

成田市関戸関ノ台遺跡

— 一般国道464号北千葉道路事業埋蔵文化財発掘調査報告書3 —

令和3年1月

千葉県教育委員会

なり た し せき ど せき の だい い せき

成田市関戸関ノ台遺跡

— 一般国道464号北千葉道路事業埋蔵文化財発掘調査報告書3 —



序 文

いにしえより温暖な気候に恵まれた千葉県には、先人たちの生活の痕跡が埋蔵文化財包蔵地(遺跡)として数多く残されています。これらの埋蔵文化財は県民共有の財産として、地域の歴史や文化の解明に欠かすことのできない貴重なものです。

千葉県教育委員会では、埋蔵文化財の保護と各種開発事業との調整、埋蔵文化財の調査研究・文化財保護思想の普及などを目的とした諸活動に加え、千葉県が行う開発事業に係る埋蔵文化財の記録保存のための発掘調査や調査成果の整理、報告書の刊行について実施しております。

本書は、千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第35集として、一般国道464号北千葉道路事業に伴って実施した成田市関戸関ノ台遺跡の発掘調査報告書です。今回の調査では、旧石器時代の石器製作跡をはじめ、縄文時代の狩猟用の陥穴、弥生時代から平安時代までの竪穴住居跡、中・近世の地下式の倉庫跡など、長期間にわたる人々の多様な営みの跡が検出されました。既に調査報告第31集として報告した隣接する成田市関戸谷津之台遺跡などの調査成果と相まって、当地域の歴史を知る上での貴重な資料を得ることができました。

刊行に当たり、本書が学術資料としてだけでなく、郷土の歴史に対する理解を深めるための資料として多くの方々に広く活用されることを期待しております。

最後に、発掘調査から整理作業を通じ、地元の方々をはじめとする関係者の皆様や関係諸機関には多大な御協力をいただきました。心から感謝申し上げます。

令和3年1月

千葉県教育庁教育振興部
文化財課長 田中 文昭

凡 例

- 1 本書は、千葉県県土整備部北千葉道路建設事務所による一般国道464号北千葉道路事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書は、下記の遺跡を収録したものである。

関戸関ノ台遺跡 成田市関戸字関ノ臺245ほか (遺跡コード211-097)
- 3 千葉県県土整備部の依頼を受け、千葉県教育庁教育振興部文化財課が平成27・28年度に発掘調査を実施し、令和元・2年度に整理作業を実施した。なお、整理作業については、公益財団法人千葉県教育振興財団に支援業務委託して実施した。
- 4 調査組織及び発掘調査と整理作業の期間・担当者等は、第1章第1節に記載したとおりである。
- 5 本書の執筆は、第2章第2節・第7節及び第3章の一部を文化財主事渡邊玲、第2章第3節・第4節及び第3章の一部を文化財主事鈴木彩奈、第2章第5節・第6節及び第3章の一部を文化財主事横田真名望、第1章及び第2章第1節を主任上席文化財主事金丸誠が担当し、編集及び加筆・訂正は、各担当者と協同し金丸が行った。
- 6 SI-020出土の完形品の土鈴2点については、内部構造を明らかにするために、千葉県産業支援技術研究所細谷昌裕主席研究員にX線CT試験を依頼した。その結果については、第3章まとめにその概要を記載するとともに画像データの一部を図版40に掲載した。
- 7 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県県土整備部道路整備課、同北千葉道路建設事務所、成田市教育委員会、公益財団法人千葉市教育振興財団小林嵩氏ほか多くの方々から御指導、御協力を得た。
- 8 本書で使用した地図の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標で、図面の方位は全て座標北である。
- 9 土器観察表及び本文中に記載した色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖2007年版』に基づいている。
- 10 本書で使用した地形図は下記のとおりである。

第1図 成田市発行 1/2,500 成田市都市計画図を編集
第4図 参謀本部陸軍測量局作成 1/25,000 迅速測図「成田」を編集
第5図 国土地理院発行 1/25,000 地形図「成田」を編集
- 11 図版1の航空写真は、京葉測量株式会社による昭和45年撮影のものを使用した。
- 12 各表中の()は推定数値、< >は現存数値を表わす。
- 13 遺構や遺物の図面に使用したスクリーントーンの利用例は次のとおりである。挿図中の「K」は攪乱の略である。



山 砂



焼 土



黒色処理

本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査の概要	1
1 調査に至る経緯と経過	1
2 調査の方法と概要	3
第2節 遺跡の位置と環境	3
1 遺跡の位置と地形	3
2 周辺の遺跡	5
第2章 調査の成果	15
第1節 遺跡の概要	15
第2節 旧石器時代の遺構と遺物	18
1 第1ブロック	18
2 単独出土	20
第3節 縄文時代の遺構と遺物	23
1 陥穴	23
2 遺構外出土の遺物	25
第4節 弥生時代の遺構と遺物	28
1 竪穴住居跡	28
2 遺構外出土の遺物	34
第5節 古墳時代の遺構と遺物	44
1 竪穴住居跡	44
2 土坑	62
3 溝	63
4 遺構外出土の遺物	64
第6節 奈良・平安時代の遺構と遺物	70
1 竪穴住居跡	70
2 土坑	72
3 遺構外出土の遺物	78
第7節 中・近世の遺構と遺物	81
1 北側台地整形区画	81
2 南側台地整形区画	97
3 土坑墓	100
4 土坑	101
5 土坑群(ピット群)	104
6 溝	105

第3章 まとめ	106
報告書抄録	巻末

挿図目次

第1図	周辺地形と調査区	2	第31図	SI-020(2)	62
第2図	上層トレンチ配置及び表土除去範囲	4	第32図	SI-021・SK-021	63
第3図	下層確認グリッド配置	4	第33図	SD-006	64
第4図	遺跡の位置(迅速測図)	6	第34図	遺構外出土の遺物	65
第5図	周辺の遺跡	8	第35図	SB-001	71
第6図	調査区内上層遺構分布	16	第36図	SB-002	71
第7図	第1ブロック器種別・母岩別分布図	19	第37図	SK-004	72
第8図	第1ブロック出土石器	21	第38図	SK-005	73
第9図	単独出土石器	22	第39図	SK-007a・b	74
第10図	SK-010・011・020・024・030・042・ 043	24	第40図	SK-008・009	75
第11図	SK-046・050・058	26	第41図	SK-012	76
第12図	SK-052	27	第42図	SK-026	77
第13図	遺構外出土の遺物	28	第43図	SK-057	77
第14図	SI-002	29	第44図	SK-070	78
第15図	SI-007	31	第45図	SK-085	79
第16図	SI-009	33	第46図	遺構外出土の遺物	79
第17図	遺構外出土の遺物(1)	35	第47図	北側台地整形区画	82
第18図	遺構外出土の遺物(2)	36	第48図	第I地区SX-001・008・SK-014・025 a~c(1)	84
第19図	遺構外出土の遺物(3)	37	第49図	第I地区SX-001・008・SK-014・025 a~c(2)	85
第20図	SI-001・004	45	第50図	第I地区SK-028・029・031・034・ SX-007	87
第21図	SI-003a・b(1)・SK-044	48	第51図	第I地区SK-001~003・032・033	88
第22図	SI-003a・b(2)	49	第52図	第II地区SB-003・SX-009	90
第23図	SI-005	50	第53図	第II地区SK-016・018・019	91
第24図	SI-006	51	第54図	第II地区SK-015	92
第25図	SI-012~015(1)	53	第55図	第II地区SK-022・023	93
第26図	SI-012~015(2)	54	第56図	第II地区SK-035a・b・SX-010	94
第27図	SI-017	56	第57図	第III地区SX-003	96
第28図	SI-018・019(1)	58	第58図	南側台地整形区画SX-004・005	
第29図	SI-018・019(2)	59			
第30図	SI-020(1)	61			

	SK-071~079(1) ……………98	第62図	SK-051・053~056 …………… 103
第59図	南側台地整形区画 SX-004・005・ SK-071~079(2) ……………99	第63図	SK-080~084・SD-003 …………… 103
第60図	SK-027 …………… 101	第64図	SX-006 …………… 104
第61図	SK-017a~d・SX-002 …………… 102	第65図	関戸関ノ台遺跡・関戸砦跡遺構配置… 110

表目次

第1表	周辺の遺跡概要一覧表……………12	第13表	SX-007ピット計測表 ……………89
第2表	竪穴住居跡等一覧表……………15	第14表	SX-008ピット計測表 ……………89
第3表	竪穴状遺構・土坑等一覧表……………17	第15表	SB-003柱穴計測表 ……………90
第4表	溝一覧表……………18	第16表	SX-009ピット計測表 ……………95
第5表	旧石器時代石器属性表……………19	第17表	SX-010ピット計測表 ……………95
第6表	縄文土器観察表……………27	第18表	SX-003ピット計測表 ……………96
第7表	縄文時代石器属性表……………27	第19表	SX-004ピット計測表 …………… 100
第8表	弥生土器観察表……………38	第20表	SX-002ピット計測表 …………… 104
第9表	古墳時代土器観察表……………66	第21表	SX-006ピット計測表 …………… 105
第10表	古墳時代土製品観察表……………69	第22表	中・近世土器観察表…………… 105
第11表	古墳時代石製品観察表……………70	第23表	中・近世土製品観察表…………… 105
第12表	奈良・平安時代土器観察表……………79		

図版目次

図版1	航空写真	図版9	SI-009H27 SI-009H28・SK-051
図版2	調査前① 調査前②	図版10	SI-009炉 SI-001カマド SI-001貯蔵穴 SI-001
図版3	調査前③ 調査前④	図版11	SI-003a・b SI-005
図版4	調査前⑤ 調査前⑥	図版12	SI-006 SI-006カマド SI-006貯蔵穴 SI-013カマド SI-012・013
図版5	T 6 遺構検出 T 7 遺構検出 T12遺構検出 第1ブロック	図版13	SI-012~015
図版6	SK-009・010 SK-011 SK-020 SK-024 SK-030セクション SK-030 SK-042・043 SK-058	図版14	SI-017・SK-070 SI-017貯蔵穴 SI-018・019セクション SI-018・019遺物 SI-018貯蔵穴
図版7	SK-046セクション SK-046 SK-050セクション SK-050 SK-052セクション SK-052 SI-002遺物	図版15	SI-018・019・SK-085 SD-006・SK-057
図版8	SI-002 SI-007	図版16	SI-020貯蔵穴 SK-021 SK-004 SB-001
		図版17	SK-005 SK-008・009遺物 SK-012 SK-026・北側台地整形区画

- 図版18 北側台地整形区画SX-001 北側台地整形
 区画第Ⅰ地区北側
- 図版19 SK-014 SK-025a~c・SX-008
 SK-028・034 SK-029 SK-032 SK-033
 SK-001~003 SK-031
- 図版20 第Ⅱ地区SB-003・SX-009・010 SK-018
 SK-015 SK-016 SK-019 SK-022
 SK-023
- 図版21 SK-035a・b 第Ⅲ地区SX-003 南側台地整
 形区画SX-004・005・SK-071~079
 SX-005セクション SX-004セクション
- 図版22 南側台地整形区画SX-004・005
- 図版23 南側台地整形区画SX-004・005 SK-027
 SK-017a~d・SX-002 SK-053~056
 SX-006
- 図版24 第Ⅰブロック出土石器
- 図版25 単独出土石器
- 図版26 SK-050 遺構外出土の遺物 SI-002
- 図版27 SI-007 SI-009
- 図版28 遺構外出土の遺物(1)
- 図版29 遺構外出土の遺物(2)
- 図版30 遺構外出土の遺物(3)
- 図版31 SI-001 SI-003a・b SI-004 SI-005
- 図版32 SI-006 SI-013 SI-014 SI-015 SI-017
 SI-018
- 図版33 SI-018 SI-019
- 図版34 SI-020
- 図版35 SI-020 SI-021 SK-021 SD-006
 遺構外出土の遺物
- 図版36 遺構外出土の遺物 SB-001 SK-004
 SK-007a SK-005 SK-012
- 図版37 SK-008 SK-009 SK-026 SK-057
 SK-070
- 図版38 SK-085 遺構外出土の遺物 SX-001
 SK-014 SK-018 SK-015 SK-023
- 図版39 SX-004 SK-078 SK-074 SK-027
 SX-002 SK-008-1墨書土器(赤外線)
 SK-070-1墨書土器(赤外線)
- 図版40 SI-020-16X線CT画像
 SI-020-17X線CT画像

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査に至る経緯と経過（第1図）

一般国道464号北千葉道路は、東京外かく環状道路から千葉ニュータウンを経て成田国際空港を結ぶ全長約43kmの幹線道路で、このうち印西市から成田市までの区間(延長約13.5km)については、成田新高速鉄道の新線建設区間と並行しており、一体的に整備を進めていくことが計画された。本区間の整備により首都圏北部や県西地域と成田国際空港間のアクセスの強化が図れるとともに、沿線地域の活性化、物流の効率化、救急医療・防災機能の強化などが期待されている^(註1)。

本区間の整備事業の実施に先立って、平成16年9月に事業地内の「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会文書が千葉県県土整備部道路計画課長から千葉県教育委員会に提出された。千葉県教育委員会では現地踏査等の結果を踏まえ、平成16年11月に事業地内には埋蔵文化財の包蔵地6か所が存在する旨の回答を行った。この回答に基づき、埋蔵文化財の取扱いについて千葉県県土整備部、千葉県教育委員会、成田市教育委員会の関係諸機関による協議を行った結果、事業の性格上、やむを得ず記録保存の措置を講ずることとなった。このうち、千葉県が施工する国道408号(成田市押畑)から国道295号(成田市大山)までの区間に所在する関戸谷津之台遺跡・関戸関ノ台遺跡・久米砦遺跡の3遺跡については、千葉県教育委員会が発掘調査を実施することとなった。

今回報告する関戸関ノ台遺跡は平成27・28年度に発掘調査を実施し、令和元・2年度に整理作業を実施した。各年度の調査組織及び担当者・期間・内容は次のとおりである。

○平成27年度 関戸関ノ台遺跡(1)

千葉県教育庁教育振興部文化財課

文化財課長 永沼 律朗 発掘調査班長 蜂屋 孝之

担当者 主任上席文化財主事 土屋 潤一郎

実施期間 平成27年8月10日～平成28年1月28日

内容 調査対象面積2,753㎡ 確認調査 上層320㎡ 下層172㎡ 本調査 上層2,753㎡ 下層0㎡

○平成28年度 関戸関ノ台遺跡(2)

千葉県教育庁教育振興部文化財課

文化財課長 永沼 律朗 発掘調査班長 田井 知二

担当者 主任上席文化財主事 土屋 潤一郎

実施期間 平成28年7月1日～平成28年10月7日

内容 調査対象面積4,875㎡ 確認調査 上層354㎡ 下層56㎡ 本調査 上層4,875㎡ 下層0㎡

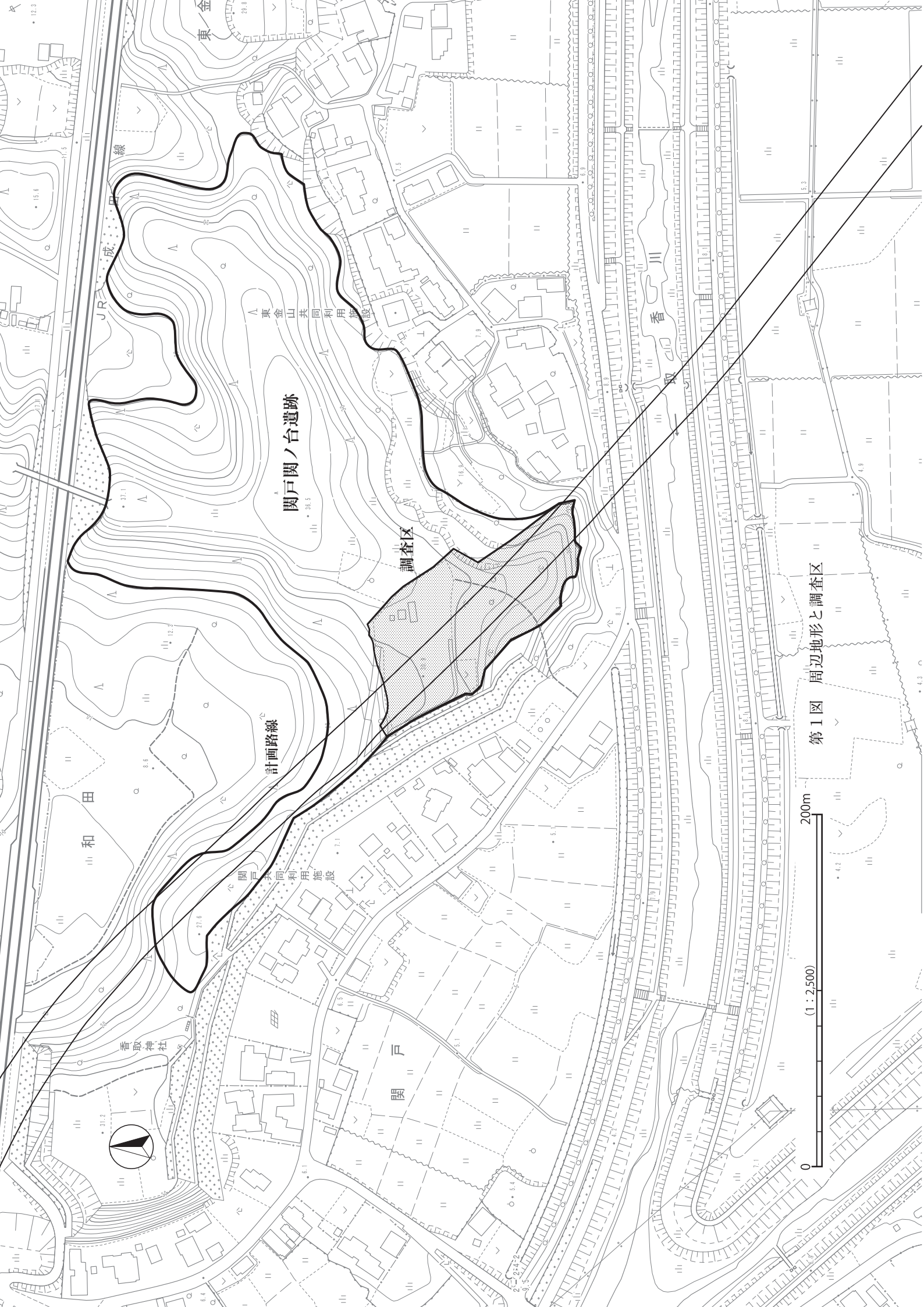
○令和元年度 関戸関ノ台遺跡(1)・(2)

千葉県教育庁教育振興部文化財課

文化財課長 大森 けい子 発掘調査班長 大内 千年

担当者 主任上席文化財主事 金丸 誠、文化財主事 渡邊 玲・横田 真名望・鈴木 彩奈

内容 水洗注記～実測・トレースの一部



関戸駅ノ台遺跡

調査区

計画路線

第1図 周辺地形と調査区

200m
(1 : 2,500)



○令和2年度 関戸関ノ台遺跡(1)・(2)

千葉県教育庁教育振興部文化財課

文化財課長 田中文昭 発掘調査班長 大内 千年

担当者 主任上席文化財主事 金丸 誠、文化財主事 渡邊 玲・横田 真名望・鈴木 彩奈

内容 実測・トレースの一部～報告書刊行

2 調査の方法と概要(第2・3図、図版2～5)

発掘調査に当たっては、千葉県教育委員会が実施する3遺跡を網羅するように日本測地系(第Ⅸ座標系)の公共座標に基づくグリッド設定を行った。グリッドの基準は関戸谷津之台遺跡の位置する $X=-22,540$ 、 $Y=44,760$ を起点とし、 $40\text{m}\times 40\text{m}$ の方眼網を設定し、大グリッドとした。名称は北から南へ1・2、西から東へA・Bとした。大グリッドは更に $4\text{m}\times 4\text{m}$ の小グリッドに100分割し、北西隅を00、南東隅を99とした。大グリッドと小グリッドを組み合わせて、1A-01や2B-00などと呼称した。今回報告する関戸関ノ台遺跡は $X=-22,700$ 、 $Y=45,000$ の5G大グリッド～8J大グリッドの範囲に所在する。

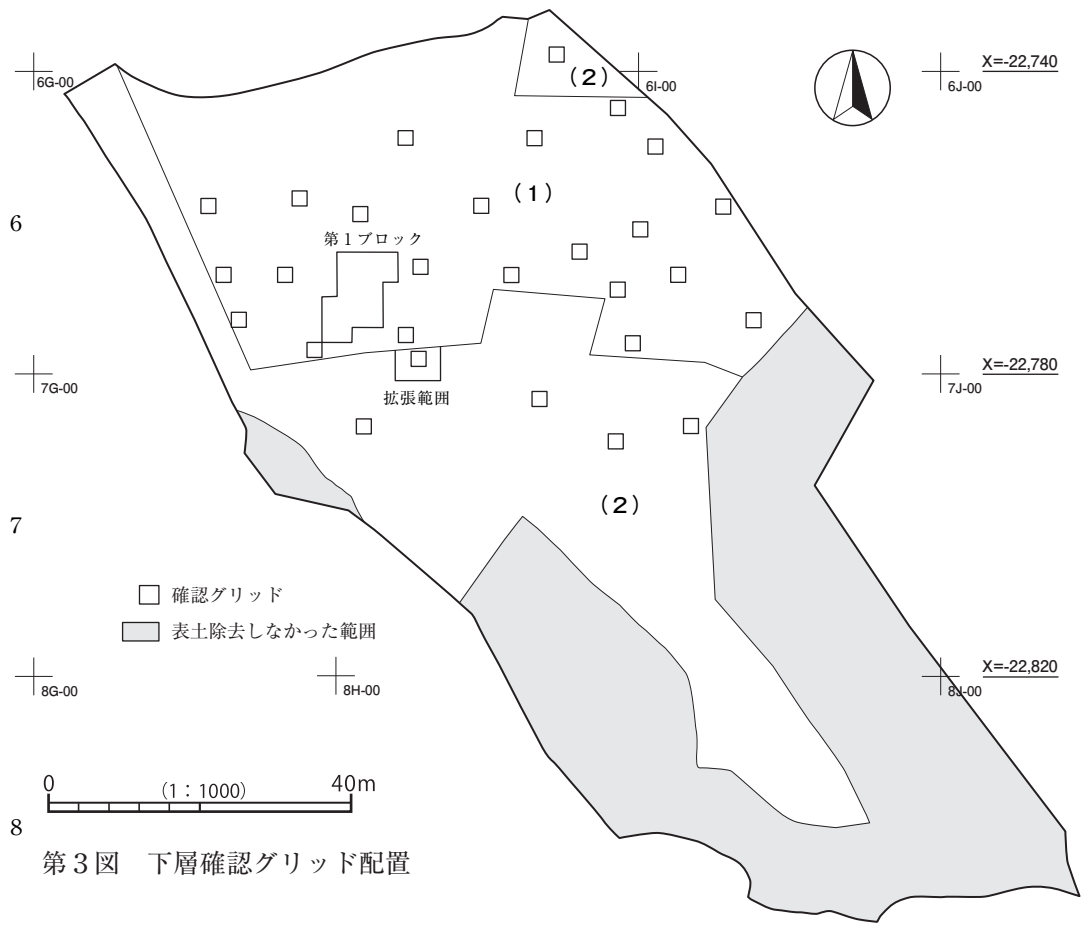
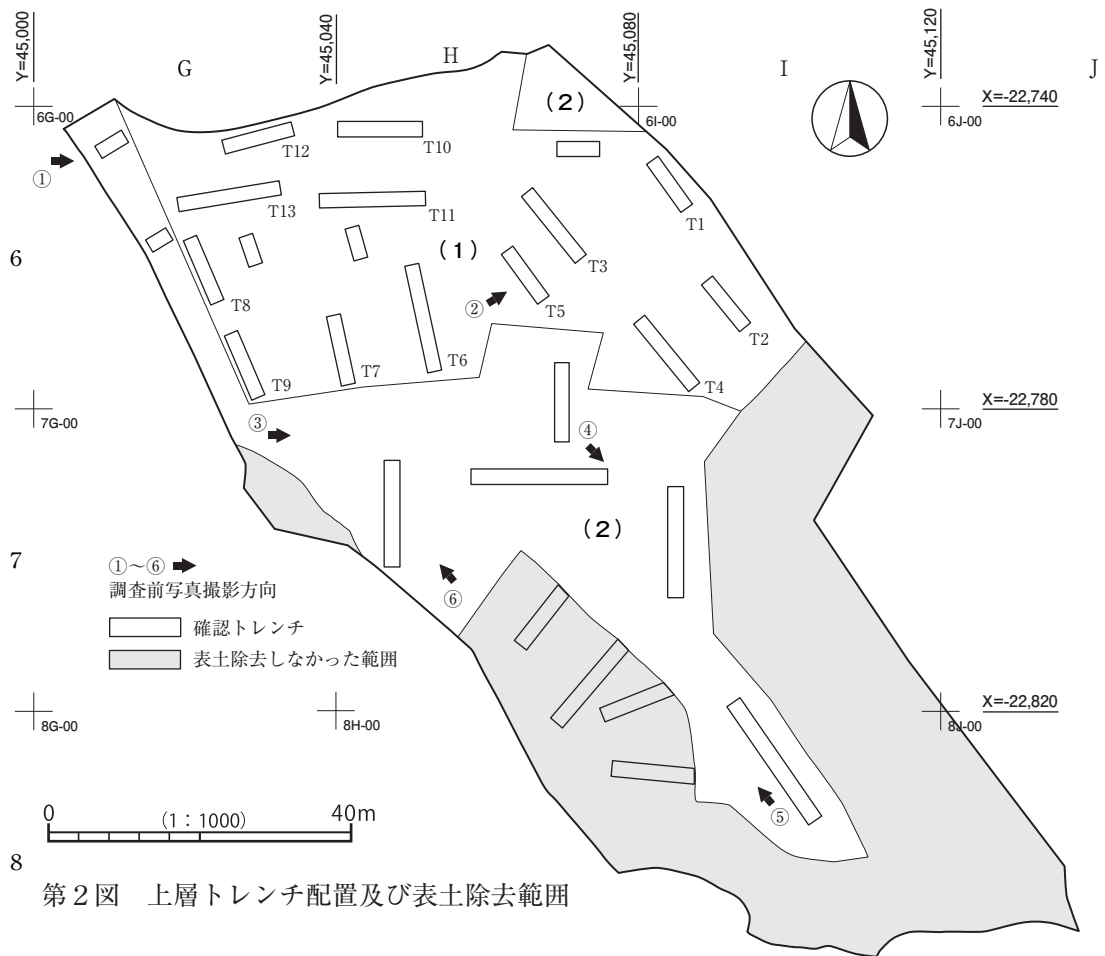
確認調査は基本的に地形に沿って2m幅のトレンチを設定して実施した(第2図)。ただし、(2)地点の三角形の地区は全面表土除去による確認調査を行い、南側及び東側の傾斜面部は安全上の観点からトレンチを設定しなかった。確認調査の結果、全てのトレンチで遺構が検出されたため全域を本調査範囲とし、遺構精査・記録作成・写真撮影・遺物取上げなどの作業を行った。しかし、(2)地点の西側傾斜面部は土砂崩落等の危険が予想されたため表土除去は実施しなかった。下層確認調査は、ローム層が存在している範囲に $2\text{m}\times 2\text{m}$ のグリッドを設定して実施した(第3図)。6H-70と6H-92グリッドで石器が出土したことから、それぞれのグリッド周囲を拡張し、合計10点及び3点の石器が出土したが、それ以上石器の分布の広がり認められず、記録作成などを行い、確認調査で終了した。記録作成のうち全体図と遺構平面図の実測図面は平板測量で行った。写真撮影はフィルムカメラ(120mmモノクロ、35mmカラーリバーサル)及びデジタルカメラ(RAW+JPEGデータ)により実施した。上層調査に当たっては、遺構種類ごとに記号を付け、竪穴住居跡はSI、掘立柱建物跡はSB、土坑はSK、古墳はSM、溝はSD、その他はSXとし、種類記号ごとに3桁の通し番号と合わせてSI-001のように遺構番号として表記した。遺物は遺構ごとに、旧石器時代の遺物や帰属遺構が不明確なものについては小グリッド単位で通し番号を付けて取り上げた。

整理作業は出土遺物の水洗・注記作業を行った後、遺物の種別・器種分類を行ってから接合・復元作業を実施し、実測・拓本作業を行った。出土遺物の写真撮影はデジタルカメラで行った。発掘調査で作成した図面・写真などの記録整理を行った後、挿図・写真図版原図を作成し、それらをもとにデジタル編集によるトレースや写真補正などを行い、挿図・写真図版を作成した。その後、原稿執筆・編集・校正作業を経て、この度報告書刊行となった。また、報告書編集中に報告書に基づいた収納整理作業も併せて実施した。

第2節 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置と地形(第1・4図、図版1)

成田市は千葉県の北部中央に位置し、北は利根川を挟んで茨城県、東は香取市、南東は芝山町、南は富里市、南西は酒々井町、西は印旛沼を挟んで印西市、北西は栄町に接する面積約214km²、人口約13万人の中核市である。周辺の地形は下総台地と沖積地からなり、台地は根本名川や大須賀川、印旛沼から延びる樹枝



状の小支谷により複雑に開析されている。本遺跡は根本名川とその支流である取香川の合流地点の北側で、樹枝状に延びる痩せ尾根付け根部分の台地上にある。この痩せ尾根先端部には関戸谷津之台遺跡がある。本遺跡の標高は28m～30mで、台地下の水田面との標高差は21m前後である。

2 周辺の遺跡（第5図）

本遺跡<1>の周辺では、成田ニュータウン造成事業をはじめとして、東関東自動車道路、成田国際空港予定地及び関連事業に伴う大規模な発掘調査が行われ、その調査成果は既に報告書が刊行されている。ここでは時代ごとに主な遺跡について記述し、周辺の遺跡の概要は第1表の周辺の遺跡概要一覧表を参照されたい。

旧石器時代 旧石器時代の遺跡としては成田国際空港予定地内の遺跡群が特筆される^(註2)。取香和田戸遺跡(空港No.60遺跡)はⅡc層～Ⅶ層から4つの文化層(15ブロック)、東峰御幸畑東遺跡(空港No.62遺跡)はⅢ層～Ⅸ層から6つの文化層(46ブロック)、十余三稻荷峰遺跡(空港No.67遺跡)は信州産黒曜石を主体とする細石刃石器群が検出されているなど22遺跡から多くの石器群が検出されている。これらの遺跡群は、利根川に向かって北に流れる根本名川の支流の取香川と九十九里平野を経て太平洋に向かって南に流れる高谷川との分水嶺となる台地上に位置する。

本遺跡と同じ根本名川及びその支流の中・下流域では、旧石器時代の遺跡は極めて少なく、検出された遺構はいずれも小規模なブロックか単独出土である。本遺跡の西側台地上にある関戸谷津之台遺跡<2>は、Ⅸc層上部から剥片2点1ブロックが検出されている。小橋川流域では、松崎山ノ台遺跡<5>はⅢ層とⅨ層から尖頭器や楔形石器・剥片など19点3ブロック、雷土(Loc.37)遺跡<84>はⅢ層からナイフ形石器や敲石・削器・剥片など9点5ブロックが検出されている。小橋川の最奥部に当たる向台遺跡<95>はⅢ層から彫器や削器・石核・剥片など51点1ブロックが検出され、1ブロックの出土点数が多い。印旛沼東岸の松崎外小代内小代遺跡<4>はⅦ層から石核や敲石・剥片など183点1ブロックとⅦ層～Ⅸ層から石核や剥片8点1ブロックが検出されている。

縄文時代 早期の遺跡は、成田国際空港予定地内遺跡群で竪穴住居跡を中心とした集落が複数検出されている。木の根拓美遺跡(空港No.6遺跡)は竪穴住居跡8軒、東峰御幸畑西遺跡(空港No.61遺跡)は竪穴住居跡3軒・炉穴14基・陥穴16基、十余三稻荷峰遺跡(空港No.67遺跡)は竪穴住居跡18軒・炉穴109基・陥穴153基などが検出されている。木の根拓美遺跡(空港No.6遺跡)は県指定文化財に指定された三角形の土偶が出土したことでも注目される^(註2)。取香川の中流域では、本遺跡は陥穴11基、馬場扇ノ作遺跡<29>は陥穴4基が検出されている。印旛沼東岸及び印旛沼に注ぐ江川流域では、松崎外小代内小代遺跡<4>は竪穴住居跡1軒・土坑6基・陥穴19基、橋賀台Ⅱ遺跡<93>・橋賀台Ⅰ遺跡<94>は竪穴住居跡13軒・炉穴3基、上人塚遺跡<97>は竪穴住居跡7軒・炉穴15基など集落跡が検出されている。

前期は明確な遺構が検出された遺跡は極めて少なく、印旛沼東岸の松崎外小代内小代遺跡<4>で竪穴住居跡1軒、江川流域の橋賀台Ⅱ遺跡<93>で竪穴住居跡2軒が検出されているだけである。

中期は遺跡の数が増加し、流域ごとに複数の集落跡が検出されている。取香川右岸の台地上にある野毛平木戸下向山遺跡<17>は竪穴住居跡41軒・土坑42基、隣接する野毛平植出遺跡<18>は竪穴住居跡1軒・土坑1基が検出され、対岸に位置する長田雉子ヶ原遺跡などからも竪穴住居跡や掘立柱建物跡などが複数検出されている^(註3)。印旛沼東岸の松崎名代遺跡<59>は竪穴住居跡4軒と中期～晩期の土坑126基が検出さ



第4図 遺跡の位置(迅速測図)

れている。小橋川流域では、郷部南台遺跡<72>は竪穴住居跡6軒と中期～後期の土坑200基、囲護台遺跡群<105>は竪穴住居跡46軒と中期～後期の土坑600基以上が検出されている。

後期・晩期は遺跡の数が減少する。根本名川流域では、最奥部の台地上の小菅法華塚遺跡<37>は後期の竪穴住居跡5軒・柄鏡型住居跡2軒・土坑10基、中流域の土屋殿台(貝塚)遺跡<69>は後期の竪穴住居跡23軒・土坑125基が検出されている。印旛沼東岸では、松崎烏内遺跡<58>は竪穴住居跡1軒・土坑33基・陥穴2基、八代玉作(Loc.39)遺跡<75>は後期～晩期の竪穴住居跡6軒が検出されている。

弥生時代 本遺跡周辺地域は、櫛描き文や口縁部～胴部に斜縄文などを施す北関東系の土器群が多く見られる地域である。根本名川と取香川との合流域では、本遺跡は竪穴住居跡3軒、関戸谷津之台遺跡<2>は昭和55年調査分を合わせて中期～後期の竪穴住居跡71軒が検出されている。やや奥まった上流域の東和田城遺跡<33>は竪穴住居跡10軒以上、最奥部の小菅法華塚遺跡<37>は後期の竪穴住居跡3軒が検出されている。根本名川支流の小橋川の流域と印旛沼東岸地域でも中期～後期の集落が多数見られる。小橋川流域では、宝田八反目遺跡<47>は中期～古墳時代前期の竪穴住居跡115軒以上、松崎白子遺跡<55>や押畑(子の神)城<64>・押畑広台遺跡<66>などは中期や後期の竪穴住居跡などが検出されている。松崎白子遺跡の北約3kmの利根川を臨む台地上にある南羽鳥遺跡群は、中期の竪穴住居跡・方形周溝墓・土器棺墓と後期の竪穴住居跡・土器棺墓などで構成される集落跡が検出されている^(註4)。印旛沼東岸地域では、外子代(Loc.40)遺跡<73>は後期の竪穴住居跡15軒、八代玉作(Loc.39)遺跡<75>は中期の竪穴住居跡2軒が検出されているが、全体としては散発的である。印旛沼南岸地域の鹿島川流域では、中期後半の環濠集落と方形周溝墓群で構成される佐倉市六崎大崎台遺跡^(註5)や後期の集落である佐倉市江原台遺跡^(註6)など各時期を代表する遺跡が所在している。

古墳時代 河川流域ごとの遺跡数が増加し、特に、後期から始まる集落遺跡の増加が顕著である。根本名川中・上流域と取香川流域では、本遺跡や関戸谷津之台遺跡<2>・東和田城遺跡<33>・小菅法華塚遺跡<37>は弥生時代～後期まで集落が続くが、関戸谷津之台遺跡は中期に古墳が作られるようになり、小規模な集落へと変わっていく。野毛平高台遺跡<21>は前期から始まる集落で前期～中期の竪穴住居跡12軒、後期の竪穴住居跡17軒・土坑30基が検出されている。小菅大山遺跡群 I <26>は後期から集落が始まると思われる。小橋川流域では、根本名川との合流部付近にある宝田八反目遺跡<47>や松崎白子遺跡<55>・押畑(子の神)城<64>は弥生時代から続く集落であるが、存続期間は前期又は中期までで、後期には続かないと思われる。上流域では、石橋台2遺跡<90>は弥生時代から続く集落であるが、後期の竪穴住居跡65軒が検出され、この時期が主体となると思われる。石塚(Loc.20)遺跡<86>と印旛沼東岸の外子代(Loc.40)遺跡<73>・八代玉作(Loc.39)遺跡<75>も弥生時代～前期又は中期まで続く集落であるが、前二者は玉作工房跡、後者は石製模造品工房跡を伴うもので、ほかの集落とは性格をやや異にするものと思われる。後期になると小橋川流域では、郷部加定地遺跡<71>や囲護台遺跡群<105>は新たに集落が現れ、郷部加定地遺跡は後期～奈良時代の竪穴住居跡336軒・土坑376基、囲護台遺跡群は竪穴住居跡236軒・鍛冶工房跡1軒・大形土坑2基などが検出され、奈良・平安時代まで集落として継続している。印旛沼東岸地域では、松崎外小代内小代遺跡<4>や松崎山ノ台遺跡<5>・松崎遠原遺跡<60>などは後期から集落が現れる。松崎外小代内小代遺跡は竪穴住居跡45軒、松崎山ノ台遺跡は竪穴住居跡23軒、松崎遠原遺跡は竪穴住居跡12軒などが検出されており、いずれの遺跡も台地の一部の調査であることから、本来は囲護台遺跡群に匹敵する規模の集落であると思われる。



第5図 周辺の遺跡

古墳については、小橋川と印旛沼に注ぐ江川の分水嶺に沿って築造されている公津原古墳群<74>がこの地域を代表する古墳群である^(註7)。八代台古墳群、天王・船塚古墳群、瓢塚古墳群の3つの古墳群からなり、総数で前方後円墳6基・円墳88基・方墳34基で構成される。4世紀前半～7世紀末まで造営され、その中でも6世紀～7世紀に築造されたものが多く、周辺地域における後期の集落遺跡の増加と軌を一にする。天王・船塚古墳群の南東部には公津原埴輪生産遺跡<113>があり、県内で2か所しか見つかっていない埴輪窯跡1基と竪穴状遺構4軒が検出されている。本遺跡の北東側の広い範囲に野毛平古墳群<11>があり、5世紀～7世紀の前方後円墳や円墳などが調査されている。関戸谷津之台遺跡でも円墳8基が検出され、取香川右岸の台地上ある古墳などとともに野毛平古墳群の一部を構成していたと考えられる。

奈良・平安時代 根木名川と取香川流域では、関戸谷津之台遺跡<2>・久米砦遺跡<3>・野毛平高台遺跡<21>・小菅大山遺跡群 I <26>・東和田城遺跡<33>・小菅法華塚遺跡<37>などは古墳時代後期から集落が続く、野毛平木戸下向山遺跡<17>や野毛平植出遺跡<18>はこれまで居住地として利用されなかったが、新たに集落が作られるようになる。小橋川中・上流域では、郷部加定地遺跡<71>や郷部南台遺跡<72>・戸崎Ⅳ (Loc.33A・B) 遺跡<80>・雷土 (Loc.37) 遺跡<84>・石橋台2遺跡<90>・中台遺跡<101>・囲護台遺跡群<105>などの古墳時代後期から集落が続く遺跡を中心にして、さらに、郷部松ノ下 (Loc.16・17) 遺跡<99>や加良部 (Loc.15) 遺跡<100>・南囲護台遺跡<106>など新たな集落がその周辺地に拡大する。囲護台遺跡群は奈良時代の竪穴住居跡226軒、平安時代の竪穴住居跡118軒・掘立柱建物跡37棟などが検出され、古墳時代後期から連続と続く中心的な集落と考えられる。南囲護台遺跡は部分的な発掘調査であるが、その成果から集落が台地全域に広がると考えられる。加良部 (Loc.15) 遺跡は竪穴住居跡66軒・掘立柱建物跡16棟など多くの遺構が検出され、その中の掘立柱建物跡の一つは四面廂を持ち、村落内寺院の可能性が考えられる。印旛沼東岸地域では、松崎外小代内小代遺跡<4>や松崎烏内遺跡<58>・松崎名代遺跡<59>・松崎遠原遺跡<60>などは古墳時代後期から引き続き集落が形成されている。松崎外小代内小代遺跡は竪穴住居跡3軒・掘立柱建物跡15棟・竪穴状遺構11基など、松崎烏内遺跡は昭和58年に行われた調査で竪穴住居跡26軒・掘立柱建物跡1棟・土坑51基が検出されており、いずれの遺跡ともに更なる遺構の広がりが想定される。

中・近世 城館跡は根木名川とその支流の取香川流域の台地上に見られ、右岸には北から一の陣屋遺跡<44>・下金山城<19>・関戸谷津之台遺跡<2>、左岸には寺台城跡<32>・久米砦遺跡<3>・小菅城<27>が所在し、寺台城跡の南側対岸には東和田城遺跡<33>が所在する。小橋川との合流地点には押畑(子の神)城<64>、それより南側のやや奥まった台地上には土屋殿台(貝塚)遺跡<69>が所在する。部分的な発掘調査のため全容について不明な遺跡が多いが、東和田城遺跡は全域を発掘調査した数少ない遺跡である。城跡は南北約450m・東西約250mの範囲に及び、郭3か所とそれらに伴う掘立柱建物跡や地下式坑・土坑・柵列など多数の遺構が検出されている。出土遺物などから16世紀後半の時期を中心に使われた戦国後期の「番城」であり、成田市では最大規模の城跡と位置付けられている^(註8)。台地整形区画など屋敷跡と思われる遺跡としては、本遺跡や松崎外小代内小代遺跡<4>・松崎烏内遺跡<58>・松崎名代遺跡<59>・郷部加定地遺跡<71>があげられる。郷部加定地遺跡を除く4遺跡は、いずれも地下式坑や土坑・柵列・溝などを伴う台地整形区画が検出されている。墓域としては、赤荻屋下遺跡<9>や赤荻馬場遺跡<20>・小菅離山遺跡<36>・吉倉遺跡群Ⅱ<39>・松ノ木台遺跡<111>などで塚の存在が確認され、野毛平高台遺跡<21>は火葬墓・土坑墓10基が検出されている。

- 注1 千葉県県土整備部北千葉道路建設事務所発行「北千葉道路パンフレット」を参考にした。
- 注2 1981『木の根-成田市木の根No.5、No.6 遺跡発掘調査報告書』財団法人千葉県文化財センター
 1994『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ』千葉県文化財センター調査報告第244集
 2000『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅢ』千葉県文化財センター調査報告第385集
 2004『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅨ』千葉県文化財センター調査報告第483集
 2004『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅩ』千葉県文化財センター調査報告第485集
 2000『千葉県の歴史 資料編 考古1(旧石器・縄文時代)』千葉県
- 注3 1989『ニュー東京空港ゴルフ場造成地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅱ)』財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第31集
- 注4 1997『南羽鳥遺跡群Ⅱ』財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第133集
 2000『南羽鳥遺跡群Ⅳ』財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第156集
- 注5 1985~1987『大崎台遺跡発掘調査報告Ⅰ』『同Ⅱ』『同Ⅲ』佐倉市大崎台B地区遺跡調査会
- 注6 1979『江原台』江原台第1遺跡発掘調査団
- 注7 1998『千葉県重要古墳群測量調査報告書-成田市公津原古墳群-』千葉県教育委員会
 2003『千葉県の歴史 資料編 考古2(弥生・古墳時代)』千葉県
- 注8 1995『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅰ-旧下総国地域-』千葉県教育委員会
 1998『千葉県の歴史 資料編 中世1 考古資料』千葉県

参考文献

- 文1 1956『成田史談』創刊号 成田史談会
- 文2 1959『成田史談』第5号 成田史談会
- 文3 1960『成田市の古墳群』成田史談会
- 文4 1969『成田市東和田遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』栗本佳弘
- 文5 1971『成田市の文化財』第2輯 成田市教育委員会
- 文6 1973『成田市中囲護台遺跡発掘調査報告』成田市遺跡調査報告第1集 成田市教育委員会
- 文7 1974『成田市の文化財』第5輯 成田市教育委員会
- 文8 1974『下総国の玉作遺跡』寺村光晴 雄山閣
- 文9 1975『公津原』千葉県企業庁
- 文10 1975『遺跡日吉倉』日吉倉遺跡調査団
- 文11 1977『成田市の文化財』第7・8輯 成田市教育委員会
- 文12 1978『成田市の文化財』第9輯 成田市教育委員会
- 文13 1979『成田市の文化財』第10輯 成田市教育委員会
- 文14 1979『千葉県文化財センター研究紀要4』財団法人千葉県文化財センター
- 文15 1980『成田市の文化財』第11集 成田市教育委員会
- 文16 1980『成田新線建設事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』財団法人千葉県文化財センター
- 文17 1981『公津原Ⅱ』財団法人千葉県文化財センター
- 文18 1983『成田新線建設事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ(関戸遺跡)』財団法人千葉県文化財センター
- 文19 1983『成田市中世城郭址調査報告書』成田市中世城郭址調査団 成田市史編さん室
- 文20 1984『千葉県成田市殿台遺跡の調査』『奈和』第22号 藤下昌信ほか 奈和同人会
- 文21 1984『成田市郷部北遺跡群調査概要(加定地・殿台遺跡)』成田市郷部北遺跡調査会
- 文22 1985『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅰ-成田地区-』財団法人千葉県文化財センター
- 文23 1985『成田市松崎白子、大袋台畑・塔之下遺跡発掘調査報告書』成田市松崎・大袋遺跡調査会
- 文24 1985『主要地方道成田安食線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』財団法人千葉県文化財センター
- 文25 1986『成田市史 中世・近世編』成田市
- 文26 1987『成田新住宅市街地内埋蔵文化財調査報告書 山口雷土遺跡』財団法人千葉県文化財センター
- 文27 1988『千葉県成田市押畑子の神城跡発掘調査報告書』財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第24集
- 文28 1990『囲護台遺跡発掘調査報告書』財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第34集
- 文29 1990『成田都市計画事業成田駅西口土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』成田市中世城郭址調査団
- 文30 1990『平成元年度成田市内遺跡群発掘調査報告書』成田市教育委員会

- 文31 1990『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ』千葉県文化財センター調査報告第177集
- 文32 1990『ニュー東京空港ゴルフ場造成地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅲ)』財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第32集
- 文33 1991『財団法人印旛郡市文化財センター年報7-平成2年度-』財団法人印旛郡市文化財センター
- 文34 1991『平成2年度 成田市内遺跡群発掘調査報告書』成田市教育委員会
- 文35 1992『成田市下金山城跡発掘調査報告書』成田市下金山城調査会
- 文36 1992『財団法人印旛郡市文化財センター年報8-平成3年度-』財団法人印旛郡市文化財センター
- 文37 1993『成田市の文化財 第24集-埋蔵文化財発掘調査報告書-』成田市教育委員会
- 文38 1993『主要地方道成田安食線地方道道路改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』千葉県文化財センター調査報告第229集
- 文39 1994『平成5年度 成田市内遺跡発掘調査報告書』成田市教育委員会
- 文40 1994『千葉県文化財センター 研究紀要15』財団法人千葉県文化財センター
- 文41 1995『埋蔵文化財調査報告書2』成田市教育委員会
- 文42 1995『小菅法華塚Ⅰ・Ⅱ遺跡』財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第92集
- 文43 1996『南厩護台遺跡(第1地点)』財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第106集
- 文44 1996『平成7年度 成田市内遺跡群発掘調査報告書』成田市教育委員会
- 文45 1996『成田市松崎遠原遺跡』千葉県文化財センター調査報告第282集
- 文46 1997『成田市郷部北遺跡発掘調査報告書 第1分冊 第2分冊』成田市郷部北遺跡調査会
- 文47 1997『千葉県埋蔵文化財分布地図(1)-東葛飾・印旛地区(改訂版)-』千葉県教育委員会
- 文48 1997『財団法人印旛郡市文化財センター年報12-平成7年度-』財団法人印旛郡市文化財センター
- 文49 1998『千葉県の歴史 資料編 考古3(奈良・平安時代)』千葉県
- 文50 1998『北厩護台遺跡』財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第137集
- 文51 1998『馬場扇作遺跡』財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第139集
- 文52 1998『南厩護台遺跡(第2地点)』財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第142集
- 文53 2001『大生城跡・関戸砦跡』財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第182集
- 文54 2001『平成12年度成田市内遺跡発掘調査報告書』成田市教育委員会
- 文55 2002『下金山城跡』財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第197集
- 文56 2004『南厩護台遺跡(第4地点)』財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第218集
- 文57 2005『松ノ木台遺跡発掘調査報告書』富里市文化財報告書第3集
- 文58 2006『南厩護台遺跡(第3地点)』財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第235集
- 文59 2007『成田市押畑広台遺跡』千葉県教育振興財団調査報告第569集
- 文60 2008『平成19年度成田市内遺跡発掘調査報告書』成田市教育委員会
- 文61 2008『成田市東和田城跡』財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第267集
- 文62 2009『成田新高速鉄道・北千葉道路埋蔵文化財発掘調査報告書1』千葉県教育振興財団調査報告第618集
- 文63 2009『平成20年度成田市内遺跡発掘調査報告書』成田市教育委員会
- 文64 2011『成田新高速鉄道・北千葉道路埋蔵文化財発掘調査報告書5』千葉県教育振興財団調査報告第659集
- 文65 2011『平成22年度成田市内遺跡発掘調査報告書』成田市教育委員会
- 文66 2012『南厩護台遺跡(第7地点)』財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第309集
- 文67 2013『平成24年度成田市内遺跡発掘調査報告書』成田市教育委員会
- 文68 2013『郷部南台遺跡』公益財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第322集
- 文69 2013『松崎名代遺跡』公益財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第327集
- 文70 2016『寺台城跡(第1・2・3・4・5次)』公益財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第348集
- 文71 2016『平成27年度成田市内遺跡発掘調査報告書』成田市教育委員会
- 文72 2016『成田ニュータウンの遺跡展 旛沼に栄えた文化 津原再発見』図録 益財団法人千葉県教育振興財団
- 文73 2018『平成30年度千葉県の博物館・文化財行政』千葉県教育庁教育振興部文化財課
- 文74 2019『成田市関戸谷津之台遺跡』千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第31集
- 文75 2019『平成31年度千葉県の博物館・文化財行政』千葉県教育庁教育振興部文化財課

第1表 周辺の遺跡概要一覧表

番号	遺跡名	田石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中・近世	文献
1	関戸関ノ台遺跡	①Ⅵ層～Ⅷ層1フロック7点(石核・剥片)	①陥穴11基	①後期堅穴3軒	①中期～後期堅穴14軒・土坑3基・溝1条 ②中期土坑1基	①平安堅穴2軒・土坑11基 ②平安土坑1基	①台地整形区画2か所、土地整形3基、掘立1棟、堅穴7か所、溝1条 ②地下式坑2基、土坑墓1基、土坑31基、ヒコナ溝1条 ③溝、腰曲輪、空堀、掘底道 ④堅穴1基、土坑2基、溝1条、板碑片 ⑤腰曲輪4か所 ⑥腰曲輪、土器、空堀、溝、掘立9棟、土坑墓1基等 ⑦地下式坑16基、土坑墓1基、土坑56基、溝10条、欄列7列、ヒコナ溝7か所、台地整形1か所、礎土遺構1基 ⑧溝1条	①本報古書 ②文33 ③文18 ④文25 ⑤文53 ⑥文74 ⑦文25 ⑧文73 ⑨文64 ⑩文65 ⑪文67 ⑫文71
2	関戸谷津之台遺跡	④Ⅲc層1フロック2点(剥片)	②④早期～晩期土器片・石器少量	②④中期後半～後期堅穴71軒	②④前期堅穴10軒、中期堅穴3軒・溝1条、後期堅穴2軒、後期古墳8基 ③中期末～後期初土坑墓	①平安堅穴5軒・溝1条 ②平安土坑1基	①溝、腰曲輪、空堀、掘底道 ②腰曲輪4か所	①文25 ②文18 ③文53 ④文74
3	久米巻遺跡	③陥穴3基	③陥穴3基	②③中期～後期堅穴45軒・土坑2基	②③中期～後期堅穴45軒・土坑2基	②③奈良堅穴2軒	①腰曲輪、土器、空堀、溝、掘立9棟、土坑墓1基等 ②地下式坑16基、土坑墓1基、土坑56基、溝10条、欄列7列、ヒコナ溝7か所、台地整形1か所、礎土遺構1基 ③溝1条	①文25 ②文73 ③文75
4	松崎外小代内小代遺跡	①Ⅷ層1フロック183点(石核・破石・剥片)・Ⅷ～Ⅹ層1フロック8点(石核・剥片)	①早期堅穴1軒・土坑6基・陥穴19基、前期堅穴1軒 ②陥穴2基 ④堅穴1軒	①後期堅穴2軒	①後期～終末期堅穴23軒・方墳1基	①掘立15棟、堅穴11基、井戸3基、土坑9基 ②堅穴3軒	①地下式坑16基、土坑墓1基、土坑56基、溝10条、欄列7列、ヒコナ溝7か所、台地整形1か所、礎土遺構1基 ③溝1条	①文62
5	松崎山ノ台遺跡	①Ⅷ層1フロック12点(尖頭器・鏡形石器・撻器・剥片)・Ⅹ層1フロック7点(削片)・Ⅹ層1フロック2点(削片)	①なし	①後期堅穴2軒	①後期～終末期堅穴23軒・方墳1基	①なし	①なし	①文62
6	西和原香取台遺跡					土師器		○文47
7	赤坂前原遺跡		後期(加曾利B・安行1)土器			平安土師器		○文47
8	赤坂西向遺跡		後期(加曾利B・安行1)土器			土師器		○文47
9	赤坂屋下遺跡		後期(加曾利B・安行1)土器			土師器	近世塚	○文47
10	赤坂清水台遺跡		後期(加曾利B・安行1)土器			土師器		○文47
11	野毛平古墳群				①遺跡台古墳：田溝1基(7世紀) ②遺跡台古墳：田溝1基(7世紀) ③遺跡台古墳：田溝1基(7世紀) ④田溝1基(7世紀) ⑤田溝1基(7世紀) ⑥田溝1基(7世紀) ⑦田溝1基(7世紀) ⑧田溝1基(7世紀)	④溝3条	①文2・文14 ②文16 ③文22 ④文22	
12	赤坂合ノ田遺跡		前期(黒浜)土器			平安土師器		○文47
13	野毛平高台Ⅱ遺跡		中期(加曾利EⅣ)土器			土師器		○文47
14	野毛平高台Ⅰ遺跡		中期～後期(加曾利EⅠ～EⅡ)土器			土師器		○文47
15	野毛平上之内遺跡					土師器		○文47
16	野毛平東方遺跡					土師器		○文47
17	野毛平木下向山遺跡	①なし ②なし ③なし ④なし ⑤Ⅲ層～Ⅳ層1点(ナイフ形石器)・Ⅷ～Ⅹ層2点(削片)	①なし ②前期加曾利EⅢ～EⅣ期堅穴28軒・土坑28基 ③中期阿玉台期堅穴1軒・土坑1基 ④Ⅲ層～Ⅳ層1点(ナイフ形石器)・Ⅷ～Ⅹ層2点(削片) ⑤Ⅲ層～Ⅳ層1点(ナイフ形石器)・Ⅷ～Ⅹ層2点(削片) ⑥Ⅲ層～Ⅳ層1点(ナイフ形石器)・Ⅷ～Ⅹ層2点(削片) ⑦平安定之小講数百基 ⑧なし	①なし ②なし ③なし ④なし ⑤なし ⑥なし ⑦なし ⑧なし	①平安堅穴18軒・土坑1基・溝1条 ②平安堅穴17軒・掘立9棟・土坑7基 ③平安堅穴18軒・掘立7棟・土坑2基 ④土坑2基 ⑤奈良堅穴2軒・方形周溝1基 ⑥堅穴25軒・土坑689基、平安掘立1棟・鍛冶工房1基 ⑦堅穴89軒、掘立6棟、土坑72基、溝1条、平安土器隆築場1か所 ⑧平安堅穴8軒・土坑8基・掘立1棟・鍛冶隆築場1か所	①時期不明土坑7基、溝1条 ②掘立1棟、溝1条、欄列1基、時期不明土坑61基 ③土坑1基、溝1条、時期不明土坑3基 ④近世塚2基 ⑤なし ⑥なし ⑦溝1条、欄列3条 ⑧炭燻窯	①文31 ②文32 ③文32 ④文22 ⑤文22 ⑥文33 ⑦文33 ⑧文36	
18	野毛平福出遺跡		②中期堅穴1軒・土坑1基	①なし ②なし	①後期古墳1基・周溝状遺構1基	①平安堅穴16軒・掘立17棟・土坑4基 ②堅穴13軒・土坑26基、土器隆築場1か所	①なし ②なし	①文32 ②文33
19	下金山城		①なし ②なし	①なし ②なし	①なし ②なし	①平安土坑1基	①土器1条、薬師堀1条、堀底道1条 ②溝、腰曲輪10か所	①文35 ②文55
20	赤坂馬場遺跡					近世塚		○文47
21	野毛平高台遺跡		①なし	①なし	①前期～中期堅穴12軒、後期17軒、後期以降土坑30基、時期不明堅穴15軒	①平安堅穴5軒	①火葬墓・土坑墓10基	①文16
22	野毛平浅間遺跡		①なし	①なし	①前期堅穴1軒	①なし	①道路跡1条	①文16 ②文47
23	東方低地遺跡		早期～前期(岡山)土器			土師器		○文7 文14
24	取香山低地A遺跡		①前期(岡山)土器			土師器		○文15
25	久米(貝塚)遺跡		前期・後期土器			土師器		○文22
26	小菅城		①なし	①なし	①後期堅穴25軒・土坑5基、時期不明堅穴33軒	①掘立5棟、堅穴15軒(奈良10、平安5)、平安土坑1基	①溝2条、近世塚1基・土坑1基、時期不明土坑30基	①文22
27	大山御所台遺跡					平安土師器	①溝、堀2条(中世)	①文47
28	馬場山ノ作遺跡		①早期陥穴4基	①なし		①堅穴19軒、掘立4棟、土坑5基	①台地整形区画1か所	①文44 文51
29	馬場山ノ作遺跡					平安土師器		○文47
30	山ノ作笹山遺跡					平安土師器		○文47
31	馬場大場佐間遺跡		後期(加曾利BⅠ・Ⅱ)土器			平安土師器		○文47
32	寺台城跡					①土坑1基		○文19 文70
33	東和田城遺跡		②土坑3基 ⑤陥穴1基	②堅穴4棟 ③堅穴36軒(弥生中期～古墳後期)	②堅穴28軒・土坑6基 ③堅穴36軒(弥生中期～古墳後期)	①奈良土師器 ②堅穴3軒・時期不明1軒、土坑11基、溝1条	①カワラケ ②掘立2棟、土坑30基・時期不明8基、地下式坑9基、溝8条、土器1条 ③掘立4棟、地下式坑1基、土坑86基、欄列2条、道跡2条、溝8条 ④台地整形1か所、溝1条、土坑1基 ⑤台地整形1か所、土坑11基、小ピット11基、溝4条	①文19 ②文34 ③文33 ④文36 ⑤文61 ⑥文48

番号	遺跡名	田石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中・近世	文献
34	吉倉下口遺跡		早期(井草・夏島)土器					○文47
35	吉倉六木山遺跡					土師器		○文47
36	小菅離山遺跡					平安土師器	近世塚	○文47
37	小菅法華塚遺跡		①竪穴7軒(早期1・中期1・後期5)・後期板鏡型住居2軒・土坑10基	①後期竪穴3軒	①竪穴15軒(前期3・後期-奈良12)	①平安竪穴2軒・掘立3棟・時期不明竪穴11軒・土坑6基		①文42
38	駒井野元相後遺跡		後期(堀之内・加曾利BⅡ)土器			平安土師器	近世塚	○文47
39	吉倉遺跡群Ⅱ		中・後期(加曾利E・B)土器		土師器	土師器		○文47
40	吉倉遺跡群Ⅰ		土器		円墳6基			○文3
41	久米野古墳群		前期(黒浜・諸磯B)土器			土師器・須恵器		○文47
42	東相田遺跡群Ⅱ		前期(黒浜・諸磯B)土器			土師器		○文4
43	東相田遺跡群Ⅰ		前期(黒浜・諸磯B)土器			土師器	館跡・郭	○文19
44	一の陣屋遺跡		早期(茅山)土器		土師器		①土坑墓	○文47①文15
45	新妻久保遺跡		早期(茅山)土器					○文15
46	新妻(貝塚)遺跡		早期(茅山)土器					○文15
47	宝田入反目遺跡		①中期(堀之内)竪穴60軒以上 ②中期-古墳中期竪穴55軒以上	①中期-古墳中期竪穴60軒以上 ②中期-古墳中期竪穴55軒以上	①古墳1基 ②円墳3基			①文30②文34
48	宝田下栗山低地遺跡					土師器・須恵器		○文47
49	宝田入反目(貝塚)遺跡		後期(加曾利B・安行1)土器		土師器			○文15
50	宝田岡ノ台Ⅱ遺跡		後期(加曾利B・安行1)土器		土師器			○文47
51	宝田岡ノ台Ⅰ遺跡				土師器			○文47
52	宝田櫛穴							○文47
53	宝田山越(貝塚)遺跡		中期(阿玉台・加曾利EⅡ)土器					○文15
54	宝田遺跡群Ⅰ		①早期竪穴1基	①中期未竪穴2軒	土師器	土師器		○文47
55	松崎日子遺跡					平安土師器		①文23
56	松崎市ノ坪遺跡					平安土師器		○文47
57	松崎講堂遺跡				土師器			○文47
58	松崎高内遺跡	①なし ②なし ③なし	①後期(堀之内)竪穴1軒・土坑33基 竪穴2基 ②早期-後期土器 ③竪穴1基	①なし ②なし ③なし	①後期(7世紀代)竪穴4軒 ②なし	①竪穴26軒・掘立1棟・土坑51基 ②平安土坑1基・確認時期不明竪穴25軒・土坑5基・溝2条・掘立敷基・土師器・須恵器 ③竪穴2軒 ④竪穴1軒・ヒット多数	①台地整形1か所・竪穴2基・溝8条 ②近世陶器・土師器・土坑4基・溝3条 ③地下式土坑3基 ④中世粘土土師土坑2基・土坑2基	①文24②文37 ③文38④文67
59	松崎名代遺跡		①中期土坑2基 ②中期(阿玉台・加曾利E)竪穴4軒・中期-後期土坑85基・中期-晚期土坑41基	②後期竪穴2軒・土坑2基		②竪穴4軒・土坑3基	①中世土坑5基・粘土土坑1基・ヒット20基以上 ②台地整形2か所・地下式土坑2基・土坑2基(覆銅貫通1)・溝8条	①文63②文69
60	松崎遠原遺跡	①Ⅳ-V層1点(ナイフ形石器) ②なし	①なし ②竪穴1基	①なし ②なし	①後期(7世紀中-)竪穴12軒 ②なし	①奈良竪穴3軒・平安竪穴1軒 ②奈良竪穴3軒・溝1条	①なし ②中世土坑8基・土坑4基	①文38②文45
61	下福田君作遺跡		①竪穴5軒	①なし	①祭祀跡1か所	①なし	①近世塚1基	①文38
62	大竹遺跡群Ⅲ		後期(加曾利B・安行1)土器		土師器			○文47
63	小藤川低地遺跡		①なし	①中期後半竪穴1軒・方形溝溝溝1基・後期竪穴1軒	①前期竪穴3軒・土坑1基	①なし	①中世土壘1基	○文47
64	押畑(子の神)城				前方後円墳1基・円墳9基			○文19①文27
65	宝田・押畑古墳群				前方後円墳1基・円墳9基			○文47
66	押畑広台遺跡	①なし		①後期竪穴2軒	①後期(6世紀)竪穴3軒	①竪穴3軒	①土坑1基・土坑列1条・土坑墓7基・ヒット群1基・溝7条	①文59
67	山口古墳群				円墳4基			○文47
68	山口又神古宮田遺跡				土師器			○文47
69	土屋殿台(貝塚)遺跡		①後-晩期竪穴23軒・土坑125基・遺物包含層1か所		①中-後期竪穴25軒		①中世曲輪・掘立2棟・溝8条	①文5 ②文21 ③文49
70	郷部立野遺跡				①後期竪穴2軒・土坑1基			①文21 ②文46
71	郷部加定地遺跡		①竪穴16軒・竪穴9基・土坑多数(縄文-平安514基)	①なし	①後期-奈良竪穴336軒・土坑376基	①平安土坑20基	①中世掘立7棟・土坑26基・井戸1基・欄列4基・溝24条	①文11 ②文21 ③文49
72	郷部南台遺跡		①中期竪穴6軒・中-後期土坑約200基 ②中期土坑8基 ③竪穴5軒・土坑10基	①後期竪穴6軒・中-後期土坑約200基 ②中期土坑8基 ③竪穴5軒・土坑10基	①後期竪穴約50軒	②竪穴13軒・掘立1棟		①文21 ②文68 ③文71
73	外子代(Loc.40)遺跡	②なし		②後期竪穴15軒	①円墳3基 ②前期竪穴22軒・玉作工房8軒	②竪穴37軒・掘立6棟		①文9 ②文17 ③文72
74	公津原古墳群				①瓢塚古墳群33基(円墳18・方墳15) ②天王・船塚古墳群20基(帆立貝1・円墳11・方墳8) ③八代古墳群6基(円墳3・方墳3)		②近世塚1基・土坑2基	①-③文9

番号	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中・近世	文献
75	八代玉作 (Loc.39) 遺跡	①なし	①後期～晩期(堀之内内～姥山)竪穴6軒	①中期末竪穴2軒	①前期竪穴9軒・玉作工房7軒			①文17 文72
76	八代玉作遺跡				①中期竪穴3軒・玉作工房3軒			①文8
77	八代花内遺跡				土師器	土師器		①文47
78	後原 (Loc.34) 遺跡				土師器	土師器		①文47
79	八代時田遺跡							①文17
80	戸崎Ⅳ (Loc.33A-B) 遺跡	①なし	①なし	①なし	①後期竪穴7軒	①竪穴6軒		①文17
81	戸崎Ⅰ-Ⅲ遺跡	①なし	①なし	①なし	①後期竪穴9軒	①竪穴5軒		①文17
82	引地 (Loc.29) 遺跡	①なし	①なし	①なし	①後期竪穴9軒	①竪穴14軒、掘立1棟	①近世竪穴状1基	①文17
83	多代台遺跡	①なし	①なし	①なし	①後期竪穴2軒	①後期竪穴2軒		①文47
84	雷土 (Loc.37) 遺跡	①Ⅲ層5ブロック9点(ナイフ形石器・削器・破石・剥片)	①竪穴2軒、竪穴12基、土坑15基、竪穴4基	①なし	①後期竪穴2軒	①後期竪穴2軒	①近世土坑4基	①文26
85	新山遺跡							①文47
86	石塚 (Loc.20) 遺跡	②なし	②なし	②中期末～竪穴5軒	①中層2基、方溝2基 ②中期竪穴4軒・石製模造品工房9軒	②竪穴54軒、掘立9棟、製鉄関連遺構10基、溝6条		①文9 ②文17 文72
87	米野一本松遺跡				後期土師器	後期土師器		①文47
88	米野屋敷裏遺跡				後期土師器	後期土師器		①文47
89	米野中台遺跡	①なし	①なし	①なし	①中期方形周溝1基	①奈良竪穴1軒、平安竪穴2軒・掘立2棟	①なし	①文37
90	石橋台2遺跡	①なし	①早期(茅山下降)竪穴1基	①竪穴4軒(北園東系)	①前期～中期竪穴5軒、後期竪穴65軒	①平安竪穴7軒 ②平安竪穴4軒		①文9 ②文17
91	石橋台1遺跡	①なし	①中期(加曾利E)土器			①土師器		①文9
92	橋賀台Ⅲ遺跡	①なし	①前期土器			①平安土師器		①文9
93	橋賀台Ⅱ遺跡	①なし	①竪穴14軒(早期田上層12・前期諸磯1・浮島1)、早期竪穴1基					①文9
94	橋賀台Ⅰ遺跡	①なし	①早期(茅山下降)竪穴1軒・竪穴2基	①中期竪穴2軒、後期竪穴2軒				①文9
95	向台遺跡	①遺物集中地(Ⅲ層)Ⅰか所3点(彫器1・削器6・剥片22・石2等)	①なし	①なし	①前期竪穴18軒・方形周溝2基、V字溝1条	①なし		①文9 文17
96	西中学校遺跡					平安土師器		①文47
97	上人塚遺跡		①早期(茅山式)竪穴7軒・竪穴15基			①平安竪穴4軒		①文9
98	金塚遺跡					①竪穴1軒		①文9
99	郷部松ノ下 (Loc.16・17) 遺跡	②なし	②なし	②なし	①方墳(後期末)1基	②竪穴68軒、竪穴状1基、土坑1基		①文9 ②文17 文49
100	加良部 (Loc.15) 遺跡	①なし	①なし	①なし	①なし	①竪穴66軒、掘立6棟(9世紀中四角箱建物1棟、溝1条、土坑多数)		①文17 文49
101	中台遺跡	①なし	①なし	①なし	①後期竪穴50軒	①竪穴93軒、掘立6棟		①文17
102	新山Ⅱ (Loc. 7) 遺跡	①なし	①中期(加曾利EⅡ)竪穴1軒	①なし	①なし	①竪穴8軒、ビツ状遺構1基		①文9
103	新山Ⅰ (Loc. 1) 遺跡	①なし	①竪穴1基	①なし	①なし	①奈良竪穴21軒		①文9
104	加良部台 (Loc. 2) 遺跡					竪穴、土師器、須恵器		①文47
105	開護台遺跡群		①中期(加曾利EⅣ)竪穴3軒・土坑5基 ②前期(加曾利EⅢ)竪穴41軒・中層土坑16基、土坑1基、中層後～後期初竪穴7基・土坑644基 ③中層(加曾利EⅣ)竪穴2軒・土坑6基 ④竪穴1基	①中期(加曾利EⅣ)竪穴3軒・土坑1基 ②後期竪穴200軒・土坑1基 ③後期竪穴6軒 ④後期竪穴30軒・鍛冶工房1基・大親土坑2基・土坑11基	①奈良竪穴2軒 ②奈良竪穴226軒、平安竪穴118軒・掘立37棟・土坑2基、時期不明竪穴88軒 ③奈良竪穴5軒、平安竪穴8軒 ④竪穴15軒、掘立7棟、石地彫形区画1か所、井戸1基、土坑15基 ⑤竪穴1軒 ⑥奈良竪穴1軒	①竪列3条 ②溝10条、土坑19基	①文6 ②文29 ③文8 ④文50 ⑤文66 ⑥文63	
106	南開護台遺跡	④なし ⑤なし	①土坑4基 ③なし ④土坑1基 ⑤中層土坑2基 ⑥なし ⑦なし ⑧なし		①奈良竪穴8軒、平安竪穴2軒・掘立5棟 ②奈良竪穴5軒、平安竪穴3軒・掘立1棟 ③奈良竪穴1軒、溝1条 ④竪穴1軒、掘立1基 ⑤竪穴15軒、掘立1条 ⑥奈良竪穴1軒 ⑦奈良竪穴1軒 ⑧竪穴13軒、掘立5棟、土坑2基 ⑨平安竪穴1軒	⑤溝3条、土坑2基	①文42 ②文52 ③文54 ④文56 ⑤文38 ⑥文60 ⑦文65 ⑧文66 ⑨文67	
107	台方下平遺跡					土師器		①文47
108	台方下平遺跡					土師器		①文47
109	不動ヶ岡大田遺跡		前期(黒泥)土器			土師器		①文47
110	不動ヶ岡大田遺跡		前期(黒泥)土器			土師器		①文47
111	松ノ木台遺跡 <富里市>				①後期(7世紀後半)方溝1基 ②後期竪穴5軒・土坑4基・溝3条	①平安竪穴1軒・土坑3基	①近世塚1基	①文10 ②文57
112	日吉倉、五斗新遺跡 <富里市>		土器					①文47
113	公津原輪船生産遺跡				①中期(5世紀後半)掘輪窯跡1基・竪穴遺構4軒			①文9 文40

第2章 調査の成果

第1節 遺跡の概要 (第6図、第2～4表)

今回の発掘調査で検出した遺構は、旧石器時代～中・近世までの幅広い時代にわたるものであるが、比較的平坦な北側半分に集中し、南側の痩せ尾根部分にはほとんど遺構が検出されなかった。時代ごとの内容では、旧石器時代はⅥ層～Ⅶ層から石核・剥片7点が出土したブロック1か所が検出され、そのほか単独出土石器として石核・剥片12点が出土した。縄文時代は調査区の中央部に陥穴11基が検出され、特に、6H-50・6H-55・7H-00・7H-55グリッドの内側に集中している。弥生時代は後期の竪穴住居跡3軒が調査区の西側にまとまって検出された。古墳時代は中期の竪穴住居跡6軒・土坑2基と後期の竪穴住居跡8軒・土坑1基・溝1条が検出され、竪穴住居跡と土坑は調査区の中央部にまとまり、溝は調査区南側の台地先端部を横断するように作られている。奈良・平安時代は竪穴住居跡2軒・土坑11基が検出された。竪穴住居跡は調査区西側に近接して作られ、土坑は調査区全域に広がっている。中・近世は台地整形区画2か所・土地整形遺構3基・掘立柱建物跡1棟・竪穴状遺構11基・地下式坑2基・土坑墓1基・土坑31基・土坑群(ピット群)7か所・溝1条が検出された。台地整形区画は北側と南側に分かれ、北側台地整形区画の中に掘立柱建物跡・竪穴状遺構・地下式坑の全てと多くの土坑や土坑群(ピット群)が含まれている。台地整形区画以外の場所では、土坑とピット群がわずかに見られるだけである。弥生時代～奈良・平安時代の遺構の分布は、中・近世の台地整形区画以外の範囲にあることから、台地整形区画造成に伴って多くの遺構が壊されたと推測される。それを裏付けるように、台地整形区画や中・近世の竪穴状遺構・土坑などからこれらの時代の遺物が多く出土している。

第2表 竪穴住居跡等一覧表

()推定値:< >現存値 単位:主軸・幅m 床面積㎡

遺構番号	位置	主軸方向	主軸	幅	床面積	炉・カマド	貯蔵穴	壁溝	時期	備考
SI-001	6I-81・90～92	N-26°-W	<2.4>	<5.5>	-	北西	北	一部	古墳後期	SI-004と重複
SI-002	6G-77・87・88・97	N-37°-W	(5.4)	(5.3)	(27.4)	北西	なし	なし	弥生後期	
SI-003a	6H-70～72・80～82・90～92	N-44°-W	(8.5)	(8.2)	(66.0)	北西	東	一部	古墳中期	SI-005と重複
SI-003b	6H-70・71・80～82・90・91	N-44°-W	(6.1)	(5.8)	(35.7)	不明	東	一部	古墳中期	
SI-004	6I-80・90・91	N-10°-W	<2.0>	<4.8>	-	不明	不明	なし	古墳中期	SI-001と重複
SI-005	6H-60・61・70・71	N-61°-W	(5.7)	(4.5)	(23.6)	中央・南	なし	一部	古墳中期	SI-003と重複
SI-006	6G-88・89・98・99	N-64°-E	4.5	(4.9)	(20.9)	北東	南東	一部	古墳後期	
SI-007	6H-63・64・73・74・83・84	N-5°-E	(5.2)	(3.9)	(15.2)	中央	なし	一部	弥生後期	
SI-009	6G-99、6H-90、7G-09、7H-00	N-65°-W	4.6	4.2	(16.8)	西	なし	なし	弥生後期	SI-006と重複
SI-012	6H-97・98	N-33°-W	<1.2>	<1.4>	-	不明	北東	あり	古墳後期	SI-013～015と重複
SI-013	6H-98・99	N-32°-W	<1.4>	<3.7>	-	北西	不明	あり	古墳後期	SI-012・014・015と重複
SI-014	6H-87・88・97・98	N-36°-E	<2.1>	<1.9>	-	北東	東・西	なし	古墳後期	SI-012・013・015と重複
SI-015	6H-87・88・98	N-32°-W	<4.2>	<1.7>	-	不明	不明	なし	古墳中期	SI-012～014と重複
SI-017	7I-30・31	N-28°-W	<0.6>	<4.1>	-	北	西	なし	古墳後期	
SI-018	7H-31・32・41～43	N-36°-E	<7.0>	<3.4>	-	不明	北・南西	全周?	古墳後期	SI-019と重複
SI-019	7H-32・42・43	N-44°-E	<4.4>	<2.2>	-	不明	北	なし	古墳中期	SI-018と重複
SI-020	7H-16・17・26～28	N-43°-E	<8.6>	<2.7>	-	不明	北	なし	古墳後期	
SB-001	6G-87・88・97・98	N-28°-W	2.1	2.8	-	不明	不明	不明	奈良・平安	竪穴住居跡
SB-002	6G-78・79・88・89	N-33°-W	2.4	2.2	-	不明	不明	不明	奈良・平安	竪穴住居跡
SB-003	6G-39・49、6H-30・40	N-14°-W	-	-	-	-	-	-	中・近世	掘立柱建物跡 2間×2間
SI-008・010・011・016	欠番									



表土除去しなかった範囲

0 (1 : 500) 40m

第6図 調査区内上層遺構分布

第3表 竪穴状遺構・土坑等一覧表

()推定値：< >現存値

遺構番号	種別	位置	長軸方向	計測値：m			時期	備考
				長軸	短軸	深さ		
SI-021	土坑	7G-29、7H-20	N-21° -W	(3.60)	(2.80)	0.10	古墳中期	
SK-001	土坑	6G-07	N- 9° -W	<1.60>	1.20	0.24	中・近世	粘土貼り
SK-002	土坑	6G-17	-	0.90	0.90	0.20	中・近世	粘土貼り
SK-003	土坑	6G-06・07・16・17	N- 3° -W	2.84	1.40	0.32	中・近世	粘土貼り
SK-004	土坑	6I-62	-	1.68	1.68	0.36	奈良・平安	
SK-005	土坑	6G-77	N-77° -E	2.60	1.60	0.64	奈良・平安	
SK-007a	土坑	6G-88	N-88° -E	0.75	0.65	0.48	奈良・平安	
SK-007b	土坑	6G-88	-	77.00	0.77	0.11	奈良・平安	
SK-008	土坑	6H-26	-	1.12	1.12	0.40	奈良・平安	「賣井」墨書
SK-009	土坑	6H-26・36	N- 6° -E	2.00	1.36	0.52	奈良・平安	
SK-010	陥穴	6H-26・36	N- 1° -E	4.10	1.98	1.06	縄文	
SK-011	陥穴	6G-89	N-29° -W	2.53	0.80	1.84	縄文	
SK-012	土坑	6I-20・21	N-80° -E	<1.30>	1.20	0.20	奈良・平安	
SK-014	地下式坑	6G-46・56	N- 0° -E	2.68	2.15	2.32	中・近世	
SK-015	竪穴状遺構	6G-47・48・57・58	N-90° -E	3.28	2.24	0.32	中・近世	
SK-016	竪穴状遺構	6H-41・51	N- 4° -E	3.32	3.04	0.25	中・近世	
SK-017a	土坑	6H-51	N- 6° -E	1.16	0.96	0.37	中・近世	SX-002と重複
SK-017b	土坑	6H-51	N-45° -E	1.28	0.82	0.17	中・近世	SX-002と重複
SK-017c	土坑	6H-51	N-35° -E	1.10	0.80	0.59	中・近世	SX-002と重複
SK-017d	土坑	6H-61	N-12° -W	1.14	1.00	0.30	中・近世	SX-002と重複
SK-018	地下式坑	6H-31・32・41・42	N- 2° -W	2.30	2.05	1.80	中・近世	SK-019と重複
SK-019	竪穴状遺構	6H-31・41	N-15° -W	2.24	2.24	0.44	中・近世	SK-018と重複
SK-020	陥穴	6H-53・63	N-42° -E	3.36	0.48	0.37	縄文	
SK-021	土坑	6H-53	N-36° -W	0.90	0.56	0.50	古墳後期	
SK-022	竪穴状遺構	6G-39	N-80° -E	2.53	2.00	0.42	中・近世	
SK-023	竪穴状遺構	6G-29・39、6H-20・30	N-90° -E	2.50	2.34	0.47	中・近世	
SK-024	陥穴	6H-62・72	N-22° -W	3.65	0.90	1.33	縄文	
SK-025a	竪穴状遺構	6G-27・28・37・38	N-31° -E	2.30	1.93	0.39	中・近世	
SK-025b	土坑	6G-37	N-33° -E	<1.52>	1.40	0.22	中・近世	
SK-025c	土坑	6G-37・47	N-32° -E	2.21	1.18	0.14	中・近世	
SK-026	土坑	6I-41	N-84° -W	1.12	0.96	0.76	奈良・平安	
SK-027	土坑墓	6H-59・69、6I-50・60	N-87° -W	1.60	1.36	0.96	中・近世	
SK-028	竪穴状遺構	6G-24・25	N-89° -E	2.92	2.04	0.36	中・近世	SK-034と重複
SK-029	竪穴状遺構	6G-14	N-29° -W	2.46	1.90	0.58	中・近世	一部粘土貼り
SK-030	陥穴	6H-73・83	N- 6° -W	4.18	1.56	1.80	縄文	
SK-031	土坑	6G-15・16	N-87° -E	1.70	1.08	0.88	中・近世	粘土貼り
SK-032	竪穴状遺構	6G-16・17・26・27	N- 7° -W	2.32	2.16	0.44	中・近世	
SK-033	竪穴状遺構	6G-17・18	N-78° -E	(2.56)	(2.12)	0.64	中・近世	一部粘土貼り
SK-034	竪穴状遺構	6G-24	N-90° -E	2.88	2.00	0.87	中・近世	粘土貼り、SK-028と重複
SK-035a	土坑	6G-19・20、6H-10・20	N-71° -E	(1.52)	(0.88)	0.50	中・近世	SK-035bと重複
SK-035b	土坑	6G-19・20、6H-10・20	N-21° -W	(1.94)	1.52	0.67	中・近世	SK-035aと重複
SK-042	陥穴	6H-59、6I-50	N-41° -W	2.56	0.68	0.72	縄文	
SK-043	陥穴	6H-59、6I-50	N-45° -W	3.24	0.28	0.24	縄文	
SK-044	土坑	6H-72	N- 6° -E	0.89	0.79	-	古墳中期	
SK-046	陥穴	6H-80・81・90・91	N-23° -W	3.22	2.24	1.89	縄文	
SK-050	陥穴	6H-90・91、7H-00・01	N- 2° -E	3.30	0.96	2.01	縄文	
SK-051	土坑	7G-09	N-58° -E	1.39	0.74	0.86	中・近世	
SK-052	陥穴	6H-92	N- 4° -E	3.14	0.86	1.43	縄文	
SK-053	土坑	6H-97	N-84° -E	1.90	0.79	0.86	中・近世	
SK-054	土坑	6H-97	-	1.07	0.98	0.45	中・近世	
SK-055	土坑	6H-97	-	0.45	<0.2>	0.19	中・近世	
SK-056	土坑	6H-97	-	0.73	<0.64>	0.18	中・近世	
SK-057	土坑	8I-46	N-39° -W	1.46	0.92	0.20	奈良・平安	
SK-058	陥穴	7H-24・25	N-76° -W	3.76	1.24	1.12	縄文	
SK-070	土坑	7I-41	-	1.24	1.24	0.21	奈良・平安	「富」墨書
SK-071	土坑	7H-34	N-85° -W	(1.06)	0.89	0.64	中・近世	SX-004内
SK-072	土坑	7H-34	N- 5° -E	1.07	0.86	0.52	中・近世	SX-004内
SK-073	土坑	7H-34	N-43° -W	0.78	0.72	0.47	中・近世	SX-004内
SK-074	土坑	7H-34	N-34° -W	0.95	0.69	0.42	中・近世	SX-004内

遺構番号	種別	位置	長軸方向	計測値：m			時期	備考
				長軸	短軸	深さ		
SK-075	土坑	7H-34	N-10° -E	0.87	0.81	0.46	中・近世	SX-004内
SK-076	土坑	7H-31	N-85° -E	0.76	0.64	0.12	中・近世	SX-004内
SK-077	土坑	7H-32	-	(1.12)	<1.10>	0.56	中・近世	SX-004内
SK-078	土坑	7H-32・33	N-88° -E	1.16	1.00	0.49	中・近世	SX-004内
SK-079	土坑	7H-33	N-2° -E	0.76	0.70	0.21	中・近世	SX-004内
SK-080	土坑	6H-06	N-83° -W	<2.26>	1.94	0.25	中・近世	
SK-081	土坑	6H-06	N-83° -W	1.92	1.41	0.71	中・近世	
SK-082	土坑	6H-07	N-90° -W	1.38	0.96	0.32	中・近世	
SK-083	土坑	6H-07	N-88° -W	2.10	0.63	0.45	中・近世	
SK-084	土坑	6H-07・08	N-8° -E	1.36	1.08	0.32	中・近世	
SK-085	土坑	7H-32・42	N-54° -W	(1.24)	<0.72>	-	奈良・平安	
SX-001	土地整形遺構	6G-25~28・35~38・45~47・56・57	-	13.00	9.00	-	中・近世	北側台地整形区画内
SX-002	ピット群	6H-50・51・60・61	-	6.80	5.90	-	中・近世	ピット17基
SX-003	土坑群	6H-15・16・25・26・35・36・45・46	-	13.00	-	-	中・近世	土坑8基
SX-004	土地整形遺構	7H-11~13・20~25・30~35、7G-29・39	-	<24.00>	<7.00>	-	中・近世	南側台地整形区画内 平場状
SX-005	土地整形遺構	7H-30~35・40~46ほか	-	<54.00>	<20.00>	-	中・近世	南側台地整形区画内 階段状
SX-006	ピット群	6H-52・53・63	-	4.50	5.30	-	中・近世	ピット14基
SX-007	ピット群	6G-14・15・24・25	-	7.00	4.00	-	中・近世	柵列ピット7基
SX-008	ピット群	6G-27・28・37・38・47	-	7.00	4.00	-	中・近世	柵列ピット7基
SX-009	ピット群	6G-29・38・39・49、6H-40	-	8.00	7.00	-	中・近世	ピット17基
SX-010	ピット群	6G-08・09・18・19・28・29、6H-10・20	-	9.00	6.00	-	中・近世	ピット41基

SK-006・013・036~041・045・047~049・059~69 欠番

第4表 溝一覧表

遺構番号	位置	走行方向	計測値：m			時期	備考
			総延長	幅	深さ		
SD-003	6H-06~09	N-90° -E	<10.6>	0.86 ~ 1.16	0.05 ~ 0.24	中・近世	
SD-006	8I-25・26・35・36・45	N-24° -E	<9.7>	1.30 ~ 1.75	0.58 ~ 0.89	古墳時代	

SD-001・002・004・005・007~011 欠番

第2節 旧石器時代の遺構と遺物

1 第1ブロック(第7・8図、第5表、図版5・24)

6H-70グリッドに所在する。樹枝状台地突端の平坦面に位置する。南北方向3m・東西方向1mの範囲に7点の石器が出土した、僅少かつ小規模なブロックである。出土層位はいずれもVI層とVII層の境界面である。ただし、6H-70グリッド付近のローム層はVI層上面まで削平されており、上層遺構の底面がVI層中位、一部の深い土坑がIXa層まで達している。ブロックに重複する上層遺構を重ね合わせると、見かけ上の石器の広がり、上層遺構の間隙を縫って残された石器の分布であることが分かる。したがって、本ブロックは後世の削平の影響を受けており、本来の全容を保っていない可能性が高い。

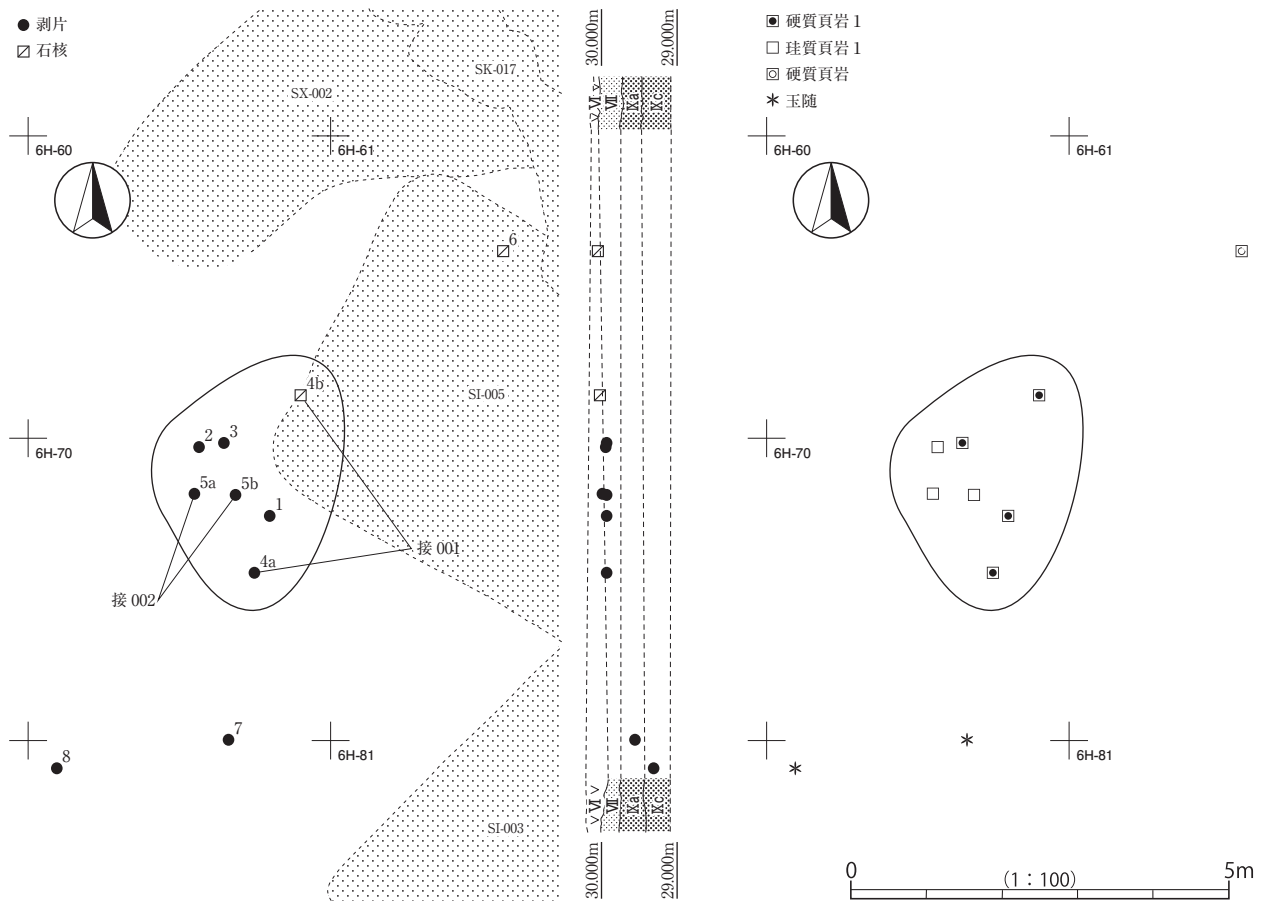
定型的な石器は認められず、剥片・石核類と接合資料のみで構成される。大型の石刃ないし剥片をブランクとし、特徴的なリダクションを行う資料が出土している。

使用されている石材は、均質な硬質頁岩と珪質頁岩のみである。2母岩に分類した。

硬質頁岩1(母岩番号：001・第8図)自然面は残存個体がないため不明である。剥離面は黒褐色(Hue10YR 3/2)である。所により黒褐色斑が延びる。油脂光沢がある。

珪質頁岩1(母岩番号：002・第8図)自然面は明褐色(Hue7.5YR 5/6)、剥離面はにぶい黄橙色(Hue10YR 6/3)で、所により明色部分が混ざる。節理面は灰白色(Hue10YR 7/1)である。微光沢があるが、油脂光沢の発達が弱いことから珪質頁岩とした。

1~3は剥片である。1・3は硬質頁岩1の剥片である。打点が浅く、打面は線状に近い。2は珪質頁岩1の剥片である。背面の剥離は、稜線が不明瞭なものは自然面とした。



第7図 第1ブロック器種別・母岩別分布図

第5表 旧石器時代石器属性表

現存値()

挿図番号	石器集中	出土層位	器種	石材	母岩番号	接合番号	計測値：mm g				グリッド	遺物番号	位置情報：m		
							最大長	最大幅	最大厚	重量			X値	Y値	標高
第8図-1	1B	VI	剥片	HSh	001		20.9	9.4	2.8	0.5	6H-70	4	-22765.025	45043.265	29.947
第8図-2	1B	VI	剥片	SSh	002		21.7	28.4	7.8	4.1	6H-70	6	-22764.115	45042.331	29.930
第8図-3	1B	VI	剥片	HSh	001		18.6	15.1	3.2	0.7	6H-70	7	-22764.061	45042.659	29.961
第8図-4a	1B	VI	剥片	HSh	001	001	42.8	11.8	3.0	2.0	6H-70	5	-22765.777	45043.063	29.937
第8図-4b	1B	VI	石核	HSh	001	001	55.8	21.2	17.2	16.1	6H-60	2	-22763.430	45043.674	30.068
第8図-5a	1B	VI	剥片	SSh	002	002	41.5	15.2	11.5	3.6	6H-70	2	-22764.733	45042.269	30.000
第8図-5b	1B	VI	剥片	SSh	002	002	(32.1)	16.9	7.6	4.9	6H-70	3	-22764.748	45042.813	29.956
第9図-6	外	VI	石核	HSh			44.4	28.0	12.2	15.1	6H-61	2	-22761.524	45046.352	30.038
第9図-7	外	IXa	剥片	Cc			18.1	22.8	6.7	2.4	6H-70	8	-22767.985	45042.721	29.526
第9図-8	外	IXc	剥片	Cc			(19.8)	(26.5)	2.6	1.4	6H-80	2	-22768.362	45040.449	29.317
第9図-9	外	不明	剥片	HSh			(40.7)	59.9	8.9	19.8	7G-07	1	-	-	-
第9図-10	外	不明	剥片	HSh			24.2	31.6	5.6	2.6	6H-93	1	-	-	-
第9図-11	外	不明	剥片	Ho			38.3	27.1	13.2	8.5	SK-052	1	-	-	-
第9図-12	外	不明	剥片	Ho			25.1	13.8	4.9	1.2	6H-92	4	-	-	-
第9図-13	外	不明	剥片	Ch			52.3	41.2	9.2	15.1	6H-92	5	-	-	-
	外	不明	剥片	Ho			33.5	15.7	5.4	2.6	SK-052	1	-	-	-
	外	不明	剥片	Ho			15.4	25.1	4.4	1.9	SK-052	1	-	-	-
	外	不明	剥片	Ho			(11.2)	17.1	6.3	1.3	SK-052	1	-	-	-
	外	不明	剥片	Ho			(10.5)	23.2	6.4	1.7	SK-052	1	-	-	-

4は硬質頁岩1の石核1点と石刃1点の接合資料である。厚手の石刃ないし剥片をブランクとして、小石刃や剥片を剥離する資料である。4bの右側面のポジティブ面は、末端がウートラパッセ状になる。また、右側面下部と裏面の剥離面は、このポジティブ面よりも古く、裏面下部の剥離面は更に古いポジティブ面である可能性が高い。したがって、ブランク剥出に先立つ複数段階の剥片剥離工程が想定でき、剥片石核の底面を取り込んで剥離された石刃ないし剥片がブランクであると推測される。剥片剥離は、まず、4の上下に打面を設定し、正面と両側面を作業面として進められる。下面は単剥離打面、上面は調整打面である。小石刃を連続的に剥離しており、この過程で4aが剥離されている。その後、打面を正面に転移し、左側面を作業面として幅広の剥片を剥離している。作業面には顕著な頭部調整が残っている。最終的に残核4bが遺跡内に残されている。

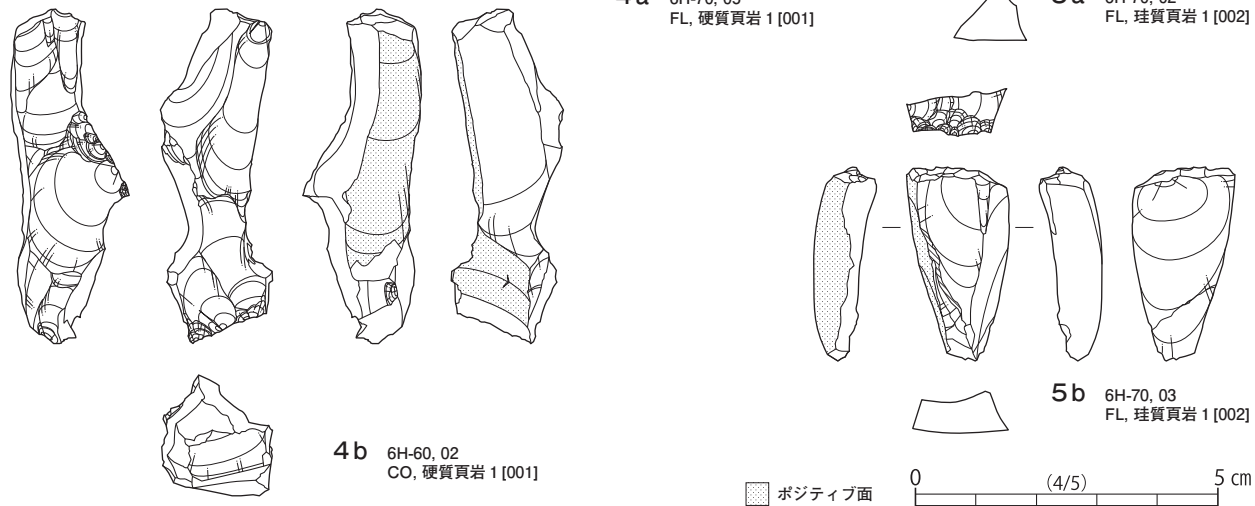
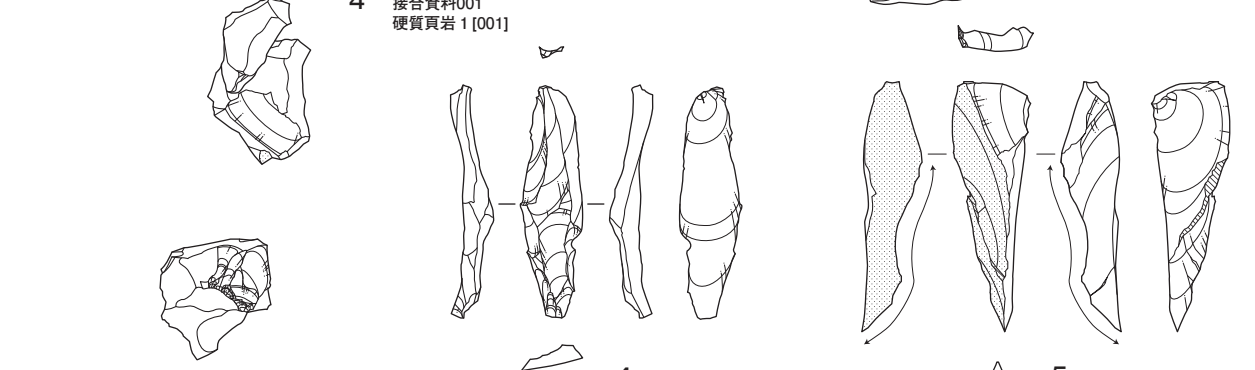
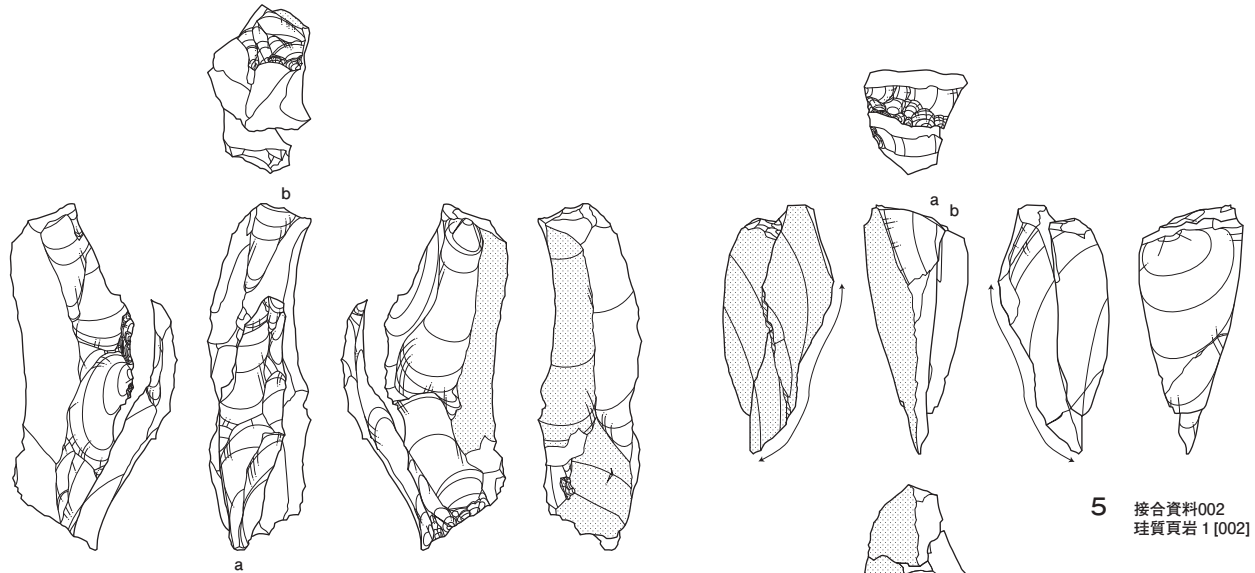
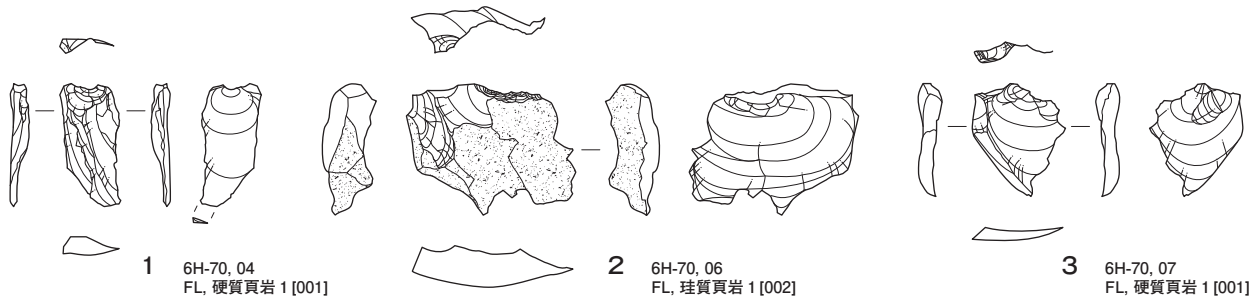
5は珪質頁岩1の石刃2点の接合資料である。剥片をブランクとし、小口面の作業面から石刃を剥離する資料である。5の左側面はポジティブ面である。正面の剥離面はポジティブ面よりも新しく、右側面の剥離面がそれよりも新しい。したがって、ブランクを用意したのち、石刃剥離に先立って、小口面の作業面が作り出されていることが分かる。剥片剥離は、まず、上面に打面を作出し、小口面になった正面を作業面として石刃剥離が進められ、5aが剥離される。その後、裏面側から打面更新と正面側から顕著な打面調整を施して5bが剥離される。残核は検出されていない。なお、正面背稜に微細剥離が連続するが、パティナが新しいためガジリの可能性が高い。

2 単独出土(第9図、第5表、図版25)

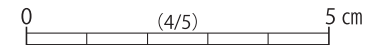
6は石核である。6H-61グリッドで、Ⅵ層とⅦ層の境界面から出土した。第1ブロックから離れるため単独出土としたが、出土層位・石材・剥離工程を考慮すると、第1ブロックと同一の文化層に帰属する可能性が高い。石質は硬質頁岩であるが、ブロック内出土の硬質頁岩1とは異なる。剥離面はにぶい黄褐色(Hue10YR 5/3)で、薄墨のような暗色部が斑に混ざり、油脂光沢がある。厚手の石刃をブランクとして、小石刃・剥片を剥離する石核である。裏面に広いポジティブ面が残る。また、ブランク時の背面が右側面と背面に残存し、左側面にも並行して僅かに残存する。したがって、ブランクは厚手で両側縁が並行する石刃であり、腹面の状況から見て、残存している部分はリダクションが進んだ石刃の端部であると推測される。右側縁には、裏面(素材時の腹面)に微細剥離痕、表面(素材時の背面)に線状痕が認められる。剥片剥離は上下に打面を設定し、表裏両面を作業面として進められ、小石刃・剥片類を剥離している。上面は線状打面で、下面は単剥離打面である。打面直下に連続する小剥離は、両極剥離に由来する可能性が高い。

7・8は玉髓の剥片で、6H-80グリッドのⅨa層下部から出土した。剥離面は黄色を帯び半透明である。

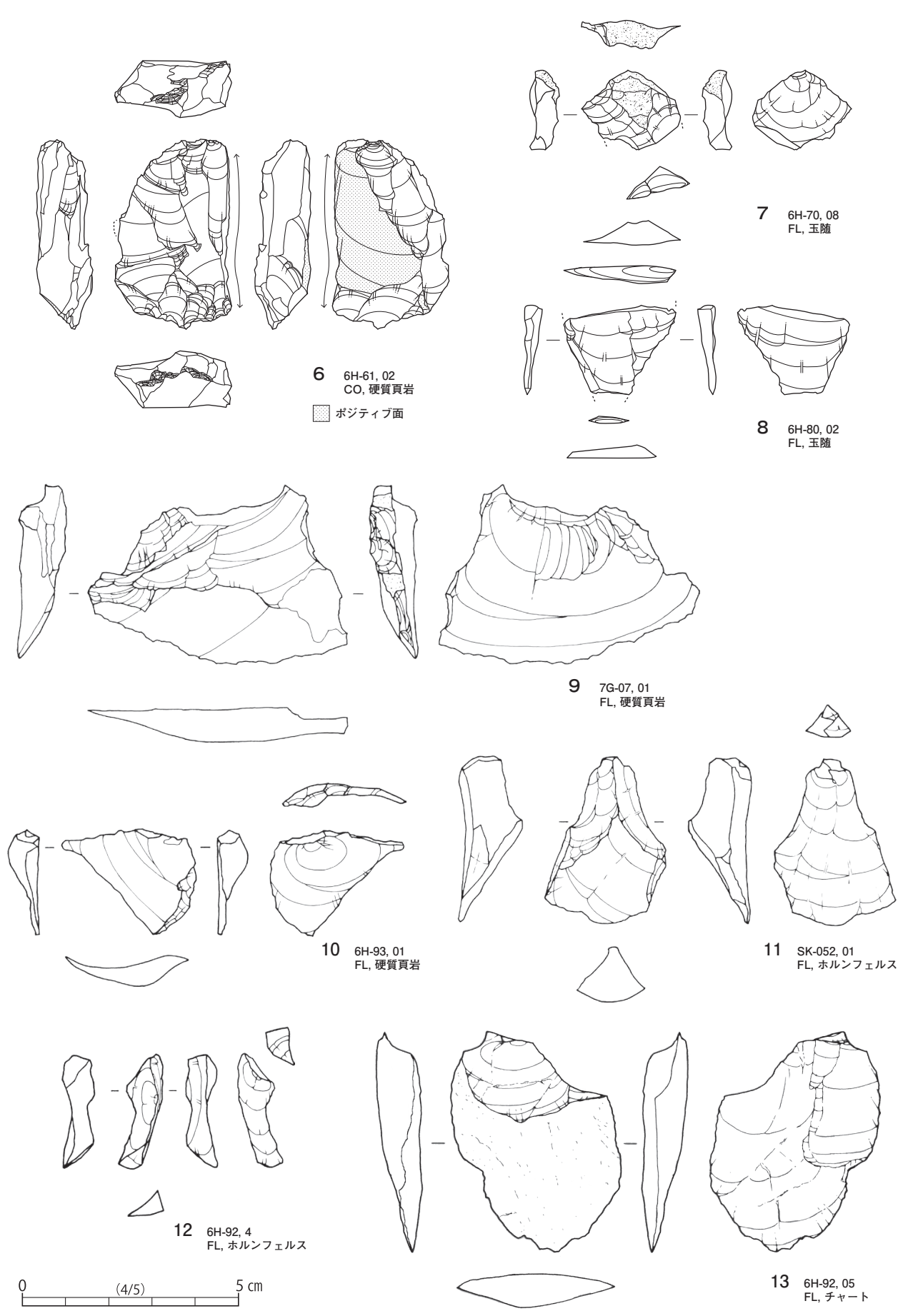
9～13は上層調査時に遺構埋土やグリッド一括遺物として出土した石器のうち、旧石器時代に帰属すると判断した資料を図示した。いずれも剥片である。9は6H-93グリッドから出土した硬質頁岩の剥片である。石質は第1ブロックの硬質頁岩2に似るが、やや黄色を帯びる。10は7G-07グリッドから出土した硬質頁岩の剥片である。石質は第1ブロックの硬質頁岩1に似ている。背面や縁辺の細かい剥離は全てガジリである。11～13は6H-92グリッド及び上層遺構のSK-052から出土した剥片である。11・12はホルンフェルスの剥片である。図示した石器以外にも、同様の石質のホルンフェルスの剥片4点が付近から出土している。13はチャートの剥片である。



☐ ポジティブ面



第8図 第1ブロック出土石器



第9図 単独出土石器

第3節 縄文時代の遺構と遺物

1 陥穴

検出した陥穴は11基であり、形状や深さから陥穴と判断した。多くの遺構からは時期を特定できるような遺物が出土していないため、各遺構の詳細な時期は判断しがたい。陥穴は平面形の形態から、2パターンに分類することができる。ひとつは平面形が長楕円形のもので、SK-011・020・024・042・043・052・058が該当する。もうひとつは平面形が楕円形のもので、SK-010・030・046・050が該当する。分布の状況は、6H-50グリッドから南に20m、東に20mの範囲に濃密な分布範囲が認められるが、平面形パターンによる分布の傾向は認められない。

SK-010(第10図、第3表、図版6)

6H-26・36グリッドに所在する。北東部分の一部はSK-009に壊されている。平面形は楕円形で、長軸方向はN-1°-Eである。規模は長軸長4.10m・短軸長1.98mである。確認面からの深さは北側で1.06m、中央から南側で0.7m~0.8mである。南側の底面は、側壁よりも外側に抉るように作られている。南側の壁寄りに深さ25cmほどのピットがあるが、性格は不明である。埋土の堆積状況は、発掘調査時の所見ではローム粒を多量に含んだ黄褐色土が主体となっている。

本遺構に伴う遺物は出土していない。

SK-011(第10図、第3表、図版6)

6G-89グリッドに所在する。北東部分の一部はSB-002の柱穴に壊されている。平面形は長楕円形で、長軸方向はN-29°-Wである。規模は長軸長2.53m・短軸長0.80mで、確認面からの深さは1.84mである。長軸方向の壁は底面から袋状に立ち上がり、一旦広がった後、垂直に立ち上がる。

本遺構に伴う遺物は出土していない。

SK-020(第10図、第3表、図版6)

6H-53・63グリッドに所在する。北東部分はSK-021・SX-006に壊されている。平面形は長楕円形で、長軸方向はN-42°-Eである。規模は遺存部分から推測し、長軸長3.36m・短軸長0.48mで、確認面からの深さは0.37mである。短軸方向の断面形はV字状である。深さは浅いが、遺構の形状から陥穴と判断した。

遺物は出土していない。

SK-024(第10図、第3表、図版6)

6H-62・72グリッドに所在する。平面形は長楕円形で、長軸方向はN-22°-Wである。規模は長軸長3.65m・短軸長0.90mで、確認面からの深さは1.33mである。短軸方向の断面形はV字状である。

遺物は出土していない。

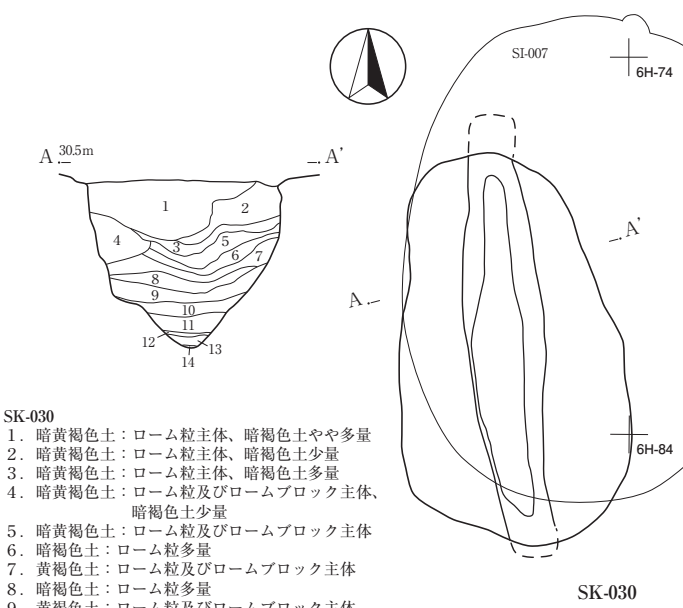
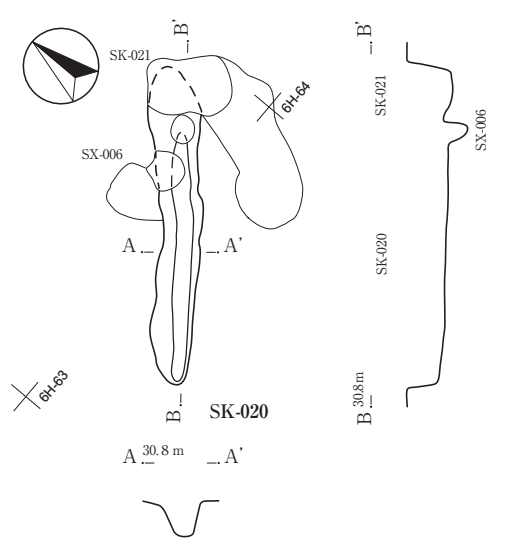
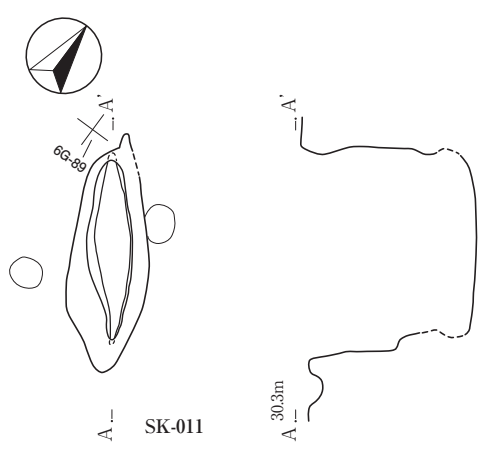
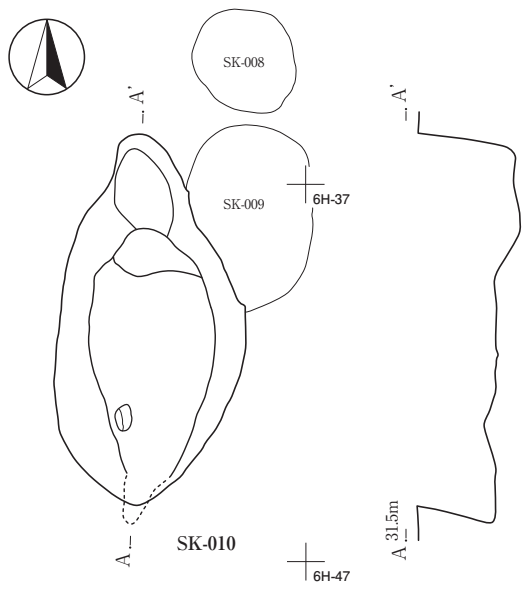
SK-030(第10図、第3表、図版6)

6H-73・83グリッドに所在する。SI-007の床面精査中に検出したものである。平面形は楕円形で、長軸方向はN-6°-Wである。規模は長軸長4.18m・短軸長1.56mで、確認面からの深さは1.80mである。長軸方向の底面は、側壁よりも外側に抉るように作られている。短軸方向の断面形は緩やかなV字状である。埋土は中層から下層にかけて、暗褐色土と黄褐色土が交互に堆積している。

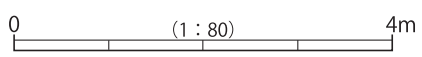
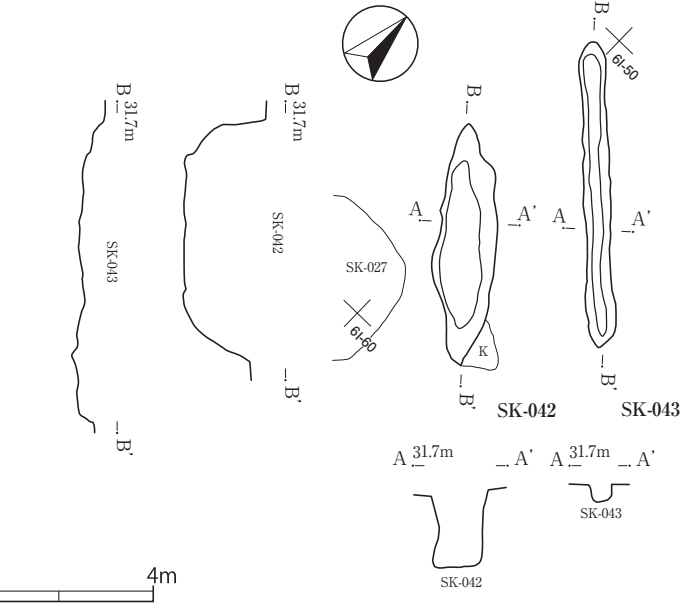
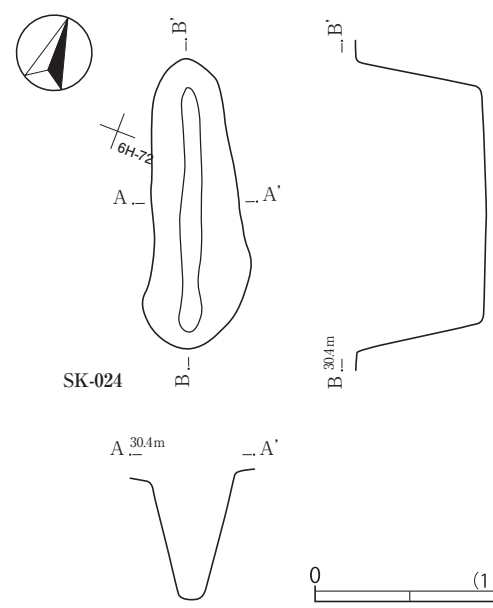
遺物は出土していない。

SK-042(第10図、第3表、図版6)

6H-59・6I-50グリッドに所在する。北東約1mにSK-043が近接し、本遺構と平行に並んでいる。南東部



- SK-030
1. 暗黄褐色土：ローム粒主体、暗褐色土やや多量
 2. 暗黄褐色土：ローム粒主体、暗褐色土少量
 3. 暗黄褐色土：ローム粒主体、暗褐色土多量
 4. 暗黄褐色土：ローム粒及びロームブロック主体、暗褐色土少量
 5. 暗黄褐色土：ローム粒及びロームブロック主体
 6. 暗褐色土：ローム粒多量
 7. 黄褐色土：ローム粒及びロームブロック主体
 8. 暗褐色土：ローム粒多量
 9. 黄褐色土：ローム粒及びロームブロック主体
 10. 暗褐色土：ロームブロックやや多量
 11. 黄褐色土：ローム粒及びロームブロック主体
 12. 暗黄褐色土：暗褐色土やや多量
 13. 暗黄褐色土：ロームブロック（径5～10mm）やや多量
 14. 暗褐色土：ローム粒少量



第10図 SK-010・011・020・024・030・042・043

分の一部は攪乱を受けている。平面形は長楕円形で、長軸方向はN-41° -Wである。規模は長軸長2.56m・短軸長0.68mで、確認面からの深さは0.72mである。短軸方向の断面形は箱形である。

遺物は出土していない。

SK-043(第10図、第3表、図版6)

6H-59・6I-50グリッドに所在する。南西約1mにSK-042が近接し、本遺構と平行に並んでいる。平面形は長楕円形で、長軸方向はN-45° -Wである。規模は長軸長3.24m・短軸長0.28mで、確認面からの深さは0.24mである。短軸方向の断面形は椀形である。深さは浅いが、SK-042との位置関係や方向などから一連の遺構と考え、陥穴と判断した。

遺物は出土していない。

SK-046(第11図、第3表、図版7)

6H-80・8I・90・9Iグリッドに所在する。SI-003a・bの床面精査中に検出したものである。平面形は楕円形で、長軸方向はN-23° -Wである。規模は長軸長3.22m・短軸長2.24mで、確認面からの深さは北側の深いところで1.89mである。短軸方向の断面形は箱形である。埋土は中層から下層にかけて、ロームブロックを主体とした黄褐色土が厚く堆積し、人為的に埋め戻されたと推測される。

遺物は出土していない。

SK-050(第11図、第3・7表、図版7・50)

6H-90・9I・7H-01グリッドに所在する。中央上部は溝状の攪乱に削平されている。平面形は楕円形で、長軸方向はN-2° -Eである。規模は長軸長3.30m・短軸長0.96mで、確認面からの深さは2.01mである。長軸方向の底面は、側壁よりも外側に抉るように作られている。埋土はロームブロックやローム粒を主体とした暗黄褐色土が厚く堆積し、所々に暗褐色土が挟まれ、人為的に埋め戻されたと推測される。

遺物は13層の上面付近から、石器が1点出土した。1は黒曜石製の石核である。長さ27.9mm・幅29.9mm・厚さ13.8mmである。

SK-052(第12図、第3表、図版7)

6H-92グリッドに所在する。平面形は長楕円形で、長軸方向はN-4° -Eである。規模は長軸長3.14m・短軸長0.86mで、確認面からの深さは1.43mである。長軸方向の北側底面は、側壁よりも外側に抉るように作られているが、南側は緩やかに立ち上がる。短軸方向の断面形はV字状である。

本遺構に伴う遺物は出土していない。

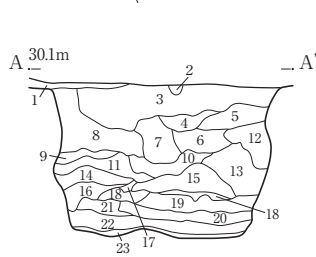
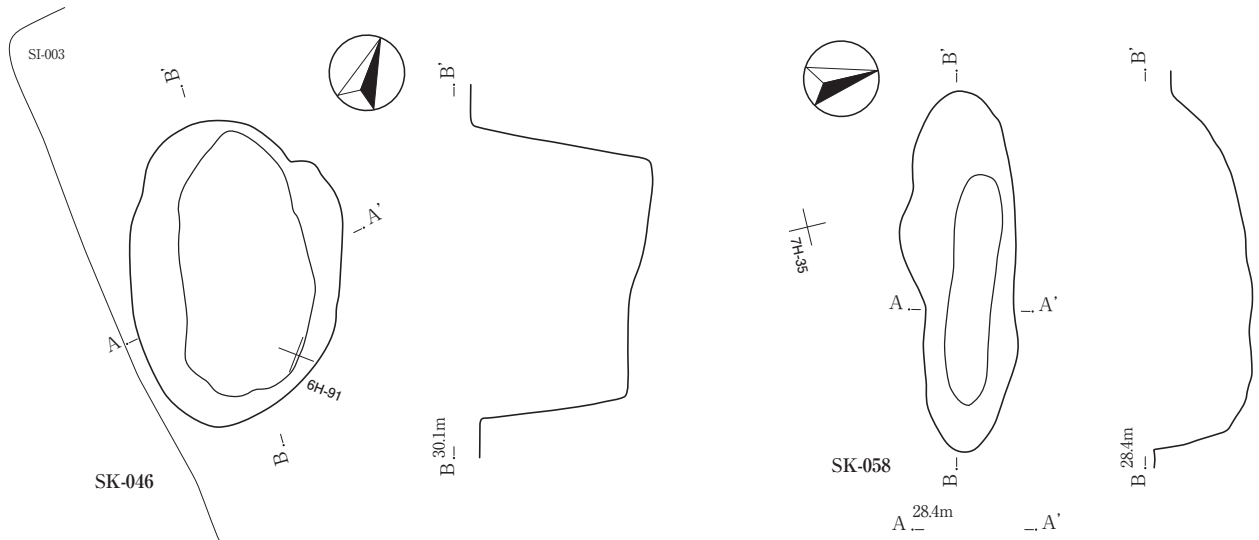
SK-058(第11図、第3表、図版6)

7H-24・25グリッドに所在する。南側上部は溝状の攪乱に削平されている。平面形は長楕円形で、長軸方向はN-76° -Wである。規模は長軸長3.76m・短軸長1.24mで、確認面からの深さは1.12mである。短軸方向の断面形は袋状である。

本遺構に伴う遺物は出土していない。

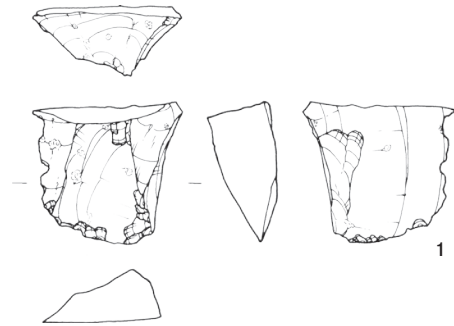
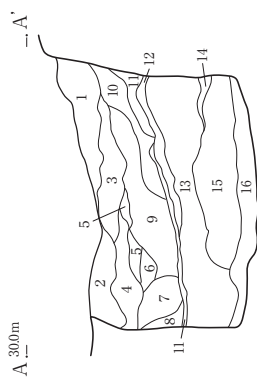
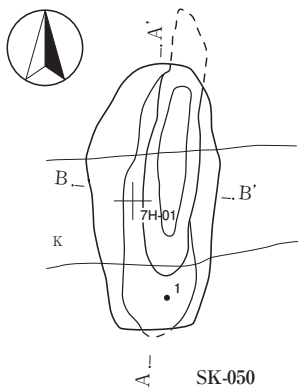
2 遺構外出土の遺物(第13図、第6・7表、図版26)

今回の調査範囲における縄文時代の遺構は陥穴のみで、そこからは当該時代の土器は出土していない。また、本遺跡全体としても縄文時代の遺物は極めて少ない。グリッド一括や出土遺構に伴わない遺物のうち9点を図示することができた。土器は中期後半～後期前半の時期のものである。

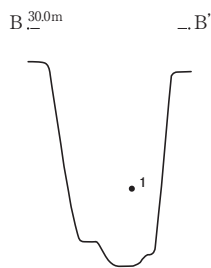


SK-046

1. 暗褐色土：ローム粒多量、ロームブロック(径5mm) やや多量、SI-003埋土
2. 暗褐色土：ローム粒多量、SI-003埋土
3. 暗褐色土：ロームブロック(径3~5mm)少量
4. 暗褐色土：ローム粒少量
5. 暗褐色土：ロームブロック(径5mm)少量
6. 暗褐色土：暗褐色土粒主体、ローム粒やや多量
7. 黄褐色土：ローム粒多量
8. 褐色土：ロームブロック(径20~30mm)やや多量
9. 暗褐色土：ロームブロック(径20~30mm)やや多量
10. 暗褐色土：ロームブロック(径20~30mm)やや多量
11. 黄褐色土：ローム粒多量、大形ロームブロック含む
12. 黄褐色土：ロームブロック(径5~10mm)多量、ロームブロック(径30~50mm)少量
13. 黄褐色土：ロームブロック(径3~5mm)主体、大形ロームブロック含む
14. 黄褐色土：ハードロームブロック主体、ローム粒多量
15. 黄褐色土：ローム粒主体、大形ロームブロック含む
16. 黄褐色土：ローム粒主体、大形ロームブロック含む
17. 暗褐色土：ロームブロック(径5~10mm)やや多量
18. 暗褐色土：ロームブロック(径10~20mm)やや多量
19. 黄褐色土：ハードロームブロック主体
20. 暗褐色土：ローム粒多量、かたくしまる
21. 黄褐色土：ハードロームブロック主体
22. 暗黄褐色土：ハードロームブロック主体
23. 暗褐色土：ローム粒多量、かたくしまる



0 (2/3) 5 cm



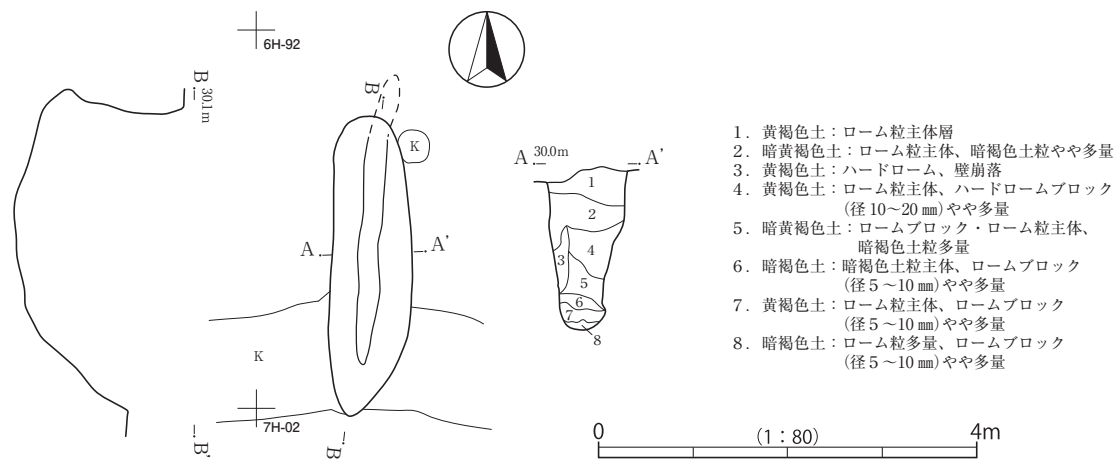
SK-050

1. 暗黄褐色土：ローム粒(ソフト)、暗褐色土粒少量
2. 暗黄褐色土：ローム粒(ソフト)、暗褐色土粒多量
3. 暗黄褐色土：ローム粒(ソフト)主体、暗褐色土粒やや多量
4. 黄褐色土：ローム粒主体、暗褐色土粒少量
5. 暗黄褐色土：ローム粒・暗褐色土粒多量
6. 暗褐色土：暗褐色土粒主体、ローム粒やや多量
7. 黄褐色土：ロームブロック(ハード)主体
8. 暗黄褐色土：ローム粒主体、暗褐色土粒少量
9. 黄褐色土：ロームブロック(ハード)主体、暗褐色土粒少量
10. 暗黄褐色土：ローム粒主体、暗褐色土粒やや多量
11. 暗褐色土：暗褐色土主体、ローム粒少量
12. 黄褐色土：ローム粒主体
13. 暗黄褐色土：ローム粒主体、暗褐色土やや多量
14. 暗褐色土：暗褐色土多量、ローム粒少量
15. 黄褐色土：ローム粒主体
16. 暗褐色土：初期堆積土

0 (1:80) 4m

第11図 SK-046・050・058

1・2は加曾利E式後半の深鉢である。1は口縁部の破片で、欠損しているが突起が付されたものと推測される。その下から隆線で口縁部の区画が形成されている。隆線貼付後に単節縄文LRが施される。2



第12図 SK-052

は胴部破片で、単節縄文LRが施された後に2本の縦位の沈線が引かれ、沈線間が磨り消される。3・4は加曾利E式～称名寺式の胴部破片で、櫛歯状工具で蛇行した沈線が引かれる。5は称名寺式の深鉢で、口縁部である。やや細い沈線でJ字文が施されるが、縄文は認められない。また、内面には稜が作り出される。6は堀之内式の深鉢である。口縁部の破片で、全体に単節縄文RLが横・縦・横と、方向を変えながら施された後、円形の押捺文が施される。

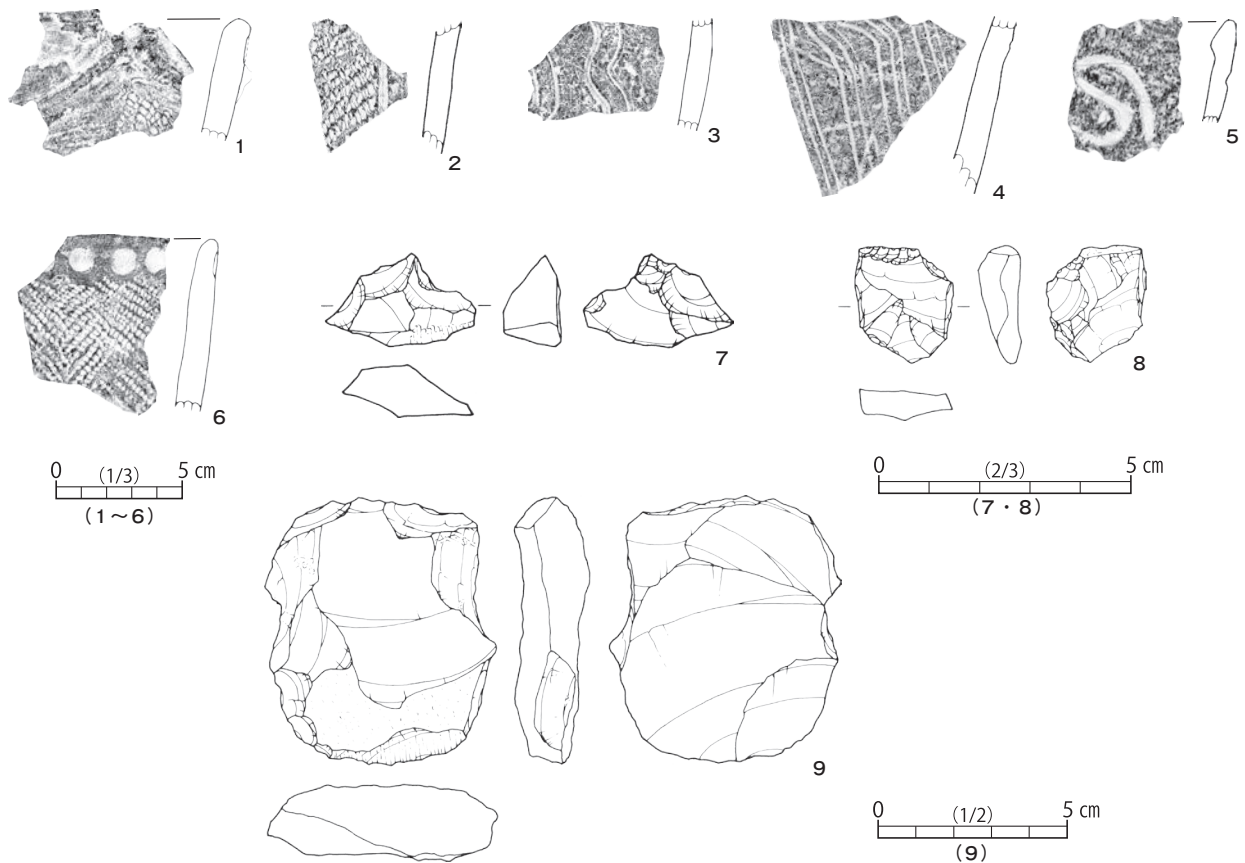
7～9は石器である。7は石核で、石材はチャートである。縁辺には調整剥離が施されている。長さ18mm・幅30mm・厚さ12mmである。8はチャート製の楔形石器である。上面及び左側面は打面調整により平坦に整えられ、その後に両極打法により、対となる面にも剥離が加えられている。縁辺には一部押圧剥離が施されている部分が見られる。長さ23.2mm・幅19.6mm・厚さ8.3mmである。9は打製石斧である。石材は花崗岩で、長さ70.3mm・幅60.4mm・厚さ20.1mm・重さ101.19gである。分銅型打製石斧を再加工したと考えられる。刃部の表面は摩耗しており、側面は両極剥離により再調整が施されている。

第6表 縄文土器観察表

遺構	挿図番号	型式	器種	法量(cm)	遺存度	胎土	色調・焼成	技法	備考
遺構外	第13図-1	加曾利E	深鉢	口径 - 底径 - 器高 -	口縁部	小石	内面 黄褐色(10YR5/4) 外面 黄褐色(10YR5/4) 焼成 良好	内面 - 外面 - 底外面 -	隆線+単節縄文LR SI-002
	第13図-2	加曾利E	深鉢	口径 - 底径 - 器高 -	胴部	石英	内面 明褐色(7.5YR5/6) 外面 黄褐色(10YR5/4) 焼成 良好	内面 - 外面 - 底外面 -	単節縄文LR+磨消懸垂文 SI-002
	第13図-3	加曾利E ～称名寺	深鉢	口径 - 底径 - 器高 -	胴部	小石	内面 黒褐色(10YR3/2) 外面 黄褐色(10YR5/4) 焼成 良好	内面 - 外面 - 底外面 -	櫛歯状工具による沈線文 SI-009
	第13図-4	加曾利E ～称名寺	深鉢	口径 - 底径 - 器高 -	胴部	白色粒子	内面 灰黄褐色(10YR6/2) 外面 黄褐色(10YR5/4) 焼成 良好	内面 - 外面 - 底外面 -	櫛歯状工具による沈線文 SX-002
	第13図-5	称名寺	深鉢	口径 - 底径 - 器高 -	口縁部	雲母粒	内面 黄褐色(10YR6/4) 外面 黄褐色(10YR5/4) 焼成 良好	内面 - 外面 - 底外面 -	J字文 SI-003a
	第13図-6	堀之内	深鉢	口径 - 底径 - 器高 -	口縁部	雲母粒	内面 明黄褐色(10YR7/6) 外面 黄褐色(10YR5/4) 焼成 良好	内面 - 外面 - 底外面 -	単節縄文RL+円形の押捺文 SI-018

第7表 縄文時代石器属性表

遺構番号	挿図番号	遺物番号	種類	石材	法量: mm g				備考
					最大長	最大幅	最大厚	重量	
SK-050	第11図- 1	2	石核	黒曜石	27.9	29.9	13.8	8.95	
遺構外	第13図- 7	SI-009-1	石核	チャート	18.0	30.0	12.0	5.00	
	第13図- 8	6G-97-1	楔形石器	チャート	23.2	19.6	8.3	4.16	
	第13図- 9	SH-003-1	打製石斧	花崗岩	70.3	60.4	20.1	101.19	



第13図 遺構外出土の遺物

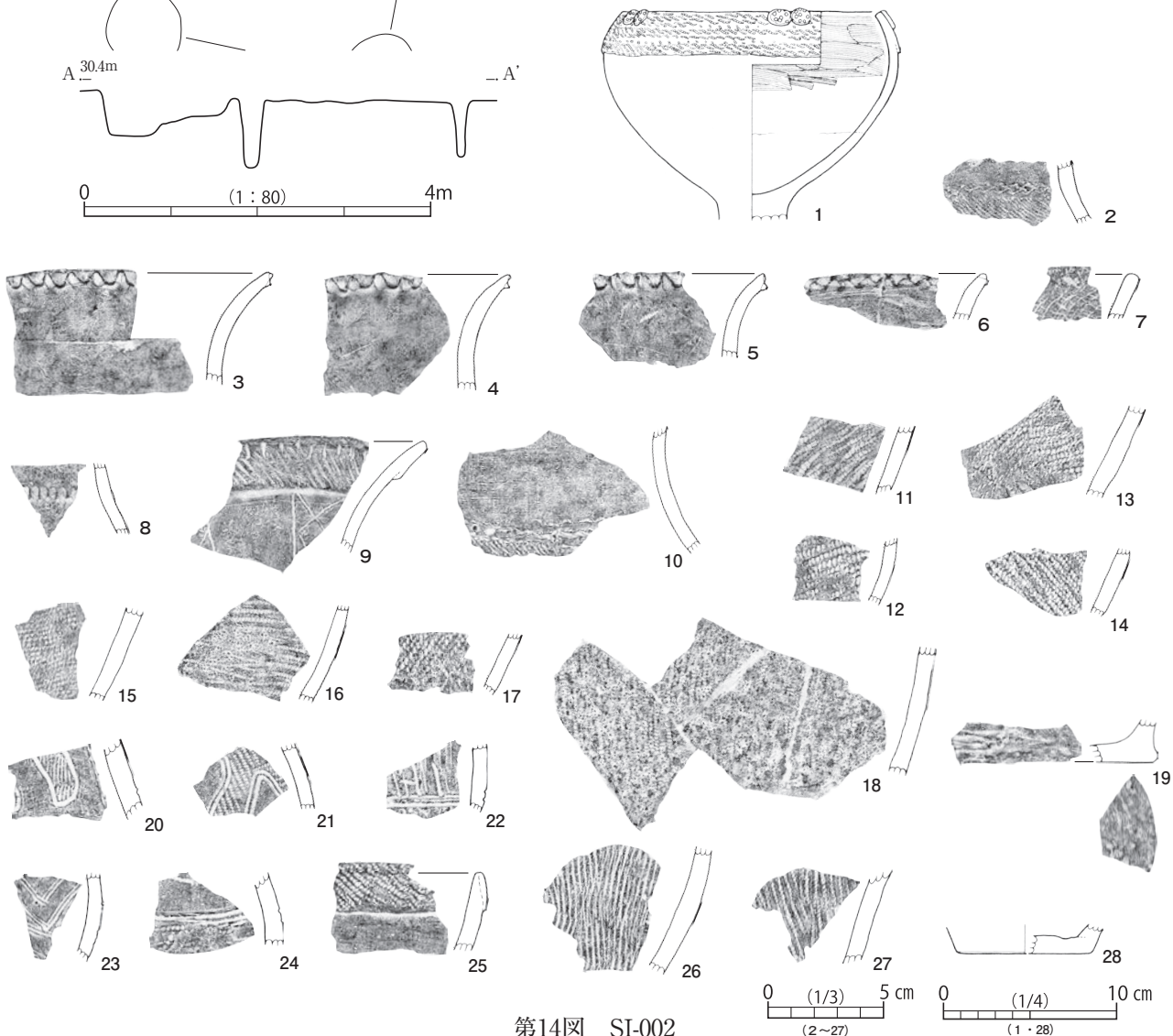
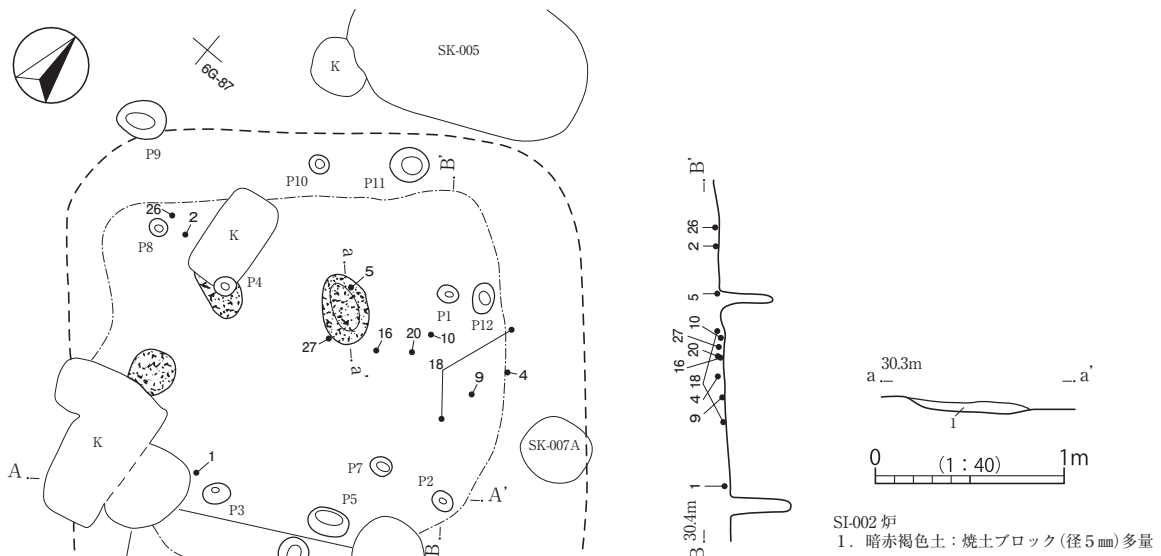
第4節 弥生時代の遺構と遺物

今回の調査では、弥生時代の竪穴住居跡3軒を検出した。これらの遺構は全て調査区の北西側で検出された。遺物は土器、石器が出土した。土器はほぼ全て破片資料だが、台部と欠損するが器形の分る台付鉢を1点図示することができた。土器は遺構外でも多く出土しており、遺構外出土の遺物として掲載した。

1 竪穴住居跡

SI-002(第14図、第2・8表、図版7・8・26)

6G-77・87・88・97グリッドに所在する。南側でSB-001と重複し、本遺構の方が古い。全体的に攪乱や削平が著しく、壁や壁溝は検出できなかった。炉と支柱穴4基を検出し、それらの位置から主軸方向や形状を推測した。平面形は隅丸方形で、主軸方向はN-37°-Wと推測される。規模はいずれも推定で主軸長5.44m・幅5.28mで、床面積は27.4㎡である。炉は北西壁側の支柱穴の間にある。P4の周囲及びその南側で焼土化した部分を2か所検出したが、本遺構に伴う炉であるかは不明である。ピットは12基検出した。P1~P4は支柱穴で、P1は径80cm前後、床面からの深さは56cmである。P2は径22cm前後、床面からの深さは62cmである。P3は長径31cm・短径21cm、床面からの深さは76cmである。P4は径22cm前後、床面からの深さは68cmである。P5は長径44cm・短径28cm、床面からの深さは29cmで、出入口ピットと判断した。P6~P12は本遺構に伴う可能性があるが、性格は不明である。埋土は最大で7cmの厚さで確認し、発掘調査時の所見ではロームブロック(径3mm~5mm)やローム粒を少量含む暗褐色土が堆積している。



第14図 SI-002

図示できた遺物は28点である。1～19は後期中葉を主体とする土器である。1～8は南関東系の土器である。1は複合口縁の台付鉢である。台部は欠損している。口縁部はZ字状結節文が2段3列施され、竹管による刺突(7～8つ)を施した円形浮文を2個単位で、5か所に貼り付けている。台部との破断面は被熱の痕跡があり、体部内面にはススが付着している。床面付近に据えられた状態で出土していることから、台部が欠損した後に、煮炊き用の鉢として使用したものと推測される。2は壺の頸部で、S字状結節文と単節斜縄文が施される。3～8は甕である。3～6は波状口縁で、3～5は棒状工具による外側押圧が施され、押圧の間に親指の爪と思われる跡が見られる。6は棒状工具による交互押圧である。7は破断面を磨滅させて口唇部にした擬似口縁部で、網目状撚糸文が施される。8は頸部下端部で、輪積痕の下端部に縄文原体以外の工具による刻みが施される。9～19は北関東系の土器である。9は壺の口縁部～頸部である。口縁部は複合口縁で、外面に2条絡め撚糸文、上端部にヘラ状工具による刻みが施される。頸部はヘラ描き縦区画文と斜格子文が施される。10～18は甕の胴部である。10はS字状結節文3段と単節斜縄文が施される。11～18は単節斜縄文が施される。19は甕の底部で、網代痕が見られる。

20～24は中期後葉の土器である。20・21は宮ノ台式の壺胴部で、20は無節斜縄文を地文とし、沈線で区画した舌状文あるいは結紐文が施される。21は単節斜縄文を地文とし、2本櫛描き結紐文が施される。いずれも文様間の縄文は磨り消している。22～24は北関東系の壺の胴部で、2本櫛描き文が施される。22は横走文と縦走文、23は山形文と横走文、24は渦巻き文と単節斜縄文LRが施される。

25～27は中期末葉～後期初頭の土器である。25は鉢の口縁部で、複合口縁である。口唇部と口縁部に単節斜縄文が施される。26・27は甕の胴部で、いずれも撚糸文が施される。28は底部で、施文等が残っていないため時期の判断が難しいが、ほかの遺物との比較から中期後葉～後期中葉のものと推測される。

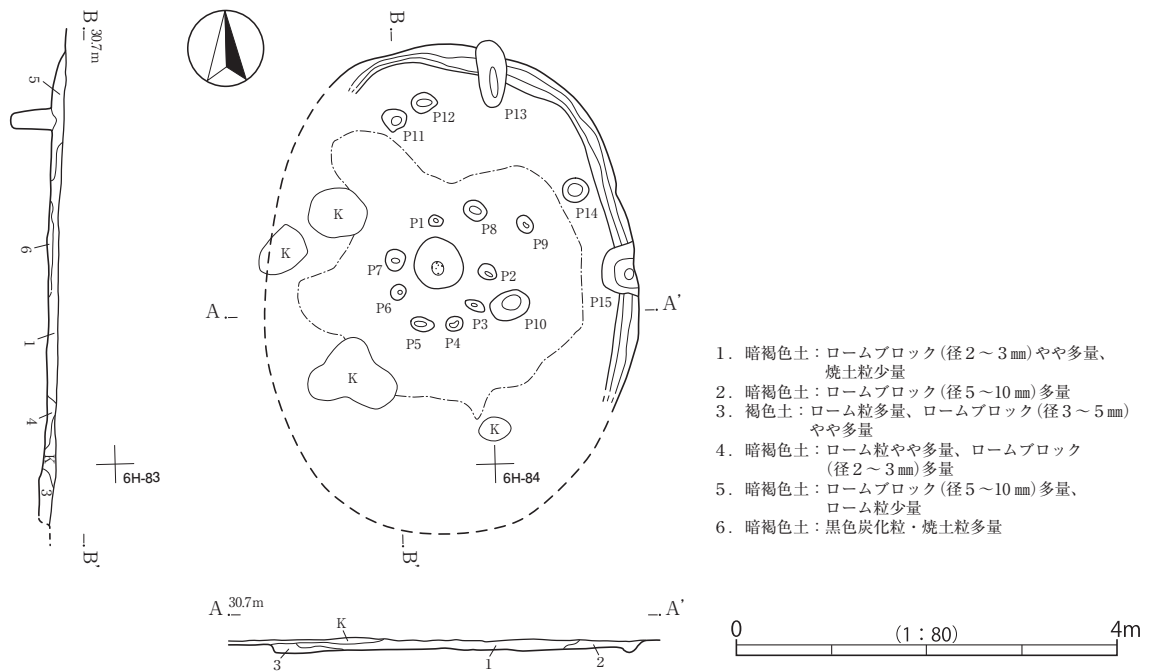
本遺構の時期は、遺物の様相と出土状況から後期中葉と考えられ、南関東系の土器がやや目立つ点の特徴としてあげられる。

SI-007(第15図、第2・8表、図版8・26)

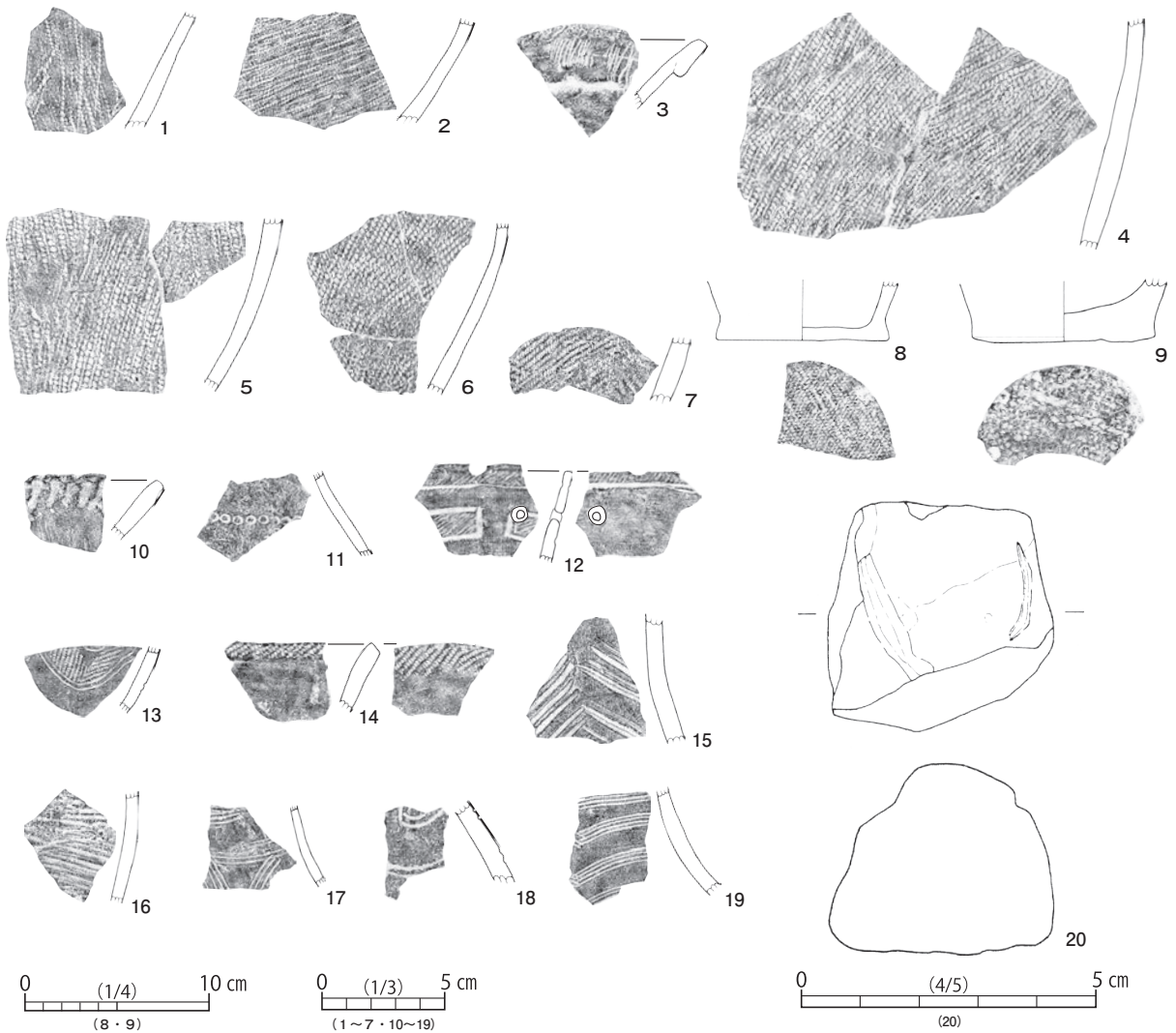
6H-63・64・73・74・83・84グリッドに所在する。遺存状態が悪く、北側～東側の壁及び壁溝の一部と炉、床面の硬化範囲を検出した。平面形は楕円形で、主軸方向はN-5°-Eと推測される。規模は推定で主軸長5.15m・幅3.94mで、確認面からの深さは0.20mである。床面積は推定で15.2㎡である。炉は中心からやや北側に寄った位置で検出した。ピットは15基検出し、全て本遺構に伴う可能性があるが、支柱穴及び貯蔵穴と判断できるものはなかった。P1～P9・P11・P12は小形で径15cm～25cm・深さ8cm～26cmである。P10は長径43cm・短径32cm・深さ54cm、P13は長径72cm・短径29cm・深さ36cm、P14は径26cm・深さ45cm、P15は長径50cm・短径37cm・深さ32cmである。

遺物は全て遺構内一括で取り上げたもので、図示できたものは土器19点と砥石1点である。1～9は後期初頭を主体とする北関東系の土器である。1・2は壺の胴部で、いずれも撚糸文が施される。3～9は甕である。3は複合口縁で、口唇部と口縁部に撚糸文が施される。4～7は胴部で、4・6は単節斜縄文が施される。7は0段多条の単節縄文が羽状に施される。8・9は底部である。8は網代痕、9は網目圧痕が見られる。10・11は南関東系の甕である。10は波状口縁部で、縄文原体による押捺が施される。11は胴部で、竹管による連続円形刺突文が施される。

12～19は中期の土器である。12は中期前葉～中葉の可能性のある、北関東系の甕の口縁部～胴部である。口縁部は内外面と口唇部に無節斜縄文が施され、下端部はヘラ描き沈線で胴部と区画される。胴部外面は



1. 暗褐色土：ロームブロック(径2~3mm)やや多量、
焼土粒少量
2. 暗褐色土：ロームブロック(径5~10mm)多量
3. 褐色土：ローム粒多量、ロームブロック(径3~5mm)
やや多量
4. 暗褐色土：ローム粒やや多量、ロームブロック
(径2~3mm)多量
5. 暗褐色土：ロームブロック(径5~10mm)多量、
ローム粒少量
6. 暗褐色土：黒色炭化粒・焼土粒多量



第15図 SI-007

ヘラ描き沈線による横長の区画文が連続して描かれ、内側に無節斜縄文が施される。文様以外の器面は、内外面ともにヘラ磨きが施される。焼成後の補修孔がある。13~16は宮ノ台式と推測される土器である。13は壺の胴部である。2本櫛描きで曲線の区画文が描かれ、内部に単節斜縄文が施される。14~16は甕である。14は口縁部で、口唇部と内面に単節斜縄文が施される。15・16は胴部で、15は2本~3本の櫛描き縦走羽状文、16は条痕文が施される。17・18は足洗式と推測される壺である。17は頸部で、3本櫛描き横走文と山形文が施される。18は胴部で、2本櫛描き渦巻文が施される。19は北関東系の壺の頸部で、4本櫛描き横走文と連弧文が施される。

20は砂岩製の砥石である。下半部は欠損している。最大長39.0mm・最大幅38.0mm・最大厚32.0mm・重量58.00gである。

図示できた遺物は中期と後期の遺物が同量程度であるが、非掲載分の遺物も考慮すると後期初頭と推測される遺物が多いことから、本遺構の時期は後期初頭と判断した。

SI-009(第16図、第2・8表、図版9・10・27)

6G-99・6H-90・7G-09・7H-00グリッドに所在する。北西側でSI-006と重複し、本遺構の方が古い。南側は溝状の攪乱を受け、壁は検出できなかった。平面形は隅丸長方形で、主軸方向はN-65°-Wと推測される。規模は主軸長4.60m・幅4.23m、床面積は16.8㎡で、確認面からの深さは0.23mである。壁溝はない。炉は北西壁側の支柱穴の間で検出した。ピットは8基検出した。P1~P3は支柱穴で、P1は径24cm前後で、床面からの深さは38cmである。P2は長径41cm・短径28cmで、床面からの深さは17cmである。P3は径26cm前後で、床面からの深さは42cmである。P4~P8は本遺構に伴う可能性があるが、性格は不明である。

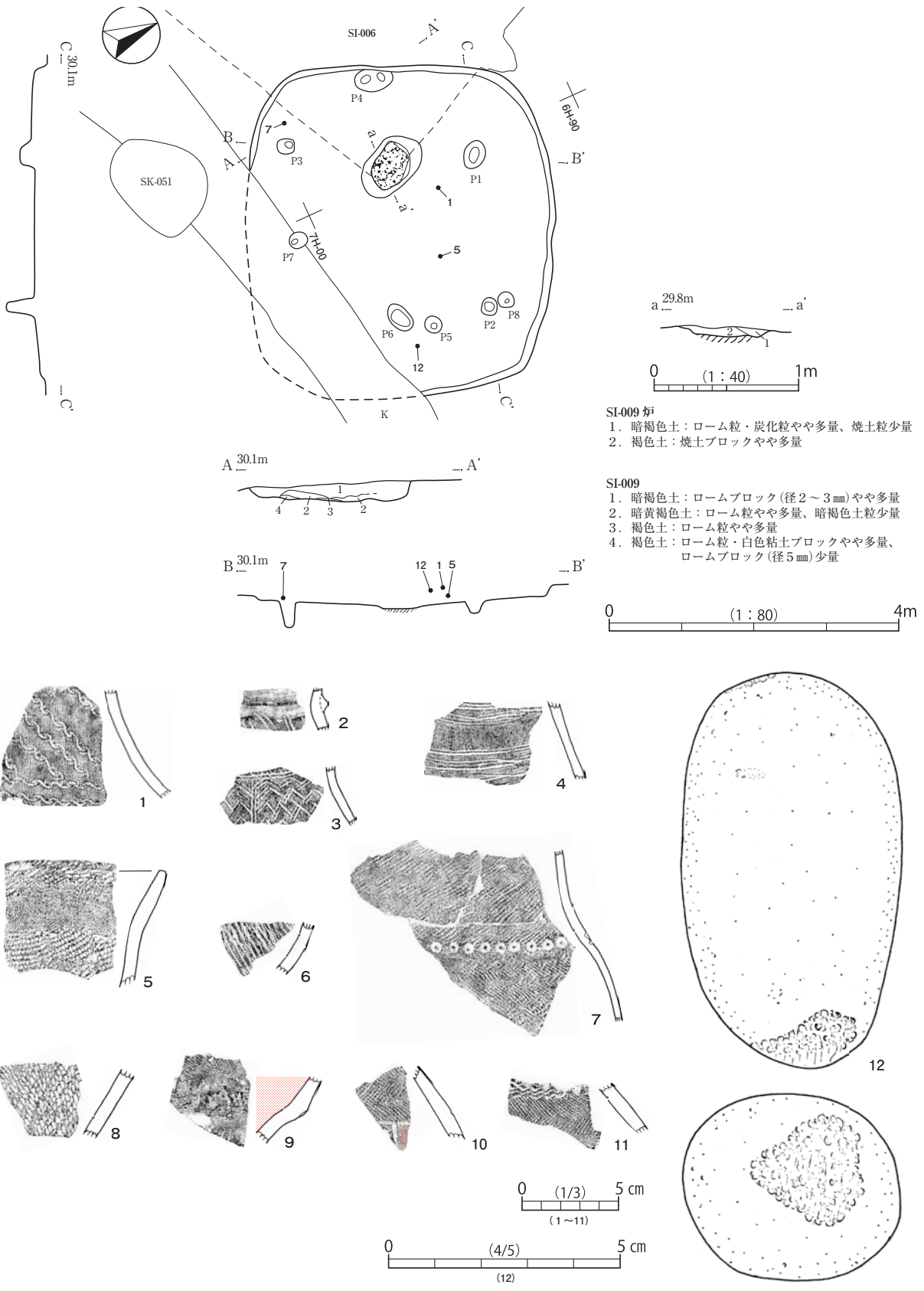
図示できた遺物は土器11点と敲石1点である。1~5は中期の土器である。1は宮ノ台式と推測される壺の頸部で、Z字状結節文が3条単位で斜位と横位に施されている。2~5は北関東系の土器である。2~4は壺の頸部である。2は断面三角形の突帯が巡り、その下に2本櫛描き斜行文が施される。3は2本櫛描き文で横と縦に区画され、区画内に2本櫛描き連続鋸歯状文が施される。4は2本櫛描き横走文が無文帯を挟んで施される。5は甕の口縁部~胴部の破片で、口唇部と口縁部及び頸部無文帯を挟んだ胴部に単節斜縄文が施される。

6~11は後期の土器である。6は壺の胴部で撚糸文が施される。7は甕の頸部で単節斜縄文を地文とし、胴部上半を帯状に磨り消して竹管による刺突文が1列施される。刺突文より下は地文の上から無節縄文が施される。8は甕の胴部で単節斜縄文が施される。

9~11は南関東系の壺である。9は口縁部~頸部、10・11は胴部である。9は有段口縁で単節縄文が羽状に施され、下端部には縄文原体による刻みが施される。内面は赤彩される。10は単節の羽状縄文を地文として沈線により区画され、縄文を磨り消した区画内は赤彩される。11はS字状結節文と単節の羽状縄文が施される。

12は敲石で完存している。上面・下面に敲打痕が見られる。石材は安山岩もしくは礫岩と推測される。最大長84.0mm・最大幅47.0mm・最大厚40.0mm・重量225.40gである。

中期後葉~後期の遺物がほぼ同量出土し、床面付近の遺物も両時期のものが存在するため、本遺構の時期判断は難しいが後期と判断した。



第16図 SI-009

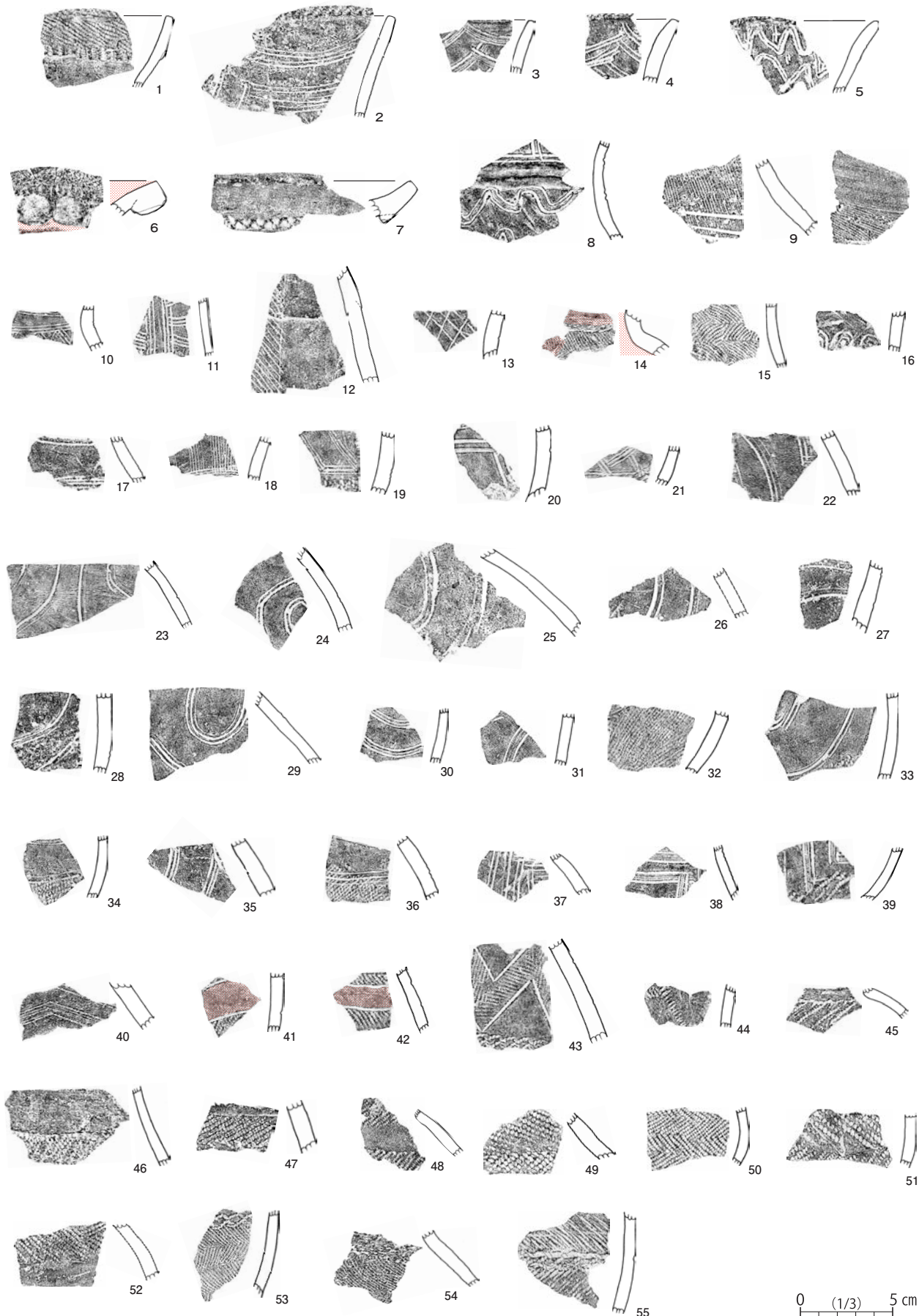
2 遺構外出土の遺物(第17~19図、第8表、図版28~30)

ここではグリッド一括や出土遺構に伴わない遺物をまとめ、土器168点を図示することができた。後期初頭~中葉を主体としつつ、中期後葉~中期末の土器も出土する点は遺構内出土の土器と同様である。以下、器種・部位・文様の特徴で分けて記載した。

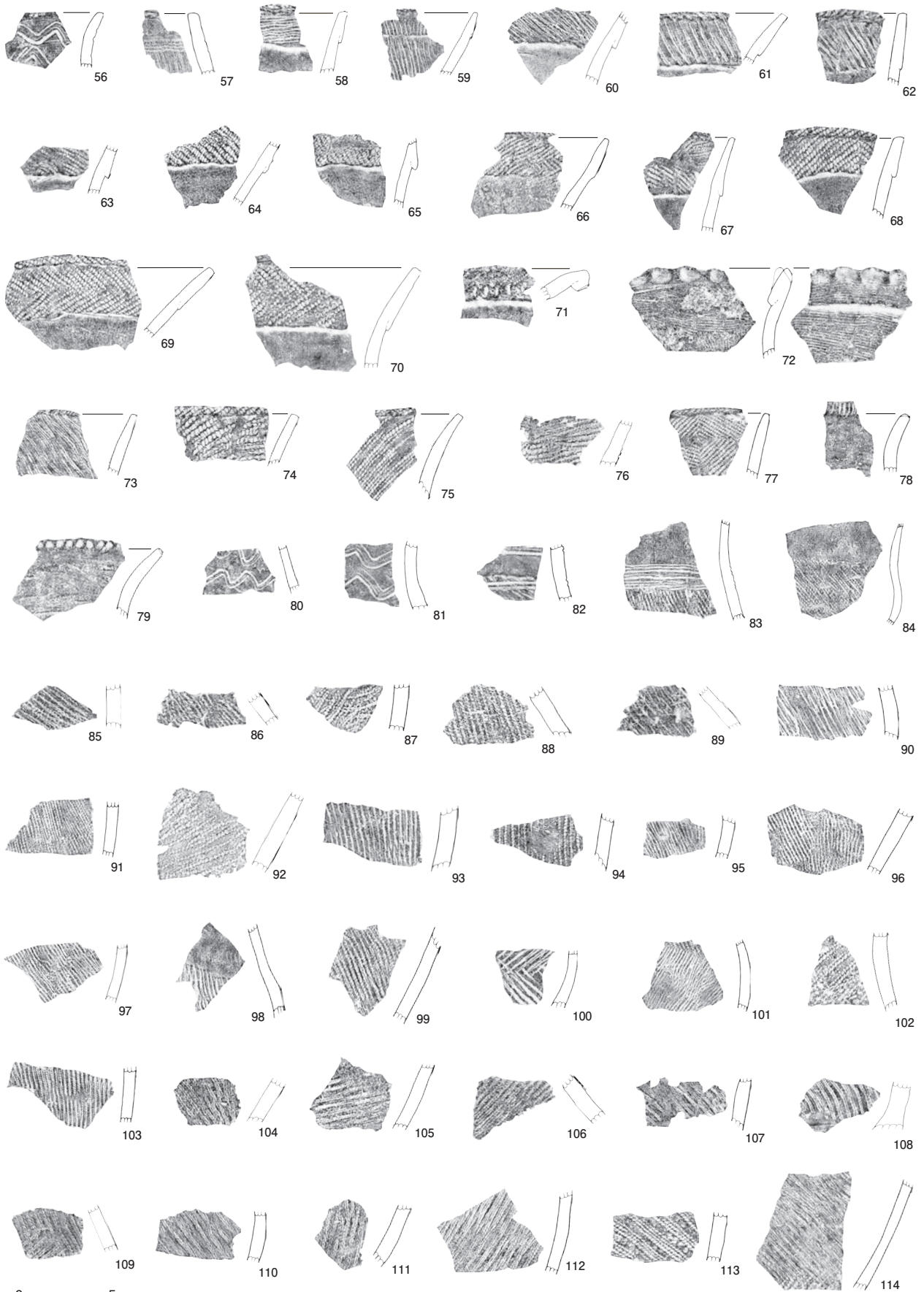
1は鉢で複合口縁である。口唇部と口縁部外面に無節斜縄文が施され、口縁部下端部に縄文原体による刻みが施される。

2~55は壺である。2~7は口縁部である。2・4は2本櫛描き連弧文が施され、2は口唇部に縄文原体による刻み、4は口唇部に単節斜縄文が施される。3は4本櫛描き連弧文が施される。5は口唇部に単節縄文、口縁部外面に2本櫛描き波状文が施される。6・7は複合口縁である。6は口唇部に単節斜縄文、口縁部に指頭押圧が施される。内外面は赤彩される。7は口唇部が平坦に仕上げられ、口縁部下端にヘラ状工具による刻みが施される。8~15は頸部である。8~11は櫛描き文が施されるものである。8は断面が三角形の突帯が付けられ、その上に2本櫛描き縦・横区画文、その下に2本櫛描き波状文が施される。9は横走文が施される。10は3本櫛描き横走文の下に細かい櫛描き文が施される。11は3本櫛描き縦区画文によるスリットと3本櫛描き横走文が施される。12・13はヘラ描き沈線が施されるものである。12は縦区画文によるスリットと斜め方向の沈線文、13は斜格子文が施される。14・15は単節縄文が羽状に施されるもので、14はS字状結節文により無文帯と区画される。内面と外面無文帯は赤彩され、縄文施文帯は円形に赤彩が施される。16~55は胴部である。16~40は櫛描き文が施されるものである。16は2本櫛描き波状文が描かれ、その中に刺突が施される。17は4本以上の櫛描き横走文、18は6本櫛描き横走文と縦走文が施される。19・20は櫛描き横走文と重菱形文の一部と思われる斜行文が施されるものである。19は横走文の下に単節斜縄文が施される。21は3本櫛描き斜格子文と単節斜縄文が施される。22~36は櫛描き渦巻文が施される、いわゆる足洗式土器である。22は3本櫛描き渦巻文と、その上部に連弧文と横の接続線が施される。23~28は2本櫛描き、29~31は3本櫛描き渦巻文が施される。32~34は2本櫛描き渦巻文と単節斜縄文が施される。35は3本櫛描き渦巻文と撚糸文、36は3本櫛描き渦巻文と単節斜縄文が施される。37~39は2本又は4本櫛描き重四角文が施されるものである。39は重四角文の下に単節斜縄文が施される。40は6本櫛描き縦走羽状文が施される。41~43は単節斜縄文を地文とし、沈線による区画文を施して区画外の縄文を磨り消すものである。41・42は無文部分が赤彩される。43は鋸歯状区画の下にS字状結節文が施される。44は縄文原体押圧による山形文が施される。45~52は撚糸文又は単節斜縄文が施されるものである。45は撚糸文、46~48は単節斜縄文、49~52は単節の羽状縄文が施される。53~55は結節文と単節斜縄文が施されるものである。53はS字状結節文と単節の羽状縄文、54はZ字状結節文と単節斜縄文、55は単節の羽状縄文の上にZ字状結節文が施される。

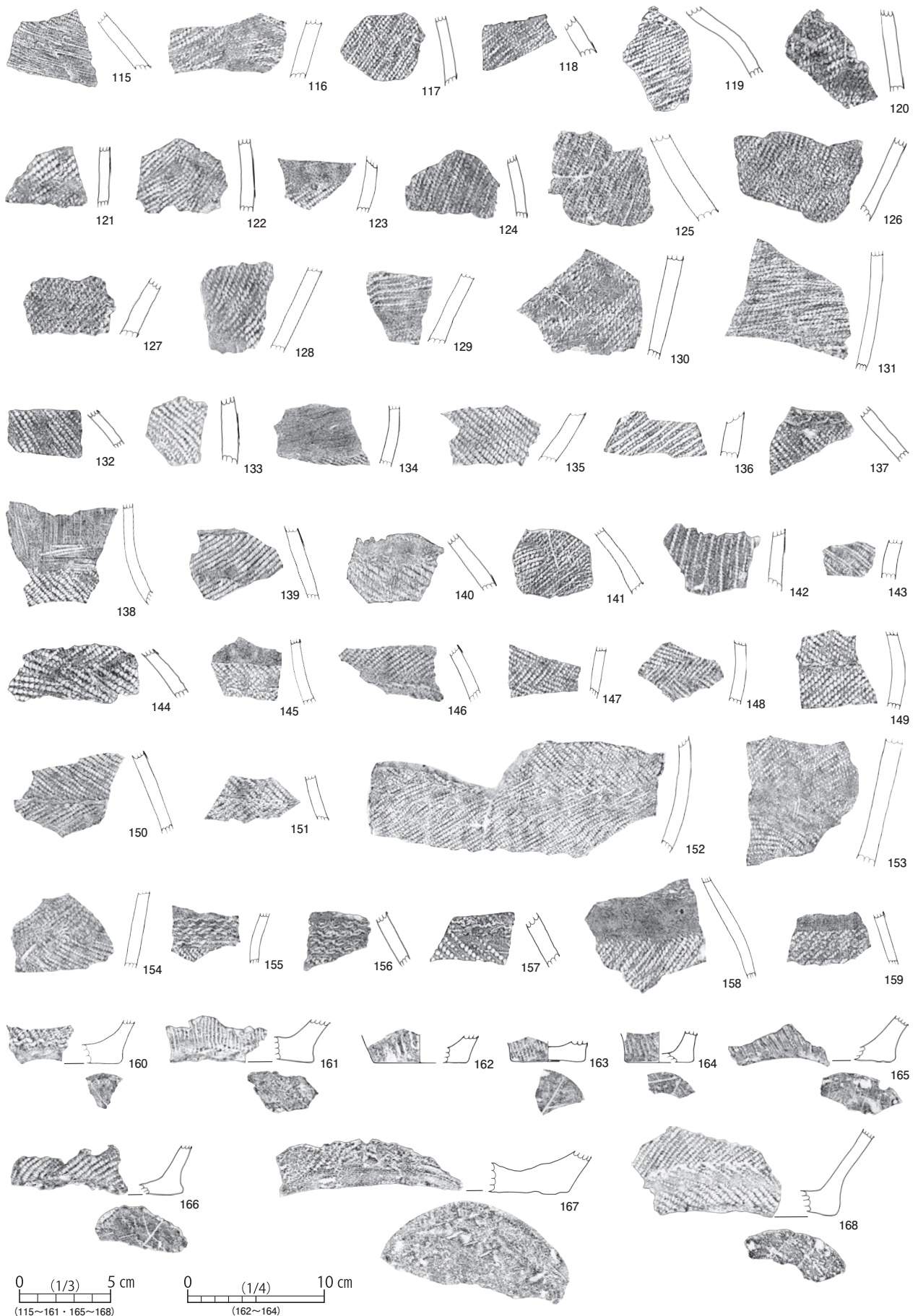
56~168は甕である。56~79は口縁部である。56・57は単口縁で櫛描き文が施されるものである。56は2本櫛描き波状文、57はかなり細かい4本櫛描き波状文で区画し、その下に2条絡め撚糸文が施される。58~71は複合口縁で、撚糸文ないし単節斜縄文が施されるものである。58~60は撚糸文が施される。58は口唇部と口縁部、59は口唇部と口縁部・胴部外面、60は口縁部に施される。61は2条絡め撚糸文、62は3条絡め撚糸文が口唇部と口縁部に施される。63~65は単節斜縄文が施される。66は口唇部と口縁部に無節斜縄文が施され、口縁部の一部には口唇部と同じ原体の無節斜縄文が施される。67は口唇部内側に単節斜縄文、外側に無節斜縄文が施され、施文により先端部は尖っている。口縁部は口唇部と同じ原体による



第17図 遺構外出土の遺物(1)



第18図 遺構外出土の遺物(2)



第19図 遺構外出土の遺物(3)

羽状縄文が施される。68～70は口唇部に単節斜縄文、口縁部に単節縄文が羽状に施される。71は口縁部に単節斜縄文、下端部に縄文原体による刻みが施される。72は内面に輪積の段を明瞭に残し、折返し口縁状に作り出している。口縁部は指頭交互押圧による波状口縁である。73～77は単口縁で、捺糸文ないし単節斜縄文が施されるものである。73は口唇部と口縁部に2条絡め捺糸文が施される。74・75は口唇部と口縁部に単節斜縄文が施される。76は口縁部に単節斜縄文が施されるが、口唇部はほとんど遺存していない。77は口唇部に単節斜縄文が施され、口縁部は単節の羽状縄文が途中で向きを変えて施される。78・79は口縁部が無文で、78はヘラ状工具、79は棒状工具により口唇部に刻みが施される。80～159は胴部である。80～83は櫛描き文が施されるものである。80・81は2本櫛描き波状文が施される。82は2本櫛描き横走文と無節斜縄文、83は3本櫛描き横走文と捺糸文が施される。84～154は捺糸文ないし縄文が施されるものである。84～101は捺糸文が施される。98は上部の捺糸文を磨り消している。100は捺糸文が羽状に施される。101は捺糸文と単節斜縄文が施される。102～108は2条絡め捺糸文が施される。109は上部に3条、下部に2条絡め捺糸文が施される。110～113は3条絡め捺糸文が施される。114・115は2条絡め捺糸文と単節斜縄文が施される。116～139は単節斜縄文が施される。138は上部にやや粗いヘラナデを施し、縄文の一部を磨り消している。139は上部に無文帯がある。140は無節斜縄文が施される。141～143は附加条縄文が施される。144～154は単節の羽状縄文が施される。150は0段多条の単節縄文を用いる。155～159は結節文が施されるものである。155・156は上部から順に無文帯・多条のS字状結節文・単節斜縄文が施される。157はS字状結節文と単節斜縄文が施される。158は結節の種類は不明であるが、無文帯を挟んで単節斜縄文が施される。159は上部が無文帯で、多条のS字状結節文が施される。160～168は底部である。160はS字状結節文と単節斜縄文、161～163は捺糸文、164・165は2条絡め捺糸文、166・167は単節斜縄文、168は単節の羽状縄文が施される。167の底部には布目綴じ紐痕跡が見られる。

第8表 弥生土器観察表

()推定値 < >現存値

遺構	種別	種類	器種	法量 (cm)	遺存度	胎土	色調・焼成	技法	備考
SI-002	第14図-1	弥生	台付鉢	口径 14.8 底径 - 器高 <11.9>	鉢部95%	石英粒・雲母粒	内面 明赤褐色(2.5YR5/8) 外面 明赤褐色(2.5YR5/8) 底面 良好	内面 ハケヘラナデ 外面 ヘラナデ 底面 -	複合口縁 Z字状結節文R 2段3列+円形浮文2個単位5か所
	第14図-2	弥生	壺	口径 - 底径 - 器高 -	頸部	雲母粒・砂粒・石英粒	内面 におい橙色(7.5YR7/4) 外面 橙色(7.5YR6/6) 底面 良好	内面 - 外面 ヘラナデ 底面 -	S字状結節文+単節縄文RL
	第14図-3	弥生	甕	口径 - 底径 - 器高 -	口縁部	石英粒・雲母粒・白色砂粒	内面 におい橙色(10YR6/4) 外面 黒褐色(10YR3/2) 底面 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底面 -	棒状工具外側押圧による波状口縁 親指の爪痕
	第14図-4	弥生	甕	口径 - 底径 - 器高 -	口縁部	石英粒・雲母粒・白色砂粒	内面 におい橙色(10YR6/4) 外面 黒褐色(10YR3/2) 底面 良好	内面 ハケ 外面 ヘラナデヘラナデ 底面 -	棒状工具外側押圧による波状口縁 親指の爪痕
	第14図-5	弥生	甕	口径 - 底径 - 器高 -	口縁部	石英粒・雲母粒・白色砂粒	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 橙色(7.5YR7/6) 底面 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底面 -	棒状工具外側押圧による波状口縁 親指の爪痕
	第14図-6	弥生	甕	口径 - 底径 - 器高 -	口縁部	石英粒・雲母粒・白色砂粒	内面 褐灰色(10YR4/1) 外面 黒褐色(7.5YR3/1) 底面 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底面 -	棒状工具交互押圧による波状口縁
	第14図-7	弥生	甕	口径 - 底径 - 器高 -	擬似口縁部	雲母粒・砂粒・石英粒	内面 明赤褐色(5YR5/6) 外面 褐色(5YR6/6) 底面 良好	内面 ヘラ磨き 外面 - 底面 -	口唇部を再生 網目状捺糸文
	第14図-8	弥生	甕	口径 - 底径 - 器高 -	頸部	石英粒・白色粒・雲母粒	内面 におい赤褐色(5YR5/4) 外面 褐色(5YR6/6) 底面 良好	内面 ヘラナデ 外面 - 底面 -	輪積痕+縄文原体以外の工具による刻み
	第14図-9	弥生	壺	口径 - 底径 - 器高 -	口縁部~頸部	石英粒・雲母粒・白色砂粒	内面 におい橙色(7.5YR6/4) 外面 黒褐色(7.5YR3/1) 底面 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底面 -	複合口縁 2条絡め捺糸文R+ヘラ状工具による刻み ヘラ描き縦区画文・斜格子文
	第14図-10	弥生	甕	口径 - 底径 - 器高 -	胴部	雲母粒・砂粒・石英粒	内面 におい橙色(7.5YR7/4) 外面 におい橙色(7.5YR6/4) 底面 良好	内面 ハケ 外面 ハケ 底面 -	S字状結節文3段+単節縄文RL
	第14図-11	弥生	甕	口径 - 底径 - 器高 -	胴部	雲母粒・石英粒・砂粒	内面 褐色(5YR7/6) 外面 褐色(7.5YR7/6) 底面 良好	内面 器面剥落 外面 - 底面 -	単節縄文LR
	第14図-12	弥生	甕	口径 - 底径 - 器高 -	胴部	雲母粒・石英粒・砂粒	内面 褐色(5YR6/6) 外面 黒褐色(10YR3/1) 底面 良好	内面 ヘラナデ 外面 - 底面 -	単節縄文LR
	第14図-13	弥生	甕	口径 - 底径 - 器高 -	胴部	雲母粒・砂粒・石英粒	内面 褐灰色(10YR4/1) 外面 におい橙色(7.5YR6/4) 底面 良好	内面 ヘラナデ 外面 - 底面 -	単節縄文LR
	第14図-14	弥生	甕	口径 - 底径 - 器高 -	胴部	雲母粒・砂粒・石英粒	内面 褐色(7.5YR6/6) 外面 におい橙色(7.5YR6/4) 底面 良好	内面 ざらつく 外面 ざらつく 底面 -	単節縄文RL
	第14図-15	弥生	甕	口径 - 底径 - 器高 -	胴部	雲母粒・石英粒・砂粒	内面 灰褐色(10YR4/2) 外面 黒褐色(10YR3/2) 底面 良好	内面 ヘラナデ 外面 - 底面 -	単節縄文LR

遺構	挿入番号	種類	器種	法量 (cm)	遺存度	胎土	色調・焼成	技法	備考
遺構外	第18図-110	弥生	甕	口径 底径 器高	- - -	胴部	白色砂粒・雲母粒 内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 - 底外面 -	3条絡め熱系文R+L+L
	第18図-111	弥生	甕	口径 底径 器高	- - -	胴部	白色砂粒・石英粒 内面 黒褐色(10YR3/1) 外面 におい黄褐色(10YR7/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 - 底外面 -	3条絡め熱系文R+L+L
	第18図-112	弥生	甕	口径 底径 器高	- - -	胴部	白色砂粒 内面 におい黄褐色(10YR7/3) 外面 におい黄褐色(10YR7/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 - 底外面 -	3条絡め熱系文
	第18図-113	弥生	甕	口径 底径 器高	- - -	胴部	白色砂粒・雲母粒 内面 黒褐色(10YR3/2) 外面 灰黄褐色(10YR4/2) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 - 底外面 -	3条絡め熱系文R
	第18図-114	弥生	甕	口径 底径 器高	- - -	胴部	白色砂粒 内面 におい黄褐色(10YR7/3) 外面 黄褐色(10YR5/8) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 - 底外面 -	2条絡め熱系文L+単節縄文LR
	第19図-115	弥生	甕	口径 底径 器高	- - -	胴部	白色砂粒・小石 内面 におい褐色(7.5YR7/4) 外面 明赤褐色(5YR5/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 - 底外面 -	2条絡め熱系文R+L+単節縄文RL
	第19図-116	弥生	甕	口径 底径 器高	- - -	胴部	石英粒・小石 内面 褐色(7.5YR4/4) 外面 暗褐色(7.5YR3/4) 焼成 良好	内面 荒れている 外面 - 底外面 -	単節縄文LR
	第19図-117	弥生	甕	口径 底径 器高	- - -	胴部	白色砂粒・石英粒 内面 におい褐色(7.5YR5/4) 外面 におい黄褐色(10YR5/3) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 - 底外面 -	単節縄文LR
	第19図-118	弥生	甕	口径 底径 器高	- - -	胴部	白色砂粒 内面 におい褐色(7.5YR5/3) 外面 褐色(5YR6/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 - 底外面 -	単節縄文LR
	第19図-119	弥生	甕	口径 底径 器高	- - -	胴部	白色砂粒・石英粒 内面 黒褐色(10YR3/1) 外面 におい黄褐色(10YR6/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 - 底外面 -	単節縄文LR
	第19図-120	弥生	甕	口径 底径 器高	- - -	胴部	白色砂粒・石英粒 内面 褐色(7.5YR6/6) 外面 明赤褐色(5YR5/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 - 底外面 -	単節縄文LR
	第19図-121	弥生	甕	口径 底径 器高	- - -	胴部	白色砂粒・石英粒・砂粒 内面 におい褐色(7.5YR5/4) 外面 明褐色(7.5YR5/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 - 底外面 -	単節縄文LR
	第19図-122	弥生	甕	口径 底径 器高	- - -	胴部	白色砂粒・石英粒 内面 におい黄褐色(10YR6/3) 外面 におい黄褐色(10YR7/2) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 - 底外面 -	単節縄文LR
	第19図-123	弥生	甕	口径 底径 器高	- - -	胴部	石英粒 内面 明黄褐色(10YR6/6) 外面 におい黄褐色(10YR5/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 - 底外面 -	単節縄文LR
	第19図-124	弥生	甕	口径 底径 器高	- - -	胴部	白色砂粒・石英粒 内面 黒褐色(10YR3/2) 外面 におい褐色(7.5YR5/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 - 底外面 -	単節縄文LR
	第19図-125	弥生	甕	口径 底径 器高	- - -	胴部	白色砂粒・石英粒 内面 におい褐色(7.5YR7/4) 外面 浅黄褐色(10YR8/4) 焼成 良好	内面 荒れている 外面 - 底外面 -	単節縄文LR
	第19図-126	弥生	甕	口径 底径 器高	- - -	胴部	白色砂粒・石英粒 内面 褐色(7.5YR7/6) 外面 明赤褐色(2.5YR5/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 - 底外面 -	単節縄文LR
	第19図-127	弥生	甕	口径 底径 器高	- - -	胴部	白色s粒・石英粒 内面 におい黄褐色(10YR7/4) 外面 におい黄褐色(10YR7/3) 焼成 良好	内面 荒れている 外面 - 底外面 -	単節縄文LR
	第19図-128	弥生	甕	口径 底径 器高	- - -	胴部	白色砂粒・石英粒 内面 黒褐色(7.5YR3/1) 外面 褐色(7.5YR4/3) 焼成 良好	内面 荒れている 外面 荒れている 底外面 -	単節縄文LR
	第19図-129	弥生	甕	口径 底径 器高	- - -	胴部	白色砂粒・雲母粒 内面 におい黄褐色(10YR7/4) 外面 明黄褐色(10YR6/6) 焼成 良好	内面 荒れている 外面 - 底外面 -	単節縄文LR
	第19図-130	弥生	甕	口径 底径 器高	- - -	胴部	石英粒・雲母粒 内面 黒褐色(10YR3/2) 外面 灰黄褐色(10YR5/2) 焼成 良好	内面 荒れている 外面 - 底外面 -	単節縄文LR
	第19図-131	弥生	甕	口径 底径 器高	- - -	胴部	石英粒 内面 におい黄褐色(10YR7/3) 外面 におい黄褐色(10YR6/4) 焼成 良好	内面 荒れている 外面 - 底外面 -	単節縄文LR
	第19図-132	弥生	甕	口径 底径 器高	- - -	胴部	白色砂粒・黒色砂粒・石英粒 内面 褐色(5YR6/6) 外面 褐色(5YR6/6) 焼成 良好	内面 荒れている 外面 - 底外面 -	単節縄文RL
	第19図-133	弥生	甕	口径 底径 器高	- - -	胴部	白色砂粒・石英粒 内面 褐色(5YR6/6) 外面 褐色(7.5YR7/6) 焼成 良好	内面 荒れている 外面 - 底外面 -	単節縄文RL
	第19図-134	弥生	甕	口径 底径 器高	- - -	胴部	白色砂粒・石英粒 内面 灰黄褐色(10YR4/2) 外面 黒褐色(10YR3/2) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 -	単節縄文RL
	第19図-135	弥生	甕	口径 底径 器高	- - -	胴部	小石・白色砂粒 内面 明褐色(7.5YR5/6) 外面 におい褐色(7.5YR5/4) 焼成 良好	内面 荒れている 外面 - 底外面 -	単節縄文RL
	第19図-136	弥生	甕	口径 底径 器高	- - -	胴部	白色砂粒 内面 におい黄褐色(10YR7/3) 外面 におい黄褐色(10YR6/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 - 底外面 -	単節縄文RL
	第19図-137	弥生	甕	口径 底径 器高	- - -	胴部	白色砂粒 内面 褐色(5YR7/6) 外面 褐色(7.5YR7/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 - 底外面 -	単節縄文RL
	第19図-138	弥生	甕	口径 底径 器高	- - -	胴部	石英粒 内面 におい黄褐色(10YR6/4) 外面 黒褐色(10YR3/2) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 -	単節縄文RL
	第19図-139	弥生	甕	口径 底径 器高	- - -	胴部	白色砂粒・石英粒 内面 におい黄褐色(10YR6/4) 外面 におい黄褐色(10YR5/3) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 - 底外面 -	0段多条単節縄文LR
	第19図-140	弥生	甕	口径 底径 器高	- - -	胴部	白色砂粒・石英粒 内面 明赤褐色(2.5YR5/6) 外面 灰褐色(5YR5/2) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 - 底外面 -	無節縄文R
	第19図-141	弥生	甕	口径 底径 器高	- - -	胴部	白色砂粒・石英粒 内面 におい黄褐色(10YR7/4) 外面 におい黄褐色(10YR7/3) 焼成 良好	内面 荒れている 外面 - 底外面 -	附加条縄文
	第19図-142	弥生	甕	口径 底径 器高	- - -	胴部	白色砂粒・石英粒 内面 黒褐色(10YR3/2) 外面 におい黄褐色(10YR7/3) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 - 底外面 -	附加条縄文
	第19図-143	弥生	甕	口径 底径 器高	- - -	胴部	雲母粒 内面 におい黄褐色(10YR7/3) 外面 浅黄褐色(10YR8/4) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 - 底外面 -	附加条縄文RL+L2本
	第19図-144	弥生	甕	口径 底径 器高	- - -	胴部	白色砂粒・石英粒 内面 灰褐色(7.5YR4/2) 外面 褐色(7.5YR4/3) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 - 底外面 -	羽状縄文LR+RL
	第19図-145	弥生	甕	口径 底径 器高	- - -	胴部	白色砂粒・雲母粒 内面 暗褐色(10YR3/3) 外面 暗褐色(10YR3/3) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 -	羽状縄文RL+LR
	第19図-146	弥生	甕	口径 底径 器高	- - -	胴部	白色砂粒 内面 におい黄褐色(10YR5/3) 外面 におい黄褐色(10YR7/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 - 底外面 -	羽状縄文LR+RL
	第19図-147	弥生	甕	口径 底径 器高	- - -	胴部	石英粒 内面 黄褐色(10YR5/6) 外面 黒褐色(10YR3/2) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 - 底外面 -	羽状縄文RL+LR

遺構	挿入番号	種類	器種	法量 (cm)	遺存度	胎土	色調・焼成	技法	備考
遺構外	第19図-148	弥生	甕	口径 底径 器高	- - -	胴部	石英粒 内面 におい黄褐色(10YR6/4) 外面 におい黄褐色(10YR6/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 - 底外面 -	羽状縄文RL+LR
	第19図-149	弥生	甕	口径 底径 器高	- - -	胴部	石英粒・雲母粒 内面 明褐色(7.5YR5/6) 外面 灰褐色(7.5YR4/2) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 - 底外面 -	羽状縄文RL+LR
	第19図-150	弥生	甕	口径 底径 器高	- - -	胴部	石英粒 内面 におい黄褐色(10YR6/4) 外面 灰黄褐色(10YR4/2) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 - 底外面 -	単節縄文0段多条LR+0段多条RL
	第19図-151	弥生	甕	口径 底径 器高	- - -	胴部	白色砂粒 内面 におい黄褐色(10YR6/4) 外面 灰黄褐色(10YR5/2) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 - 底外面 -	羽状縄文RL+LR
	第19図-152	弥生	甕	口径 底径 器高	- - -	胴部	白色砂粒・石英粒 内面 明褐色(7.5YR5/6) 外面 褐色(7.5YR4/3) 焼成 良好	内面 荒れている 外面 - 底外面 -	羽状縄文RL+LR
	第19図-153	弥生	甕	口径 底径 器高	- - -	胴部	雲母粒・石英粒 内面 におい黄褐色(10YR5/3) 外面 明黄褐色(10YR6/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 - 底外面 -	羽状縄文LR+RL
	第19図-154	弥生	甕	口径 底径 器高	- - -	胴部	白色砂粒・雲母粒 内面 黒褐色(10YR3/2) 外面 明黄褐色(10YR6/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 - 底外面 -	羽状縄文LR+RL
	第19図-155	弥生	甕	口径 底径 器高	- - -	胴部	雲母粒 内面 黄褐色(10YR5/6) 外面 におい黄褐色(10YR5/3) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 - 底外面 -	6段Z字状結節文+単節縄文RL
	第19図-156	弥生	甕	口径 底径 器高	- - -	胴部	雲母粒・白色砂粒・石英粒 内面 黒褐色(7.5YR3/1) 外面 灰褐色(7.5YR4/2) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 - 底外面 -	多段Z字状結節文+単節縄文
	第19図-157	弥生	甕	口径 底径 器高	- - -	胴部	石英粒・砂粒 内面 におい褐色(7.5YR7/4) 外面 におい褐色(7.5YR7/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 - 底外面 -	S字状結節文+単節縄文RL
	第19図-158	弥生	甕	口径 底径 器高	- - -	胴部	石英粒・雲母粒 内面 灰褐色(10YR4/1) 外面 黒褐色(10YR3/1) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ナデ 底外面 -	結節文+単節縄文LR
	第19図-159	弥生	甕	口径 底径 器高	- - -	胴部	石英粒 内面 灰黄褐色(10YR4/2) 外面 灰黄褐色(10YR4/2) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 -	S字結節文
	第19図-160	弥生	甕	口径 底径 器高	- - -	底部	白色砂粒・雲母粒 内面 におい黄褐色(10YR7/3) 外面 におい黄褐色(10YR7/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 - 底外面 木葉痕	単節縄文RL+S字状結節文
	第19図-161	弥生	甕	口径 底径 器高	- - -	底部	白色砂粒・砂粒 内面 におい褐色(7.5YR6/4) 外面 におい褐色(7.5YR6/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 - 底外面 木葉痕	縹糸文L
	第19図-162	弥生	甕	口径 底径 器高	(6.8) - -	底部	石英粒・小石 内面 灰褐色(7.5YR5/2) 外面 におい褐色(7.5YR5/4) 焼成 良好	内面 - 外面 - 底外面 -	縹糸文L
	第19図-163	弥生	甕	口径 底径 器高	(5.5) - -	底部	石英粒・小石 内面 におい黄褐色(10YR6/4) 外面 におい褐色(7.5YR5/4) 焼成 良好	内面 - 外面 - 底外面 木葉痕	縹糸文R
	第19図-164	弥生	甕	口径 底径 器高	(5.0) - -	底部	石英粒・小石 内面 におい褐色(7.5YR6/4) 外面 褐色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 - 底外面 木葉痕	2条絡め縹糸文LR
	第19図-165	弥生	甕	口径 底径 器高	(3.4) - -	底部	白色砂粒・石英粒 内面 におい褐色(5YR6/4) 外面 におい黄褐色(10YR6/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 - 底外面 木葉痕	2条絡め縹糸文L
	第19図-166	弥生	甕	口径 底径 器高	(3.8) - -	底部	白色砂粒・石英粒 内面 におい褐色(7.5YR6/4) 外面 褐色(5YR7/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 - 底外面 木葉痕	単節縄文LR
	第19図-167	弥生	甕	口径 底径 器高	(5.4) - -	底部40%	雲母粒・白色砂粒・石英粒・砂粒 内面 におい黄褐色(10YR6/4) 外面 におい黄褐色(10YR7/4) 焼成 良好	内面 荒れている 外面 - 底外面 布目痕	単節縄文LR
第19図-168	弥生	甕	口径 底径 器高	(4.2) - -	底部	白色砂粒・石英粒・小石 内面 におい赤褐色(5YR5/4) 外面 黒色(5YR1.7/1) 焼成 良好	内面 荒れている 外面 - 底外面 木葉痕	羽状縄文LR+RL	

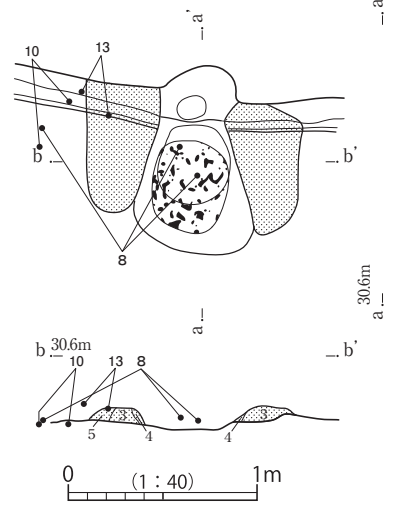
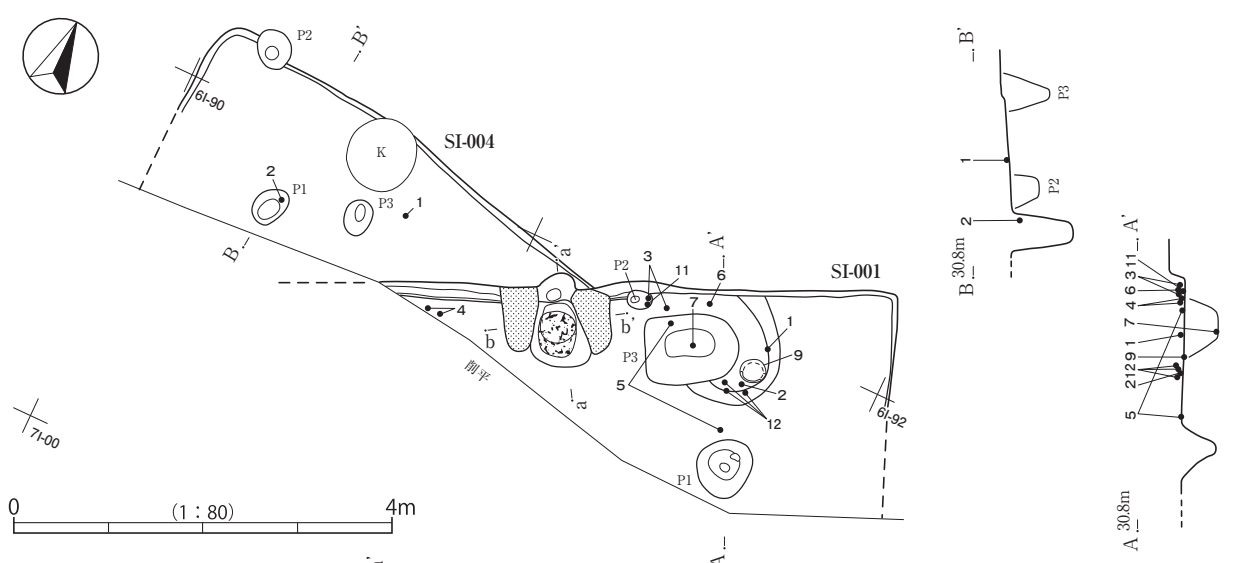
第5節 古墳時代の遺構と遺物

今回の調査では古墳時代中期～後期の竪穴住居跡を14軒検出した。竪穴住居跡以外では土坑3基と溝1条を検出した。古墳時代の遺構は一部を除き調査区の中央付近に分布し、現地形の標高35m～37mの樹枝状台地の平坦面に集中している。台地の南東部は削平の影響が強く、時期の特定はやや困難なものが多いが、竪穴住居跡からは土器類を中心に遺物が豊富に出土した。特筆すべき点は完形の土鈴2点が出土したことである。土鈴が出土した竪穴住居跡の遺存状態は悪いが、千葉県内での出土は珍しい。

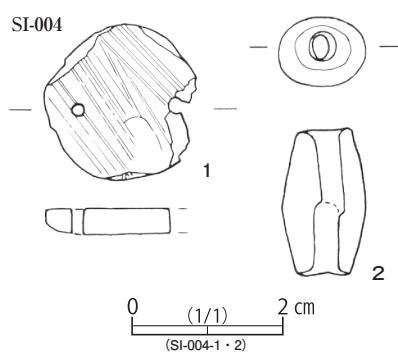
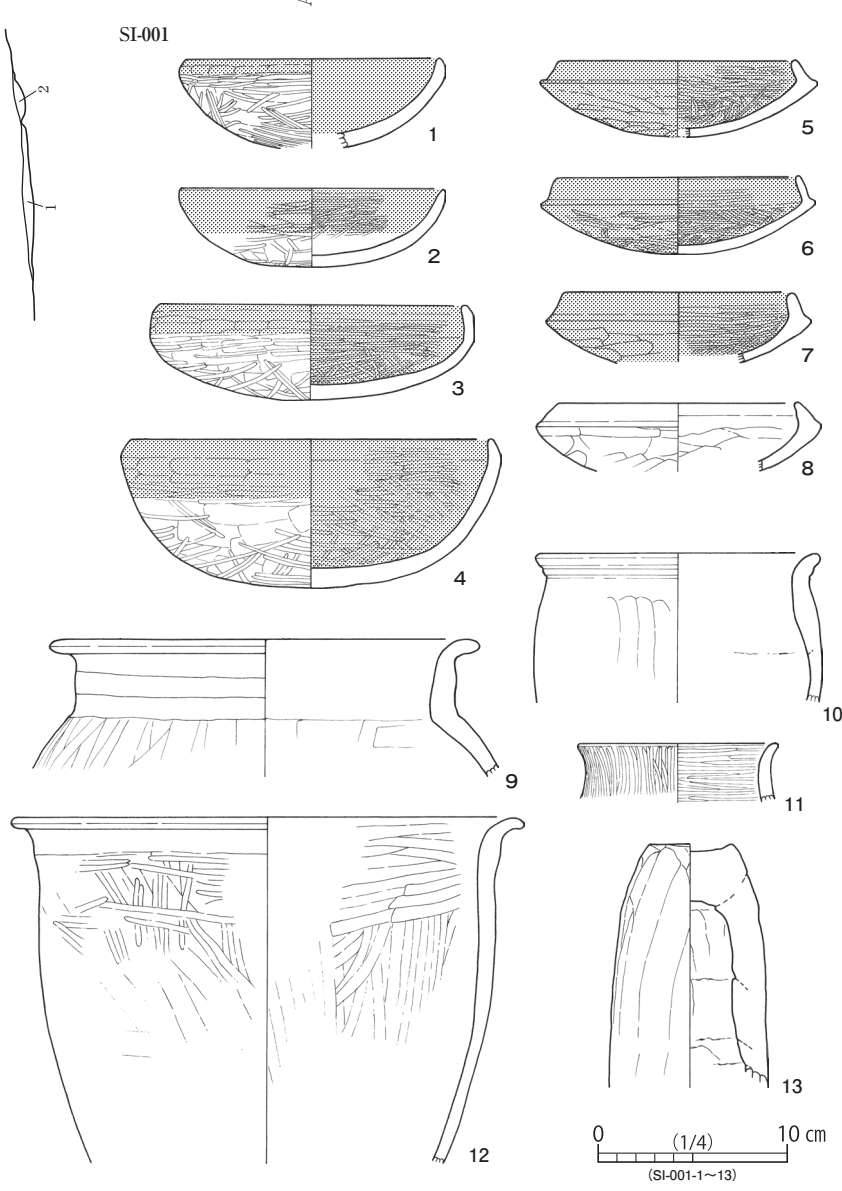
1 竪穴住居跡

SI-001(第20図、第2・9・10表、図版10・31)

6I-81・90～92グリッドに所在する。南側の大部分は攪乱により削平されている。西側でSI-004と重複し、本遺構のカマドが遺存することから、本遺構の方が新しいと判断される。平面形は方形と推測され、主軸方向はN-26°-Wである。推定規模は一辺7m前後で、確認面からの深さは0.23mである。カマドは北西壁中央に付設され、袖の構築材は山砂で、壁から70cmほど遺存している。火床部は浅く窪み、被熱し赤化している。壁溝は深さ平均4cmで、カマドの袖を除去した結果、袖部の下にも巡るが、カマド右側のP2から東側には巡らないことを確認した。ピットは3基検出した。P1は主柱穴で径63cm・深さ61cmである。P2は径28cm・深さ12cmで、壁柱穴の可能性も考えられる。カマド右側にあるP3は貯蔵穴で、長径98cm・短径



- SI-001 カマド
1. 灰黒色土：灰主体、焼土ブロック(径2~3mm)・砂粒多量
 2. 暗灰黒色土：焼土ブロック(径2~3mm)多量
 3. 黄灰褐色土：山砂・灰白色粘土・ローム粒混入
 4. 赤褐色土：3層赤変部
 5. 暗黄灰色土：3層より灰白色粘土粒多い



第20図 SI-001・004

72cm・深さ63cmである。貯蔵穴の東側周辺はわずかに窪んでいる。

遺物の遺存状態は、遺構の南側が削平され、埋土も大部分が削平されているため、総じて良好ではない。1～8は土師器杯である。1・2は小振りの杯である。1は口縁部が若干内傾し、口唇部は摩滅している。口縁部はヘラナデ調整が施される。体部外面はヘラ削りの後、非常に丁寧なヘラ磨き調整が施される。口縁部外面と内面は黒色処理される。2は口縁部が開きながら立ち上がる。内面は非常に丁寧なヘラ磨き調整が施され、外面はヘラ削りの後、ナデとやや粗いヘラ磨き調整が施される。口縁部～体部内外面は黒色処理される。3はやや大振りの杯である。口縁部は垂直に立ち上がり、口唇部はやや内傾する。粗いヘラ磨き調整が施される。内外面が所々赤みを帯びるが、赤彩ではなく胎土の発色と考えられる。口縁部外面と内面は黒色処理される。4は大振りで深い杯である。口縁部はやや内傾する。口縁部～体部の一部と内面は黒色処理される。5～8は須恵器模倣杯である。5～7は口縁部に丁寧なヘラ磨き調整が施され、8は口縁部にヨコナデ調整が施される。5～7は内外面ともに黒色処理される。5は口縁部が強く内傾し、稜が張り出している。6は薄手の杯である。口縁部は摩滅する。7は口唇部が著しく摩滅しており、再調整されていると考えられる。8は稜が張り出さないが、口縁部が強く内傾する。9～11は土師器甕である。9は大形の甕の破片で、貯蔵穴脇の窪みから正位状態で出土した。頸部～口縁部は垂直に立ち上がり、口唇部は強く外反する。外面は胴部ヘラ削りの後に、頸部にヘラナデを施し、最後に口縁部にヨコナデ調整が施される。10は口縁部～胴部破片である。器面は荒れ、調整は不明瞭である。内外面の色調は赤みを帯びる。11は小形の甕の口縁部～頸部の破片である。外面は縦方向、内面は横方向の丁寧なヘラ磨き調整が施される。器面の色調は赤みを帯びる。12は土師器甕である。下部でやや広がり始め、胴部は垂直に立ち上がり、口縁部は強く外反する。外面は口縁部にヨコナデの後、粗いヘラ磨き調整が施される。内面は縦方向のヘラナデの後、口縁部に横方向のヘラナデ調整が施される。13は土製支脚である。高杯の脚柱部のような形状である。頂部～脚柱部中位が遺存する。カマド袖付近から出土した。脚柱部は輪積による中空の円筒形で、頂部と接合する。内面接着部のナデが十分でないことから、脚柱部を積み上げた後に頂部を貼り付けていると考えられる。外面はケズリが施され、内面はヨコナデと頂部付近は指頭圧痕が見られる。出土位置と形状から支脚と判断した。

本遺構の時期は古墳時代後期と推測される。

SI-004(第20図、第2・11表、図版31)

6I-80・90・91グリッドに所在する。南側の大部分は攪乱により削平されている。東側でSI-001と重複し、本遺構の方が古い。平面形・規模は遺存状態が悪いため不明であるが、主軸方向はN-10°-Wと推測される。確認面からの深さは3cmに満たない。ピットは3基検出した。P1は径44cm・深さ65cmで、位置と深さから支柱穴と判断した。P2は長径40cm・短径30cm・深さ50cm、P3は長径40cm・短径30cm・深さ25cmで、本遺構に伴うと思われるが、性格は不明である。

遺物の出土数は遺構の大部分が削平されているため少なく、遺存状態は悪い。1は滑石製の有孔円板である。一部欠損しているが、2か所の穿孔が確認できる。2は珪化木製の棗玉である。両側から穿孔しているが、実測図下側の穿孔は器体の中軸を通っていない。図示したものほかに、土師器の小破片が出土している。

本遺構の時期は、遺物や遺構からは判断できず、SI-001との重複関係から古墳時代中期～後期と推測される。

SI-003a・b(第21・22図、第2・9・10表、図版11・31)

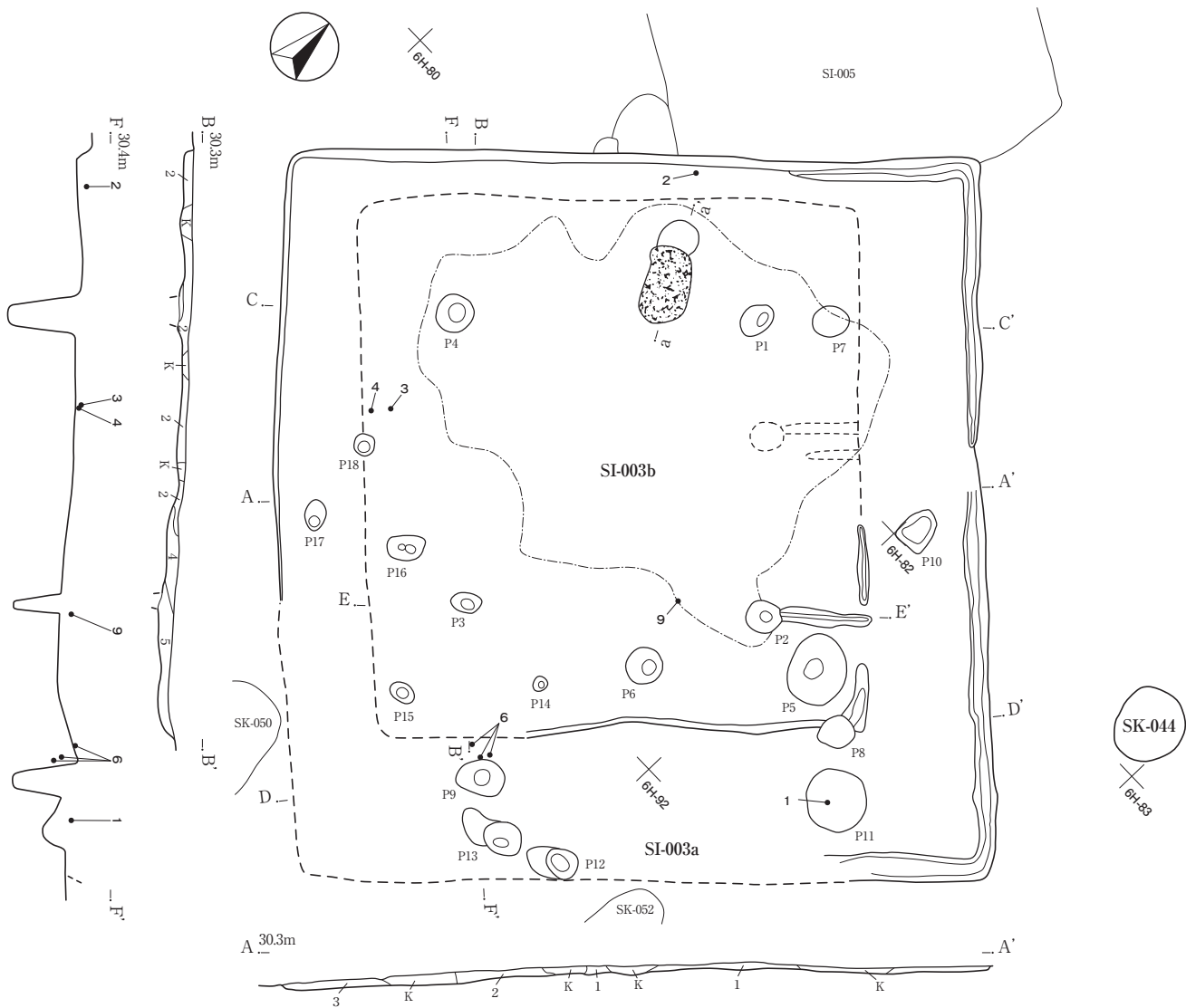
6H-70~72・80~82・90~92グリッドに所在する。北西側でSI-005と重複し、本遺構が新しい。南西側の床面の下にはSK-046(陥穴)がある。確認面からの深さが浅く、壁の立ち上がりがほとんど確認できず、壁溝によって平面形を確認することができた。南側は攪乱により削平され、壁溝も検出できなかった。本遺構は2軒の竪穴住居跡が重複したもので、外側の竪穴住居跡003aの貼床除去中に内側の竪穴住居跡003bの壁溝などを検出した。両遺構は埋土の堆積状況からは切り合い関係が認められず、各辺の向きがほぼ同じであることと支柱穴の位置などから、支柱穴P4を基点として四方に(003bから003aへ)拡張されたと推測される。P1~P11は支柱穴や貯蔵穴として帰属する竪穴住居跡を推測することができたが、P12~P18は性格やどちらの竪穴住居跡に帰属するのか不明である。

003aは、平面形は方形で、主軸方向はN-44°-Wと推測される。規模はいずれも推定で、主軸長8.45m・幅8.20mで、確認面からの深さは0.16mである。炉は北西壁側の支柱穴の間で検出し、長軸長92cm・短軸長56cmで、不整な楕円形である。壁溝は北西壁から南東壁にかけて検出した。北西側で途切れていることから、全周しないと考えられる。平面図の一点破線の範囲は床面の硬化部分である。003aの支柱穴はP4・P7~P9の4本で、P4は径46cm・深さ81cm、P7は長径42cm・短径36cm、P8は長径42cm・短径38cm、P9は長径58cm・短径42cm・深さ66cmである。南東壁際にあるP11は径74cmで、貯蔵穴と推測される。北東壁際のほぼ中央にあるP10は長径48cm・短径37cm・深さ36cmで、出入口ピットと推測される。P7・P8・P11については上端のみの記録であり、詳細な形状と深さは不明である。

003bは、平面形は方形で、主軸方向は003aと同じと推測される。規模はいずれも推定で、主軸長6.10m・幅5.75mで、003aの床面からの深さは南東側で0.04mである。壁溝は北東側で部分的に検出したものの、全周はしないと推測される。間仕切り溝については、P2から壁溝に延びるもののほかに、現場写真にのみ記録されているものがあり、挿図中に破線で位置等の概略を示した。支柱穴はP1~P4の4本で、P1は長径44cm・短径34cm・深さ65cm、P2は径40cm・深さ30cm、P3は長径36cm・短径24cm・深さ56cm、P4は径46cm・深さ81cmである。P5は長径84cm・短径68cm・深さ34cmで、東側隅にあり貯蔵穴と推測される。P6は径44cm・深さ37cmで、南東壁際のほぼ中央にあり出入口ピットと推測される。

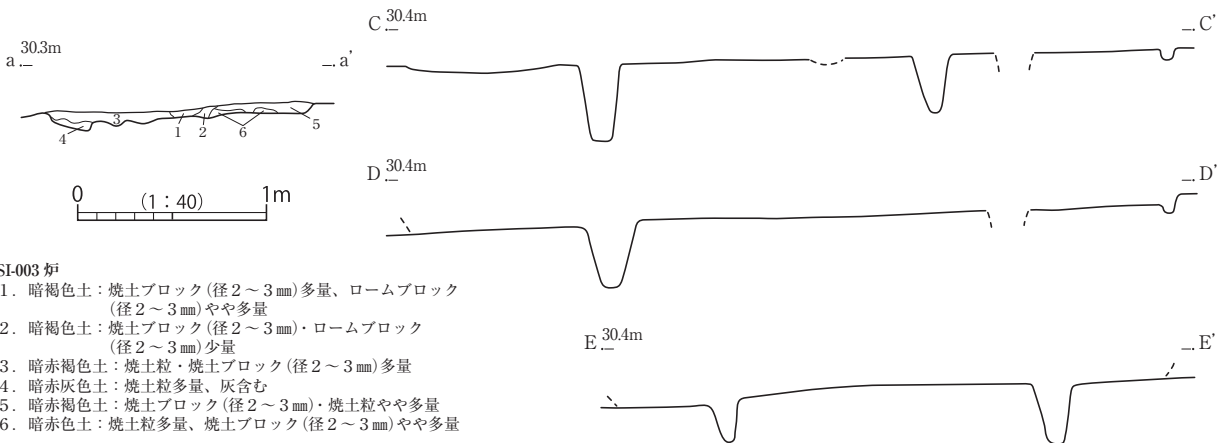
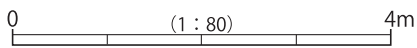
出土遺物は、拡張後の003aに伴う可能性が高いため、出土位置に関わらずまとめて記載した。1は土師器杯である。体部は平底の底部から大きく開き、口縁部はやや内傾して立ち上がる。杯部と底部内外面はヘラナデ調整が施され、内外面ともに赤彩される。2・3は土師器高杯の脚部である。ラッパ状に外反する屈曲脚で、脚柱部は円柱状で、裾部は強く屈曲して直線的に広がる。2は脚柱部内面にヘラ削り調整が施されるが、輪積痕が見られる。3は脚柱部が若干膨らみ、内外面はヘラ削り調整が施され、外面は赤彩される。4~9は土師器甕である。4・5は口縁部である。4は複合口縁で頸部が「く」の字状に屈曲する。頸部は縦方向のヘラナデ調整が施される。5は頸部が直線的に立ち上がった後、口縁部は緩やかに外反する。口縁部内面は横方向のハケ目が残る。6は球形の胴部~底部で、胴部外面は被熱し器面が荒れ、ススが付着する。内面に輪積痕がわずかに見られる。7~9は平底の底部である。7は推定底径が8.1cmと大きく器厚が薄手であるのに対し、8・9は底径が小さく器厚が厚手である。8は底部に木葉痕が見られる。10~12は土玉である。10は完形で、上部から穿孔されたと推測される。11は外面及び孔内部が黒色であり、炭素の吸着によるものと推測される。外面はヘラ磨きが施される。12は小形の土玉の破片である。

本遺構の時期は、いずれも出土遺物から古墳時代中期と推測される。



SI-003

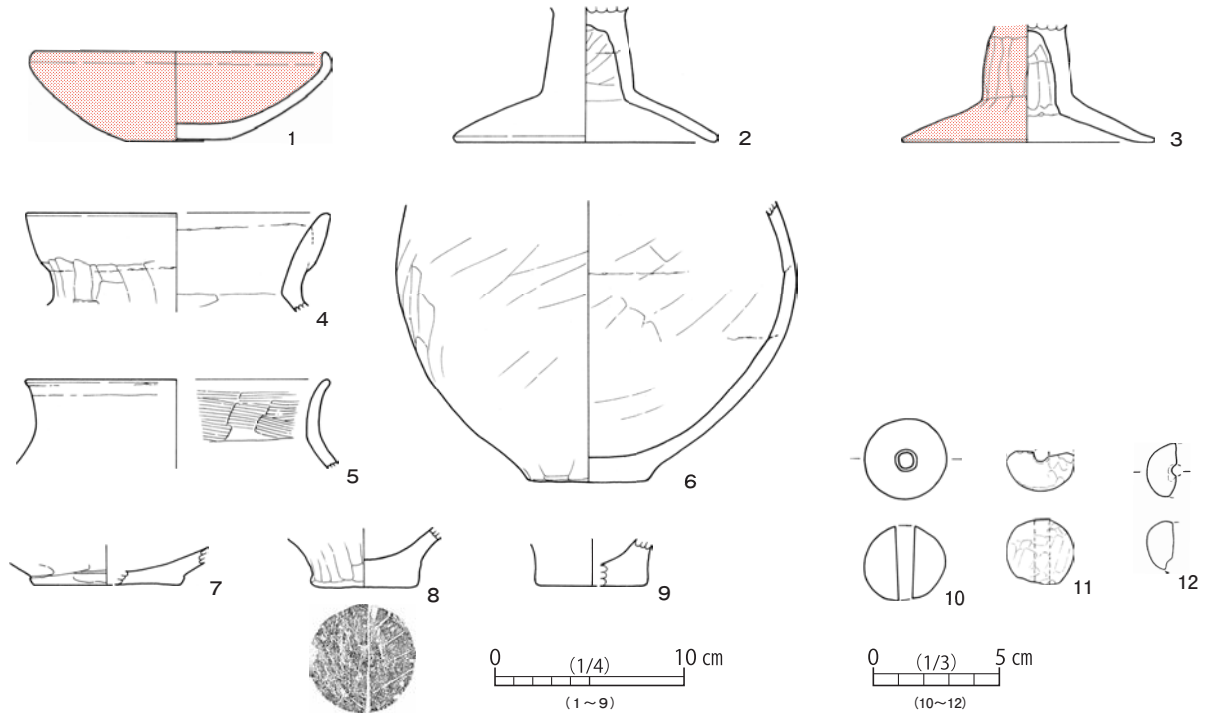
1. 暗褐色土：ローム粒やや多量、ロームブロック(径5mm)・焼土粒少量
2. 暗褐色土：ローム粒多量、ロームブロック(径5mm)やや多量、炭化粒若干
3. 暗褐色土：ローム粒多量、ロームブロック(径5mm)やや多量、焼土粒・炭化粒含む
4. 暗褐色土：ローム粒やや多量、ロームブロック(径3~5mm)多量
5. 褐色土：ローム粒やや多量、ロームブロック(径10~20mm)多量



SI-003 切

1. 暗褐色土：焼土ブロック(径2~3mm)多量、ロームブロック(径2~3mm)やや多量
2. 暗褐色土：焼土ブロック(径2~3mm)・ロームブロック(径2~3mm)少量
3. 暗赤褐色土：焼土粒・焼土ブロック(径2~3mm)多量
4. 暗赤灰色土：焼土粒多量、灰含む
5. 暗赤褐色土：焼土ブロック(径2~3mm)・焼土粒やや多量
6. 暗赤色土：焼土粒多量、焼土ブロック(径2~3mm)やや多量

第21図 SI-003a・b(1)・SK-044



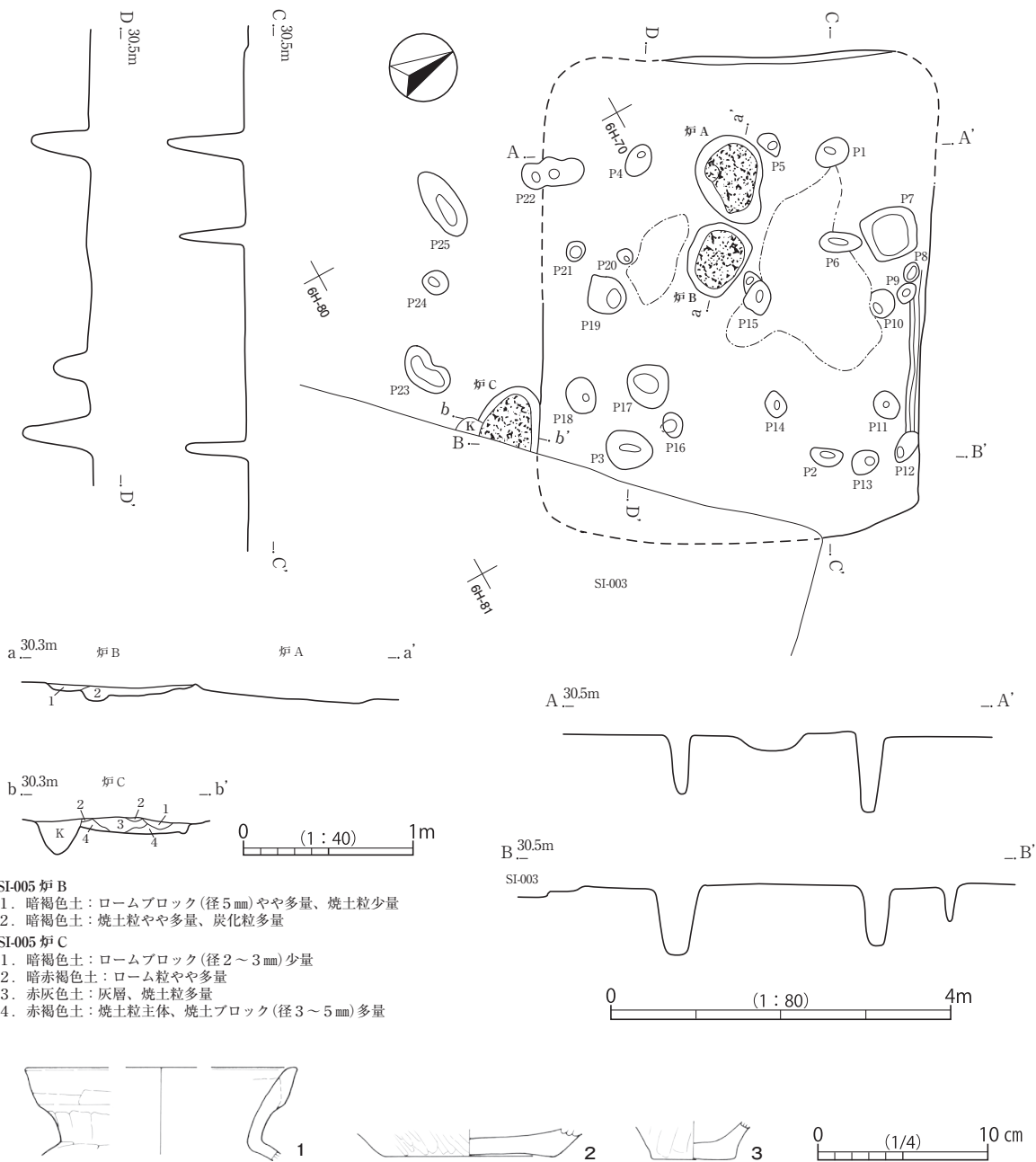
第22図 SI-003a・b(2)

SI-005(第23図、第2・9表、図版11・31)

6H-60・61・70・71グリッドに所在する。南側でSI-003aと重複し、本遺構の方が古い。発掘調査時に本遺構の南側で炉Cを検出したことから、もう一軒竪穴住居跡が重複して存在すると想定していたが、主柱穴となるようなピットなどは検出できなかった。本遺構も確認面から深さが浅く、遺存状態が良くない。平面形は隅丸長方形で、主軸方向はN-61°-Wと推測される。推定の規模は主軸長5.68m・幅4.50mで、確認面からの深さは0.14mである。壁溝は北東壁で一部検出したが、おそらく全周しないと推測される。炉は北西壁寄りの主柱穴の間に2基検出した。北側の炉Aは長軸長108cm・短軸長80cmの不整な楕円形である。断面形は扁平な皿状で、土層の堆積状況は不明である。南側の炉Bは長軸長88cm・短軸長64cmの楕円形である。断面形は扁平な皿状で、一部が深くなっている。炉A・Bの周辺に床面の硬化部分(平面図の一点破線の範囲)が見られた。炉Cは南東側半分ほどがSI-003aに削平されているが、平面形は楕円形になると推測される。現存の長軸長72cm・推定の短軸長80cmで、掘り込みは比較的しっかりしている。ピットは周辺のものも含め25基検出し、P1~P4が主柱穴である。P1は径42cm・深さ90cm、P2は径38cm・深さ69cm、P3は径57cm・深さ88cm、P4は径40cm・深さ68cmである。そのほかのピットは平面形・規模・深さともにまちまちで、性格は不明である。

図示できた遺物は3点である。1~3は土師器甕である。1は複合口縁で頸部が「く」の字状に屈曲する。口唇部は面取りされる。口縁部内面と頸部内外面は縦方向のヘラナデ調整が施される。口縁部外面に輪積痕が見られる。2・3は平底の底部である。2は内外面ともにヘラナデが施される。3は径が小さく、内面は摩滅しているが、内外面にヘラナデが施される。

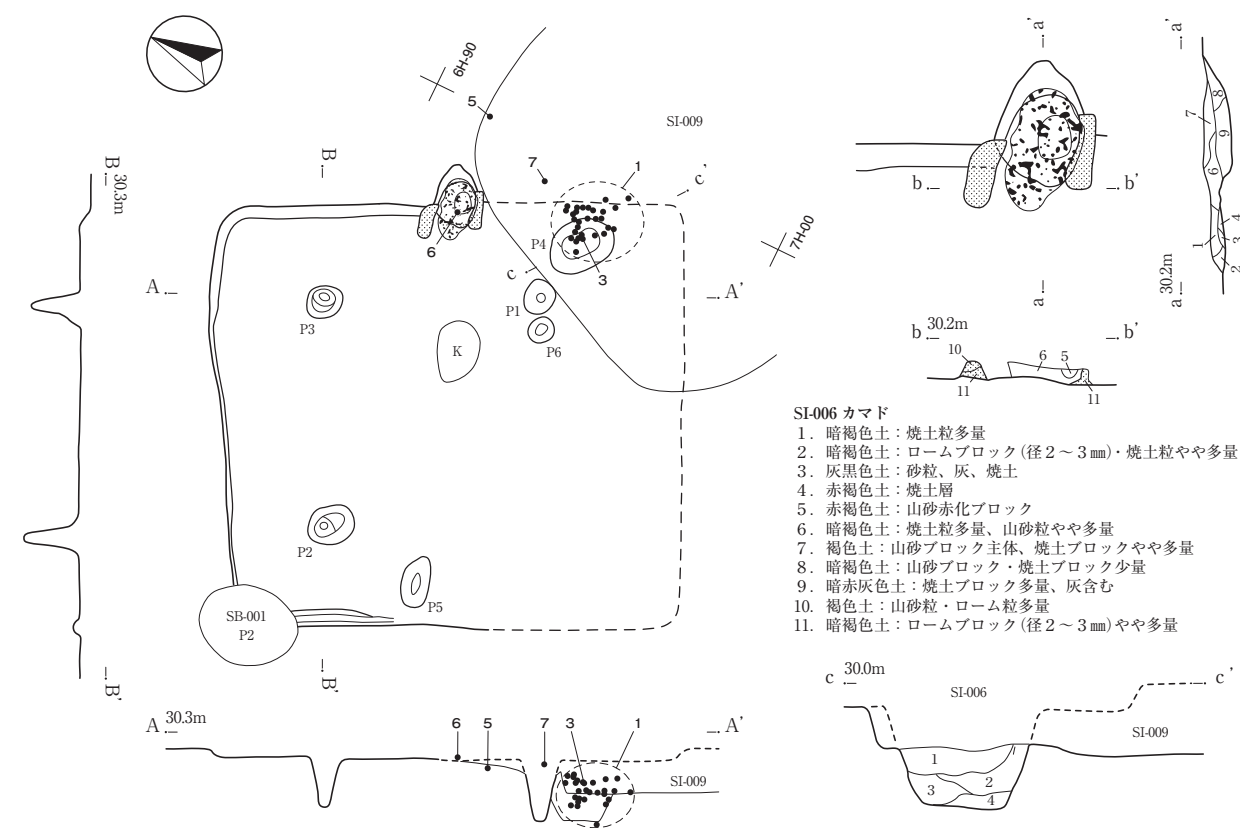
本遺構の時期は、平面形や出土遺物などから古墳時代中期と推測される。



第23図 SI-005

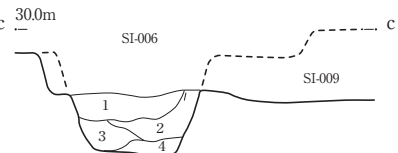
SI-006 (第24図、第2・9・10表、図版12・32)

6G-88・89・98・99グリッドに所在する。南側の大部分は攪乱により削平され、遺存状態は良くない。南東側でSI-009(弥生時代)と重複し、本遺構の方が新しい。西側隅で奈良・平安時代のSB-001のP2と重複する。発掘調査時には南東側にもう一軒竪穴住居跡が重複していると想定し、006A・006Bの遺構番号を付して調査を進めたが、プランや主柱穴などが明確にされなかったことから、整理作業時に単独の竪穴住居跡と判断し、遺構番号も006として報告することとした。平面形は方形で、主軸方向はN-64°-Eと推測される。規模は主軸長4.46m・推定幅4.86mで、確認面からの深さは0.12mである。壁溝は南西壁沿いに一部見られる。カマドは北東壁の中央に付設されている。袖の構築材は山砂で、壁から40cmほどが遺存して



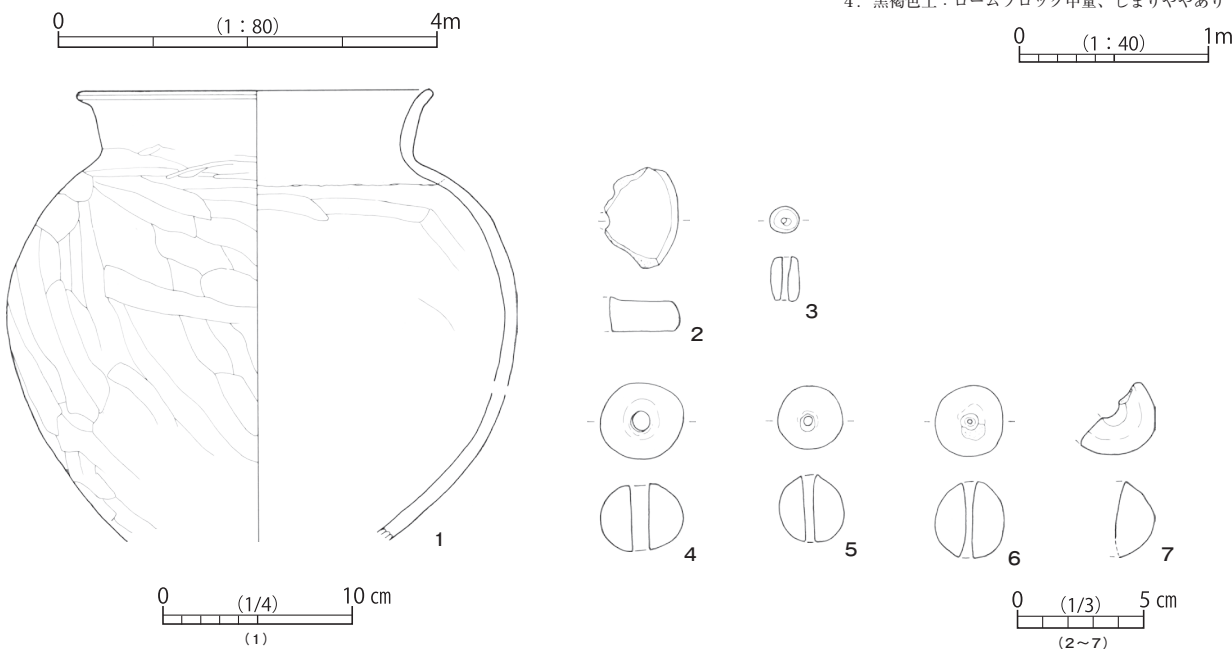
SI-006 カマド

1. 暗褐色土：焼土粒多量
2. 暗褐色土：ロームブロック（径2～3mm）・焼土粒やや多量
3. 灰黒色土：砂粒、灰、焼土
4. 赤褐色土：焼土層
5. 赤褐色土：山砂赤化ブロック
6. 暗褐色土：焼土粒多量、山砂粒やや多量
7. 褐色土：山砂ブロック主体、焼土ブロックやや多量
8. 暗褐色土：山砂ブロック・焼土ブロック少量
9. 暗赤灰色土：焼土ブロック多量、灰含む
10. 褐色土：山砂粒・ローム粒多量
11. 暗褐色土：ロームブロック（径2～3mm）やや多量



SI-006 貯蔵穴

1. 暗褐色土：ロームブロック少量、焼土・炭化粒微量
2. 暗褐色土：ロームブロック少量、しまりやや弱い
3. 黒褐色土：ロームブロック中量、しまりややあり
4. 黒褐色土：ロームブロック中量、しまりややあり



第24図 SI-006

いる。煙道部は壁を40cmほど掘り込み、奥壁は火床面から約30°の角度で立ち上がる。ピットは6基検出し、支柱穴はP1～P3である。P1は長径38cm・短径30cm・深さ51cm、P2は長径51cm・短径40cm・深さ58cm、P3は長径36cm・短径34cm・深さ53cmである。南東隅にあるP4は貯蔵穴で、長径63cm・短径52cm・深さ34cmであ

る。南西壁際にあるP5は長径56cm・短径28cm・深さ20cmで、出入口ピットと推測される。

図示できた遺物は、土器1点と土製品6点である。1は土師器甕である。胴部上部が最大径となる球形の胴部である。口縁部は、頸部で直立気味に緩やかに外反し、口唇部で大きく外反する。胴部外面はヘラ削りで、胴部中位～下半部は斜めに、胴部上半部は横方向に行っている。口縁部内外面はヨコナデ、胴部内面はヘラナデ調整が施される。2～7は土製品である。2は紡錘車と推測される。縁辺は若干摩滅している。孔は上部から一度に開けられたと推定される。3は管玉である。孔を開けた後に、上下面が平らになるよう調整が施される。4～7は土玉である。4・5は上部から孔が開けられ、6は上下から孔が開けられたと推測される。4は被熱のため表面が剥落している。6はほかの土玉と比較し、孔径が小さい。7は土玉の破片である。

本遺構の時期は、出土遺物から古墳時代中期後葉～後期初頭と推測される。

SI-012(第25図、第2表、図版12・13)

6H-97・98グリッドに所在する。北側でSI-014・015、東側でSI-013と重複し、本遺構が最も新しい。西側には中・近世土坑SK-053・056が掘り込まれている。南側は大きく攪乱により削平されるなど遺存状態は悪く、壁溝によって北東隅を検出した。平面形は方形で、主軸方向はN-33°-Wと推測される。床面は攪乱により斜めに削平され、壁溝から南に向かって傾斜している。壁溝の深さは約5cmである。ピットは4基検出した。P2は貯蔵穴で、長径81cm・短径58cm・深さ27cmである。そのほかのピットは性格不明である。

遺物の遺存状態も良好ではなく、図示できるものはない。

本遺構の時期は、ほかの竪穴住居跡との重複関係から古墳時代後期と推測される。

SI-013(第25・26図、第2・9・10表、図版12・13・32)

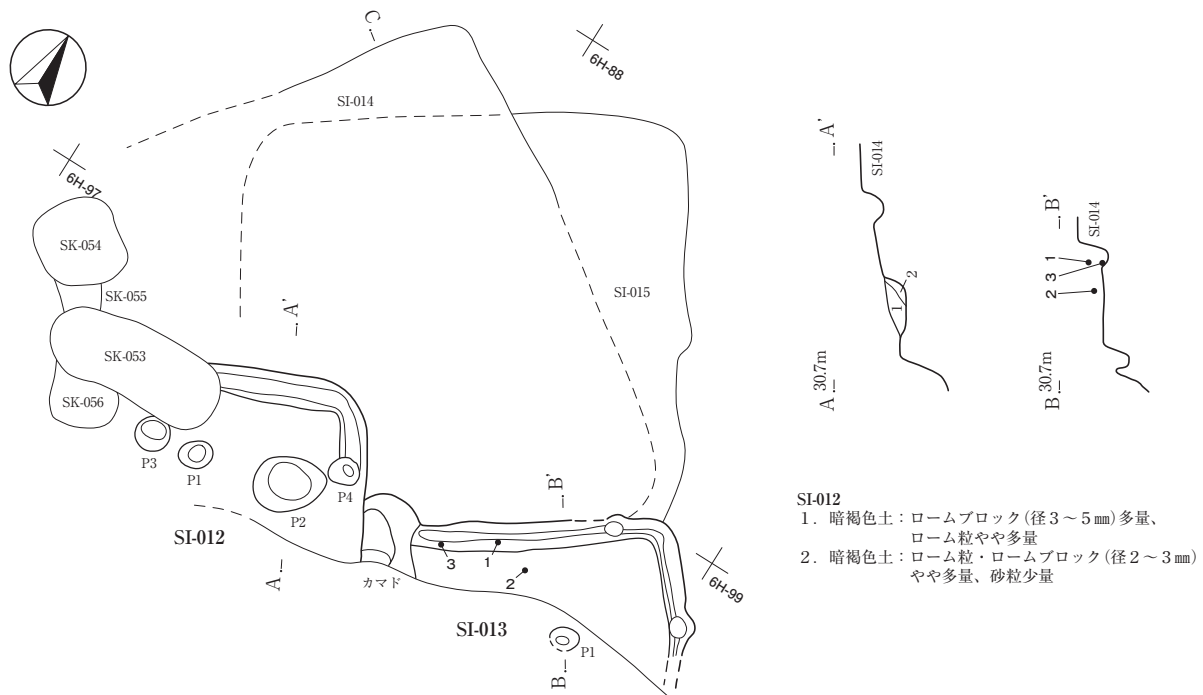
6H-98・99グリッドに所在する。北側でSI-014・015、西側でSI-012と重複し、本遺構の方がSI-012よりも古く、SI-014・015よりも新しい。南側は大きく攪乱により削平され遺存状態は悪く、カマドから北隅の一部を検出した。平面形は方形で、主軸方向はN-32°-Wと推測される。確認面からの深さは45cmである。カマドは北西壁に付設されているが、遺存状態が悪く、山砂や焼土粒・灰などの範囲を検出しただけで、袖部や火床部は検出できなかった。壁溝の深さは約5cmで、カマド付近で途切れている。検出したピット(P1)は支柱穴と考えられるが、攪乱による削平を受けている。現存規模は径33cm・深さ27cmである。

図示できた遺物は土器2点、土製品1点、石製品1点である。1は土師器杯である。器高が低く、口縁部は緩やかに立ち上がる。内面は細かなミガキ調整が施され、内外面は黒色処理される。2は土師器甕の底部である。底部の器厚は厚いが、胴部の器厚は上部に向かってかなり薄くなっている。3は土製支脚で、表面は被熱し剥落が著しい。4は砂岩製の砥石破片である。表裏両面を使用している。最大長56.0mm・最大幅63.0mm・最大厚30.0mm・重量128.51gである。

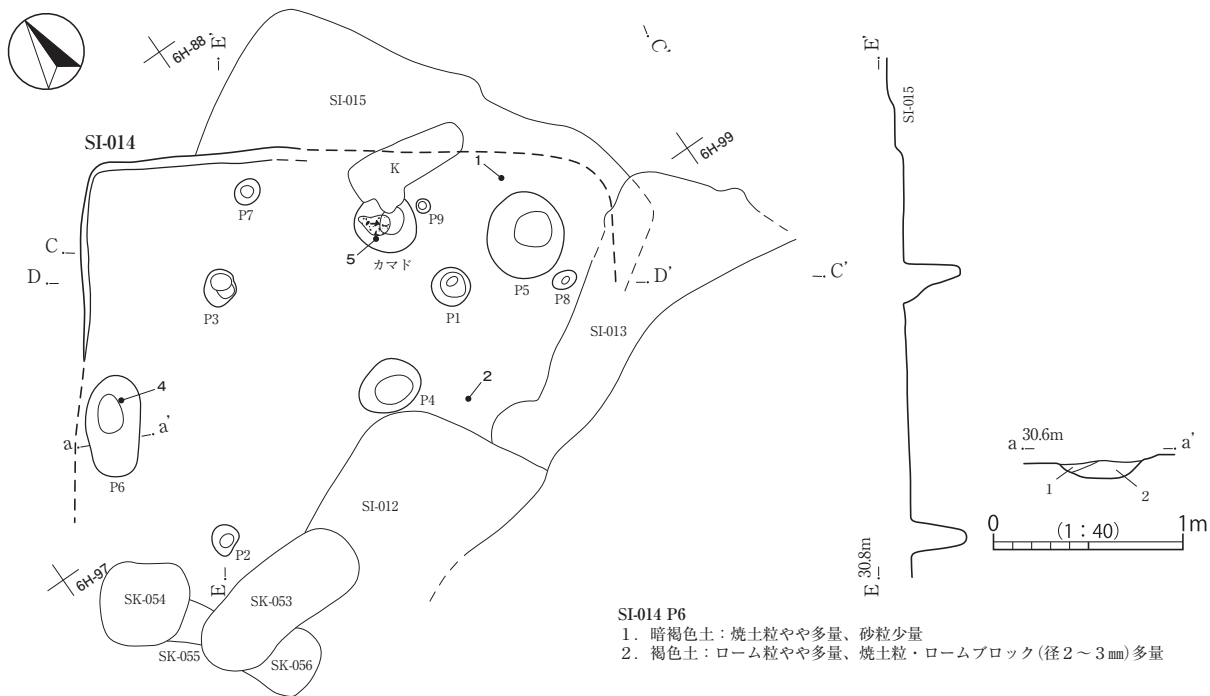
本遺構の時期は、出土遺物から古墳時代後期と推測される。

SI-014(第25・26図、第2・9～11表、図版13・32)

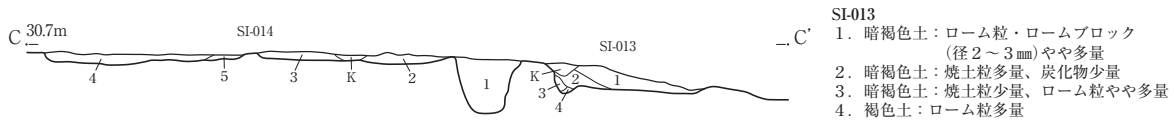
6H-87・88・97・98グリッドに所在する。東側でSI-015、南側でSI-012・013と重複し、本遺構の方がSI-012・013より古く、SI-015より新しい。南西側は中・近世土坑SK-053～056に掘り込まれている。平面形は方形で、主軸方向はN-36°-Eと推測される。規模は一辺約6mで、確認面からの深さは0.12mである。カマドは北東壁寄りの中央部に付設されたと推測される。壁際は攪乱を受け、遺存するのは火床部だけで袖部は検出できなかったが、土層断面の調査記録や写真などからカマドと判断した。ピットは9基検出し、



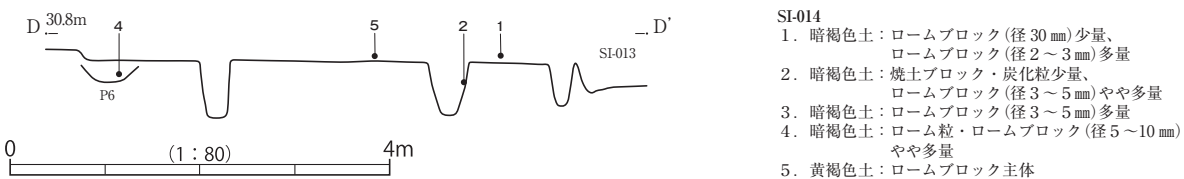
- SI-012**
1. 暗褐色土：ロームブロック(径3~5mm)多量、ローム粒やや多量
 2. 暗褐色土：ローム粒・ロームブロック(径2~3mm)やや多量、砂粒少量



- SI-014 P6**
1. 暗褐色土：焼土粒やや多量、砂粒少量
 2. 褐色土：ローム粒やや多量、焼土粒・ロームブロック(径2~3mm)多量

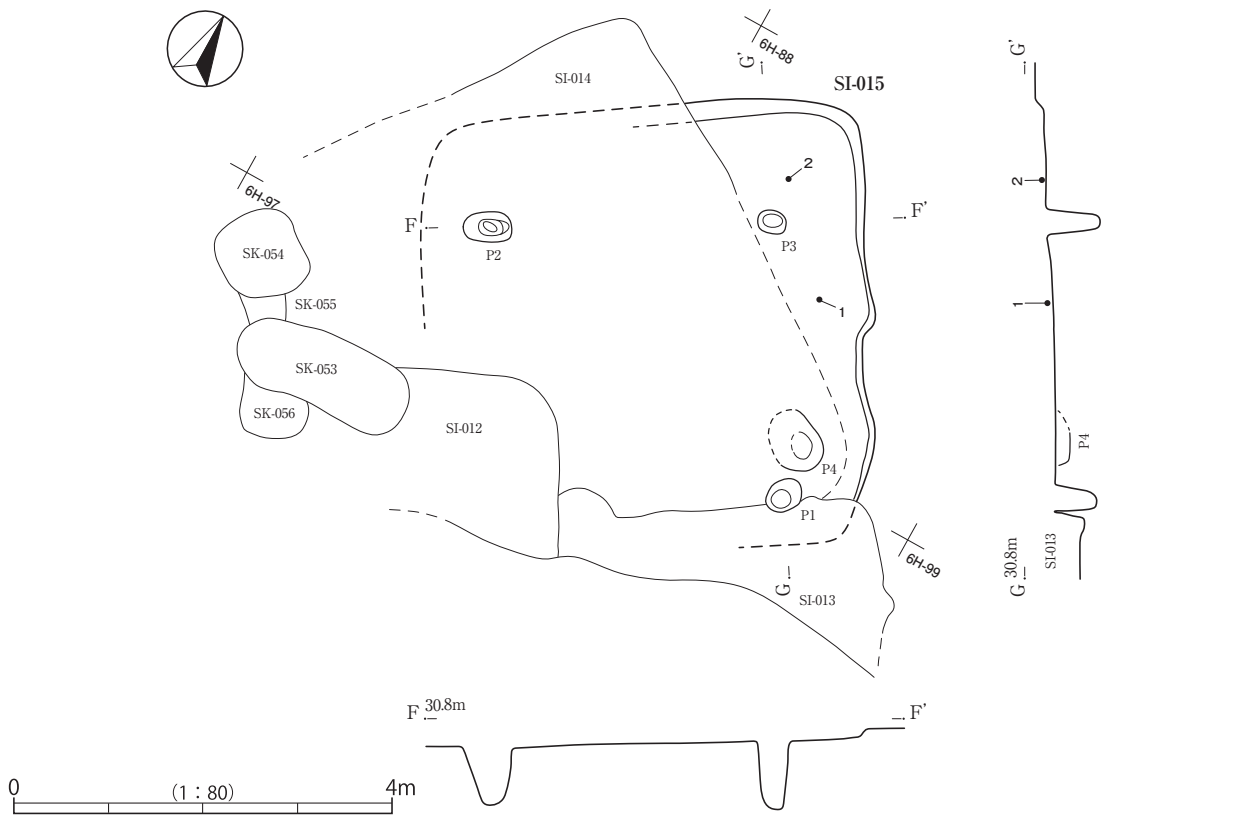


- SI-013**
1. 暗褐色土：ローム粒・ロームブロック(径2~3mm)やや多量
 2. 暗褐色土：焼土粒多量、炭化物少量
 3. 暗褐色土：焼土粒少量、ローム粒やや多量
 4. 褐色土：ローム粒多量

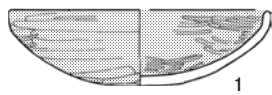


- SI-014**
1. 暗褐色土：ロームブロック(径30mm)少量、ロームブロック(径2~3mm)多量
 2. 暗褐色土：焼土ブロック・炭化粒少量、ロームブロック(径3~5mm)やや多量
 3. 暗褐色土：ロームブロック(径3~5mm)多量
 4. 暗褐色土：ローム粒・ロームブロック(径5~10mm)やや多量
 5. 黄褐色土：ロームブロック主体

第25図 SI-012~015 (1)



SI-013



1



2



3

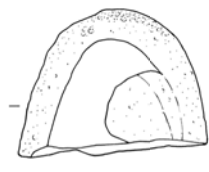


4

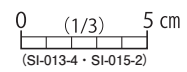
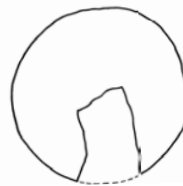
SI-015



1



2

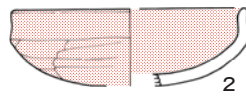


0 (1/3) 5 cm
(SI-013-4 · SI-015-2)

SI-014



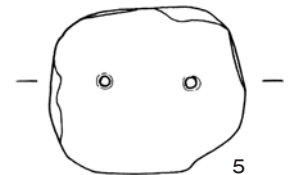
1



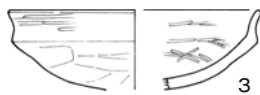
2



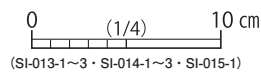
4



5



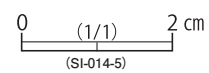
3



0 (1/4) 10 cm
(SI-013-1~3 · SI-014-1~3 · SI-015-1)



0 (1/2) 5 cm
(SI-014-4)



0 (1/1) 2 cm
(SI-014-5)

第26图 SI-012~015 (2)

支柱穴はP1～P3である。P1は径42cm・深さ58cm、P2は径34cm・深さ56cm、P3は径42cm・深さ60cmである。東隅のP5と西壁寄りのP6は貯蔵穴で、P5は径79cm・深さ56cm、P6は長径106cm・短径58cm・深さ17cmである。

遺物の遺存状態は良好ではなく、図示できたものは土器3点・土製品1点・石製品1点である。1～3は土師器杯である。1・2は内外面が赤彩される。1は器高が低く、口縁部は緩やかに立ち上がる。口唇部は使用により、かなり摩滅している。器面は被熱し剥落する。外面にススが付着している。2は口縁部が垂直に立ち上がり、口唇部はわずかに外反する。口縁部は使用により摩滅している。3は口縁部と体部の境に明瞭な稜を作り出すものである。口縁部は垂直に立ち上がった後にやや外反する。内外面は細かなヘラ磨き調整が施される。4は小形土製品の一部と推測される。指ナデによって上部に細くひねり上げており、スタンプ状である。上部は欠損している。5はほぼ完形の滑石製の有孔円板である。2か所に穿孔されている。

本遺構の時期は、出土遺物から古墳時代後期と推測される。

SI-015(第26図、第2・9表、図版13・32)

6H-87・88・98グリッドに所在する。西側でSI-014、南側でSI-012・013と重複し、本遺構が最も古い。遺構の遺存状態は悪く、確認面からの深さも浅い。ほかの遺構と重複しない部分で壁の掘り込みを検出した。平面形は方形で、主軸方向はN-32°-Wと推測される。規模は一辺約4.5mで、確認面からの深さは0.08mである。ピットは4基検出し、支柱穴はP1～P3である。P1は径39cm・深さ48cm、P2は径51cm・深さ59cm、P3は径35cm・深さ61cmである。P4は西側の半分をSI-014のP5に切られているが、貯蔵穴と推測され現存長50cm・深さ9cmである。

遺物の遺存状態は良好ではなく、図示できたものは土器1点と石器1点である。1は土師器皿の底部である。底部は若干丸みを帯びている。2は砂岩製の敲石である。表面と裏面が使用によって平らになっており、上面には敲打痕が見られる。最大長44.0mm・最大幅50.0mm・最大厚15.5mm・重量39.49gである。

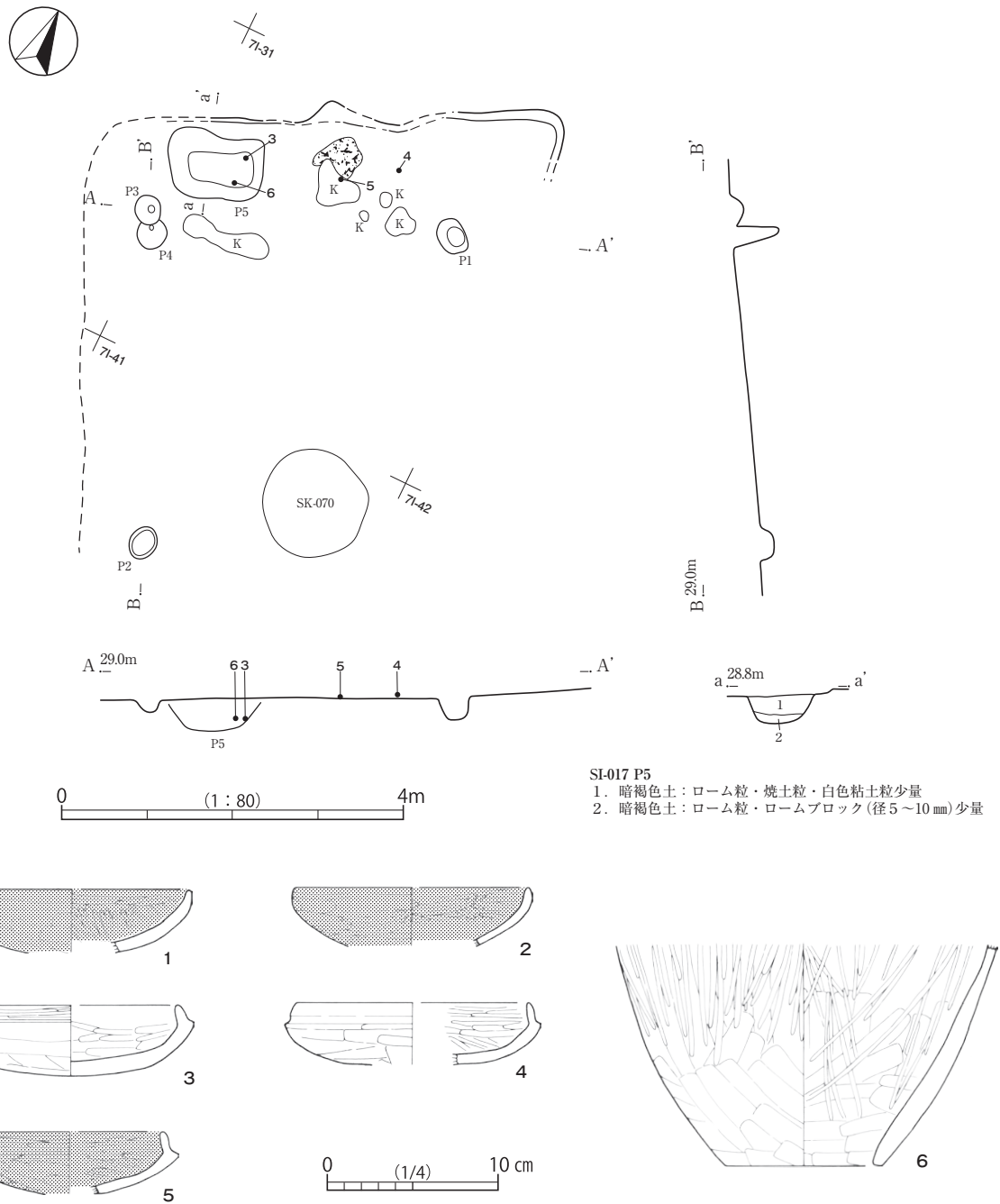
本遺構の時期は、出土遺物と重複関係から古墳時代中期と推測される。

SI-017(第27図、第2・9表、図版14・32)

7I-30・31グリッドに所在する。遺構の掘り込みが浅く、北壁と北壁寄りの床面の一部だけを検出した。北壁の状況から平面形は方形で、主軸方向はN-28°-Wと推測される。規模は一辺約5mと推測され、確認面からの深さは0.09mである。発掘調査時の所見では、北壁際に焼土と一部に山砂が見られたことから、カマドの存在を想定したが、袖部や火床部は検出できなかった。ピットは5基検出し、支柱穴はP1～P3である。P1は径41cm・深さ30cm、P2は径42cm・深さ16cm、P3は径36cm・深さ35cmである。P5は貯蔵穴と推測され、長軸長113cm・短軸長79cm・深さ40cmである。

図示できた遺物は土器6点である。1～5は土師器杯で、全て口径に対して器高が低いものである。1・2は口縁部が緩やかに内湾して立ち上がる椀形の杯で、内外面が黒色処理される。1は外面がヘラナデ、内面がヘラ磨き調整が施される。口縁部は摩滅が著しい。2は内外面にヘラ磨き調整が施される。3～5は須恵器模倣杯で、外面に明瞭な稜を作り、口縁部がやや内傾する。いずれも内外面はヘラナデないしヘラ磨き調整が施され、5は内外面が黒色処理される。6は土師器甌である。内外面ともに斜め・横方向のヘラケズリの後、縦・斜め方向の丁寧なヘラミガキ調整が施される。

本遺構の時期は、出土遺物から古墳時代後期と推測される。



第27図 SI-017

SI-018(第28・29図、第2・9・10表、図版14・15・32・33)

7H-31・32・41~43グリッドに所在する。遺跡の南西側にある小支谷の傾斜面中にあり、大部分は南側台地整形区画のSX-005によって削平されているため、北西側の壁付近と壁溝の一部などしか検出できなかった。北東側でSI-019と重複し、本遺構の方が新しい。平面形は方形又は長方形で、主軸方向はN-36°-Eと推測される。壁は北隅と西側の一部で検出し、確認面からの深さは斜面地のため5cm~80cmと幅がある。北東側で壁溝を検出し、本遺構の平面形などを推定することができた。壁溝の深さは8cmである。ピットは4基検出した。P1は主柱穴、P2・P3は貯蔵穴と推測される。P1は径46cm・短径33cm・深さ67cmである。

P2は長軸長93cm・短軸長66cm・深さ59cm、P3は長軸長74cm・短軸長62cm・深さ6cmである。P4は径60cm・深さ44cmで、壁溝と重複する場所にあり、壁柱穴と推測されるが、SI-019の主柱穴の可能性もある。

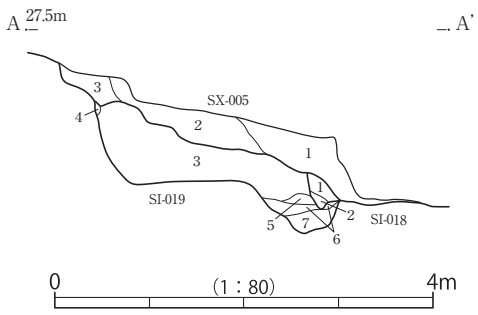
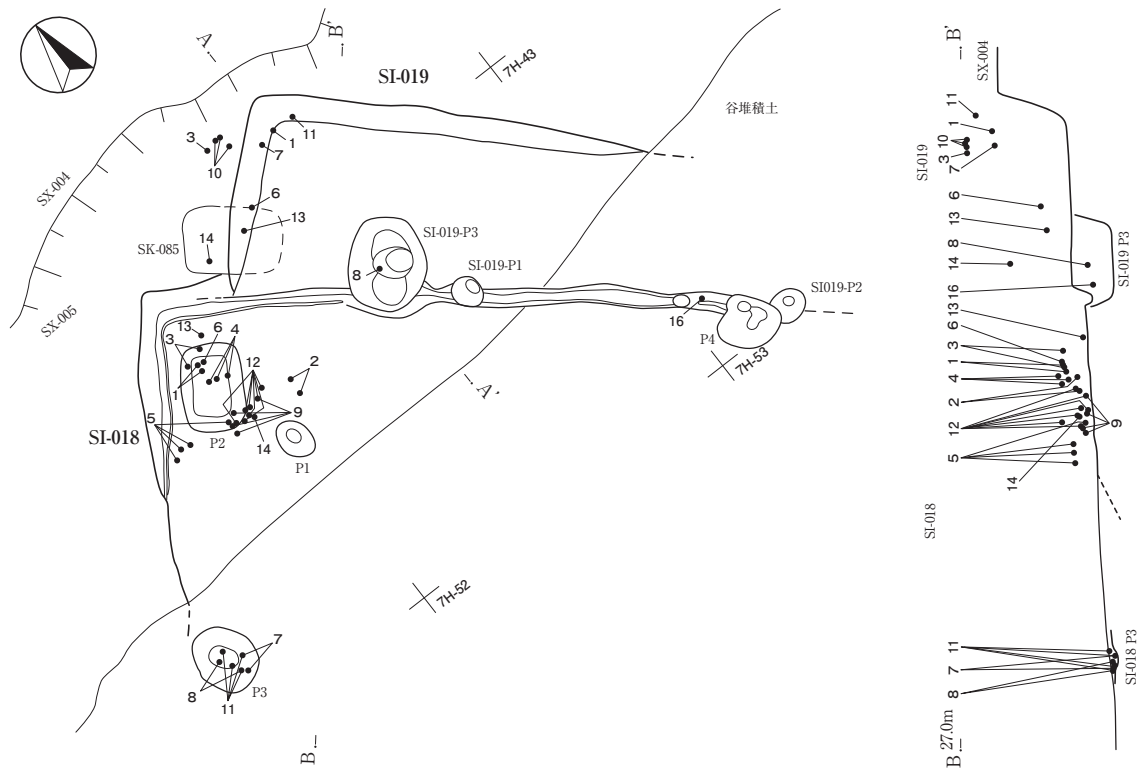
遺物は壁が最もよく遺存している北隅とP3内から出土した。図示できた遺物は土器12点、ミニチュア土器2点、土製品1点である。1～6は土師器杯である。1・2は口縁部が緩やかに内湾して立ち上がる椀形の杯である。1は口唇部の摩滅が著しく、外面はヘラナデ、内面はヘラ磨き調整が施され、内外面が黒色処理される。2は口縁部がやや直線的に立ち上がり、外面はヘラナデ、内面はヘラ磨き調整が施され、内面が黒色処理される。3～5は須恵器模倣杯で、外面に明瞭な稜を作り、口縁部が内傾する。3・4は扁平な丸底で、5はやや深い丸底である。いずれも内外面はヘラ磨き調整が施され、3は内外面が黒色処理される。5は口唇部の摩滅が著しい。6は口縁部が内湾して立ち上がる深い椀形の杯である。口縁部は短く内傾する。外面は丁寧なヘラナデ調整、内面は細かなヘラ磨き調整が施される。7～12は土師器甕である。7・8は口縁部が短く直立気味に外反し、口径が胴部径よりも小さい。胴部と口縁部の間に稜を作り出す。9～11は口縁部が大きく外反する。9は口径と胴部径がほぼ同じで、胴部外面は縦方向のヘラ削りの後、横方向のヘラナデ調整が施される。10・11は球形の胴部になると推測される。11は口縁部と胴部の境に明瞭な稜が作り出される。12は口縁部を欠損するが、10・11と同じ大きく外反する口縁部をもつ甕と推測される。外面は縦方向のヘラ削りの後、横方向のヘラナデ調整が施される。13は土師器甌である。口縁部は外反し、底部に向かってすぼまる鉢形の甌と推測される。胴部内面は丁寧なヘラ磨き調整が施される。14・15はミニチュア土器で、手捏ね成形である。いずれも平底で体部はほぼ垂直に立ち上がる。16は小形の土玉である。上部から穿孔されている。表面はヘラナデないしヘラ磨きの後、黒色処理され光沢を帯びている。装飾品として使用されていたと推測される。

本遺構の時期は、出土遺物から古墳時代後期と推測される。

SI-019(第28・29図、第2・9～11表、図版14・15・33)

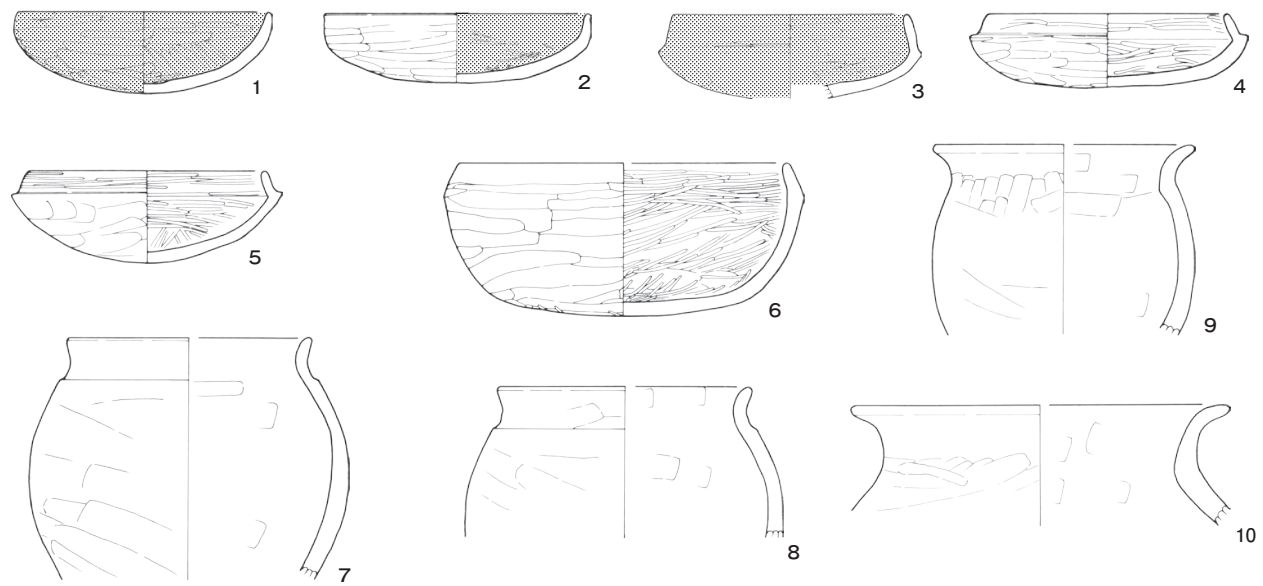
7H-32・42・43グリッドに所在する。SI-018と同様に遺跡の南西側にある小支谷の傾斜面中にあり、大部分は南側台地整形区画のSX-005に削平されている。南西側はSI-018と重複し、本遺構の方が古いため北隅部分の壁付近の一部しか検出できなかった。北西壁に奈良・平安時代の土坑SK-085が掘り込まれている。平面形は方形又は長方形で、主軸方向はN-44°-Eと推測される。規模は遺存状態が悪く、現状で主軸長4.4m・幅2.24mで、確認面からの深さは0.40m～0.97mと幅がある。ピットは3基検出した。P1・P2は主柱穴、P3は貯蔵穴と推測される。P1は径38cm・深さ64cm、P2は径32cm・深さ47cmである。P3は長径98cm・短径82cm・深さ80cmである。

遺構の遺存状態は良くないが、遺物の数量は多く、図示できた遺物は土器10点、須恵器1点、ミニチュア土器1点、石製品1点、土製品1点、砥石1点である。1～6は土師器杯である。1は半球形の扁平な杯で、体部に接合痕が見られる。外面はヘラナデ調整、内面は丁寧なヘラ磨き調整が施される。2～4は須恵器模倣杯である。2は口径に対して器高がやや高い。内面の口縁部近くに輪積痕が残る。内外面は丁寧な細かなヘラ磨き調整が施され、体部外面を除いて赤彩される。3・4は外面に明瞭な稜を作り口縁部が内傾する。3は口縁部から底部にかけて亀裂が見られ、口縁部・体部に摩滅や欠損部がないことや出土位置が床面よりかなり上であることなどから、ほとんど使用されずに投棄されたと推測される。底部～体部外面はヘラ削りで、そのほかは丁寧なヘラ磨き調整が施される。4は口唇部が全て欠損し体部外面は摩滅している。内外面は丁寧なヘラ磨き調整が施され、黒色処理される。5は体部が浅く、口縁部は体部との境に

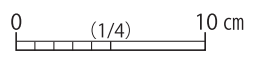


- SI-018**
1. 褐色土：ロームブロック (径10~20mm) 多量
 2. 褐色土：ロームブロック (径2~3mm) やや多量
- SI-019**
3. 暗褐色土：ロームブロック (径2~3mm) (径5~10mm) やや多量
 4. 褐色土：ローム粒多量
 5. 暗褐色土：ローム粒やや多量、ロームブロック (径10mm) 少量
 6. 褐色土：ローム粒・ロームブロック (径2~3mm) (径5~10mm) 多量
 7. 褐色土：ローム粒・ロームブロック (径2~3mm) 多量、暗褐色土粒やや多量、白色粘土ブロック少量
- SX-005**
1. 暗褐色土：焼土粒若干
 2. 褐色土：ロームブロック (径5mm前後) やや多量、焼土粒・粘土ブロック少量
 3. 褐色土：ローム粒多量、ロームブロック (径3~5mm) やや多量

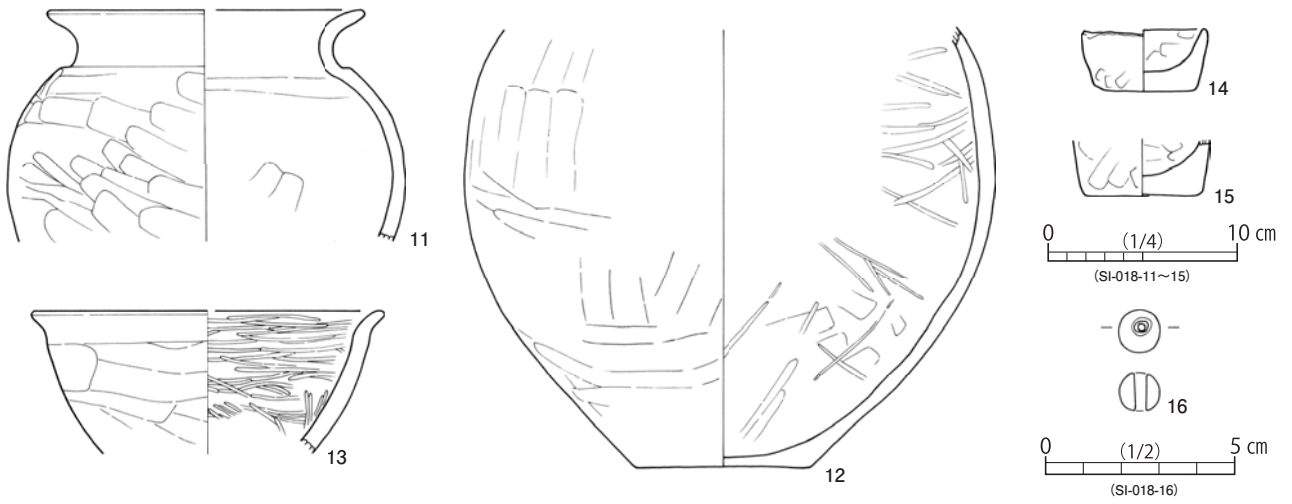
SI-018



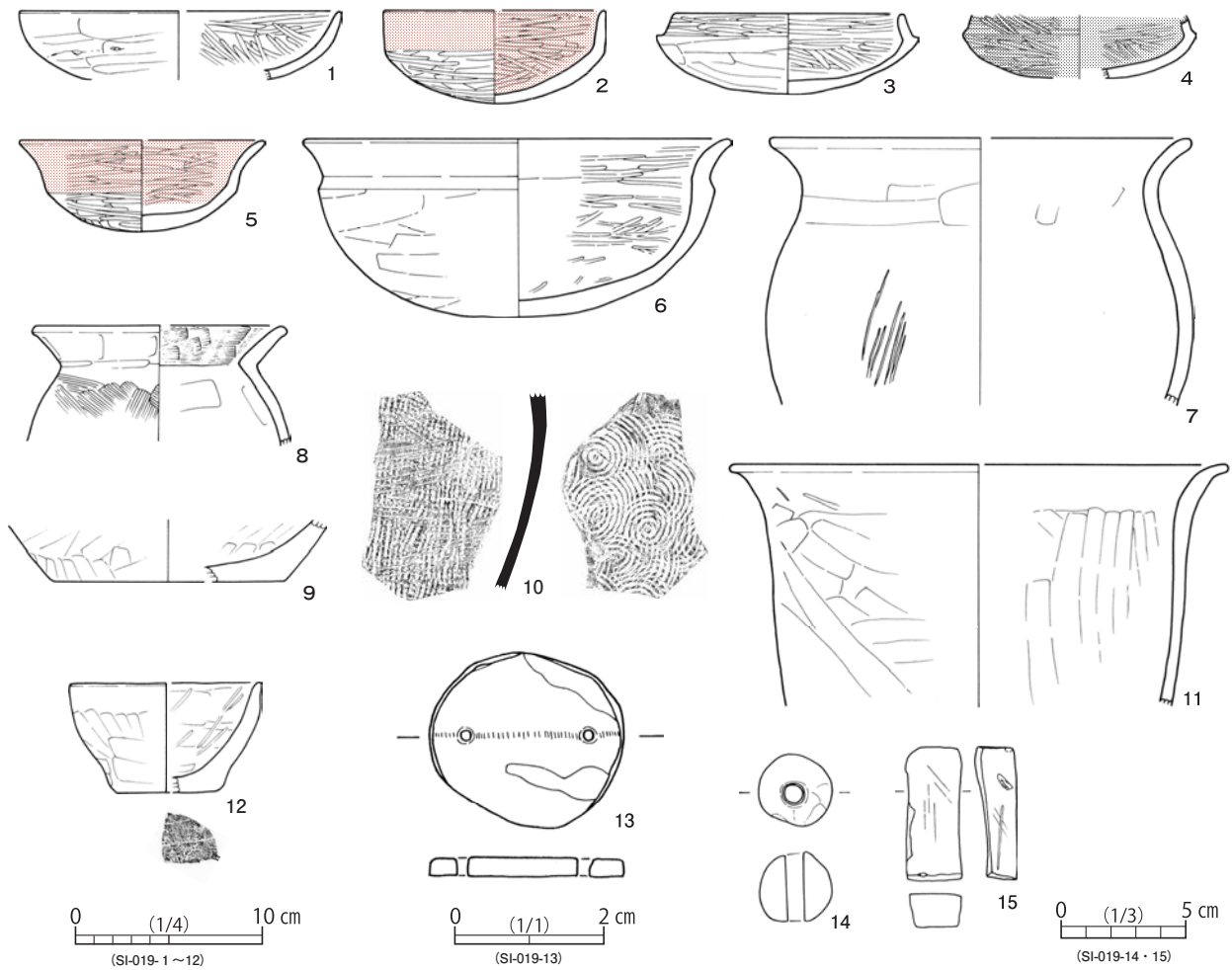
第28図 SI-018・019 (1)



SI-018



SI-019



第29図 SI-018・019(2)

稜を作って大きく外反しながら立ち上がる。内外面ともにヘラ磨き調整が施され、体部外面と底部内外面を除いて赤彩される。6は大形の杯である。口縁部は体部との境に明瞭な稜を作り出し、大きく外反し短く立ち上がる。7～9は土師器甕である。7は口縁部が緩やかに外反する。外面はヘラナデ調整と擦痕が

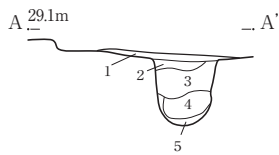
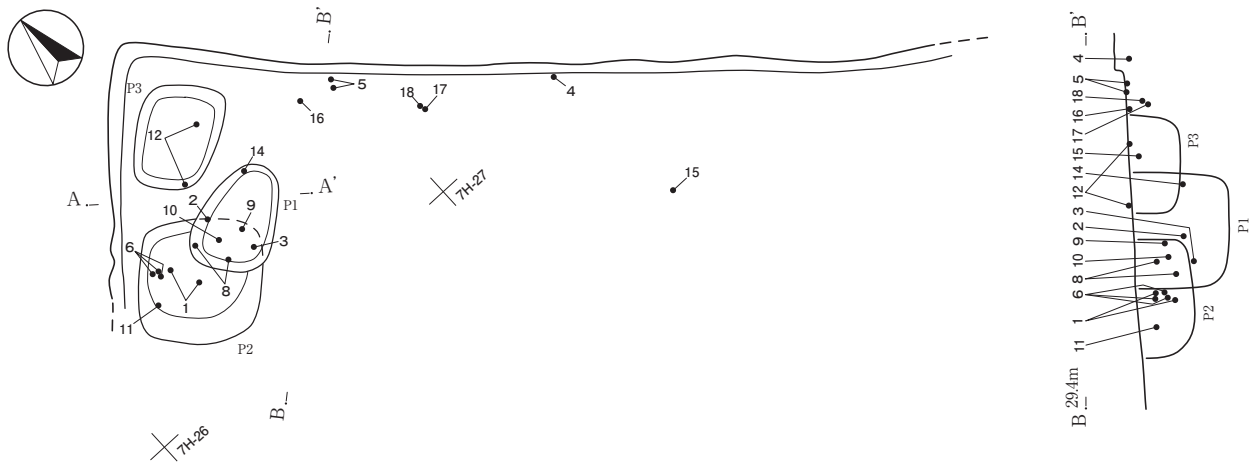
見られる。内面は剥落が激しく調整がほとんど確認できないが、わずかにヘラ状工具痕が確認できる。8は口縁部が「く」の字状に屈曲する甕である。口縁部内面は横方向、胴部外面は斜め方向のハケ調整が施される。9は甕の底部で大形の甕になると推測される。内外面ともに縦方向のヘラ削りの後、ヘラナデ調整が施される。10は須恵器甕の胴部片である。外面は平行タタキ、内面は同心円文の当て具痕が見られる。11は土師器甕である。口縁部は若干外反する。外面は斜め方向のヘラ削り及びヘラナデ調整で、内面は縦方向のヘラナデ調整が施される。12はミニチュア土器である。手捏ね成形で平底である。内面に輪積痕、底部に木葉痕が見られる。13は滑石製の有孔円板で、2か所に穿孔されている。表裏面とも孔と孔の間とその延長線上に、石材の節理面に摩滅痕が確認できる。これは孔に紐などを通して使用した際に生じたものと推測される。14は土玉である。上部から穿孔され、ナデ調整が施される。15は凝灰岩製の砥石である。表裏面と右側面、左側面の一部に擦痕がある。最大長53.0mm・最大幅22.0mm・最大厚13.0mm・重量28.04gである。

出土土器は6が床面近く、8が貯蔵穴内から出土し、いずれも古い要素をもつもので、そのほかのものは床面から高く、SI-018出土土器に類似するもので明らかに新しい要素をもつものである。よって、本遺構の時期は、出土遺物に中期と後期の土器が混在しているが、SI-018との重複関係からも古墳時代中期と推測される。

SI-020(第30・31図、第2・9・10表、図版16・34・35・40)

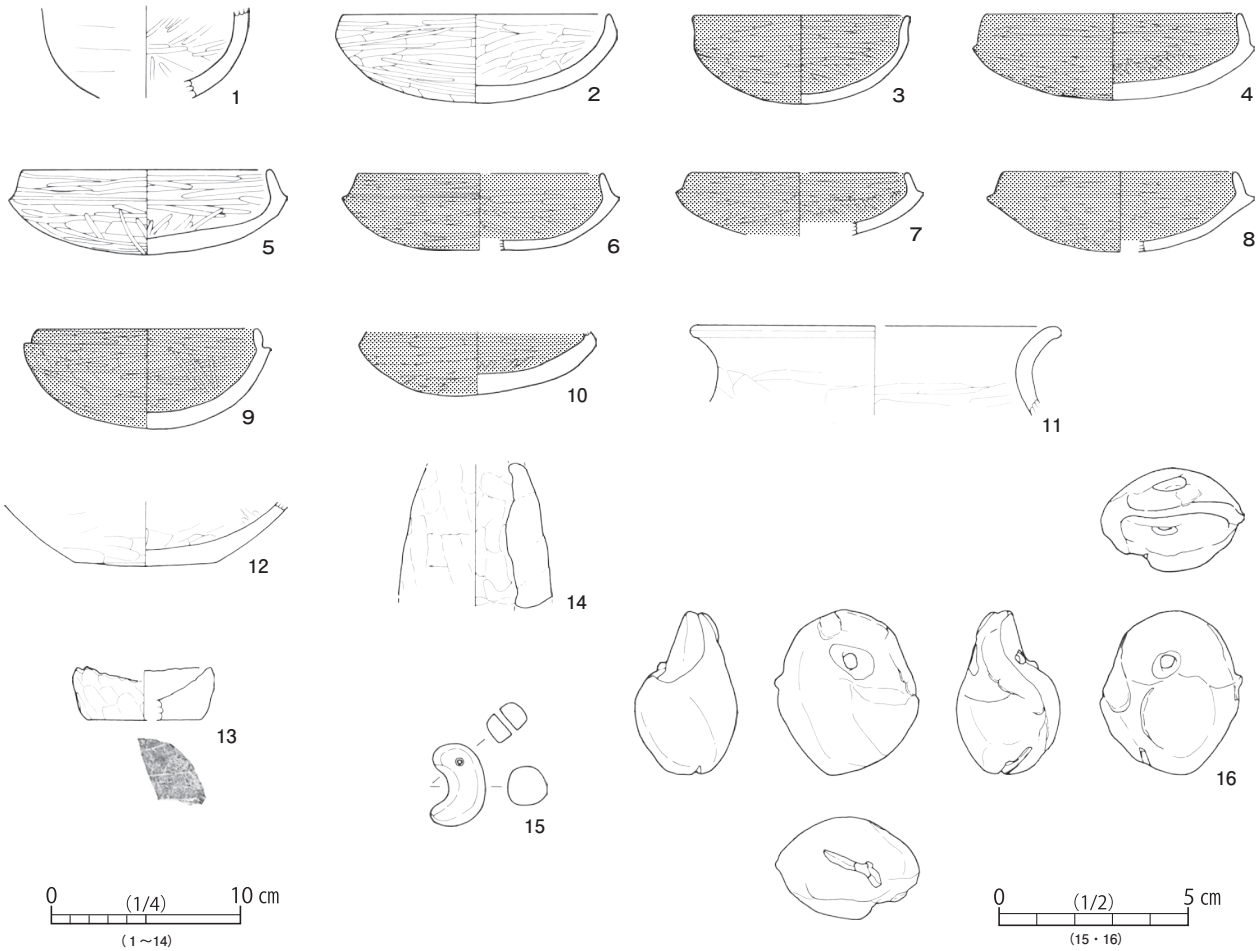
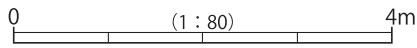
7H-16・17・26～28グリッドに所在する。北隅と北東の壁を検出し、竪穴住居跡と判断した。本遺構の発掘調査時の記録は遺物出土状況図・ピットセクション図・ピットに関する現場写真だけで、第30図に示した平面図・エレベーション図はこれらをもとに推定復元したものである。平面形は方形又は長方形で、主軸方向はN-43°-Eと推測される。規模は推定幅約9mで、確認面からの深さは約0.1mである。ピットは3基検出し、遺物の出土状況や現場写真などから、いずれも貯蔵穴で作り替えが行われたと推測される。推定規模は、P1は長軸長120cm・短軸長86cm・深さ80cm、P2は長軸長130cm・短軸長120cm・深さ60cm、P3は長軸長114cm・短軸長106cm・深さ60cmである。主柱穴やカマドは検出されていない。

遺構の遺存状態は良くないが、遺物は壁際や貯蔵穴内から多く出土し、図示できた遺物は土器12点、ミニチュア土器1点、土製品4点、石器1点である。1は土師器埴の胴部と推測される。胴部外面は被熱し荒れている。内面はヘラ磨き調整が施される。2～10は土師器杯である。2・3は碗形の杯である。2は口縁部がやや内傾し、外面は丁寧なヘラ磨き調整が施される。3は口縁部がわずかに外反気味に立ち上がり、口径に対して器高がやや高い。内外面ともにヘラ磨き調整が施され、黒色処理される。口唇部は摩耗している。4～10は須恵器模倣杯である。いずれも口縁部は内傾する。内外面はヘラ磨き調整が施され、5以外は内外面ともに黒色処理される。4は口縁部外面と体部内面の一部に、胎土を後から追加して貼り付けた痕跡が見られる。その部分は当初のヘラ磨き調整とは方向が異なり、明らかにヘラ磨き調整がやり直されていることから、作成途中に何らかの不具合が生じ(亀裂が生じる等)、それを修復した跡と推測される。9は口径に対して器高が大きい半球形の杯である。口唇部は摩耗している。11・12は土師器甕である。11は口縁部で外反する。胴部内外面は横方向のヘラナデである。12は底部で外面ヘラ削り、内面ヘラナデ調整が施される。13はミニチュア土器で、手捏ね成形である。内面は剥落が著しい。底部は木葉痕が見られる。14は土製支脚である。粘土紐を巻き上げて作られた様子が確認でき、上下の破断面は粘土紐の面である。内外面ともにナデ成形である。15は土製勾玉である。ヘラナデないしヘラ磨き調整が施される。

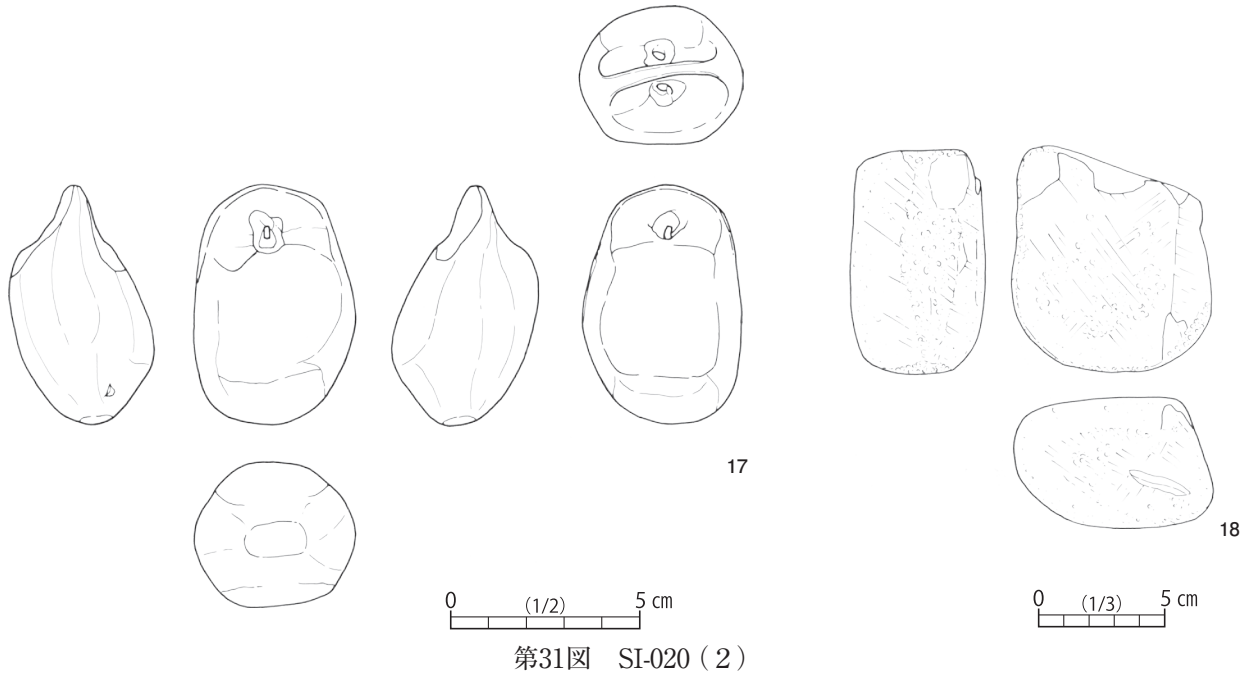


SI-020P1

1. 褐色土：ローム粒主体、ロームブロック(大・小)多量
2. 暗褐色土：ロームブロック(径5~10mm)多量
3. 暗黄褐色土：ローム粒・ロームブロック(径10~30mm)多量
4. 暗黄褐色土：ローム粒・ロームブロック(径10~30mm)やや多量
5. 暗灰褐色土：灰を主体とする層、ロームブロック(径5mm)やや多量



第30図 SI-020 (1)



第31図 SI-020 (2)

16・17は完形の土鈴である。なお、ここでは遺物の形状などを記載し、内部構造や製作方法などの詳細については、第3章まとめて記載する。16は平面形が楕円形で、断面形は吊手が板状である。内部は中空で、小石1個と粘土粒3個が入っているが、内部は空間が狭く、揺らしてもほとんど音が鳴らない。17は平面形が長楕円形で、断面形は体部が楕円形で吊手が板状である。内部は中空で、粘土粒2個が入っており、揺らすと音が鳴る。18は砂岩製の砥石である。表面・上面・右側面及び下面の一部に研磨痕が確認できる。左側面や下面には擦痕が見られる。最大長89.0mm・最大幅78.0mm・最大厚51.5mm・重量522.05gである。

本遺構の時期は、出土遺物から古墳時代後期と推測される。

2 土坑

SI-021 (第32図、第3・9表、図版35)

7G-29・7H-20グリッドに所在する。南側でSX-004と重複し、遺構の大部分はSX-004により削平されているため遺存状況が悪い。発掘調査時は竪穴住居跡としていたが、推定の平面形や規模と台地縁辺部にあることなどが関戸砦跡の3号土坑に類似することから、土坑と判断した。平面形は楕円形で、長軸方向はN-21°-Wと推測される。規模はいずれも推定で長軸長3.6m、短軸長2.8mで、確認面からの深さは約0.1mである。P1は径30cmで、床面からの深さは15cmである。

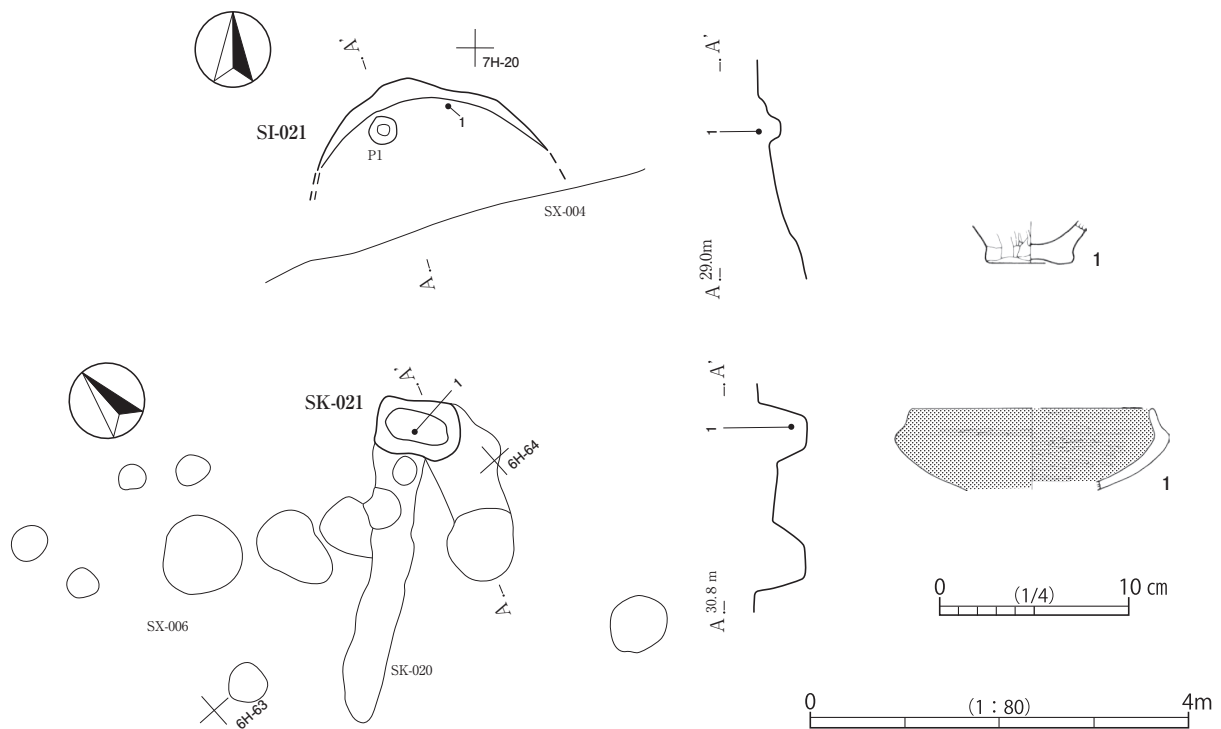
図示できた遺物は1点だけである。1は甕の底部で、中央がやや上げ底となる。

本遺構の時期は、関戸砦跡3号土坑との類似から古墳時代中期と推測される。

SK-021 (第32図、第3・9表、図版16・35)

6H-53グリッドに所在する。SX-006ピット群の中にある。平面形は長方形で、長軸方向はN-36°-Wである。規模は長軸長90cm・短軸長56cmで、確認面からの深さは50cmである。竪穴住居跡に伴う土坑(貯蔵穴)であった可能性があるが、周辺に柱穴などは検出されていない。

図示できた遺物は土器1点である。1は土師器杯で、須恵器模倣杯である。口縁部は内傾し、口縁部内



第32図 SI-021・SK-021

外面及び体内内面は丁寧なヘラ磨き調整が施され、内外面ともに黒色処理される。

本遺構の時期は、出土遺物から古墳時代後期と推測される。

SK-044 (第21図、第3表)

6H-72グリッドに所在する。SI-003a・bに隣接するが、遺物出土状況の記録しかないため、正確な規模等は不明である。平面形は楕円形で、長軸方向はN-6°-Eと推測される。規模は長軸長89cm・短軸長79cmで、深さは不明である。

遺物は土師器破片が30点ほど出土した。図示できたものはないが、内外面が赤彩される深い椀形の杯や、外面がヘラナデされる球形の胴部をもつ甕の破片などが見られる。

本遺構の時期は、破片資料ではあるが出土遺物から古墳時代中期と推測される。

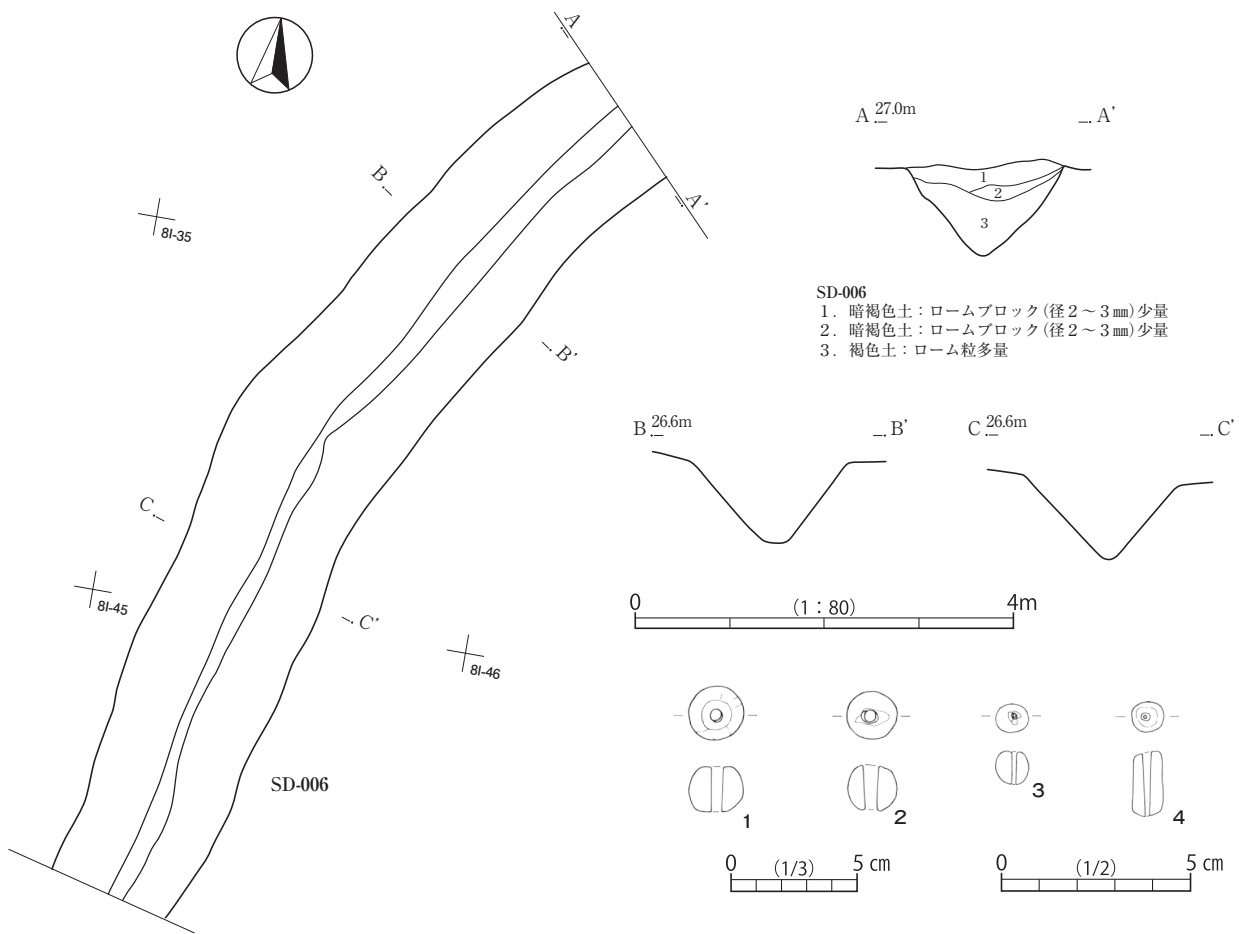
3 溝

SD-006 (第33図、第4・10表、図版15・35)

8I-25・26・35・36・45グリッドに所在する。北東から南西に延びる溝で、危険防止のために表土除去しなかった範囲に続いている。走行方向はN-24°-Eである。調査できた範囲での総延長は9.7mで、幅1.30m～1.75m・深さ0.58m～0.89mである。断面形はV字状である。

図示できた遺物は土玉3点と管玉1点である。図示したものの中には土師器杯や甕の小破片が出土している。1～3は土玉である。全て片側から穿孔される。1は穿孔した両面を削り平坦面を作り出している。4は土製の管玉である。外面はナデ成形で、片側から穿孔される。3・4は1・2に比べて小形であることから、装飾品として使用されたと推測される。

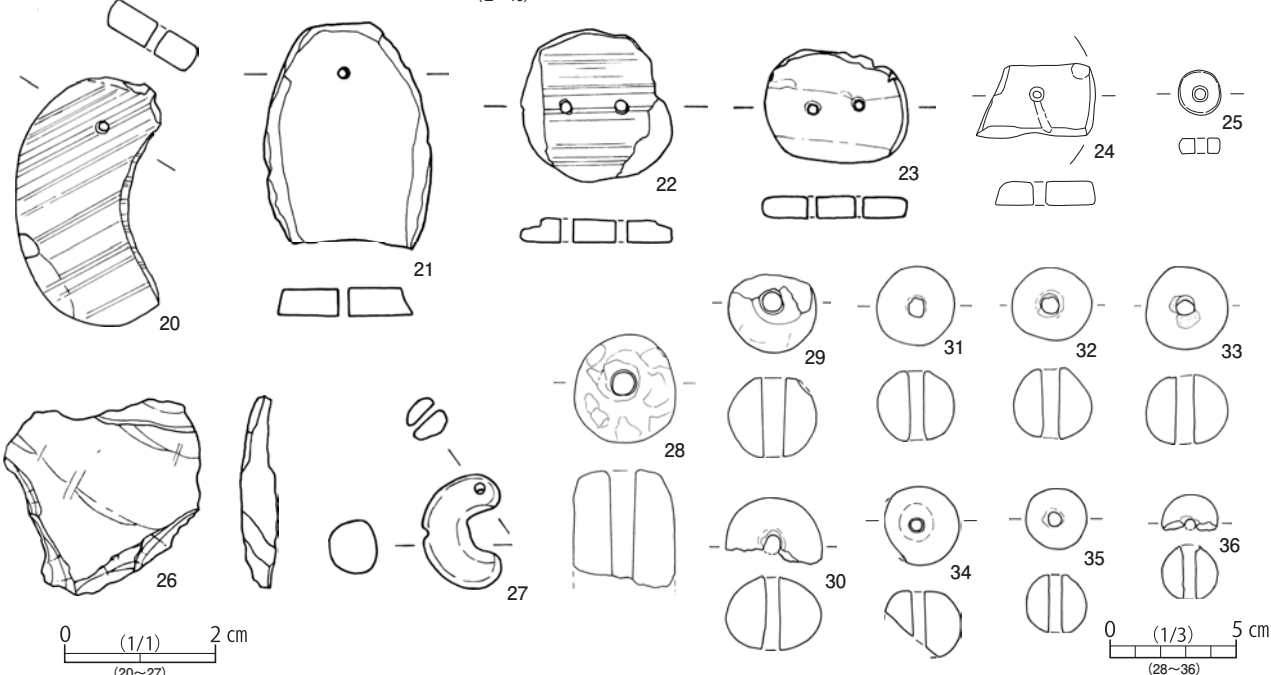
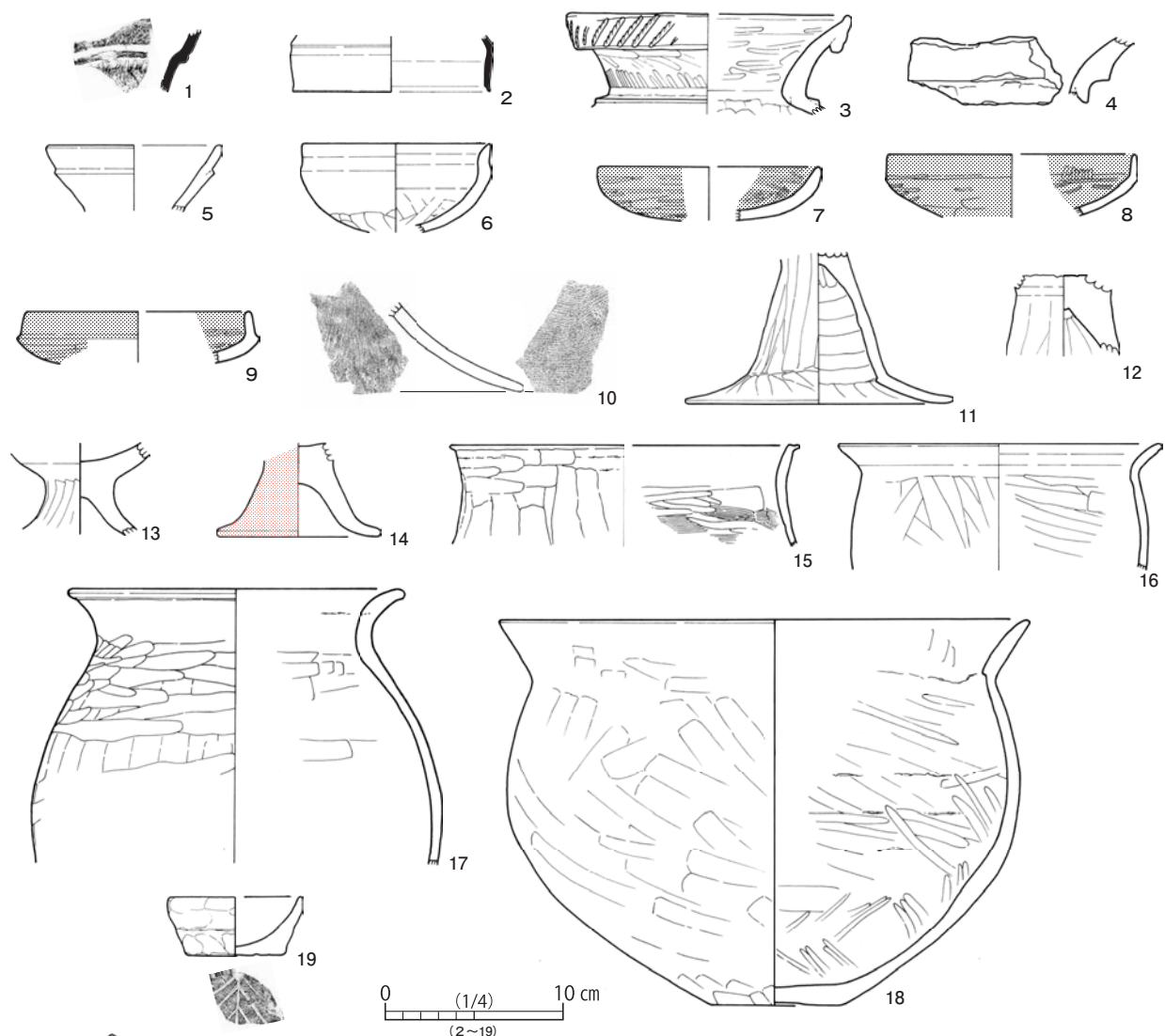
本遺構の時期は、出土遺物から古墳時代後期と推測される。



第33図 SD-006

4 遺構外出土の遺物(第34図、第9~11表、図版35・36)

ここでは、グリッド出土遺物と他の時代の遺構中に混入したと判断された遺物について記載する。1・2は須恵器である。1は壺の口縁部下部~頸部である。口縁部下端に沈線が引かれ、それを挟んだ口縁部と頸部に櫛描き波状文が施される。内外面には自然釉が見られる。2は蓋の口縁部~体部である。口縁部の体部に対する比率が大きく、口唇部はシャープな作りである。1・2ともにTK208型式と見られる。3・4は土師器壺で、いずれも複合口縁である。3は口縁部~頸部で、口縁部外面には櫛歯状工具を押圧した文様が施される。頸部には断面三角形の突帯が付けられる。内外面ともに細かなヘラ磨き調整が施される。いわゆる「パレススタイル壺」を模倣したものと推測される。4は口縁部付近の破片である。口縁部は頸部から大きく外反する。胎土は白色で外来系土器と推測される。5は有段口縁の小形壺である。口縁部はナデ、それ以外はヘラナデ調整が施される。6~9は土師器杯である。6は深い椀形で、口縁部は短く外反して立ち上がる。7は扁平な椀形である。内外面ともにヘラ磨き調整が施され、黒色処理される。8・9は須恵器模倣杯である。8は口縁部が垂直気味に立ち上がり、9はやや内傾する。いずれも内外面ともに丁寧なヘラ磨き調整が施され、黒色処理される。10は土師器器台の裾部破片である。裾部は大きく「ハ」の字状に開く。内面は粗いヘラ磨き、外面はハケ調整が施される。11~14は土師器高杯の脚部である。11は脚柱部が中膨らみした円柱状で、裾部が強く屈曲して開く屈曲脚である。脚柱部内外面はヘラナデ調整



第34図 遺構外出土の遺物

が施される。12は内外面ともにヘラナデ調整が施され、わずかに残る杯部内面は赤彩される。13・14は脚部が短く「ハ」の字状に開くものである。14は裾部が短く強く外反する。外面は赤彩される。15～18は土師器甕である。15は口縁部～胴部上半で、口縁部は頸部の屈曲がほとんどなく直立気味に立ち上がり、口唇部は摘み上げるように強く外反する。内面はハケ成形の後、横方向のヘラナデ調整が施される。胴部外面は縦方向のヘラナデ成形、頸部～口縁部は横方向のヘラナデ調整が施される。器表面は被熱し一部白く変色している。16は口縁部～胴部で、胴部はほとんど張らず、口縁部は「く」の字状に屈曲する。内外面はヘラナデである。17は長胴の甕で、口縁部は外反する。口縁部内面に輪積痕が見られる。内面は横方向のナデ調整が施される。外面は縦方向のヘラ削りの後、横方向のナデ調整が施される。18は器高に対して口径が大きい甕で、口縁部が「く」の字状に屈曲する。内面の口縁部と体部の境に輪積痕が見られる。外面はヘラナデ、内面はヘラナデの後、粗いヘラ磨き調整が施される。19はミニチュア土器で手捏ね成形である。外面は輪積痕、底部は木葉痕が見られる。

20～26は石製品である。20は滑石製の勾玉である。屈曲は緩やかで、厚さは薄く断面形は扁平である。表裏面・側面は研磨痕が筋状に残る。21は滑石製の剣形模造品である。剣先部分が欠損する。表裏面・側面は平滑であるが、角は大部分が欠損している。22～24は滑石製の有孔円板である。22・23は2か所に穿孔される。22は左右の側面が欠損する。表裏面に研磨痕が筋状に残り、側面の成形もやや粗い。23は上下の側面が欠損する。表裏面は比較的平滑で、側面も22と比べると平滑である。24は右側の側面と孔が1つだけ遺存し、大部分が欠損する。表裏面・側面は平滑である。25は滑石製の白玉である。正面形はほぼ正円で、断面は扁平である。中央に穿孔が施される。表裏面・側面は平滑である。26は滑石の剥片である。成形痕が見られないことから、未成品と推測される。

27～36は土製品である。27は勾玉である。表面から孔が穿たれる。屈曲部にしわが寄り外側に亀裂が見られることから、紐状の粘土を折り曲げて成形したと推測される。28は円筒形の管状土錘である。粗いナデが施される。29～36は土玉で29・30はやや大形、31～34は中形、35・36は小形である。29は片側から穿孔した後、孔の両端を調整する。30は上下から穿孔したと推測される。31～33・35・36は上部から穿孔される。35は穿孔した後、孔の両端を調整する。34は摩滅が著しく調整等は不明である。

第9表 古墳時代土器観察表

()推定値 < >現存値

遺構	挿図番号	種類	器種	法量(cm)	遺存度	胎土	色調・焼成	技法	備考
SI.001	第20図-1	土師器	杯	口径(13.4) 底径- 器高<4.7>	30%	石英粒・白色砂粒	内面 褐色(7.5YR4/3) 外面 にぶい赤褐色(5YR4/4) 焼成 良好	内面 ナデヘラ磨き 外面 ナデヘラ磨き 底外面 ヘラ磨き	内外面黒色処理
	第20図-2	土師器	杯	口径14.9 底径- 器高5.1	40%	白色砂粒	内面 にぶい褐色(7.5YR5/3) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデヘラ磨き 外面 ナデヘラ磨き 底外面 ヘラナデ	内外面黒色処理
	第20図-3	土師器	杯	口径(16.0) 底径- 器高5.0	70%	石英粒・白色砂粒	内面 にぶい黄褐色(10YR5/3) 外面 暗褐色(10YR3/3) 焼成 良好	内面 ナデヘラ磨き 外面 ナデヘラ磨き 底外面 ヘラ磨き	内外面黒色処理
	第20図-4	土師器	杯	口径(18.9) 底径- 器高7.7	55%	石英粒・白色砂粒	内面 黒色(7.5YR2/1) 外面 にぶい褐色(7.5YR5/4) 焼成 良好	内面 ナデヘラ磨き 外面 ナデヘラ磨き 底外面 ヘラ磨き	内外面黒色処理
	第20図-5	土師器	杯	口径(12.4) 底径- 器高4.0	60%	雲母粒・小礫	内面 褐色(7.5YR4/4) 外面 にぶい褐色(7.5YR5/4) 焼成 良好	内面 ナデヘラ磨き 外面 ナデヘラ磨き 底外面 ヘラ磨き	内外面黒色処理
	第20図-6	土師器	杯	口径12.7 底径- 器高4.0	90%	雲母粒・砂粒	内面 黒褐色(7.5YR3/1) 外面 にぶい褐色(7.5YR5/4) 焼成 良好	内面 ナデヘラ磨き 外面 ナデヘラ磨き 底外面 ヘラ磨き	内外面黒色処理
	第20図-7	土師器	杯	口径(12.3) 底径- 器高<3.7>	15%	石英粒・白色砂粒	内面 にぶい黄褐色(10YR5/3) 外面 褐灰色(10YR4/1) 焼成 良好	内面 ナデヘラ磨き 外面 ナデヘラ削り 底外面 -	内外面黒色処理
	第20図-8	土師器	杯	口径(12.6) 底径- 器高<3.6>	35%	赤色粒子・白色砂粒	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデヘラ削り 外面 ナデヘラ削り 底外面 -	
	第20図-9	土師器	甕	口径(22.6) 底径- 器高<7.2>		黒色小石・白色砂粒	内面 橙色(5YR6/6) 外面 にぶい橙色(5YR6/4) 焼成 良好	内面 ナデヘラナデ 外面 ナデヘラ削り 底外面 -	
	第20図-10	土師器	甕	口径(15.0) 底径- 器高<7.9>		石英粒・小石	内面 明赤褐色(5YR5/6) 外面 明赤褐色(5YR3/6) 焼成 良好	内面 荒れている 外面 荒れている 底外面 -	
	第20図-11	土師器	甕	口径10.6 底径- 器高<3.1>		白色砂粒・黒色砂粒	内面 橙色(5YR6/6) 外面 赤褐色(5YR4/8) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ヘラ磨き 底外面 -	

遺構	挿入番号	種類	器種	法量(cm)	遺存度	胎土	色調・焼成	技法	備考
遺構外	第34図-7	土師器	杯	口径(12.4) 底径- 器高<3.0>	20%	白色砂粒・石英粒	内面 黒褐色(7.5YR3/1) 外面 褐色(7.5YR4/3) 焼成 良好	内面 ヘラナデヘラ磨き 外面 ヘラ削りヘラ磨き 底外面 -	内外面黒色処理 SX-005-1
	第34図-8	土師器	杯	口径(14.0) 底径- 器高<3.5>	口縁部- 体部	白色砂粒	内面 におい赤褐色(5YR5/4) 外面 におい橙色(7.5YR6/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデヘラ磨き 外面 ヘラナデヘラ磨き 底外面 -	内外面黒色処理 SI-016-4
	第34図-9	土師器	杯	口径(12.6) 底径- 器高<2.8>	口縁部- 体部	雲母	内面 におい赤褐色(5YR4/3) 外面 におい褐色(7.5YR5/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデヘラ磨き 外面 ヘラ削りヘラナデ 底外面 -	内外面黒色処理 SI-016-21
	第34図-10	土師器	器台	口径- 底径- 器高<5.0>	脚部10%	微細砂粒	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 -	内面 ヘラナデ 外面 ハケ 底外面 -	SI-019-1
	第34図-11	土師器	高杯	口径(15.0) 底径- 器高<8.4>	脚部	石英粒・白色砂粒・ 砂粒	内面 明赤褐色(5YR5/6) 外面 明赤褐色(5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデヘラナデ 外面 ヘラナデナデ 底外面 -	SK-014-5
	第34図-12	土師器	高杯	口径- 底径- 器高<4.5>	脚部	雲母粒・白色砂粒・ 砂粒	内面 におい橙色(5YR7/4) 外面 におい褐色(5YR7/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 -	杯部内面赤彩 SK-018-1
	第34図-13	土師器	高杯	口径- 底径- 器高<5.2>	杯部-脚 部	白色砂粒・砂粒	内面 黒褐色(5YR3/1) 外面 明赤褐色(2.5YR5/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデナデ 外面 ヘラナデ 底外面 -	6G-46-1
	第34図-14	土師器	高杯	口径(9.1) 底径- 器高<5.2>	脚部50%	石英粒・雲母粒・ 砂粒	内面 におい黄褐色(10YR5/3) 外面 明黄褐色(5YR5/3) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 -	外面赤彩 SK-050-1
	第34図-15	土師器	甕	口径(19.6) 底径- 器高<5.6>	口縁部- 胴部上位	白色砂粒・雲母	内面 におい黄褐色(10YR7/3) 外面 におい褐色(7.5YR6/4) 焼成 良好	内面 ハケヘラナデ 外面 ヘラ削りヘラナデ 底外面 -	SI-012.3, SK-056-2
	第34図-16	土師器	甕	口径(18.2) 底径- 器高<7.1>	口縁部- 胴部上半	石英粒・雲母粒・ 白色砂粒	内面 褐色(7.5YR4/1) 外面 におい褐色(7.5YR6/3) 焼成 良好	内面 ナデヘラナデ 外面 ナデヘラ削り 底外面 -	SK-014-1
	第34図-17	土師器	甕	口径18.9 底径- 器高<15.3>	口縁部- 胴部中位	石英粒・雲母	内面 におい褐色(7.5YR6/4) 外面 褐色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラ削りヘラナデ 底外面 -	SX-005-4
	第34図-18	土師器	甕	口径(29.8) 底径7.3 器高21.7	60%	石英粒	内面 におい褐色(7.5YR7/4) 外面 褐色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデヘラ磨き 外面 ヘラ削りヘラナデ 底外面 ヘラナデ	SK-054-4・7・8・10~16
	第34図-19	土師器	ミニ チュア	口径(7.6) 底径(5.6) 器高3.3	30%	雲母	内面 褐色(7.5YR6/6) 外面 におい褐色(7.5YR6/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 木葉痕	7H-20-1

第10表 古墳時代土製品観察表

< >現存値

遺構番号	挿入番号	遺物番号	種類	法量: mm g					色調	備考
				最大長	最大幅	最大厚	孔径	重量		
SI-001	第20図-13	22,23,25	支脚	<128.0>	-	-	-	-	におい褐色(7.5YR5/3)	
SI-003a・b	第22図-10	SH-001-1	土玉	26.0	32.0	-	7.0	24.53	橙色(7.5YR7/6)	
	第22図-11	B-1	土玉	<25.0>	<27.0>	-	-	<9.48>	黒色(7.5YR7/1)	
	第22図-12	A-1	土玉	<19.0>	<21.0>	-	-	<4.2>	におい褐色(7.5YR6/4)	
SI-006	第24図-2	1	紡錘車	<40.0>	<26.0>	14.0	-	<16.28>	におい褐色(7.5YR6/4)	
	第24図-3	SI-009-17	管玉	17.0	11.0	-	3.0	2.33	褐色(7.5YR6/6)	
	第24図-4	SI-009-1	土玉	26.0	32.0	-	7.0	24.53	褐色(7.5YR7/6)	
	第24図-5	SI-009-2	土玉	26.0	25.0	-	6.0	16.08	黄灰色(2.5YR4/1)	
	第24図-6	3	土玉	29.0	29.0	-	6.0	22.51	におい黄褐色(10YR6/4)	
第24図-7	SI-009-5	土玉	<31.0>	<33.0>	-	<9.0>	<14.79>	におい黄褐色(10YR7/4)		
SI-013	第26図-3	6	支脚	<150.0>	-	-	-	-	におい褐色(7.5YR5/4)	
SI-014	第26図-4	5	小形土製品	<30.0>	22.0	12.0	-	<10.31>	におい黄褐色(10YR6/4)	
SI-018	第29図-16	3	土玉	10.0	11.0	-	2.0	1.19	黒褐色(10YR3/1)	黒色処理
SI-019	第29図-14	48	土玉	28.0	29.0	-	7.0	19.81	褐色(7.5YR6/6)	
SI-020	第30図-14	52	支脚	75.0	-	-	-	-	褐色(7.5YR4/4)	
	第30図-15	39	勾玉	21.2	14.3	10.0	1.3	2.40	におい黄褐色(10YR7/3)	
	第30図-16	31	土鈴	43.5	37.0	27.0	3.5~4.5	25.94	におい黄褐色(10YR6/4)	
	第31図-17	53	土鈴	63.0	43.0	39.0	2.0~4.5	62.75	におい褐色(7.5YR6/4)	
SD-006	第33図-1	1	土玉	18.0	21.0	-	4.0	8.00	褐色(7.5YR6/6)	
	第33図-2	1	土玉	18.0	19.0	-	4.5	5.50	明黄褐色(10YR7/6)	
	第33図-3	1	土玉	9.0	8.5	-	1.0	0.57	褐色(7.5YR6/6)	
	第33図-4	1	管玉	17.0	8.0	-	1.3	1.27	におい黄褐色(10YR5/3)	
遺構外	第34図-27	7H-26-4	勾玉	15.0	10.0	-	1.3	0.77	明黄褐色(10YR6/6)	
	第34図-28	SI-016-5	管状土錘	<46.5>	41.0	-	8.5	<88.41>	褐色(7.5YR7/6)	
	第34図-29	SX-004-11	土玉	34.0	31.5	-	7.5	<30.74>	明黄褐色(10YR6/6)	
	第34図-30	SK-016-1	土玉	29.0	38.0	-	<6.0>	<22.5>	におい黄褐色(10YR5/3)	
	第34図-31	6G-51-1	土玉	28.0	30.0	-	6.0	25.00	におい褐色(7.5YR7/4)	
	第34図-32	6G-89-1	土玉	27.0	32.0	-	8.0	23.30	におい黄褐色(10YR7/4)	
	第34図-33	6H-53-1	土玉	27.0	32.0	-	8.0	26.53	褐色(5YR7/6)	
	第34図-34	SK-051-1	土玉	<26.0>	<29.0>	-	5.0	<16.98>	におい黄色(2.5YR6/3)	
	第34図-35	6H-99-1	土玉	23.0	24.0	-	5.0	13.00	におい赤褐色(5YR5/4)	
第34図-36	SK-018-1	土玉	21.0	21.5	-	<5.0>	<6.18>	赤褐色(2.5YR4/6)		

第11表 古墳時代石製品観察表

< >現存値

遺構番号	挿図番号	遺物番号	種類	石材	法量：mm g					備考
					最大長	最大幅	最大厚	孔径	重量	
SI-004	第20図- 1	3	有孔円板	滑石(片岩)	21.0	20.0	3.3	1.5	2.48	
	第20図- 2	2	藁玉	珪化木	19.0	11.5	-	2.0~3.5	1.49	
SI-014	第26図- 5	4	有孔円板	滑石	-	26.0	2.0	1.5	2.86	
SI-019	第29図-13	39	有孔円板	滑石	-	26.0	2.5	1.5	3.09	
遺構外	第34図-20	SK-022-1	勾玉	滑石	33.0	19.0	4.0	1.5	5.09	
	第34図-21	7H-26-1	剣形品	滑石	<30.0>	22.0	3.5	1.5	4.41	
	第34図-22	SK-018-1	有孔円板	滑石	20.0	20.0	3.0	1.5	2.07	
	第34図-23	6G-97-1	有孔円板	滑石	15.0	19.0	3.0	1.0	2.00	
	第34図-24	SX-004-1	有孔円板	滑石	<9.7>	<16.0>	3.0	1.5	<0.91>	
	第34図-25	SX-004-5	白玉	滑石	-	5.5	2.0	2.0	0.13	
	第34図-26	SK-019-1	剥片	滑石(片岩)	26.5	26.0	5.0	-	4.47	

第6節 奈良・平安時代の遺構と遺物

奈良・平安時代の遺構は竪穴住居跡2軒と土坑11基を検出した。2軒の竪穴住居跡は発掘調査時に柱穴だけが検出されたことから、1間×1間の掘立柱建物跡と判断し「SB」の記号を付けて調査したものであるが、検出された柱穴の規模や本遺跡ではこれら以外に掘立柱建物跡が検出されていないことなどから、竪穴住居跡の主柱穴と判断した。竪穴住居跡は主軸方向をほぼ同じにして近接している。土坑は分布に偏りがなく調査区全体に散在している。削平を受け遺存状態が良好ではない遺構が多いが、杯類を中心に多くの遺物が出土した。

1 竪穴住居跡

SB-001(第35図、第2・12表、図版16・36)

6G-87・88・97・98グリッドに所在する。北側でSI-002と、東側でSI-006と重複し、本遺構の方が新しい。カマドや床面などは検出できなかった。ピット間の芯々距離はP1とP2が2.1m、P2とP3が2.8mである。P1とP2を結んだ方向を主軸方向とするとN-28°-Wである。ピットの規模は、P1は径79cm・深さ22cm、P2は径11cm・深さ29cm、P3は径89cm・深さ31cm、P4は径93cm・深さ19cmである。

遺物は土師器小破片が主体で、図示できたものは土師器甕1点だけである。1は平底の底部である。胴部外面は筋状のヘラ磨きが施され、常総型の甕と推測される。内面と底部外面はヘラナデ調整が施される。

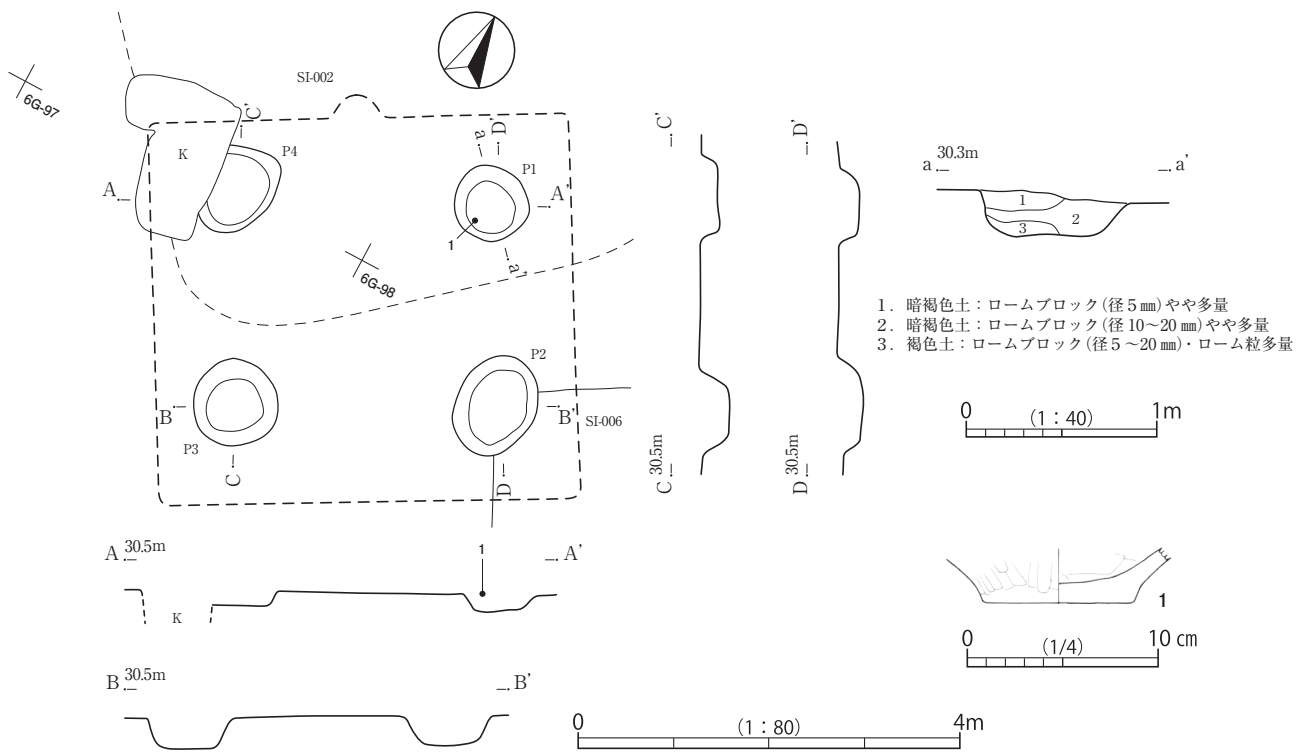
本遺構の時期は、出土遺物から奈良・平安時代と推測される。

SB-002(第36図、第2表)

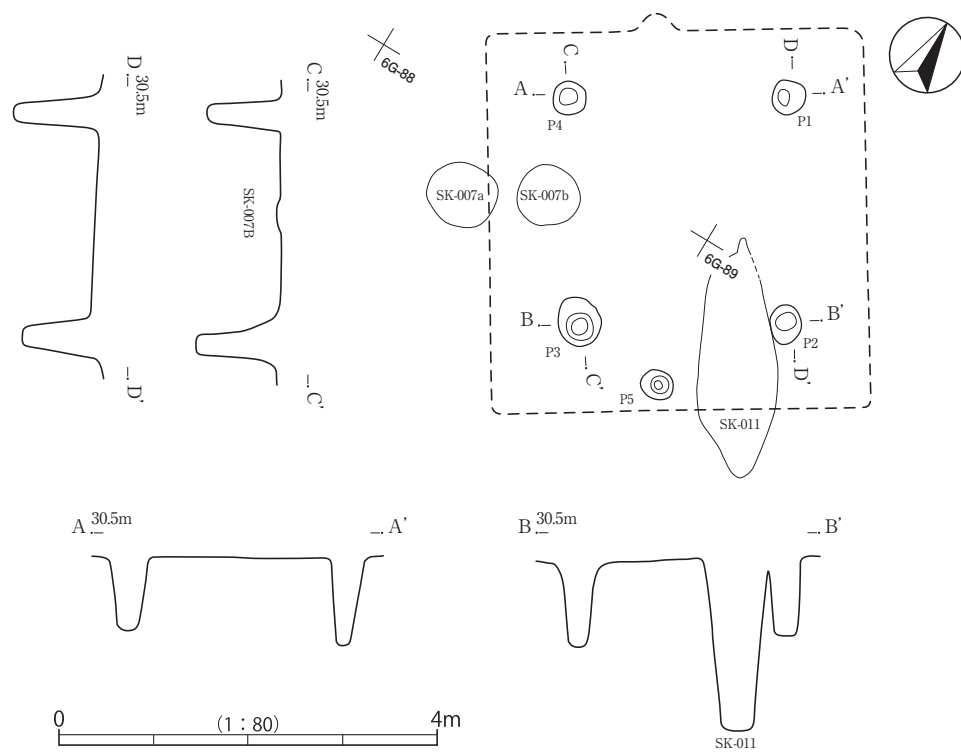
6G-78・79・88・89グリッドに所在する。カマドや床面などは検出できなかった。ピットは5基検出し、P1~P4は主柱穴である。ピット間の芯々距離はP1とP2が2.39m、P2とP3が2.19mである。P1とP2を結んだ方向を主軸方向とするとN-33°-Wである。ピットの規模は、P1は径34cm・深さ70cm、P2は径37cm・深さ90cm、P3は径41cm・深さ81cm、P4は径53cm・深さ85cmである。P5は径37cm・深さ37cmで、位置関係から出入口ピットと推測される。

遺物は出土していない。

本遺構の時期は、SB-001と主軸方向が類似することから奈良・平安時代と推測される。



第35図 SB-001



第36図 SB-002

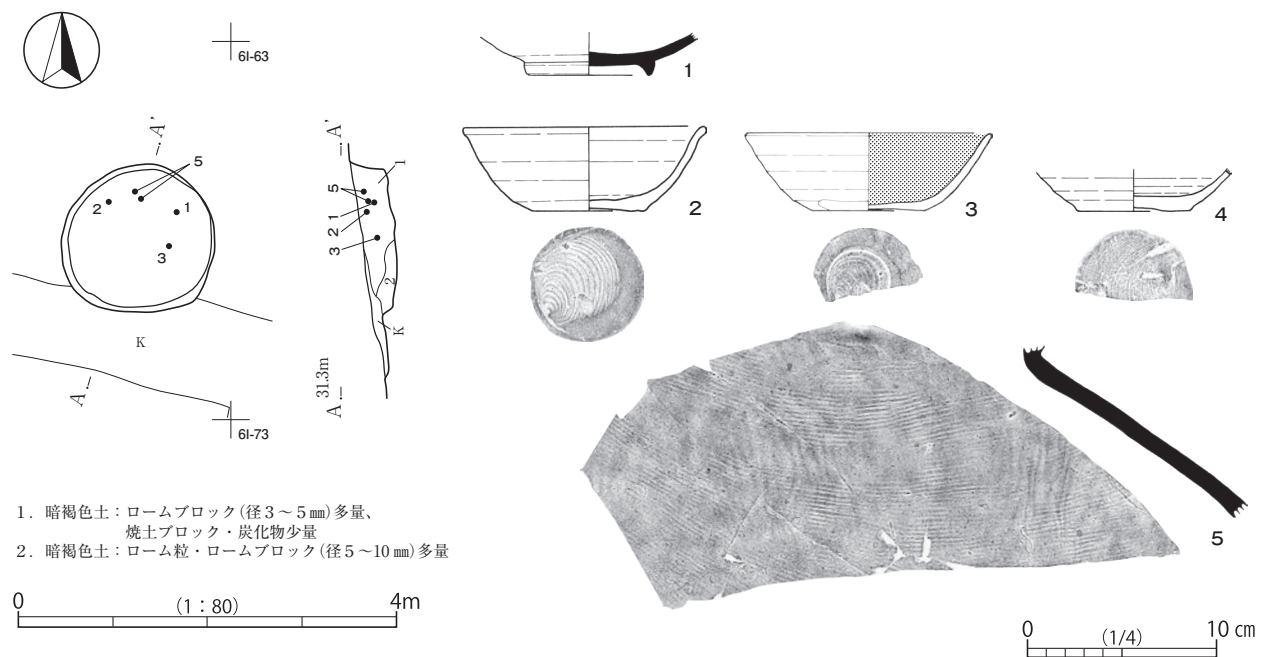
2 土坑

SK-004 (第37図、第3・12表、図版16・36)

6I-62グリッドに所在する。南側の上端は溝状の攪乱により削平されている。平面形はほぼ正円形である。規模は径1.68mで、確認面からの深さは0.36mである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は比較的平坦である。

遺物は多数出土しているが、いずれも遺存状態は悪い。図示できたものは灰釉陶器1点、土師器3点、須恵器1点である。1は灰釉陶器碗の底部破片である。底部は回転糸切り離しの後、ナデ調整が施され、三日月高台が付く。体部内外面に浸け掛けされた灰釉が見られる。猿投窯編年による折戸53号窯式期のものと推測される。2～4はロクロ土師器杯である。2は底部回転糸切り離しの後、周縁部に手持ちヘラ削り調整が施される。3は底部回転糸切り離しの後、体部下端部と底部周縁部に手持ちヘラ削り調整が施され、内面は黒色処理される。4は底部回転糸切り離し、無調整である。5は須恵器大甕の頸部～胴部上半の破片である。頸部外面はナデ、胴部外面は横方向の平行タタキの後、ナデ調整が施され、タタキ痕を消している。胴部内面はナデ調整が施される。

本遺構の時期は、出土遺物1～3の特徴から10世紀前葉と推測される。



1. 暗褐色土：ロームブロック(径3～5mm)多量、
焼土ブロック・炭化物少量
2. 暗褐色土：ローム粒・ロームブロック(径5～10mm)多量

第37図 SK-004

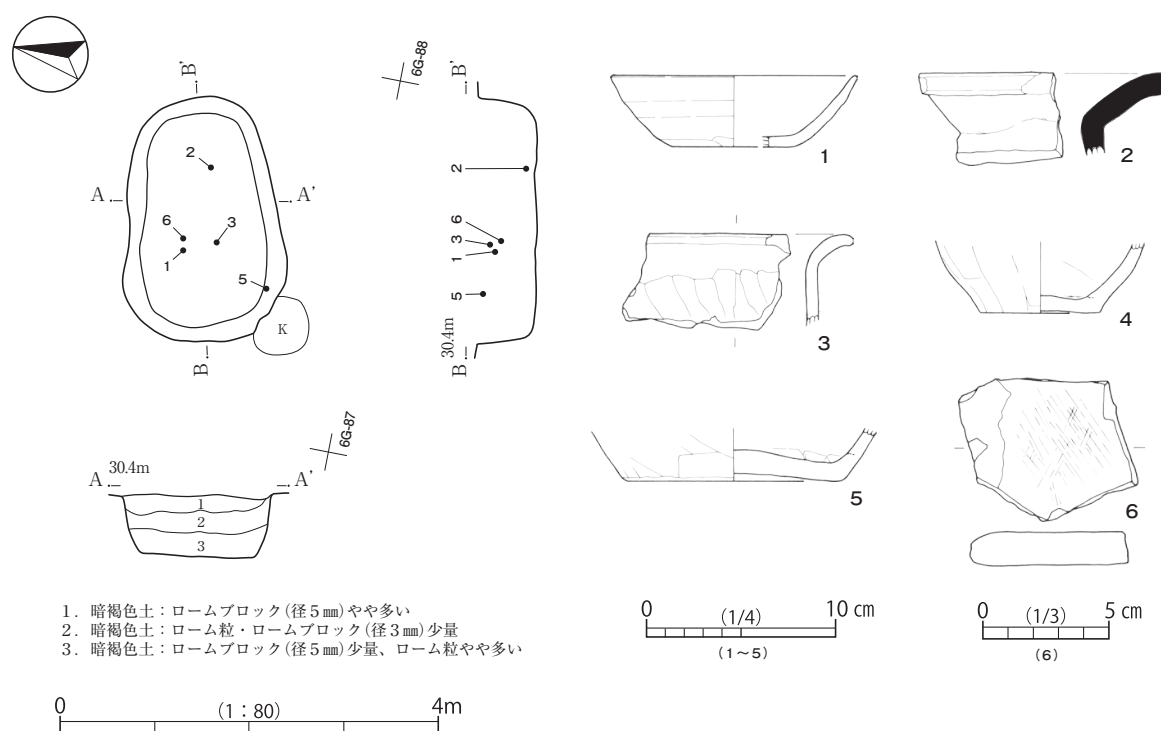
SK-005 (第38図、第3・12表、図版17・36)

6G-77グリッドに所在する。南西の一部は攪乱を受けている。平面形は隅丸長方形であるが、西側がやや幅広である。長軸方向はN-77°-Eである。規模は長軸長2.60m・短軸長1.60mで、確認面からの深さは0.64mである。底面はほぼ平坦である。埋土はレンズ状に堆積し自然堆積と推測される。

出土遺物は破片資料がほとんどで、底面より高い位置から出土したものが多。図示できた遺物は土師器4点、土師質須恵器1点、砥石1点である。1はロクロ土師器杯である。底部回転糸切り離しの後、周縁部と体部下端部に手持ちヘラ削り調整を施す。2は土師質須恵器甕の口縁部～頸部である。口縁部はか

まほこ状に膨らむ複合口縁で、頸部で「く」の字状に強く屈曲する。器厚は全体的として厚みがある。内外面ともにナデ調整が施される。頸部の長さが異なるが、SK-085の5の土師質須恵器甕に類似する。3～5は土師器甕である。3は口縁部～胴部上半で、口縁部が大きく外反する長胴の甕になると推測される。胴部外面はヘラ削り、そのほかはナデ調整が施される。4は小形甕の底部である。胴部外面はヘラ削り、内面はヘラナデ調整が施される。底部に何らかの圧痕が見られるが、詳細は不明である。5は底径が大きく、わずかに上げ底になる。胴部外面と底部はヘラ削り、内面はナデである。6は凝灰岩製の砥石である。表面が使用され、裏面は剥離面である。最大長56.0mm・最大幅72.0mm・最大厚13.0mm・重量72.00gである。

本遺構の時期は、出土遺物1の特徴から9世紀後葉と推測される。



1. 暗褐色土：ロームブロック(径5mm)やや多い
2. 暗褐色土：ローム粒・ロームブロック(径3mm)少量
3. 暗褐色土：ロームブロック(径5mm)少量、ローム粒やや多い

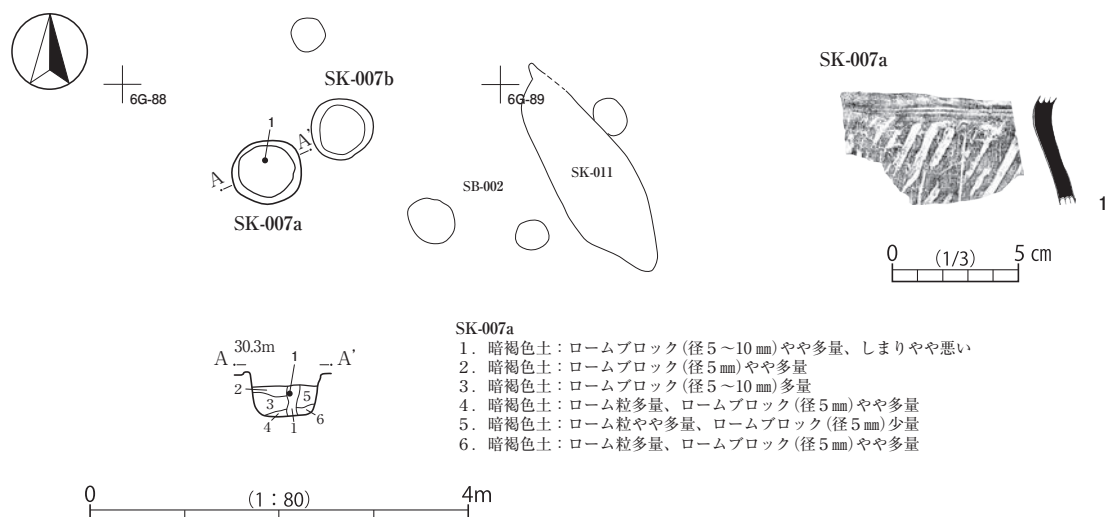
第38図 SK-005

SK-007 a・b (第39図、第3・12表、図版36)

6G-88グリッドに所在する。近接する2つの土坑で南西側のものをa、北東側のものをbとした。aは平面形が正円に近い楕円形で、長軸方向はN-88°-Eである。規模は長軸長75cm・短軸長65cmで、確認面からの深さは48cmである。bは平面形がほぼ正円形である。規模は径77cmで、確認面からの深さは11cmである。bはaに比べて浅く、性格の異なる遺構である可能性もある。埋土はaのみ記録があり、全体にローム粒子・ロームブロックを多く含む層が堆積している。

遺物はaからのみ出土し、図示できたものは1点である。1は土師質須恵器甕の頸部下部～体部の破片である。外面は平行タタキ、内面はヘラナデが施される。そのほかに土師器小破片が出土している。

本遺構の時期は、出土遺物から奈良・平安時代と推測される。



SK-007a

1. 暗褐色土：ロームブロック(径5~10mm)やや多量、しまりやや悪い
2. 暗褐色土：ロームブロック(径5mm)やや多量
3. 暗褐色土：ロームブロック(径5~10mm)多量
4. 暗褐色土：ローム粒多量、ロームブロック(径5mm)やや多量
5. 暗褐色土：ローム粒やや多量、ロームブロック(径5mm)少量
6. 暗褐色土：ローム粒多量、ロームブロック(径5mm)やや多量

第39図 SK-007a・b

SK-008 (第40図、第3・12表、図版17・37・39)

6H-26グリッドに所在する。南約10cmにSK-009が近接する。SK-009との関係は、出土遺物に接合関係が見られることと両遺構ともに遺物が底面から浮いた状態で出土していることから、遺物の同時一括廃棄と遺構の同時埋没が想定される。平面形はほぼ正円形で、底面は東側に偏る。規模は径1.12mで、確認面からの深さは0.40mである。

遺物は多数出土しているが、遺存状態が良好な個体は少ない。図示できた遺物は土器5点である。1~5はロクロ土師器杯である。1は底部回転糸切り離し、無調整である。体部外面に横位で「賣井」と墨書される。2は底部回転糸切り離しの後、体部下端部に手持ちヘラ削り調整を施す。体部外面に線状のロクロ目が強く残る。3は底部に手持ちヘラ削り調整が施される。4は底部回転糸切り離しの後、無調整である。5は底部回転糸切り離しの後、体部下端部に手持ちヘラ削り調整を施す。2・4は遺構内一括で取り上げた遺物であるが、SK-009の一括資料と接合している。

本遺構の時期は、出土遺物1~3の特徴から10世紀前葉と推測される。

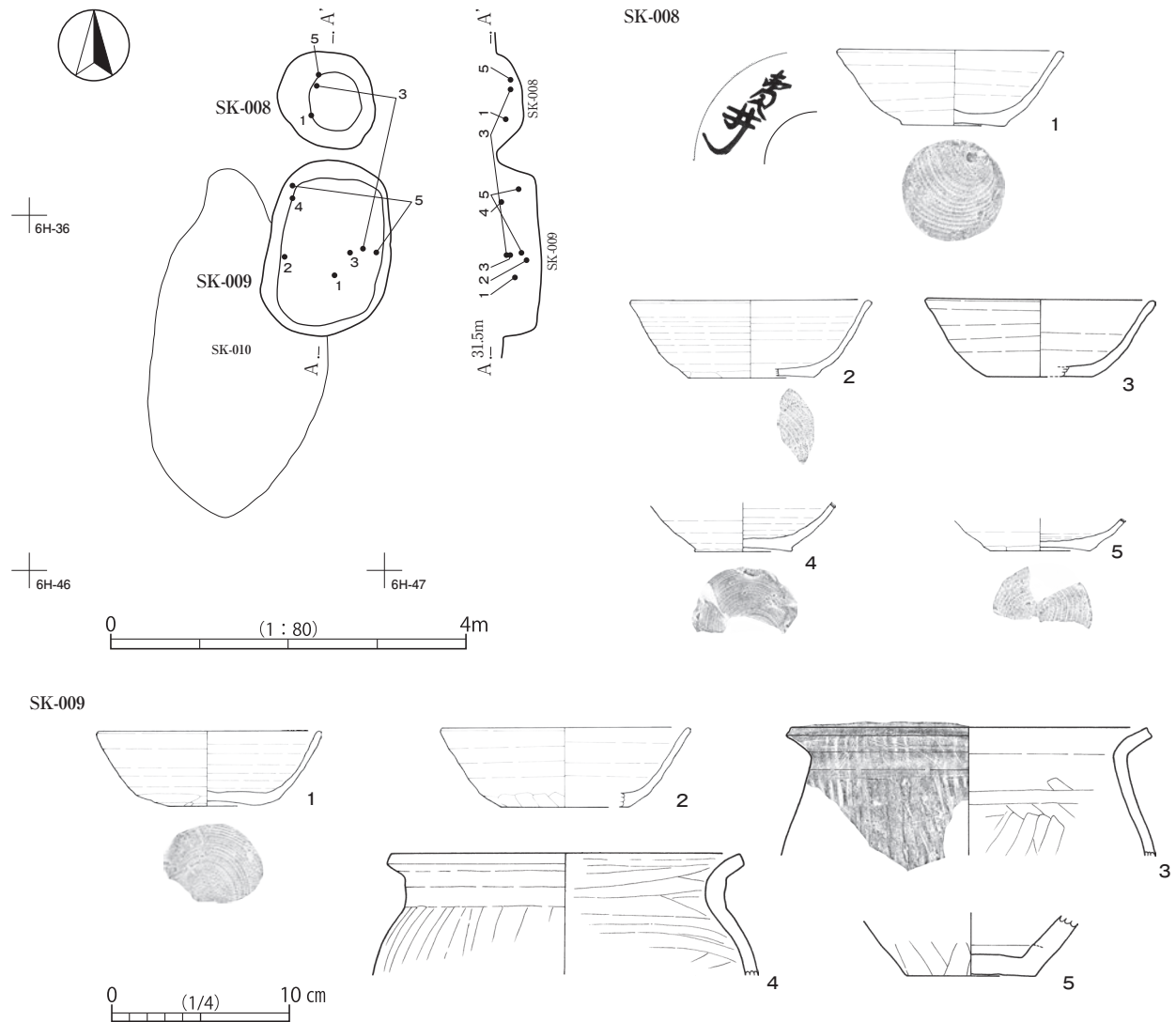
SK-009 (第40図、第3・12表、図版17・37)

6H-26・36グリッドに所在する。北約10cmにSK-008が近接する。平面形は楕円形で、長軸方向はN-6°-Eである。規模は長軸長2.0m・短軸長1.36mで、確認面からの深さは0.52mである。発掘調査時の所見では埋土に焼土ブロックや灰・炭化物が多く含まれる。

遺物は多数出土しているが、遺存状態が良好なものは少ない。図示できた遺物は土器5点である。1・2はロクロ土師器杯である。1は底部回転糸切り離しの後、体部下端部と底部周縁部に手持ちヘラ削り調整が施される。体部内面にロクロ目が強く残る。2は底部回転糸切り離し、無調整である。体部下端部に手持ちヘラ削り調整が施される。3~5は土師器甕である。3は口縁部~胴部上半で、口縁部は強く外反し口唇部は摘まみ上がる。外面は口縁部外面まで縦方向の平行タタキが行われ、口縁部外面にはナデ調整が施される。内面はヘラナデ及びナデ調整が施される。4は口縁部~胴部上半で、口唇部はわずかに摘まみ上がる。口縁部内外面はナデ、体部外面はヘラ削り、体部内面はヘラナデが施される。5は底部破片である。体部外面は縦方向のヘラケズリ、体部内面はナデが施される。底部に何らかの圧痕が見られるが、

詳細は不明である。

本遺構の時期は、出土遺物 1・2 の特徴から 9 世紀後葉と推測される。



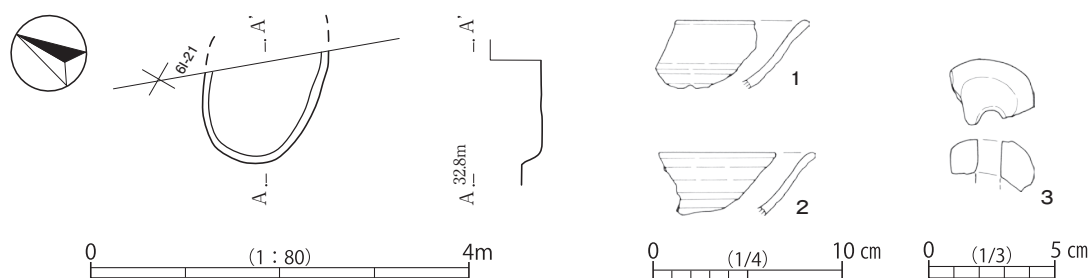
第40図 SK-008・009

SK-012(第41図、第3・12表、図版17・36)

6I-20・21グリッドに所在する。東側は調査区外である。南約 8 m にSK-026がある。平面形は楕円形で、長軸方向はN-80° -Eと推測される。規模は現存長軸長1.3m・短軸長1.2mで、確認面からの深さは0.20mである。断面形は逆台形で、底面はやや平坦である。

遺物は多数出土しているが、いずれも小破片で遺存状態は悪い。図示できた遺物は土器 2 点と土製品 1 点である。1・2はロクロ土師器杯である。いずれも体部外面にロクロ目が強く残る。2は体部下端部に手持ちヘラ削り調整が施される。3は土玉で大部分が欠損する。法量は現存値で長20.0mm・幅32.0mm・孔径10.0mm・重量14.90 gである。

本遺構の時期は、破片資料ではあるが、出土遺物 1・2 の特徴から 9 世紀後葉と推測される。



第41図 SK-012

SK-026 (第42図、第3・12表、図版17・37)

6I-41グリッドに所在する。北約8mにSK-012がある。平面形は楕円形で、長軸方向はN-84°-Wである。規模は長軸長1.12m・短軸長0.96mで、確認面からの深さは0.76mである。埋土は全体的に少量の炭化粒を含んだ土層が堆積している。

遺物は多数出土しているが、いずれも遺存状態は悪い。図示できた遺物は土器9点、須恵器1点である。1～4はロクロ土師器杯である。1は高台付き杯で、足高の高台が付く。底部は高台を貼り付けた後のナデ痕が渦巻き状に明瞭に残り、中心部は三角錐状に尖る。内面は黒色処理され、杯部底面に焼成前の「一」の字状のヘラ描きがされる。2～4はやや大ぶりの杯で、全て底部は回転糸切り離し、無調整である。5～8は土師器甕である。5～7は口縁部～胴部上半で、口縁部は短く口唇部が摘まみ上がる。口縁部内外面はナデ、胴部外面はヘラ削り、胴部内面はヘラナデが施される。8は底部で、外面はヘラ削り、内面はナデが施される。5と8は色調や器面の特徴から同一個体であると推測される。9は須恵器甕の胴部である。胴部外面は横方向の平行タタキ、胴部内面はナデとヘラナデが施される。10は土師器甕の底部で、多孔である。胴部外面はヘラ削り、胴部内面はヘラナデが施される。

本遺構の時期は、出土遺物1の特徴から10世紀前葉と推測される。

SK-057 (第43図、第3・12表、図版15・37)

8I-46グリッドに所在する。本遺跡で最も南側で検出された遺構である。西3mに古墳時代の溝SD-006がある。平面形は楕円形で、長軸方向はN-39°-Wである。規模は長軸長1.46m・短軸長0.92mで、確認面からの深さは0.20mである。

出土遺物は土師器の小破片が大部分である。図示できた遺物は須恵器1点と鉄製品1点である。1は土師質須恵器甕である。胴部外面は縦方向の平行タタキの後、下半部にヘラ削りが施される。胴部内面はナデ調整である。2は刀子の刀身部である。現存刀身長54.0mm・身幅11.0mm・背幅2.5mmである。

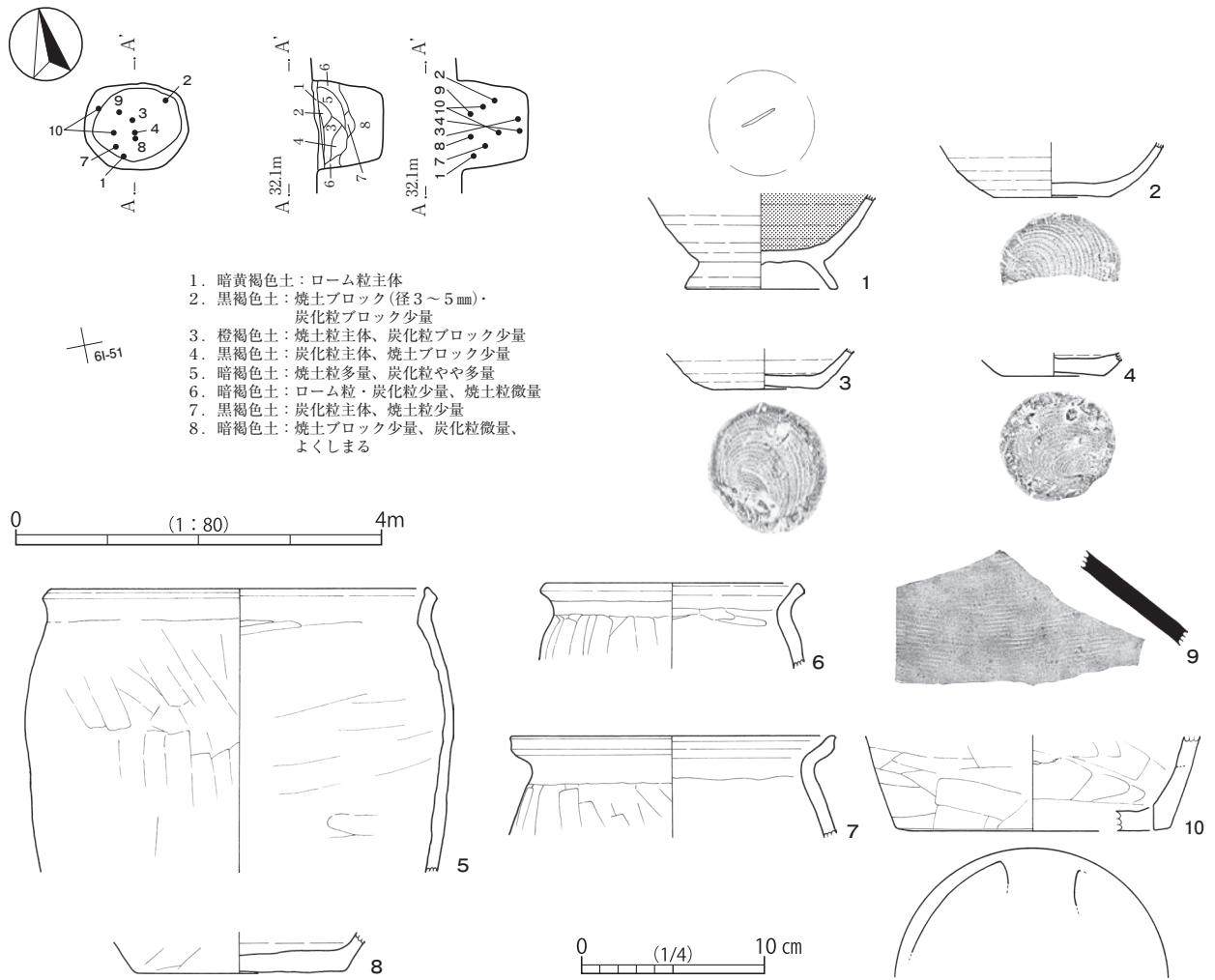
本遺構の時期は、出土遺物から奈良・平安時代と推測される。

SK-070 (第44図、第3・12表、図版14・37・39)

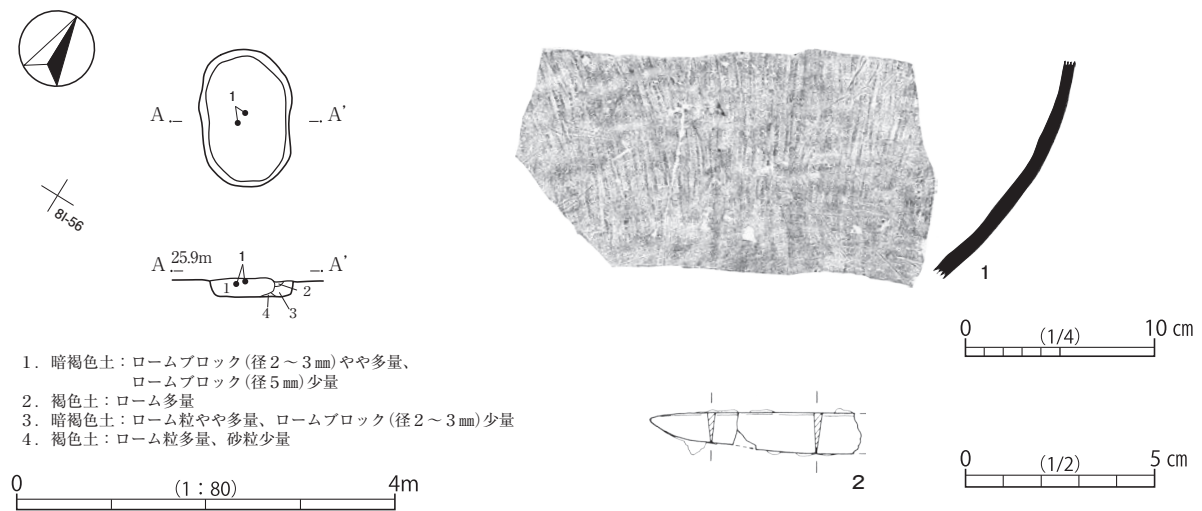
7I-41グリッドに所在する。古墳時代の竪穴住居跡SI-017の推定範囲内にある。平面形はほぼ正円形である。規模は径1.24mで、確認面からの深さは0.21mである。

図示できた遺物は土器1点で、そのほかに土師器甕の小破片がわずかに出土した。1はロクロ土師器杯で、底部回転糸切り離しの後、体部下端部に手持ちヘラ削り調整が施される。完形品で体部外面に正位で「富」が墨書される。内外面ともに器面がやや荒れる。

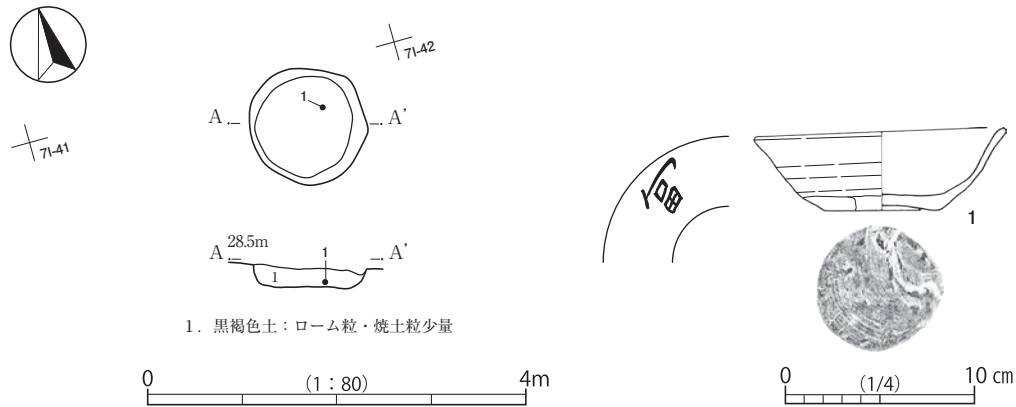
本遺構の時期は、出土遺物1の特徴から9世紀後葉と推測される。



第42図 SK-026



第43図 SK-057



第44図 SK-070

SK-085 (第45図、第3・12表、図版15・38)

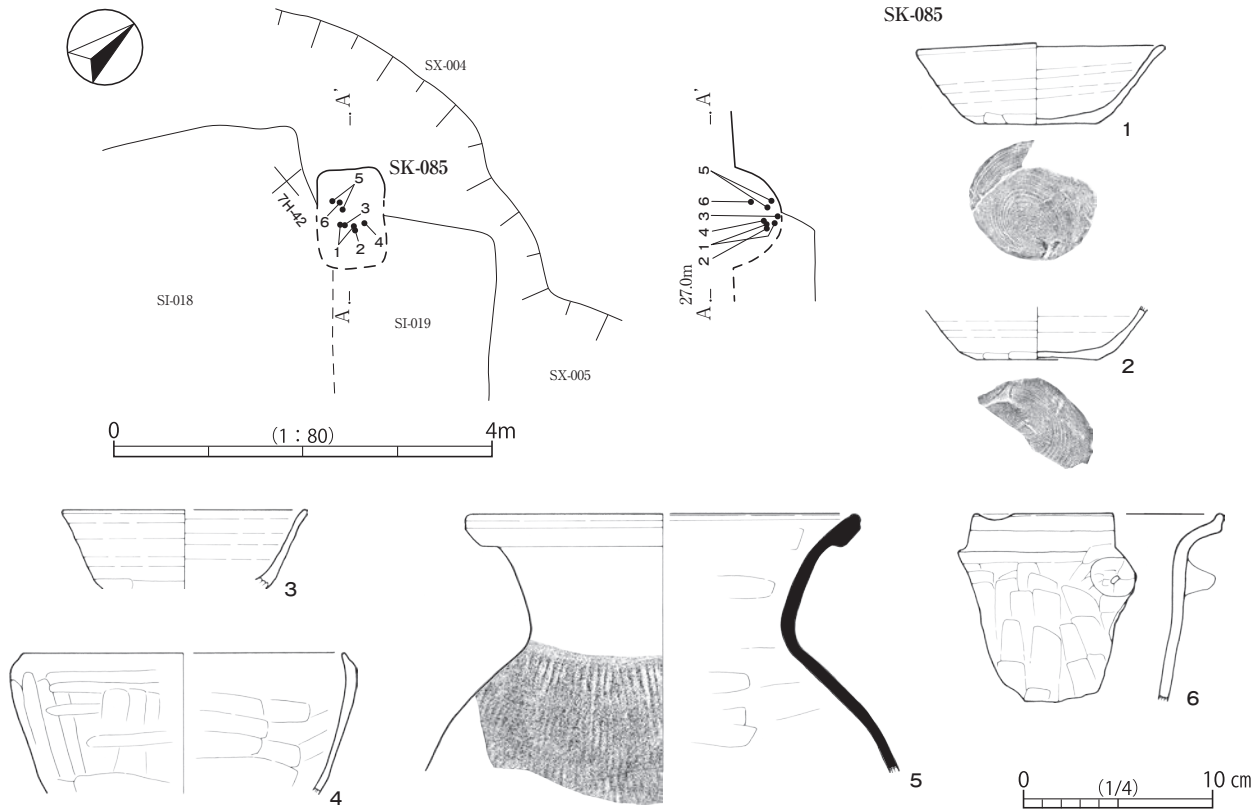
7H-32・42グリッドに所在する。発掘調査時に古墳時代の竪穴住居跡SI-019の一部と考えていたもので、整理作業時に出土遺物の時期や分布範囲・標高などからSI-019と時期・性格が異なる土坑と判断し、新たに遺構番号を付したものである。あわせて遺物もSI-019から分離した。本遺構はSI-018・019埋没後に掘り込まれ、南側台地整形区画のSX-005によって大部分が削平されたと推測される。平面形は長方形ないし楕円形で、長軸方向はN-54°-Wと推測される。規模は推定長軸長1.1m・現存短軸長0.7mで、確認面からの深さは0.50m前後と推測される。

図示できた遺物は土器5点と須恵器1点である。1～3はロクロ土師器杯である。1は底部回転糸切り離しの後、体部下端部に手持ちヘラ削り調整が施される。2は底部回転糸切り離しの後、体部下端部と底部周縁部に手持ちヘラ削り調整が施される。3は体部下端に手持ちヘラ削り調整が施される。4は土師器鉢の口縁部である。鉄鉢を模倣したものと推測される。口唇部は摩滅が著しい。口縁部は短く内傾気味に立ち上がり、体部は底部に向けてややすぼまっていく。体部外面は縦横方向のヘラ削り、体部内面は横方向のナデである。5は土師質須恵器甕で口縁部～胴部上半である。口縁部は複合口縁で、頸部は緩やかに「く」の字状に屈曲する。口縁部～頸部内外面はナデ、胴部外面は縦方向の平行タタキ、胴部内面はナデである。胴部内面に輪積痕が見られる。6は土師器甌の口縁部～胴部上半で、口縁部直下に円錐状の突起が付く。口縁部は強く外反し、口唇部は摘まみ上がる。口縁部内外面はナデ、胴部外面は縦方向のヘラ削り、胴部内面は横方向のヘラナデである。

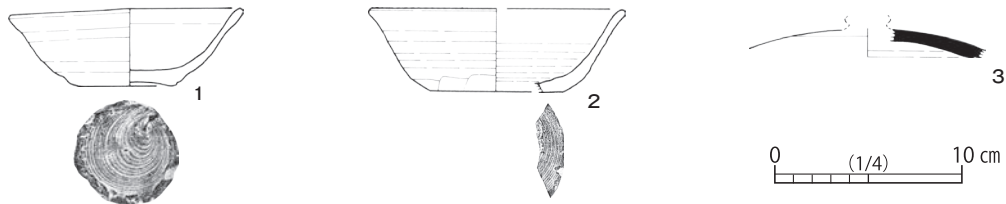
本遺構の時期は、出土遺物1の特徴から9世紀中葉と推測される。

3 遺構外出土の遺物 (第46図、第12表、図版38)

ここでは、グリッド出土遺物と他の時代の遺構に混入したと判断された遺物について記載する。1・2はロクロ土師器杯である。1はほぼ完形である。体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。底部は回転糸切り離し、無調整である。2は体部が緩やかに開きながら立ち上がり、口縁部はやや外反する。底部は回転糸切り離し、無調整である。体部下端部に手持ちヘラ削り調整が施される。口縁部内面にススの付着が見られる。3は須恵器蓋である。擬宝珠形の摘みが付くと推測される。天井部外面は回転ヘラ削り調整が施される。



第45図 SK-085



第46図 遺構外出土の遺物

第12表 奈良・平安時代土器観察表

() 推定値 < > 現存値

遺構	挿図番号	種類	器種	法量 (cm)	遺存度	胎土	色調・焼成	技法	備考
SB-001	第35図-1	土師器	甕	口径 (8.0) 底径 <2.8> 器高	底部	石英粒・雲母粒・白色砂粒	内面 明黄褐色 (10YR7/6) 外面 明黄褐色 (10YR7/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 筋状ヘラ磨き 底外面 ヘラナデ	常総型甕
SK-004	第37図-1	灰釉陶器	椀	口径 (6.7) 底径 <2.3> 器高	底部～高台部	白色砂粒	内面 灰黄色 (2.5YR6/2) 外面 黄灰色 (2.5YR6/1) 焼成 良好	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ 底外面 回転糸切り ナデ	
	第37図-2	ロクロ土師器	杯	口径 (12.8) 底径 6.0 器高 5.4	35%	雲母粒・石英粒・白色砂粒	内面 内ぶい黄橙色 (10YR6/3) 外面 灰黄褐色 (10YR6/2) 焼成 良好	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ 底外面 回転糸切り 手持ちヘラ	
	第37図-3	ロクロ土師器	杯	口径 (13.0) 底径 (6.0) 器高 5.1	35%	雲母粒・石英粒・白色砂粒	内面 黒色 (10YR2/1) 外面 内ぶい黄橙色 (10YR6/3) 焼成 良好	内面 ヘラ磨き 外面 ロクロナデ 手持ちヘラ 底外面 回転糸切り 手持ちヘラ	内面黒色処理
	第37図-4	ロクロ土師器	杯	口径 (6.0) 底径 <2.2> 器高	体部～底部	石英粒・黒色砂粒	内面 内ぶい橙色 (7.5YR7/4) 外面 内ぶい橙色 (7.5YR7/4) 焼成 良好	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ 底外面 回転糸切り	
	第37図-5	須恵器	甕	口径 () 底径 () 器高 ()	頭部～胴部	白色砂粒・小石	内面 灰色 (N4/0) 外面 灰色 (N5/0) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ 平行タタキ 底外面 ()	
SK-005	第38図-1	ロクロ土師器	杯	口径 (13.0) 底径 (6.4) 器高 3.7	20%	白色砂粒・砂粒	内面 内ぶい黄橙色 (10YR7/3) 外面 内ぶい橙色 (7.5YR7/3) 焼成 良好	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ 手持ちヘラ 底外面 回転糸切り 手持ちヘラ	
	第38図-2	土師質須恵器	甕	口径 () 底径 () 器高 ()	口縁部	雲母粒・白色砂粒	内面 橙色 (5YR6/6) 外面 橙色 (5YR6/6) 焼成 良好 (硬質)	内面 ナデ 外面 ナデ 底外面 ()	
	第38図-3	土師器	甕	口径 () 底径 () 器高 ()	口縁部	白色砂粒・小石・砂粒	内面 内ぶい黄橙色 (10YR7/3) 外面 内ぶい黄橙色 (10YR7/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ナデヘラ削り 底外面 ()	
	第38図-4	土師器	甕	口径 (6.3) 底径 <3.7> 器高	底部	白色砂粒・小石	内面 橙色 (5YR6/6) 外面 内ぶい橙色 (5YR6/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラ削り 底外面 圧痕	

遺構	挿入番号	種類	器種	法量(cm)	遺存度	胎土	色調・焼成	技法	備考		
SK-005	第38図 - 5	土師器	甕	口径 -	底部	雲母粒・小石	内面 褐色(7.5YR4/6)	内面 ヘラナデ			
				底径 (11.8)			外面 暗褐色(7.5YR3/3)	外面 ヘラ削り			
SK-007a	第39図 - 1	土師質須恵器	甕	口径 -	胴部	白色砂粒	内面 内ぶい黄褐色(10YR5/3)	内面 ヘラナデ			
				底径 -			外面 灰黄褐色(10YR4/2)	外面 平行タタキ			
SK-008	第40図 - 1	ロクロ土師器	杯	口径 12.5	100%	石英粒・白色小石・砂粒	内面 橙色(7.5YR6/6)	内面 ロクロナデ	「体部外面」墨書		
				底径 5.9			外面 内ぶい黄褐色(10YR6/4)	外面 ロクロナデ			
				器高 4.2			外面 良好	底外面 回転糸切り無調整			
				第40図 - 2			杯	口径 (13.5)		内面 内ぶい橙色(7.5YR6/4)	内面 ロクロナデ
								底径 (7.0)		外面 内ぶい橙色(7.5YR5/3)	外面 ロクロナデ
第40図 - 3	杯	口径 13.0	内面 橙色(7.5YR6/6)	内面 ロクロナデ							
		底径 (6.0)	外面 褐色(7.5YR4/1)	外面 ロクロナデ							
第40図 - 4	杯	口径 -	内面 内ぶい黄褐色(10YR7/4)	内面 ロクロナデ							
		底径 (5.5)	外面 内ぶい黄褐色(10YR7/4)	外面 ロクロナデ							
第40図 - 5	杯	口径 -	内面 内ぶい黄褐色(10YR7/4)	内面 ロクロナデ							
		底径 (5.5)	外面 内ぶい黄褐色(10YR7/4)	外面 ロクロナデ							
SK-009	第40図 - 1	ロクロ土師器	杯	口径 (12.6)	65%	石英粒・白色砂粒・小石	内面 内ぶい黄褐色(10YR7/2)	内面 ロクロナデ	「体部外面」墨書		
				底径 (14.0)			外面 灰黄褐色(10YR6/2)	外面 ロクロナデ			
				器高 4.1			外面 良好	底外面 回転糸切り 手持ちヘラ			
				第40図 - 2			杯	口径 (14.0)		内面 明赤褐色(2.5YR5/6)	内面 ロクロナデ
								底径 (7.2)		外面 明赤褐色(2.5YR5/6)	外面 ロクロナデ
第40図 - 3	土師器	甕	口径 (20.5)	口縁部～胴部上半	石英粒・小石	内面 褐色(7.5YR6/6)	内面 ナデ				
			底径 -			外面 褐色(7.5YR6/6)	外面 平行タタキ				
第40図 - 4	土師器	甕	口径 (19.6)	口縁部～胴部上半	石英粒・白色砂粒	内面 褐色(7.5YR6/6)	内面 ナデ				
			底径 -			外面 褐色(7.5YR6/6)	外面 ナデ				
第40図 - 5	土師器	甕	口径 -	底部	石英粒・白色砂粒	内面 内ぶい黄褐色(10YR7/3)	内面 ナデ				
			底径 (7.2)			外面 内ぶい褐色(7.5YR5/4)	外面 ヘラ削り				
SK-012	第41図 - 1	ロクロ土師器	杯	口径 -	5%	微細砂粒	内面 灰褐色(7.5YR4/2)	内面 ロクロナデ			
				底径 -			外面 内ぶい褐色(7.5YR5/3)	外面 ロクロナデ			
SK-012	第41図 - 2	ロクロ土師器	杯	口径 -	5%	石英粒	内面 内ぶい褐色(7.5YR5/3)	内面 ロクロナデ			
				底径 -			外面 褐色(7.5YR4/3)	外面 ロクロナデ			
SK-026	第42図 - 1	ロクロ土師器	高台付杯	口径 16.4	体部～高台	石英粒・小石・小礫	内面 黒色(7.5YR2/1)	内面 ロクロナデ	「杯部底面」墨書		
				底径 (8.4)			外面 内ぶい橙色(7.5YR6/4)	外面 ロクロナデ			
				器高 <5.1>			外面 良好	底外面 回転糸切り無調整			
				第42図 - 2			杯	口径 (6.4)		内面 褐色(7.5YR4/1)	内面 ロクロナデ
								底径 -		外面 灰褐色(7.5YR4/2)	外面 ロクロナデ
				第42図 - 3			杯	口径 -		内面 内ぶい褐色(7.5YR7/3)	内面 ロクロナデ
								底径 6.0		外面 褐色(7.5YR6/6)	外面 ロクロナデ
				第42図 - 4			杯	口径 -		内面 明赤褐色(5YR5/8)	内面 ロクロナデ
								底径 (1.2)		外面 明赤褐色(5YR5/8)	外面 ロクロナデ
				第42図 - 5			土師器	甕		口径 (21.5)	口縁部～胴部
底径 -	外面 明褐色(7.5YR5/8)	外面 ナデ									
第42図 - 6	土師器	甕	口径 (14.4)	口縁部～胴部上半	雲母粒・石英粒・小礫	内面 内ぶい褐色(7.5YR6/4)	内面 ナデ				
			底径 -			外面 内ぶい高褐色(10YR5/3)	外面 ナデ				
第42図 - 7	土師器	甕	口径 (17.6)	口縁部～胴部上半	石英粒・白色砂粒	内面 内ぶい褐色(7.5YR7/4)	内面 ナデ				
			底径 -			外面 褐色(7.5YR7/6)	外面 ナデ				
第42図 - 8	土師器	甕	口径 -	底部	石英粒・白色砂粒	内面 褐色(5YR7/6)	内面 ナデ				
			底径 (11.6)			外面 褐色(5YR6/8)	外面 ナデ				
第42図 - 9	須恵器	甕	口径 -	胴部	小石	内面 灰色(N5/0)	内面 ナデ				
			底径 -			外面 灰色(N6/1)	外面 平行タタキ				
第42図 - 10	土師器	甕	口径 -	底部	石英粒・小石	内面 内ぶい褐色(7.5YR6/4)	内面 ナデ	3～4の多孔			
			底径 (15.0)			外面 内ぶい黄褐色(10YR6/4)	外面 ナデ				
SK-057	第43図 - 1	土師質須恵器	甕	口径 -	胴部中位～下位	雲母	内面 褐色(5YR6/6)	内面 ナデ			
SK-070	第44図 - 1	ロクロ土師器	杯	口径 13.3	100%	石英粒・雲母	内面 内ぶい褐色(7.5YR7/4)	内面 ロクロナデ	「富」墨書		
				底径 6.0			外面 褐色(7.5YR7/6)	外面 ロクロナデ			
SK-085	第45図 - 1	ロクロ土師器	杯	口径 13.1	70%	石英粒・雲母	内面 明黄褐色(10YR6/6)	内面 ロクロナデ			
				底径 6.4			外面 内ぶい黄褐色(10YR7/4)	外面 ロクロナデ			
				器高 4.3			外面 良好	底外面 回転糸切り無調整			
				第45図 - 2			杯	口径 -		内面 内ぶい褐色(7.5YR7/4)	内面 ロクロナデ
								底径 (6.4)		外面 内ぶい褐色(7.5YR6/4)	外面 ロクロナデ
				第45図 - 3			杯	口径 (13.0)		内面 内ぶい黄褐色(10YR7/3)	内面 ロクロナデ
底径 -	外面 内ぶい黄褐色(10YR7/4)	外面 ロクロナデ									
第45図 - 4	土師器	鉢	口径 (17.1)	口縁部～体部	雲母	内面 内ぶい褐色(7.5YR7/3)	内面 ナデ				
			底径 -			外面 明褐色(7.5YR5/6)	外面 ナデ				
第45図 - 5	土師質須恵器	甕	口径 (21.0)	口縁部～胴部	石英粒	内面 内ぶい褐色(7.5YR6/4)	内面 ナデ				
			底径 -			外面 褐色(7.5YR6/8)	外面 タタキ				
遺構外	第46図 - 1	ロクロ土師器	杯	口径 12.5	95%	石英粒・白色砂粒・砂粒	内面 褐色(7.5YR6/6)	内面 ロクロナデ	6I-10-1		
				底径 5.4			外面 褐色(7.5YR7/6)	外面 ロクロナデ			
				器高 4.1			外面 良好	底外面 回転糸切り無調整			
				第46図 - 2			杯	口径 (13.6)		内面 灰褐色(10YR4/1)	内面 ロクロナデ
								底径 (7.1)		外面 灰黄褐色(10YR6/2)	外面 ロクロナデ
				第46図 - 3			須恵器	蓋		口径 -	天井部
底径 -	外面 オリーブ黒色(5Y3/1)	外面 ロクロナデ									

第7節 中・近世の遺構と遺物

中・近世の遺構は、台地整形区画2か所・土地整形遺構3基・掘立柱建物跡1棟・竪穴状遺構11基・地下式坑2基・土坑墓1基・土坑31基・土坑群(ピット群)7か所・溝1条を検出した。遺構の分布は、北側台地整形区画と南側台地整形区画の内側を中心に分布し、遺跡の中央付近に散在するといった状況である。発掘調査時に北側台地整形区画のSX-001周辺でいくつかの溝状遺構を検出しているが、その内のSD-002については、成田市中世城郭址調査報告書において当該遺構が明らかに攪乱である趣旨の記載があることから欠番とし、出土遺物についてはSX-001の参考遺物として掲載することとした。南側台地整形区画は谷に続く台地縁辺と傾斜面を強く意識し、2回にわたって形成されたものと推測される。これら2か所の台地整形区画については、台地整形区画ごとにそれらに関連する竪穴状遺構や土坑なども併せて記載し、それ以外の遺構については遺構種別ごとに記載することにした。

1 北側台地整形区画(第47図、図版17・18)

本区画は5H-90～95、6G-01～09・11～19・21～29・32～39・43～49・53～59、6H-00～05・10～16・20～26・30～36・40～46・50・51グリッドに所在する。本区画周辺の確認面(ローム層上面)の地形を見ると、調査区北側の谷津に向かって緩やかに傾斜する等高線が乱れ、更に調査区の東西に顕著な段差を確認することができる(第47図)。これらの等高線の状況と遺構の配置から本区画の範囲は、東限をSX-003土坑群が連なる比高1mほどの掘り込みまで、西限を調査区西端の傾斜変換線まで、南限を等高線の間隔が詰まり始めるSK-014～016とSX-002・006との間までと推測され、東西約56m・南北約20mと幅広い範囲に及んでいる。本区画内からは土地整形遺構1か所・掘立柱建物跡1棟・地下式坑2基・竪穴状遺構11基・土坑8基・土坑群(ピット群)5基を検出した。地形の状況や遺構の分布状況などから、本区画内を第Ⅰ～Ⅲ地区の3か所に区分することとした。第Ⅰ地区は土地整形遺構SX-001を中心とする範囲である。西端は傾斜変換線を境にして谷に面し、北側は緩やかに傾斜し、北西側は痩せ尾根に続く。東端はSX-001の「V」字状の掘り込みの東側である。標高は28.5m～29.0mで、地下式坑と竪穴状遺構・土坑がある。第Ⅱ地区は区画内の中央部分で、SK-018を東端とする範囲である。標高は29.0m～30.3mで、掘立柱建物跡や地下式坑・竪穴状遺構・土坑などがある。第Ⅲ地区は東側の遺構がほとんど見られない範囲である。この地区は明確な平坦面も確認できず、遺構も東端の掘り込みに沿って掘られているSX-003だけである。

区画内から出土した遺物は総じて少なく、陶器、瓦質土器の大形甕・鉢、銭貨、鉄製品などが見られるが、遺存状態の良いものはない。そのほかの遺物としては、本区画内の各遺構やグリッド一括で取り上げたものの中から弥生時代中期の土器片、古墳時代後期の須恵器・土師器破片及び石製品、奈良・平安時代のロクロ土師器破片などが出土している。特に、地下式坑の埋土から古墳時代及び奈良・平安時代の土師器片が多量に出土した。こうした遺物は、かつて本区画内に存在した各時代の遺構に伴うものであり、各時代の遺構は本区画が造成され、本区画内に各遺構が作られた際に削平され消滅したものと推測される。

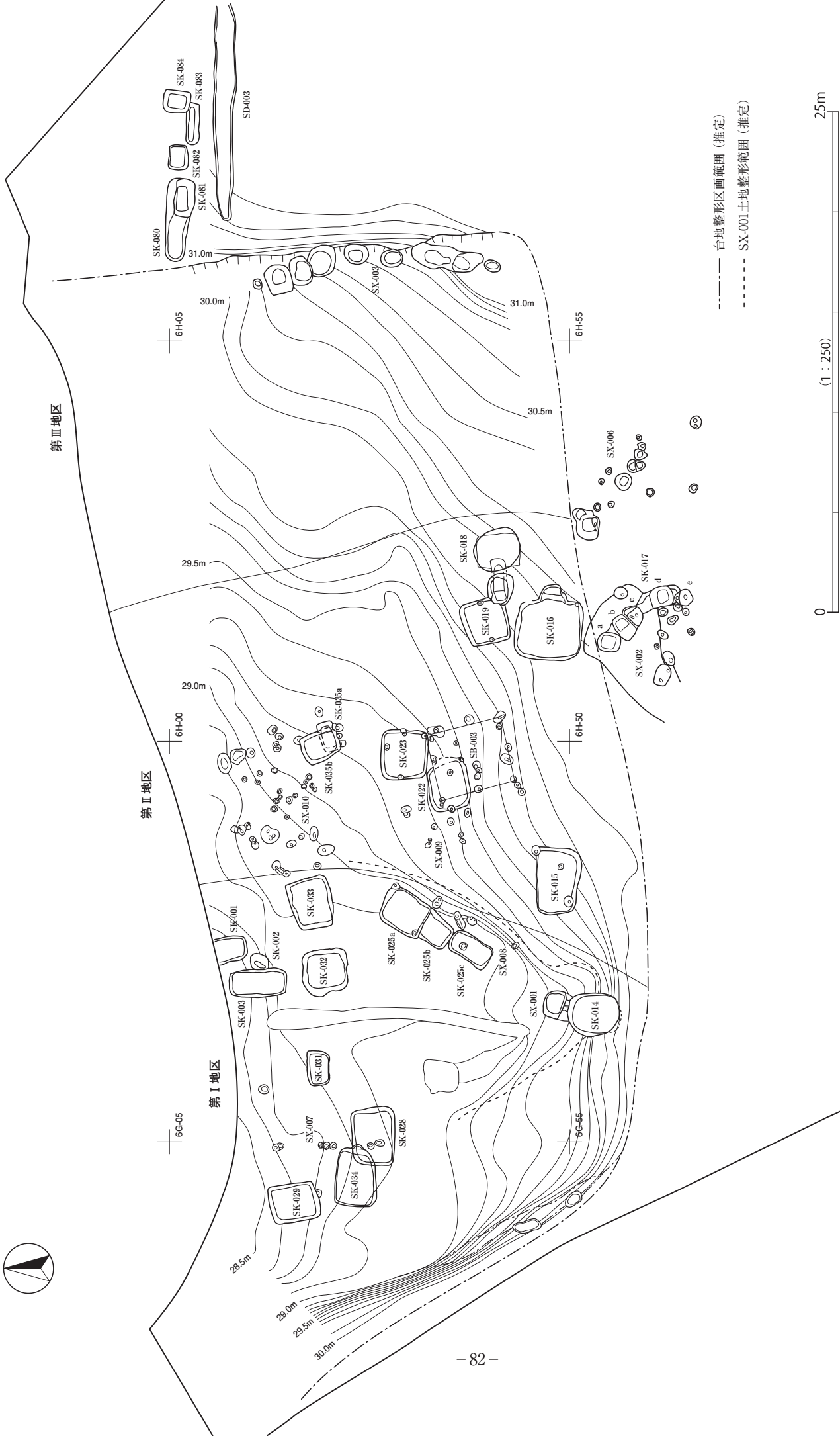
(1) 第Ⅰ地区

第Ⅰ地区は6G-03～08・12～18・22～28・33～37・43～47・54～57グリッドに所在する。この地区の遺構は土地整形遺構1か所・地下式坑1基・竪穴状遺構6基・土坑6基・土坑群(ピット群)2か所である。

土地整形遺構

SX-001(第48・49図、第3・22表、図版18・38)

6G-25～28・35～38・45～47・56・57グリッドに所在する。発掘調査時には明確な掘り込みを検出できず、



第47图 北側台地整形区画

傾斜変換線の上端部を遺構の範囲としていた。本遺構が掘り込まれる前の地形は、6G-34グリッドと6G-28グリッド付近の標高29.0mの等高線を結んだ緩やかな斜面であったと推測される。6G-56グリッド付近を頂点とする逆三角形に緩斜面地を整形して、6G-46グリッド付近に平坦部を作り出している。規模は底辺約13.0m・高さ約9mの逆三角形の範囲である。底辺北側部分は判然としないが、6G-16グリッド周辺まで整形が及んでいた可能性も推測される。南側の逆三角形の頂点部分でSK-014と重複し、本遺構がSK-014の天井部崩壊土層を削平・整形していることから本遺構の方が新しい。このことから、SK-014の様に本遺構による整形の前に存在していた遺構と、整形に伴って作られた新しい遺構が存在すると判断できる。整形範囲内に所在するSK-025との新旧関係は不明であるが、SK-025の長軸方向が本遺構の東端の傾斜変換線に沿っていることから、本遺構とほぼ同時期に作られたと推測される。整形範囲内の中央部には南北に走る溝状遺構が検出されたが、全測図にのみ記録されているため、詳細は不明である。

図示できた遺物は瓦質土器1点と銭貨1点である。それ以外に陶器甕破片や瓦質土器破片などが出土している。また、須恵器や土師器杯破片など、古い時期の遺物も多く混入している。1は土師質土器の杯底部である。底面は回転糸切り離し、無調整である。器厚は厚く硬質である。2は南宋銭の嘉泰通寶である。書体は不明で、背文は「六」である。縁外径22.7mm・縁内径21.3mm・郭外径9.8mm・郭内径6.5mm・縁厚1.3mm・重さ1.82gである。初鑄年は1201年である。腐食が進んでいる。3は区画西端部から出土した鉄銭である。SD-002出土遺物として取り上げられたが、本遺構に関連する資料として図示した。状態が悪く銭種は不明である。縁外径24.0mm・縁内径17.0mm・郭外径6.5mm・郭内径5.5mm・縁厚2.0mm・重さ3.37gである。

地下式坑

SK-014(第48・49図、第3・22表、図版19・38)

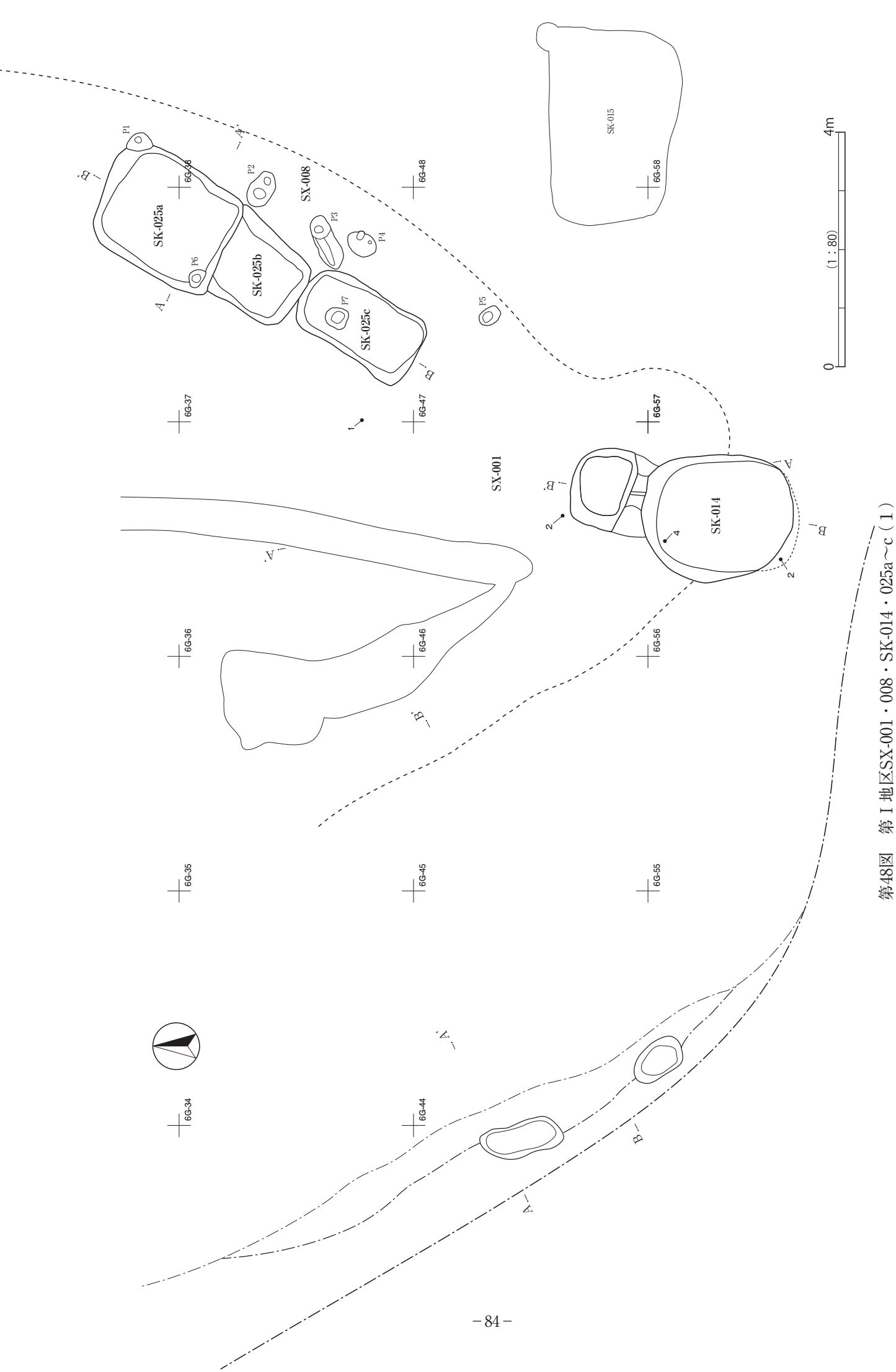
6G-46・56グリッドに所在する。北側でSX-001と重複し、本遺構の方が古い。主室の平面形は隅丸長方形である。規模は長軸長2.68m・短軸長2.15mで、確認面からの深さは1.60m～2.32mである。底面の規模は長軸長2.40m・短軸長1.84mで、長軸方向はN-0°-Eである。底面はほぼ平坦で、南側の壁はややオーバーハングしている。出入口は北側短辺に作られ、長さ1.26m・幅1.38m・主室底面からの高さ0.67mであるが、主室側は敷居状に一段高く、その奥は0.15m低くなっている。長短軸交点から見た方向はN-16°-Eである。埋土は全体的にロームブロックやローム粒を主体とする土層で、4層の天井崩壊土が厚く堆積していることから、SX-001の土地整形に伴って壊され、埋め戻されたと推測される。

図示できた遺物は陶器1点、瓦質土器1点、カワラケ2点である。そのほかに陶器破片、土師質土器破片などが出土し、数量としては中・近世遺構の中で突出して多く出土している。1は陶器三筋壺で、外面に自然釉が掛かる。肩部～頸部破片で、肩部は丸く頸部下に2条の沈線が巡る。常滑窯製品と思われる。2は地元産の瓦質土器の捏鉢である。器厚が厚手かつ均一で、直線的に立ち上がる。口唇部端部は外側に平坦面を作り、内側は摘まみ上がる。内面は櫛描きが施される。3・4はカワラケ小皿である。器面は摩滅しているが、いずれも底部は回転糸切り離しの後、手持ちヘラ削り調整が施される。

竪穴状遺構

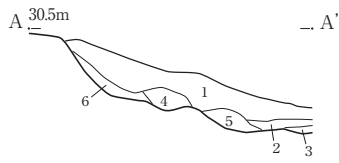
SK-025a(第48・49図、第3表、図版19)

6G-27・28・37・38グリッドに所在する。発掘調査時に単一遺構として調査され、整理作業時に北側から順にa～cの枝番号を付け、規模によりSK-025aを竪穴状遺構、SK-025b・cを土坑とした。3つの遺構は重複しているが、新旧関係は不明である。本遺構の東側にはSX-001東端の傾斜変換線に沿ってSX-008ピット

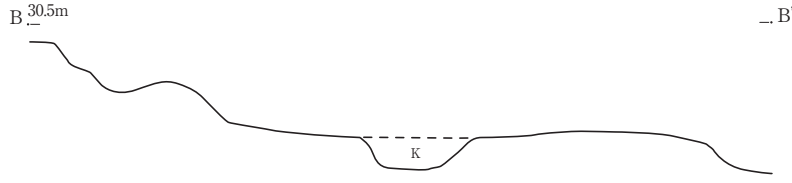


第48图 第I地区SX-001・008・SK-014・025a~c(1)

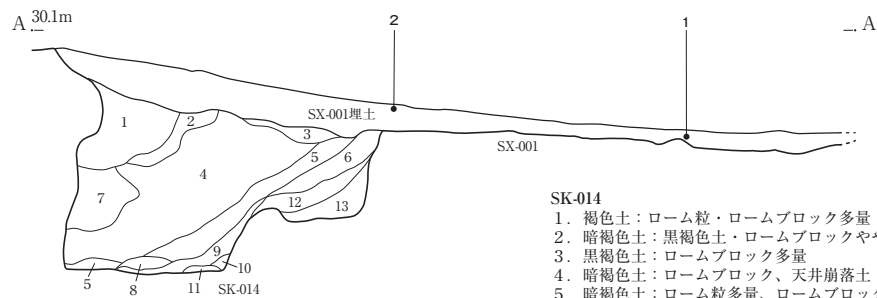
区画西端部



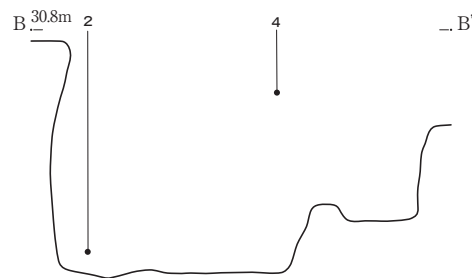
1. 暗褐色土：ロームブロック少量、全体に粗い
2. 暗褐色土：ローム粒やや多量、ロームブロック少量、炭化物微量
3. 暗褐色土：ロームブロック少量
4. 褐色土：ローム粒主体、ロームブロック少量
5. 暗褐色土：ローム粒やや多量、ロームブロック少量
6. 暗褐色土：ロームブロックやや多量



SX-001・SK-014



- SX-001
1. 暗褐色土：ローム粒やや多量、ロームブロック少量
 2. 暗褐色土：ローム粒やや多量、ロームブロック少量、炭化物微量
 3. 暗褐色土：ロームブロック少量
 4. 褐色土：ローム粒主体、ロームブロック少量
 5. 暗褐色土：ローム粒やや多量、ロームブロック少量
 6. 暗褐色土：ロームブロックやや多量
- SK-014
1. 褐色土：ローム粒・ロームブロック多量
 2. 暗褐色土：黒褐色土・ロームブロックやや多量
 3. 黒褐色土：ロームブロック多量
 4. 暗褐色土：ロームブロック、天井崩落土
 5. 暗褐色土：ローム粒多量、ロームブロックやや多量
 6. 褐色土：ローム粒多量、ロームブロックやや多量
 7. 褐色土：ロームブロック多量、黒褐色土やや多量
 8. 暗黄褐色土：ロームブロック層
 9. 褐色土：ロームブロック多量
 10. 暗褐色土：ロームブロック多量
 11. 灰黒色土：灰・焼土多量
 12. 褐色土：ローム粒・ロームブロック多量
 13. 褐色土：暗褐色土・ローム粒多量、ロームブロックやや多量

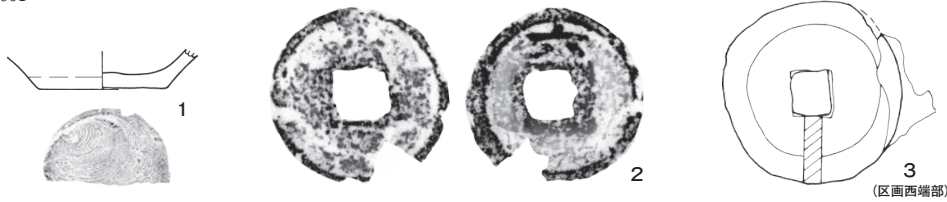


SK-025

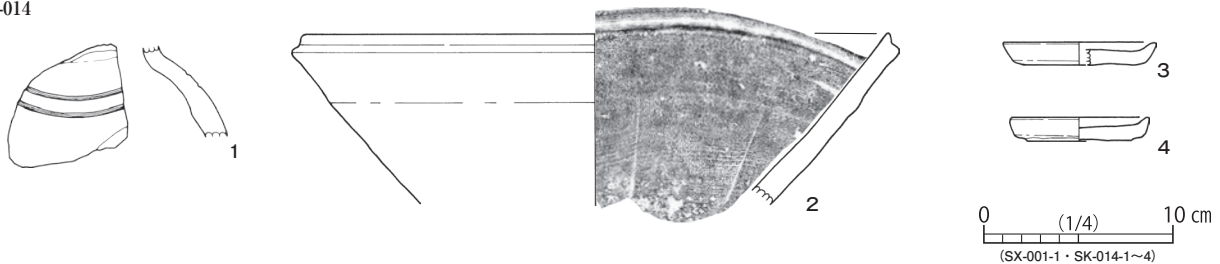


1. 暗褐色土：ローム粒多量、ロームブロックやや多量
2. 暗褐色土：ローム粒多量、ロームブロックやや多量
3. 暗褐色土：ロームブロックやや多量
4. 暗褐色土：ロームブロック多量

SX-001



SK-014



第49図 第I地区SX-001・008・SK-014・025a~c (2)

ト群が並んでいる。本遺構は長軸方向がSX-001東端の傾斜変換線とほぼ一致することから、SX-008とともにSX-001に関連する遺構であると推測される。本遺構の北東隅のP1と南西隅のP6については、P1がSX-008のP2～P5と直線状に並び、P6がその走行方向に対して垂直方向にあることから、いずれもSX-008を構成するピットと判断した。平面形は長方形で、長軸方向はN-31°-Eである。規模は長軸長2.3m・短軸長1.93mで、確認面からの深さは0.39mである。底面は平坦である。

遺物は出土していない。

SK-028(第50図、第3表、図版19)

6G-24・25グリッドに所在する。北西でSK-034と重複し、遺構内にSX-007ピット群の一部があり、本遺構の方がSK-034より新しく、SX-007ピット群よりも古い。平面形は長方形で、長軸方向はN-89°-Eである。規模は長軸長2.92m・短軸長2.04mで、確認面からの深さは0.36mである。埋土はロームブロックを少量含む暗褐色土を主体とした土層で、自然堆積である。

本遺構に伴う遺物は出土していない。

SK-029(第50図、第3表、図版19)

6G-14グリッドに所在する。南0.7mにSK-034が近接する。平面形は長方形で、長軸方向はN-29°-Wである。規模は長軸長2.46m・短軸長1.90mで、確認面からの深さは0.58mである。底面は平坦で北側半分は白色粘土が見られる。埋土は粘土粒や粘土ブロックを含んだ暗褐色土と褐色土を主体とした土層で、自然堆積である。

本遺構に伴う遺物は出土していない。

SK-032(第51図、第3表、図版19)

6G-16・17・26・27グリッドに所在する。東1.1mにSK-033が近接する。平面形は崩れた方形で、長軸方向はN-7°-Wである。規模は長軸長2.32m・短軸長2.16mで、確認面からの深さは0.44mである。底面は平坦で白色粘土が見られる。埋土は南側にローム粒やロームブロックを主体とした褐色土が厚く堆積していることから、人為的に埋め戻されたと推測される。

遺物は陶器甕や土師質土器の破片などが出土しているが、図示できるものはない。

SK-033(第51図、第3表、図版19)

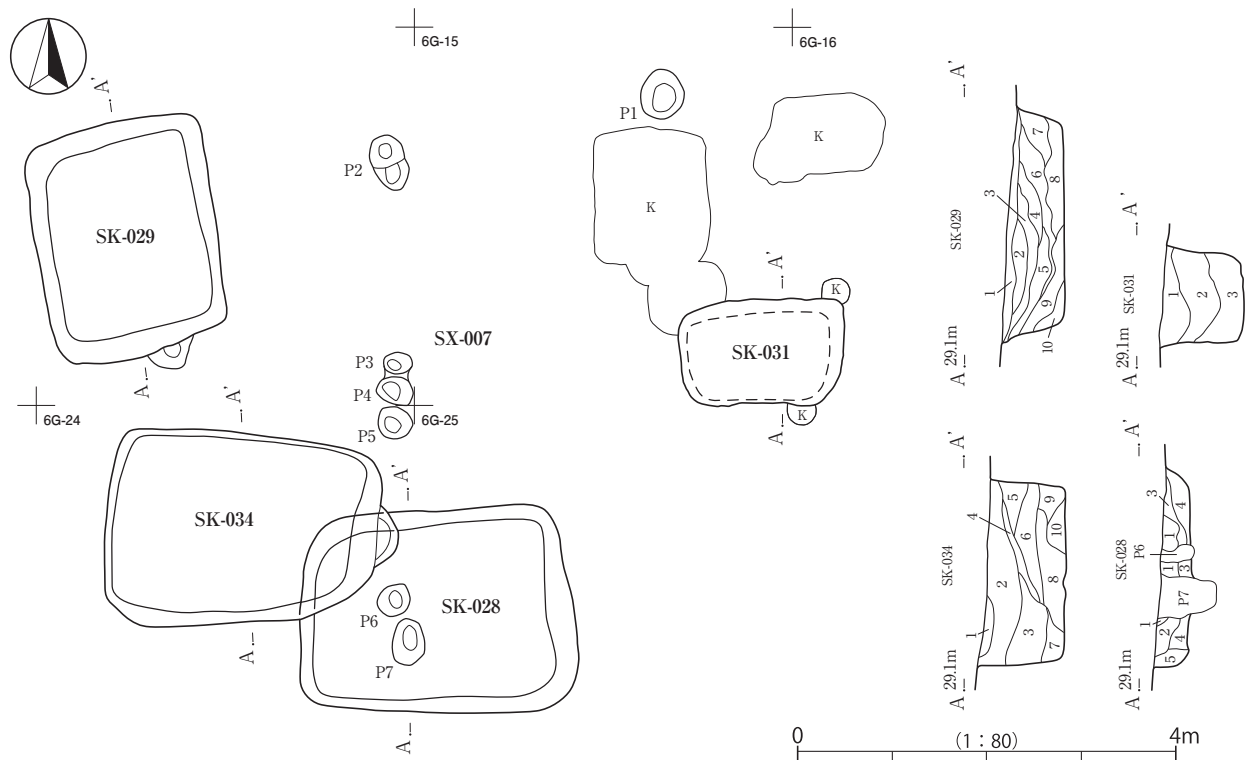
6G-17・18グリッドに所在する。西1.1mにSK-032が近接する。北側と西側の壁は、掘り過ぎて検出できなかったため土層断面図から復元した。平面形はややいびつな長方形で、長軸方向はN-78°-Eである。規模はいずれも推定で長軸長2.56m・短軸長2.12mで、確認面からの深さは0.64mである。底面は平坦で北西隅に白色粘土が見られる。埋土はローム粒やロームブロックを多量に含んだ褐色土が一方向から堆積していることから、人為的に埋め戻されたと推測される。

遺物は陶器甕や土師質土器などの破片のほかに鉄滓が出土しているが、図示できるものはない。

SK-034(第50図、第3表、図版19)

6G-24グリッドに所在する。南東でSK-028と重複し、本遺構の方が古い。平面形は不整な長方形で、長軸方向はN-90°-Eである。規模は長軸長2.88m・短軸長2.0mで、確認面からの深さは0.87mである。底面は平坦で白色粘土が見られる。埋土は白色粘土ブロックを含む暗褐色土が底面付近に堆積し、その上にロームブロックを含む暗褐色土などが堆積していることから、人為的に埋め戻されたと推測される。

本遺構に伴う遺物は出土していない。



SK-028

1. 暗褐色土：ロームブロックやや多量、白色粘土ブロック少量
2. 暗褐色土：ロームブロック少量
3. 暗褐色土：ロームブロック多量
4. 暗褐色土：ロームブロック少量
5. 暗褐色土：ロームブロックやや多量

SK-029

1. 褐色土：ローム粒やや多量
2. 褐色土：ローム粒多量、ロームブロック・白色粘土粒少量
3. 暗褐色土：ローム粒・ロームブロック少量
4. 暗褐色土：ローム粒・ロームブロックやや多量、焼土ブロック微量
5. 褐色土：ローム粒多量、粘土ブロック微量
6. 暗褐色土：ロームブロック・粘土ブロック少量
7. 暗褐色土：粘土ブロック少量
8. 暗褐色土：粘土粒・粘土ブロックやや多量、焼土ブロック微量
9. 褐色土：ロームブロック多量、粘土粒・粘土ブロックやや多量
10. 暗褐色土：ローム粒やや多量、ロームブロック・粘土粒少量

SK-031

1. 暗褐色土：ローム粒・ロームブロック少量
2. 褐色土：ロームブロック多量、ロームブロック少量、粘土ブロック微量
3. 暗褐色土：ロームブロック多量、ロームブロック多量、粘土ブロックやや多量

SK034

1. 黒褐色土：ロームブロック少量
2. 褐色土：ロームブロック多量
3. 暗褐色土：ロームブロック多量
4. 暗褐色土：ロームブロック少量
5. 暗褐色土：ローム粒やや多量、ロームブロック少量
6. 暗褐色土：ロームブロックやや多量、粘土粒やや多量
7. 黒褐色土：ロームブロック多量、白色粘土ブロック少量
8. 暗褐色土：ロームブロックやや多量、白色粘土ブロック少量
9. 暗褐色土：ロームブロック少量、白色粘土ブロックやや多量
10. 暗褐色土：ロームブロック多量、白色粘土ブロックやや多量

第50図 第I地区SK-028・029・031・034・SX-007

土坑

SK-001 (第51図、第3表、図版19)

6G-07グリッドに所在する。北側は調査区域外である。西約0.6mにSK-003が近接する。調査部分から推測し平面形は長方形で、主軸方向はN-9°-Wである。規模は現存長軸長1.6m・短軸長1.2mで、確認面からの深さは0.24mである。底面は平坦で白色粘土が見られる。埋土は白色粘土を含む明灰褐色土の単一土層である。

遺物は土師質土器などの小破片が少量出土しているが、図示できるものはない。

SK-002 (第51図、第3表、図版19)

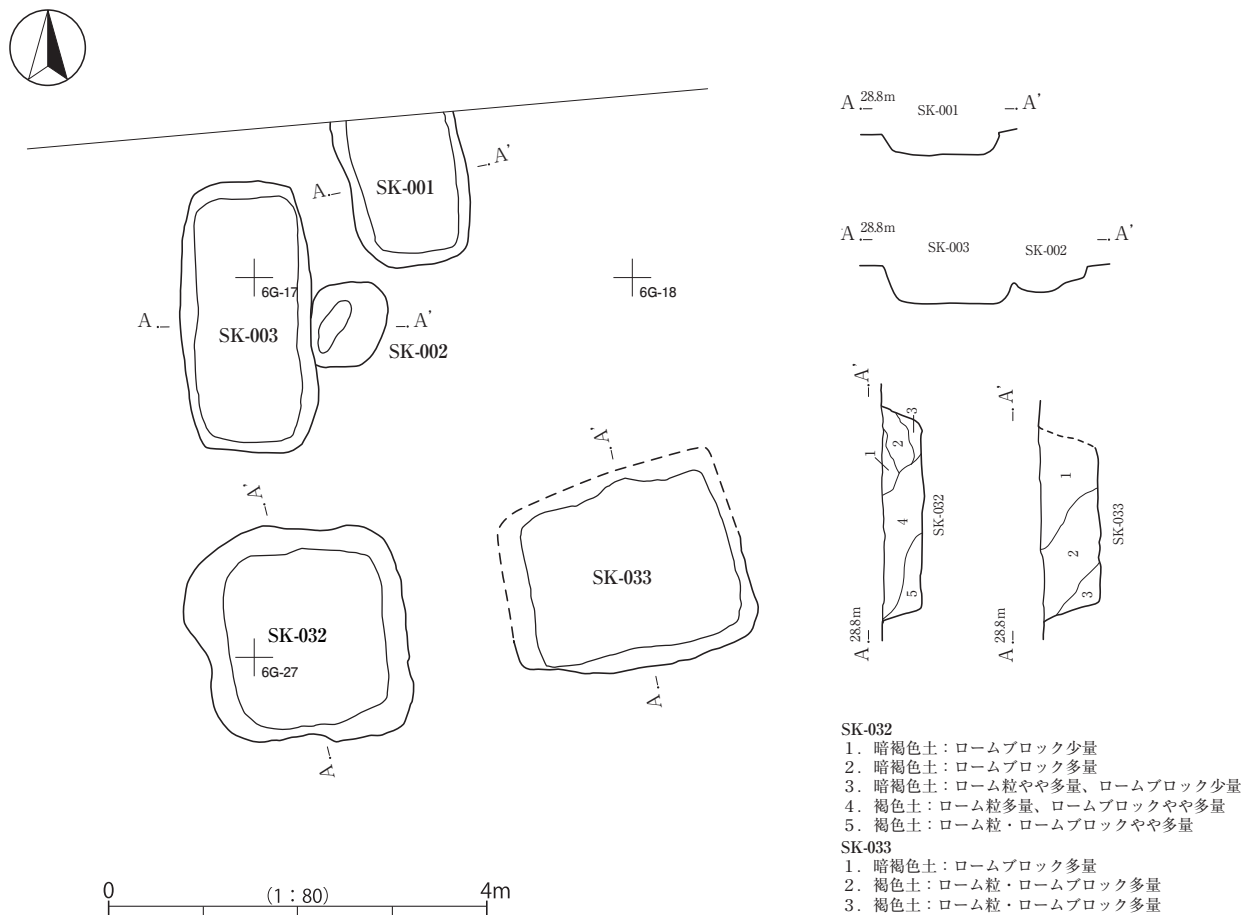
6G-17グリッドに所在する。西側でSK-003と重複するが、新旧関係は不明である。平面形は不整な円形である。規模は径90cmで、確認面からの深さは20cmである。底面は中央部が更に深くなる椀形で白色粘土が見られる。埋土は白色粘土を多く混入する灰褐色土やロームブロックをやや多量に含む灰黒色土が堆積している。

遺物は土師質土器などの小破片が少量出土しているが、図示できるものはない。

SK-003 (第51図、第3表、図版19)

6G-06・07・16・17グリッドに所在する。東側でSK-002と重複するが、新旧関係は不明である。東約0.6mにSK-001、南約0.8mにSK-032が近接する。平面形は長方形で、長軸方向はN-3°-Wである。規模は長軸長2.84m・短軸長1.4mで、確認面からの深さは0.32mである。底面は平坦で白色粘土が見られる。埋土は底面に白色粘土を混入する暗褐色土が堆積し、その上にロームブロックを主体とする褐色土や暗褐色土が堆積している。

遺物は土師質土器などの小破片が少量出土しているが、図示できるものはない。



第51図 第I地区SK-001～003・032・033

SK-025b (第48図、第3表、図版19)

6G-37グリッドに所在する。北東側でSK-025a、南西側でSK-025cと重複するが、新旧関係は不明である。SK-025aの方が深いので北東部分は遺存していない。平面形は長方形で、長軸方向はN-33°-Eである。規模は現存長軸長1.52m・短軸長1.4mで、確認面からの深さは0.22mである。底面は平坦である。

遺物は出土していない。

SK-025c (第48図、第3表、図版19)

6G-37・47グリッドに所在する。北側でSK-025bと重複し、中央部にSX-008のP7があるが、いずれも新旧

関係は不明である。平面形は長方形で、長軸方向はN-32° -Eである。規模は長軸長2.21m・短軸長1.18mで、確認面からの深さは0.14mである。底面は平坦である。

遺物は出土していない。

SK-031(第50図、第3表、図版19)

6G-15・16グリッドに所在する。北側は一部攪乱を受ける。下端のラインは断面図等からの推定である。平面形は長方形で、主軸方向はN-87° -Eである。規模は長軸長1.7m・短軸長1.08mで、確認面からの深さは0.88mである。記録写真では底面は平坦で白色粘土が見られる。埋土はローム粒やロームブロックを多量に含む褐色土・暗褐色土が堆積し、下層ほど白色粘土粒が多く含まれる。人為的に埋め戻されたと推測される。

本遺構に伴う遺物は出土していない。

土坑群(ピット群)

SX-007(第50図、第3・13表、図版18)

6G-14・15・24・25グリッドに所在する。ピットは7基である。P6・P7がSK-028と重複し、本遺構の方が新しい。P2～P7は直線状に並び、走行方向はN-2° -Wである。P1は走行方向に対して80° 東の方向にある。各ピットの規模等は第13表のとおりである。ピット間の芯々の距離はP1とP2は約3.0m、P2とP4及びP4とP7は約2.5mである。走行方向やピット間距離に一定の企画性が見られることから、柵列ないし簡易な囲いのようなものと推測される。

遺物は出土していない。

第13表 SX-007ピット計測表

単位：m ()推定値 < >現存値

番号	形状	長軸	短軸	深さ	番号	形状	長軸	短軸	深さ	番号	形状	長軸	短軸	深さ
P1	円形	0.52	0.47	0.26	P2	楕円形	0.59	0.37	0.53	P3	円形	0.31	0.22	0.22
P4	円形	0.40	0.30	0.22	P5	円形	0.36	0.36	0.35	P6	円形	<0.37>	<0.32>	(0.72)
P7	楕円形	<0.50>	<0.34>	(0.65)										

※P5・P6の深さは、SK-028の確認面からの深さを加えた推定数値

SX-008(第48図、第3・14表、図版19)

6G-27・28・37・38・47グリッドに所在する。ピットは7基である。P1とP6がSK-025a、P7がSK-025cの中にあるが、いずれも新旧関係は不明である。P1～P5は直線状に並び、走行方向はN-27° -Eである。P6は走行方向に対して80°、P7は走行方向に対して90°それぞれ西の方向にある。各ピットの規模等は第14表のとおりである。ピット間の芯々の距離はP1～P5が順に2.2m・1.2m・0.8m・2.5mで、P2とP6が1.7m、P4とP7が1.3mである。走行方向がSX-001の東端の傾斜変換線と同じで、ピット間距離に一定の企画性が見られることから、SX-007と同様に柵列ないし簡易な囲いのようなものと推測される。

遺物は出土していない。

第14表 SX-008ピット計測表

単位：m ()推定値 < >現存値

番号	形状	長軸	短軸	深さ	番号	形状	長軸	短軸	深さ	番号	形状	長軸	短軸	深さ
P1	円形	0.48	0.48	0.38	P2	楕円形	0.62	0.40	0.30	P3	楕円形	0.96	0.32	0.53
P4	長楕円形	0.53	0.38	0.68	P5	楕円形	0.40	0.27	0.37	P6	円形	0.34	0.34	0.21
P7	円形	0.40	0.40	0.38										

(2) 第Ⅱ地区

第Ⅱ地区は6G-08・09・18・19・28・29・38・39・47～49・57～59、6H-00・01・10～12・20～22・30～32・40～42・50～52グリッドに所在する。この地区の遺構は掘立柱建物跡1軒・地下式坑1基・竪穴状遺構5基・土坑2基・土坑群(ピット群)2か所である。

掘立柱建物跡

SB-003(第52図、第2・15表、図版20)

6G-39・49、6H-30・40グリッドに所在する。北側でSK-022・023と重複するが、新旧関係は不明である。発掘調査時にはSX-009ピット群との区分が明確ではなかったが、図面上の検討でP1～P12を本遺構の柱穴と判断した。記録写真でSK-023の南側に僅かな段差を確認できることから、本遺構を作る際に周辺を整地したと推測される。本遺構はP1～P7が支柱穴となる2間×2間の掘立柱建物跡である。規模は東側の桁行芯々距離が北から順に2.26m・1.6m、西側の桁行が北から順に1.96m・1.82mである。南側の梁行芯々距離が西から順に1.66m・1.48m、北側の梁行が西から2.1m・1.26mである。東側の桁行方向はN-14°-Wである。P3は平面形が楕円形であり、柱の抜き取り痕跡と思われる。各ピットの規模等は第15表のとおりである。P9～P12は支柱穴と比べて小さく浅いが、支柱穴の内側ないし外側に隣接していることから、建て替えが行われたと推測される。

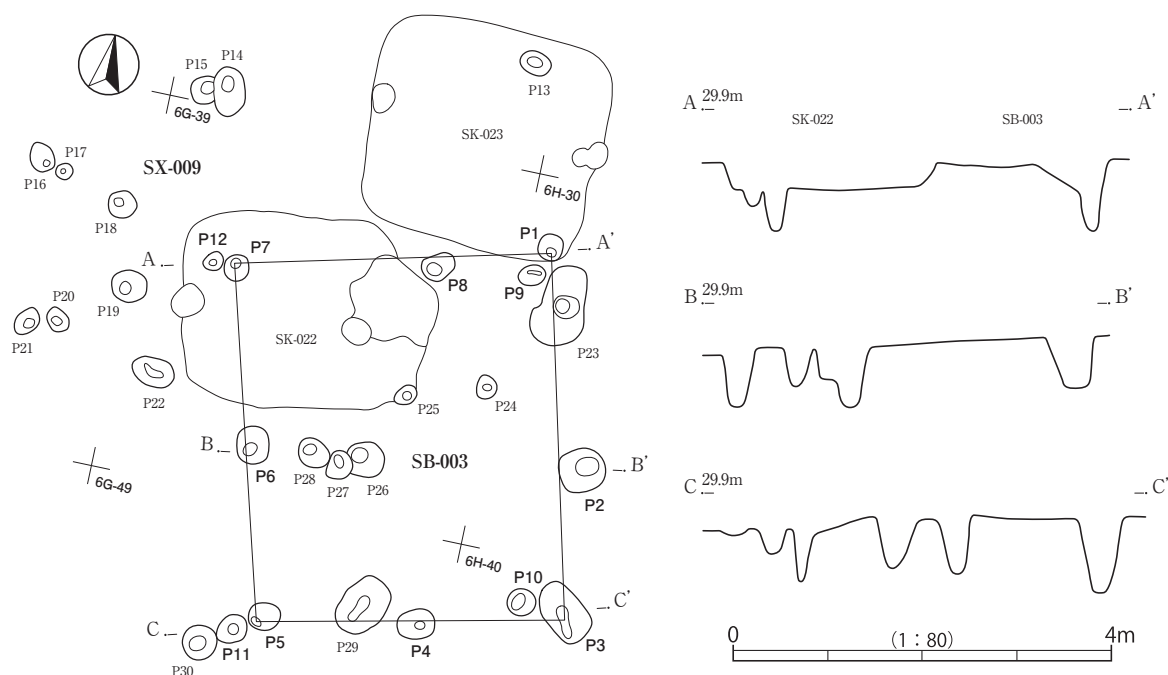
本遺構に伴う遺物は出土していない。

第15表 SB-003柱穴計測表

単位：m ()推定値 < >現存値

番号	形状	長軸	短軸	深さ	番号	形状	長軸	短軸	深さ	番号	形状	長軸	短軸	深さ
P1	円形	0.30	0.25	0.72	P2	円形	0.48	0.48	0.55	P3	楕円形	0.68	0.40	0.89
P4	円形	0.41	0.32	0.65	P5	円形	0.34	0.31	0.57	P6	円形	0.38	0.35	0.63
P7	円形	0.29	0.27	(0.63)	P8	円形	0.37	0.27	0.30	P9	円形	0.30	0.22	0.32
P10	円形	0.31	0.28	0.71	P11	円形	0.34	0.28	0.32	P12	円形	0.22	0.20	(0.38)

※P7・P12の深さは、SK-022の確認面からの深さを加えた推定数値



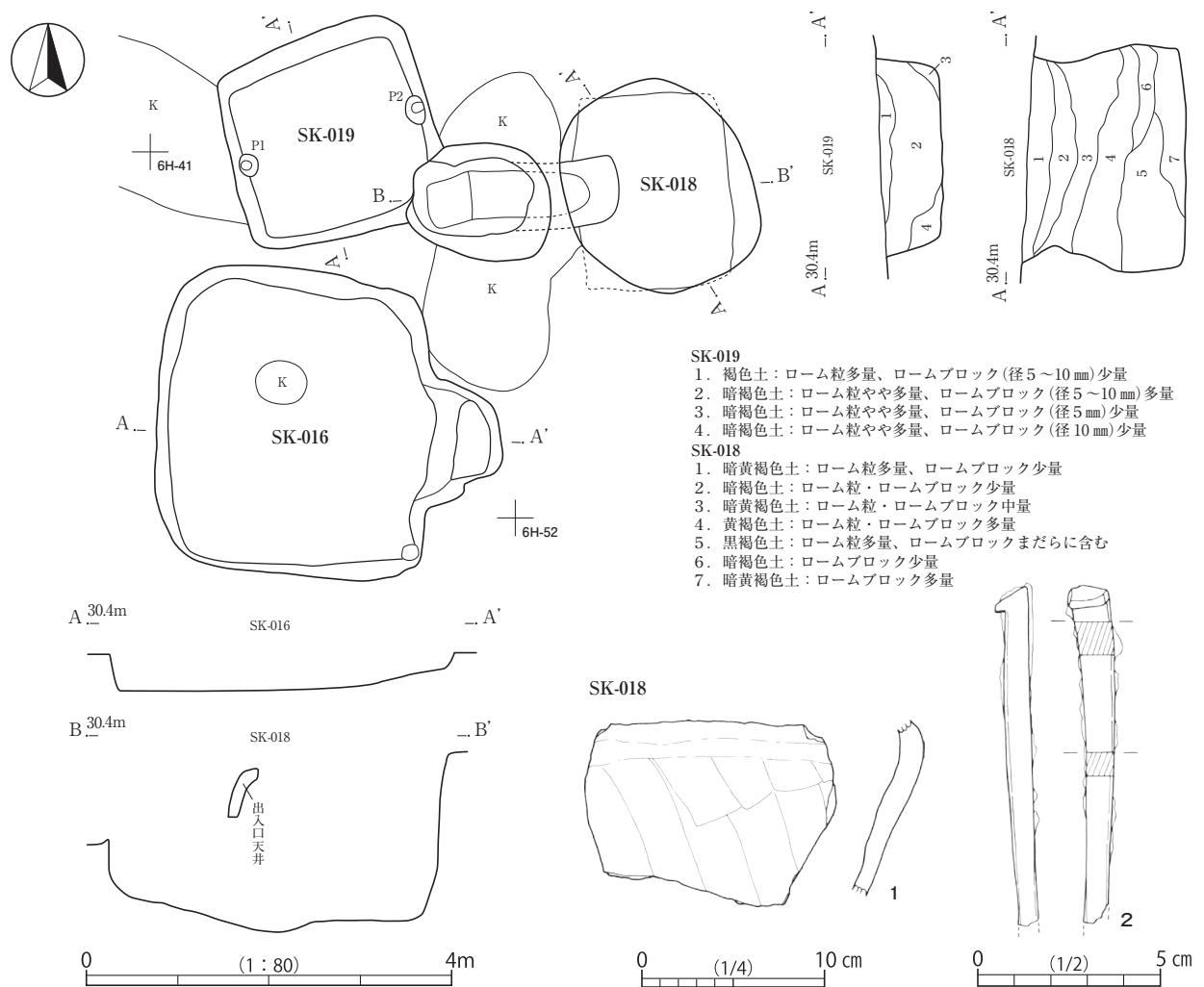
第52図 第Ⅱ地区SB-003・SX-009

地下式坑

SK-018(第53図、第3・22表、図版20・38)

6H-31・32・41・42グリッドに所在する。西側でSK-019と重複し、本遺構の方が新しい。出入口上面は攪乱を受けている。主室の平面形は隅丸長方形である。規模は長軸長2.30m・短軸長2.05mで、確認面からの深さは1.80mである。底面の形状は長方形で四隅がしっかり掘られている。底面の規模は長軸長2.12m・短軸長1.68mで、長軸方向はN-2°-Wである。底面はほぼ平坦で出入口に続く部分は深くなり、壁はややオーバーハングするように立ち上がる。出入口は西側長辺に作られ、長さ2.26m・幅0.7mで主室底面より約0.10m低く、底面から14°の角度で出入口の立坑壁に向かって傾斜している。長短軸交点から見た方向はN-93°-Wである。主室・出入口ともに底面及び壁下部に白色粘土が見られ、SK-001などに類似している。天井部は遺構検出時に既に崩落し、出入口部分にのみ一部残存する。埋土は全体的にローム粒やロームブロックを主体とする暗黄褐色土と黒褐色土・暗褐色土などが交互に堆積していることから、人為的に埋め戻されたと推測される。

遺物は土師質土器破片などが出土し、須恵器やロクロ土師器などの古い時期の遺物が多く混入している。図示できた遺物は瓦質土器1点、鉄製品1点である。1は瓦質土器の大甕の肩部破片で、肩部は丸く外側に張



第53図 第Ⅱ地区SK-016・018・019

り出す。外面はヘラナデ、内面はナデが施される。2は鉄の角釘である。先端部が欠損している。現存長92.0mm・最大幅11.5mm・最大厚さ10.0mm・現存重さ22.0gである。

竪穴状遺構

SK-015(第54図、第3表、図版20・38)

6G-47・48・57・58グリッドに所在する。第I地区東端に隣接する一段高い場所にある。緩斜面に立地するため北側のプランが不明瞭であるが、平面形は長方形で、長軸方向はN-90°-Eである。規模は長軸長3.28m・短軸長1.96m~2.24mで、確認面からの深さは0.32mである。ピットを中央に1基と壁沿いに2基検出した。P1は径64cm・底面からの深さ19cm、P2は径28cm・底面からの深さ22cm、P3は径48cm・底面からの深さ22cmである。埋土は比較的大きいロームブロックを多量に含んだ暗褐色土などが堆積していることから、人為的に埋め戻されたと推測される。

遺物は、土師質土器破片などが出土し、須恵器やロクロ土師器などの古い時期の遺物が混入している。図示できた遺物は砥石1点である。1は砂岩製の砥石である。破損部の稜線上にも削痕が確認されることから、破損後も使用が継続されたと考えられる。最大長74.5mm・最大幅30.0mm・最大厚31.0mm・重量96.24gである。

SK-016(第53図、第3表、図版20)

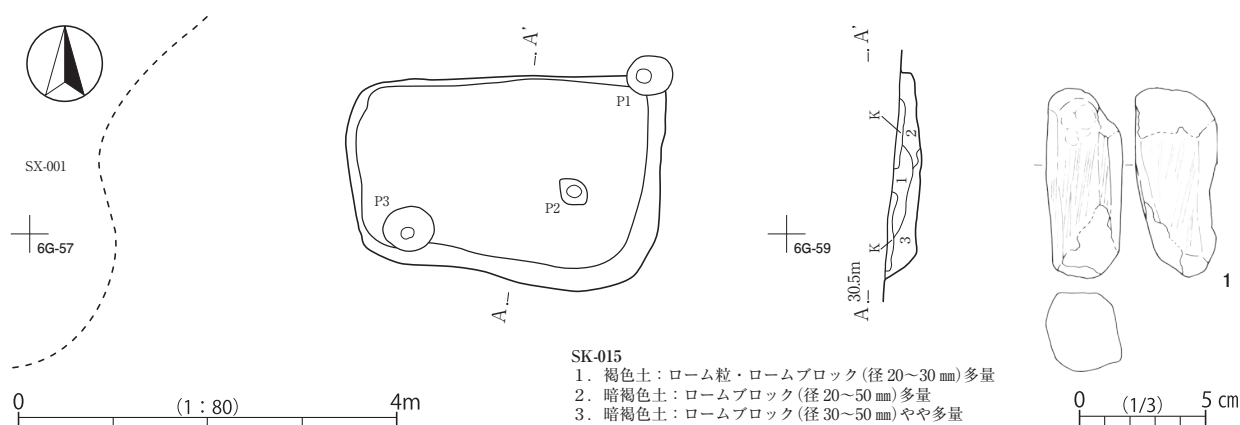
6H-41・51グリッドに所在する。北約0.2mにSK-019が近接する。東辺壁と底面の一部に攪乱を受けている。平面形は東辺中央に突出部のある長方形で、長軸方向はN-4°-Eである。規模は長軸長3.32m・短軸長3.04mで、確認面からの深さは0.25mである。東辺突出部は底面より5cmほど高くなっている。

図示できる遺物は出土していない。

SK-019(第53図、第3表、図版20)

6H-31・41グリッドに所在する。南東隅でSK-018と重複し、本遺構の方が古い。西側の壁上面に攪乱を受けている。平面形はほぼ方形で、軸方向はN-15°-Wである。規模は一辺2.24mで、確認面からの深さは0.44mである。東西両壁の壁沿いの中央にピットがあり、簡易な屋根の柱跡と推測される。P1は径21cm・底面からの深さ8cm、P2は径34cm・底面からの深さ22cmである。埋土はローム粒やロームブロックを主体とする暗褐色土が厚く堆積していることから、人為的に埋め戻されたと推測される。

図示できる遺物は出土していない。



第54図 第II地区SK-015

SK-022(第55図、第3表、図版20)

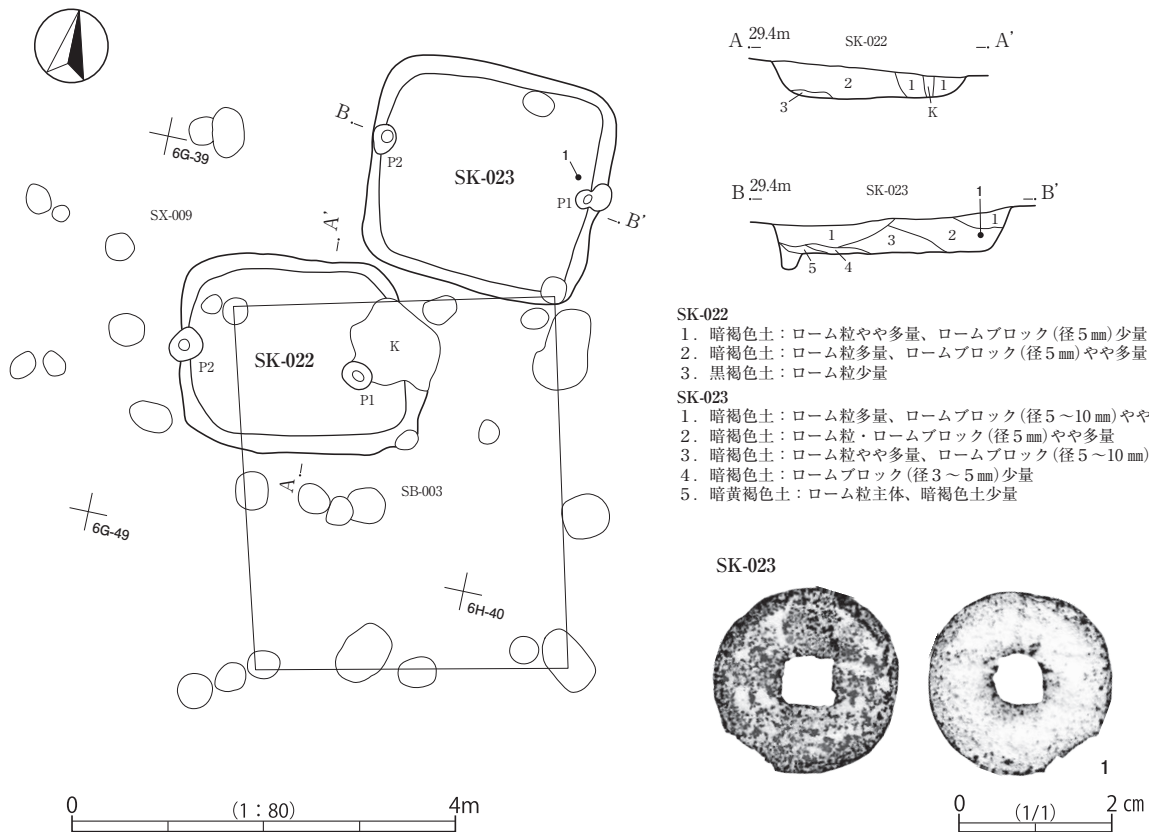
6G-39グリッドに所在する。遺構内にSB-003の柱穴とSX-009のピットがあるが、新旧関係は不明である。東側に底面まで及ぶ攪乱を受けている。北東約0.1mにSK-023が近接する。平面形は長方形で、長軸方向はN-80° -Eである。規模は長軸長2.53m・短軸長2.0mで、確認面からの深さは0.42mである。西壁沿いの中央と東壁寄りにピットがあり、簡易な屋根の柱跡と推測される。P1は径32cm・底面からの深さ32cm、P2は長径30cm・短径26cm・底面からの深さ15cmである。埋土はローム粒やロームブロックを多量に含む暗褐色土が厚く堆積しており、人為的に埋め戻されたと推測される。

図示できる遺物は出土していない。

SK-023(第55図、第3表、図版20・38)

6G-29・39、6H-20・30グリッドに所在する。遺構内にSB-003の柱穴とSX-009のピットがあるが、新旧関係は不明である。南西約0.1mにSK-022が近接する。平面形はほぼ方形で、長軸方向はN-90° -Eである。規模は長軸長2.50m・短軸長2.34mで、確認面からの深さは0.47mである。東西両壁の壁沿いの中央にピットがあり、簡易な屋根の柱跡と推測される。P2は径29cm・底面からの深さ11cm、P4は径36cm・底面からの深さ6cmである。埋土はローム粒やロームブロックを含む暗褐色土であり、堆積状況から、人為的に埋め戻されたと推測される。

遺構に伴う遺物は図示した銭貨1点だけである。1は北宋銭の熙寧元宝である。書体は真書で、背文は無文である。縁外径24.5mm・縁内径21.0mm・郭外径7.5mm・郭内径5.8mm・縁厚1.0mm・重さ2.34gである。初鑄年は1068年である。腐食が進んでいる。



第55図 第Ⅱ地区SK-022・023

土坑

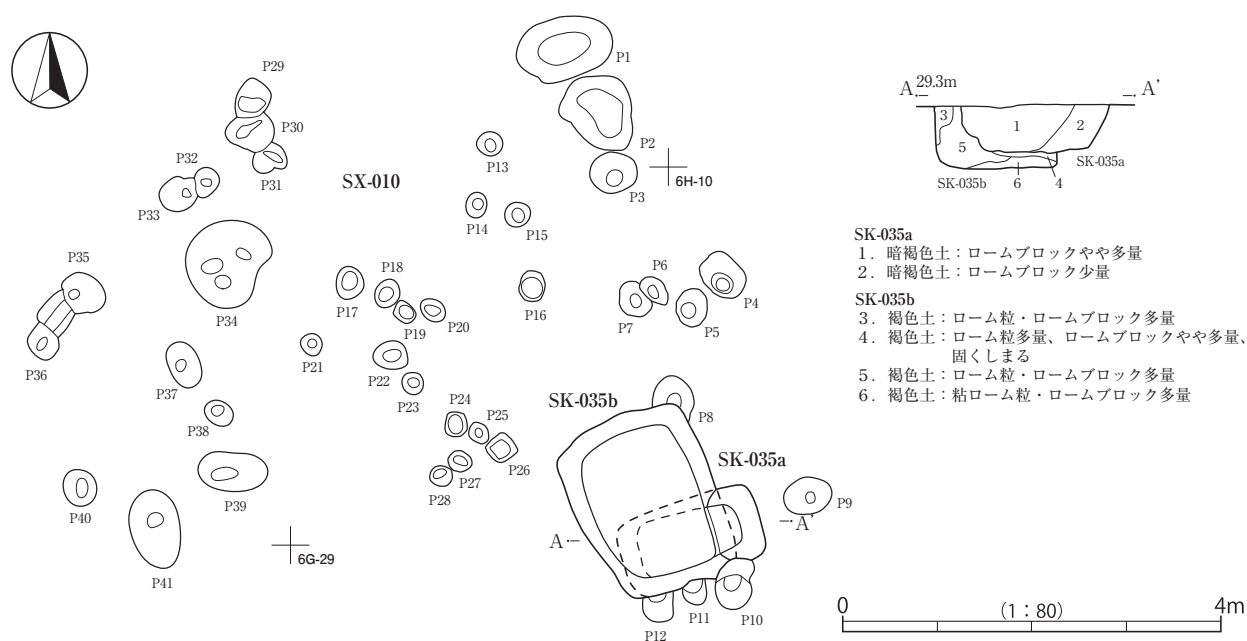
SK-035a・b(第56図、第3表、図版21)

6G-19・29、6H-10・20グリッドに所在する。発掘調査時に単一遺構として調査していたが、2基の土坑が重複していることから、南側のものをSK-035a、北側のものをSK-035bとした。埋土の状況は、SK-035bはローム粒やロームブロックを多量に含む褐色土が主体で、SK-035aはロームブロックを含む暗褐色土が主体である。土層の違いが明らかでSK-035aの方が新しい。いずれも埋土の堆積状況から人為的に埋め戻されたと推測される。周辺にSX-010ピット群があり、一部重複しているが、本遺構との新旧関係は不明である。

SK-035aは、平面形は長方形で、長軸方向はN-71°-Eである。推定規模は長軸長1.52m・短軸長0.88mで、確認面からの深さは0.50mである。南側長辺はSK-035bの南側短辺と重なる。

SK-035bは、平面形は長方形で、長軸方向はN-21°-Wである。長軸長1.94m・短軸長1.52mで、確認面からの深さは0.67mである。底面はやや丸味をおびる。

図示できる遺物は出土していない。



第56図 第Ⅱ地区SK-035a・b・SX-010

土坑群(ピット群)

SX-009(第52図、第3・16表、図版20)

6G-29・38・39・49、6H-30グリッドに所在する。SB-003とSK-022・023と重複するが、発掘調査時にはそれぞれのピットの帰属が必ずしも明確ではなく、整理作業時に図面上の検討によりSB-003とSK-022・023の柱穴を除いたP13～P30を本遺構のピットとした。ピットは17基で、比較的小形である。各ピットの規模等は第16表のとおりである。

本遺構に伴う遺物は出土していない。

第16表 SX-009ピット計測表

単位：m ()推定値 < >現存値

番号	形状	長軸	短軸	深さ	番号	形状	長軸	短軸	深さ	番号	形状	長軸	短軸	深さ
P13	円形	0.34	0.24	(0.56)	P14	楕円形	0.52	0.32	0.51	P15	円形	0.28	<0.25>	0.18
P16	円形	0.33	0.26	0.39	P17	円形	0.18	0.18	0.24	P18	円形	0.30	0.30	0.15
P19	円形	0.37	0.33	0.56	P20	円形	0.29	0.22	0.16	P21	円形	0.33	0.23	0.40
P22	楕円形	0.46	0.30	0.24	P23	楕円形	0.87	0.54	0.34	P24	円形	0.27	0.23	0.23
P25	円形	0.26	<0.20>	0.26	P26	円形	0.38	<0.35>	0.68	P27	円形	0.30	0.29	0.34
P28	円形	0.37	0.29	0.48	P29	楕円形	0.65	0.46	0.43	P30	円形	0.37	0.37	0.33

SX-010(第56図、第3・17表、図版20)

6G-08・09・18・19・28・29、6H-10・20グリッドに所在する。ピットは41基で、やや大形と小形のものがある。各ピットの規模等は第17表のとおりである。南東側でSK-035a・bと重複するが、新旧関係は不明である。発掘調査時及び整理作業時に掘立柱建物跡や柵列などの遺構を想定することはできなかった。

本遺構に伴う遺物は出土していない。

第17表 SX-010ピット計測表

単位：m ()推定値 < >現存値

番号	形状	長軸	短軸	深さ	番号	形状	長軸	短軸	深さ	番号	形状	長軸	短軸	深さ
P1	楕円形	1.03	0.65	0.65	P2	楕円形	0.90	0.70	0.39	P3	円形	0.52	0.44	0.62
P4	円形	0.51	0.40	0.26	P5	円形	0.42	0.34	0.47	P6	円形	0.38	<0.24>	0.43
P7	円形	0.40	<0.30>	0.37	P8	円形	0.45	<0.30>	0.34	P9	円形	0.53	0.40	0.65
P10	円形	<0.53>	0.38	0.36	P11	円形	<0.26>	0.26	0.24	P12	円形	<0.28>	0.32	0.20
P13	円形	0.28	0.26	0.18	P14	円形	0.27	0.22	0.10	P15	円形	0.27	0.27	0.14
P16	円形	0.31	0.28	0.12	P17	円形	0.36	0.28	0.07	P18	円形	0.33	0.25	0.05
P19	円形	0.26	0.18	0.06	P20	円形	0.29	0.22	0.09	P21	円形	0.24	0.22	0.07
P22	円形	0.38	0.28	0.11	P23	円形	0.26	0.21	0.09	P24	円形	0.27	0.23	0.07
P25	円形	0.26	0.21	0.20	P26	円形	0.30	0.28	0.12	P27	円形	0.28	0.23	0.28
P28	円形	0.26	0.22	0.22	P29	円形	0.44	0.33	0.25	P30	円形	0.48	0.43	0.23
P31	円形	0.35	<0.30>	0.16	P32	円形	0.32	0.25	0.14	P33	円形	<0.50>	0.36	0.50
P34	円形	0.92	0.84	0.40	P35	円形	0.48	0.43	0.54	P36	円形	0.36	0.30	0.29
P37	楕円形	0.50	0.32	0.41	P38	円形	0.35	0.27	0.15	P39	楕円形	0.74	0.40	0.43
P40	円形	0.38	0.38	0.22	P41	楕円形	0.85	0.52	0.41					

(3) 第Ⅲ地区

第Ⅲ地区は6H-02～05・12～16・22～26・32～36・42～46グリッドに所在する。この地区は傾斜面地には全く遺構がなく、東端の掘り込みに沿ってSX-003土坑群だけがある。

土坑群(ピット群)

SX-003(第57図、第3・18表、図版21)

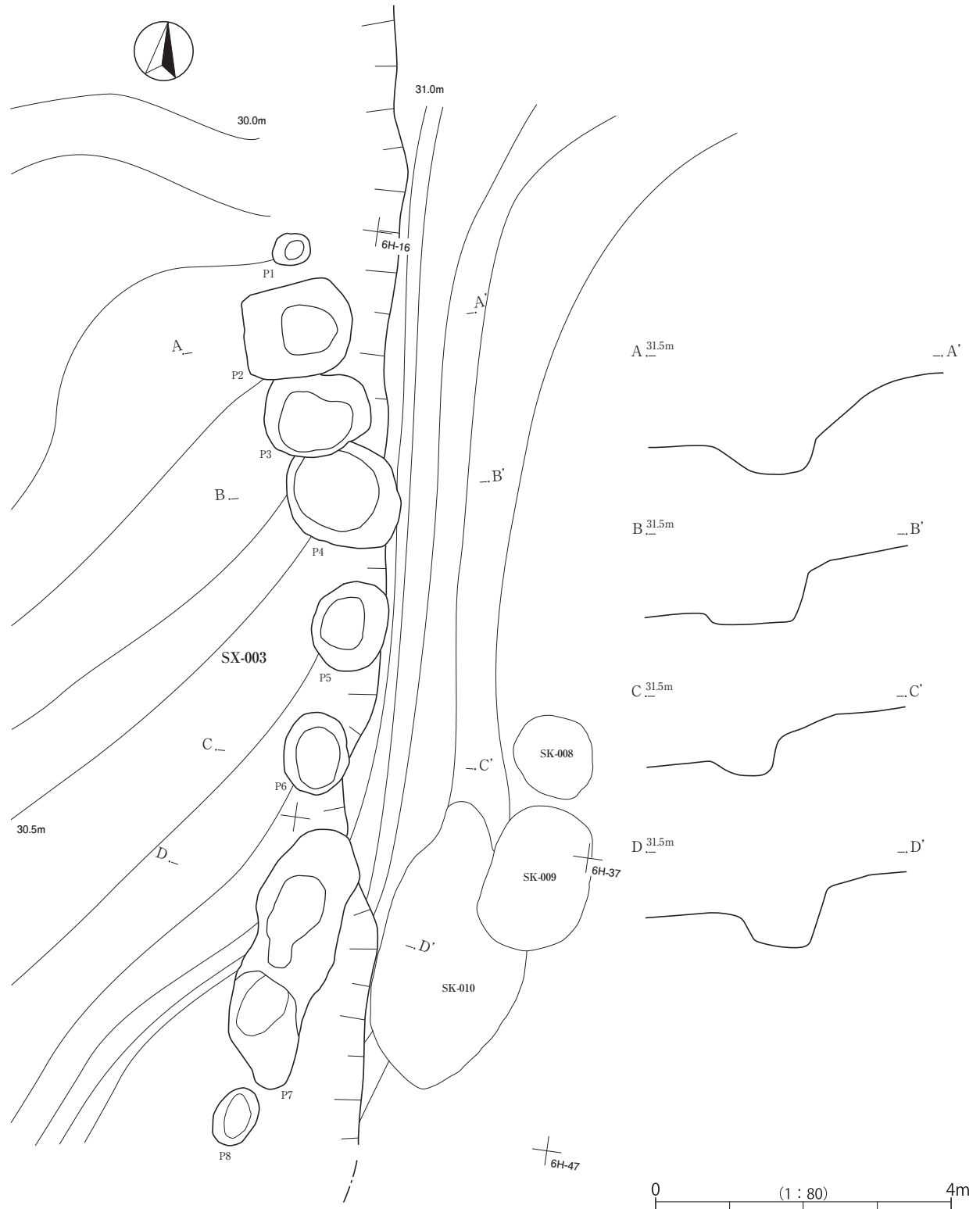
6H-15・16・25・26・35・36・45・46グリッドに所在する。土坑は8基で、南北に連なっている。土坑の多くが台地整形区画の掘り込みと重複し、埋土の記録がないため新旧関係は不明であるが、台地整形区画の東端に沿って掘られていることから、台地整形区画に関連する土坑群であると判断した。P2～P4は重複するが、新旧関係は不明である。P7は2基の土坑が重なっているように見えるが、詳細は不明である。各ピットの規模等は第18表のとおりである。平面形は円形ないし楕円形で、規模は径0.8m以下のP1・P8と径1m前後のP5・P6、長軸長1.5m前後のP2～P4に分けることができる。第18表の深さは、台地整形区画の掘り込み底面からの深さである。P2～P7については、図面や記録写真などから台地整形区画の掘り込み壁面を削って作られていることが明らかである。

遺物は出土していない。

第18表 SX-003ピット計測表

単位：m ()推定値 < >現存値

番号	形状	長軸	短軸	深さ	番号	形状	長軸	短軸	深さ	番号	形状	長軸	短軸	深さ
P1	円形	0.50	0.42	0.24	P2	方形	1.47	1.24	0.30	P3	楕円形	1.42	1.10	0.44
P4	楕円形	1.60	1.38	0.07	P5	楕円形	1.20	0.98	0.16	P6	楕円形	1.10	0.88	0.12
P7	長楕円形	3.56	1.18	0.23	P8	楕円形	0.79	0.58	0.16					



第57図 第三地区SX-003

2 南側台地整形区画(第58図、図版21・22)

本区画は、7G-29・39、7H-11～13・20～25・30～35・40～46・51～57・62～68・73～79・84～89・95～99、7I-80・90・91、8H-05～09・16～19・26～19、8I-00・01・10・11・20・21グリッドに所在する。範囲は北東から南西方向16m以上、北西から南東方向60m以上である。本区画はトレンチによる確認調査で南西側の谷を臨む台地縁辺部と傾斜地を整形していることが明らかになったが、南側の範囲は土砂流出等の危険が予想されたことから、表土除去を行わず確認調査による記録作成に止めることとした。本区画は台地縁辺部に平坦面を作り出しているSX-004と、傾斜面を階段状に掘削して下部に平坦面を作り出しているSX-005の2つの土地整形遺構が重複しているものである。SX-004の範囲内には土坑9基とピット21基がある。

土地整形遺構

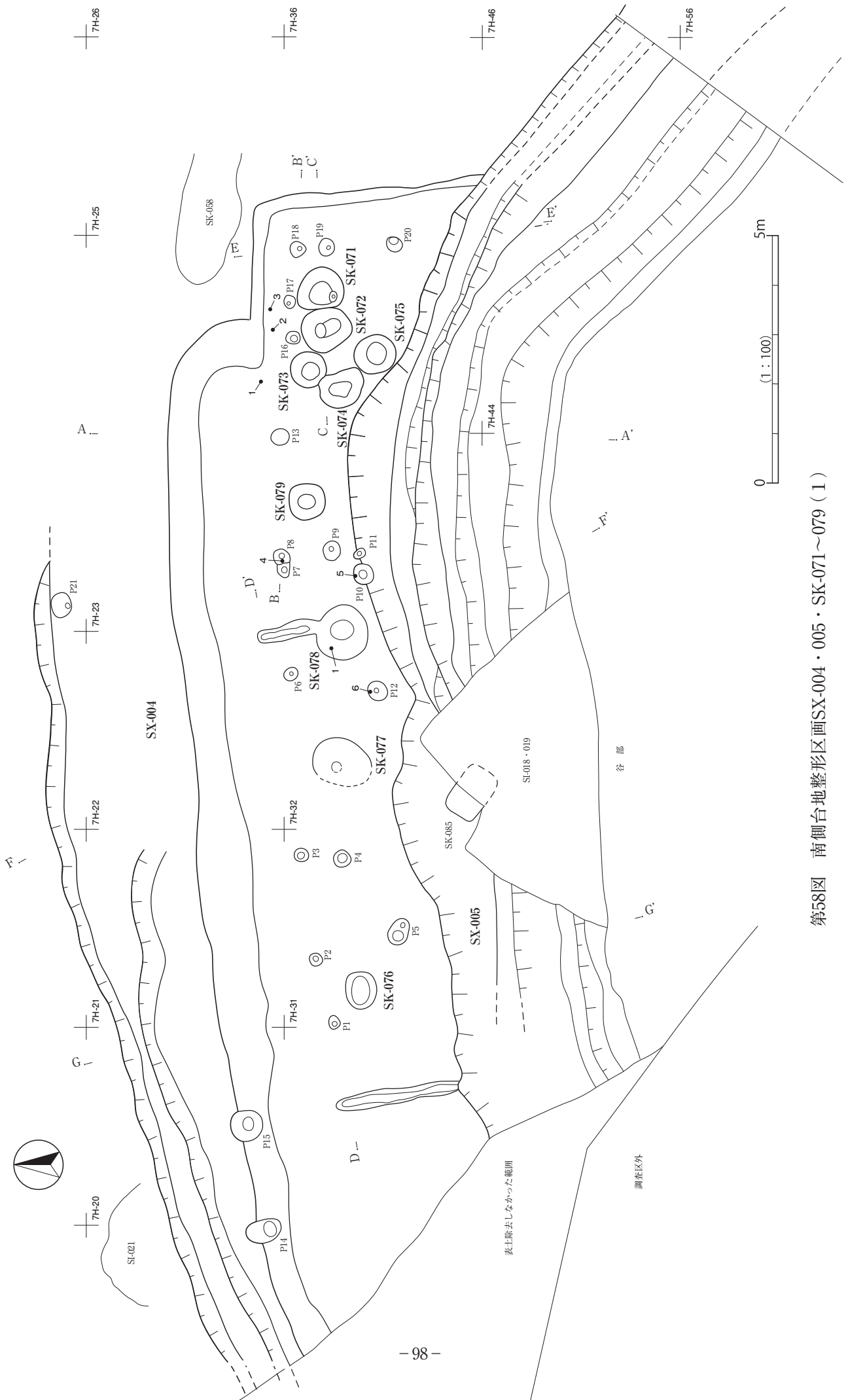
SX-004(第58・59図、第3・19・22・23表、図版21～23・39)

本遺構は、7G-29・39、7H-11～13・20～25・30～35グリッドに所在する。規模は東西24m以上・南北7mの範囲である。北側に2段の階段状の整形があり、その下に平場状整形が行われている。平場状整形の東端の方形に張り出している部分については、発掘調査時に竪穴住居跡と想定しSI-016の番号を付けて調査したが、整理作業において遺物や調査記録を精査した結果、竪穴住居跡ではないと判断した。西側の調査区外に接する部分は、危険防止の観点から表土除去を行わなかった。北側の階段状整形は西側の奥行きが約30cmと狭く、東側に行くほど広がるが、掘り込みは次第に不明確になる。深さはいずれも15cm～25cmである。底面は平坦ではなく、南に向かって低くなり、東西方向は地形に沿って西から東に向かって高くなっている。この中にはピットが3基ある。平場状整形は現状で幅(東西長)23m・奥行き(南北長)4.5mの範囲で遺存している。全体の形状は長方形で、東端は張り出している。北壁は西側と東側がなだらかに掘り込まれ、深さは20cm～30cmと浅い。P15とP8の間の壁は、斜めであるがしっかりと掘り込まれ、深さは60cm～80cmと深い。東端の張り出し部の壁はかなり鋭角に掘り込まれているが、深さは20cm～40cmである。内側に9基の土坑と18基のピット、2条の間仕切り状の溝がある。これらのうち2条の間仕切り状の溝端部とその内側のP1～P3は直線状に並んでいる。また、P6～P8・P13・P16～P18も多少のずれはあるものの、ほぼ直線状に並んでいる。P18～P20は東端壁に沿って直線状に並んでいる。これらの並び方向は、近接する北壁の方向ともほぼ一致することから、簡易な掘立柱建物跡などの柱穴と推測される。本遺構は奥行きが狭く、ピットや間仕切り状の溝がSX-005と重複していることなどから、本来は南側がもっと広く整形されていたが、SX-005によって削平されたと推測される。

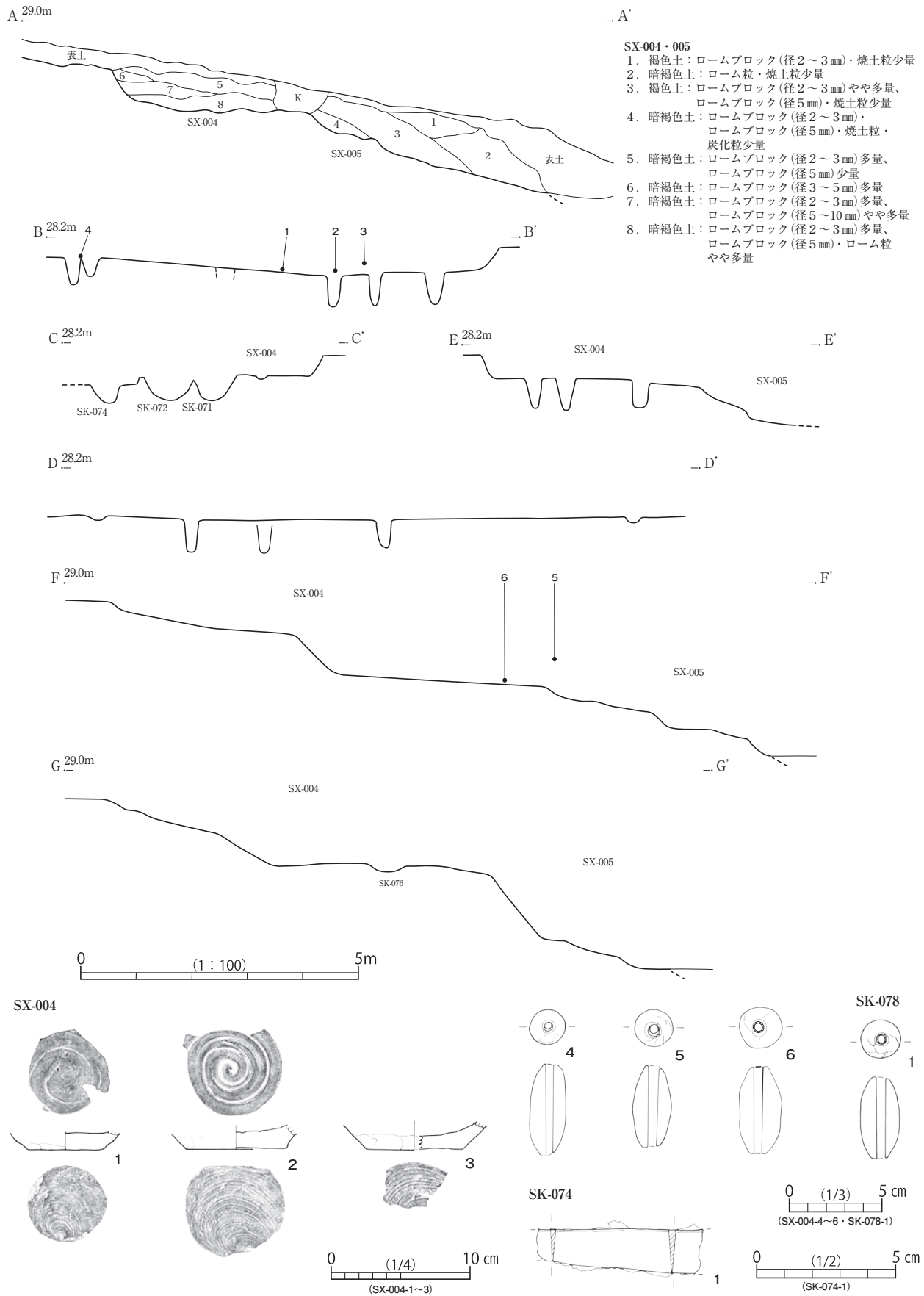
遺物は全て平場状整形部分から出土している。土師器片などの小破片が多量に出土しているが、本遺構に伴うものは少なく、図示できた遺物は土師質土器など6点である。1～3は土師質土器の杯底部である。1・2は底部内面に強いロクロナデによる凹凸が見られる。全て底部は回転糸切り離し、無調整で、体部外面はヘラ削り調整が施される。4～6は管状土錘で、紡錘形をしている。3点とも片側からの穿孔で、ナデと丁寧なミガキが施される。5・6は穿孔の後に、両端を丁寧に調整している。

SX-005(第58・59図、第3表、図版21～23)

7H-30～35・40～46・51～57・62～68・73～79・84～89・95～99、7I-80・90・91、8H-05～09・16～19・26～19、8I-00・01・10・11・20・21グリッドに所在する。本遺構が更に南側に続いていることを確認トレンチで確認したが、土砂流出等の危険が予想されたことからこの部分の表土除去は行わず、トレンチによる検出状況の記録作成に止め調査を終了した。また、表土除去を行った範囲についても、SI-018・019の壁溝



第58図 南側台地整形区画SX-004・005・SK-071～079 (1)



第59図 南側台地整形区画SX-004・005・SK-071～079(2)

の一部を検出した確認面を本遺構下部の平坦面とし、それ以下は掘り下げていない。規模は推定で幅(北西～南東長)54m・奥行き(北東～南西長)20mの範囲である。本遺構の傾斜は、現地形の等高線にもはっきりと表れていることから、南西側斜面を整形した弧状の階段状遺構と推測される。SX-004底面からの深さと傾斜角度は、西端で1.8mと26°、SI-019の東端付近で1.44mと22°、SX-004の東端付近で0.95mと14°であり、東に行くほど浅く傾斜角度が緩くなっている。各段の掘り込みには、幅や高さなどに規則性は見られない。遺物は土師器等の小破片だけで、本遺構に伴うものは出土していない。

第19表 SX-004ピット計測表

単位：m ()推定値 < >現存値

番号	形状	長軸	短軸	深さ	番号	形状	長軸	短軸	深さ	番号	形状	長軸	短軸	深さ
P1	円形	0.26	0.21	0.64	P2	円形	0.28	0.28	0.59	P3	円形	0.30	0.26	0.54
P4	円形	0.35	0.35	0.45	P5	楕円形	0.56	0.40	0.68	P6	円形	0.31	0.24	0.46
P7	円形	<0.33>	0.25	0.47	P8	円形	0.33	<0.30>	0.35	P9	円形	0.41	0.36	0.57
P10	円形	0.40	0.38	0.87	P11	円形	0.28	0.18	0.27	P12	円形	0.42	0.36	0.93
P13	円形	(0.36)	(0.36)	-	P14	楕円形	0.73	0.46	0.24	P15	円形	0.66	<0.61>	0.52
P16	円形	0.30	0.23	0.46	P17	円形	0.27	0.22	0.49	P18	円形	0.33	0.33	0.55
P19	円形	0.37	0.33	0.50	P20	円形	0.32	0.28	0.49	P21	円形	0.54	0.42	0.31

土坑

SK-071～075(第58・59図、第3表、図版21・39)

7H-34グリッドに所在する。SX-004の東端の張り出し部にあり、それぞれ重複ないし隣接するが、新旧関係は不明である。平面形は円形ないし楕円形である。規模は長径80cm～100cm・短径70cm～90cm・深さ40cm前後と類似しており、同じ目的で、ほぼ同じ場所に作り替えられたと推測される。

遺物はSK-074から鉄製品が1点出土している。1は刀子で、埋土中からの一括資料である。刀身の一部と考えられる。現存長49.0mm・幅15.0mm・厚さ3.0mm・現存の重さ10.73gである。

SK-076～079(第58・59図、第3・23表、図版21・39)

7H-31～33グリッドに所在する。東西にはほぼ直線状に並んでいる。SK-077の西側半分は記録不備のため推定である。土坑間の距離はSK-076とSK-077が約3.8m、SK-077とSK-078が1.6m、SK-078とSK-079が1.8mであるが、いずれも北壁から約1.5mの場所にある。規模は中央のSK-077・078が径約110cm・深さ50cm前後、両脇のSK-076・079が長径76cm・短径65cm前後・深さ15cm前後である。SK-078は北側で間仕切り状の溝と接するが、溝は南側には延びていない。

遺物はSK-078から土製品が1点出土している。1は管状土錘である。SX-004の4～6の管状土錘と形状や大きさが近似した紡錘形である。ナデと磨きが施され、SX-004の5・6と同様に、上部からの穿孔の後、両端を丁寧に調整している。縦方向に接合痕が確認できる。

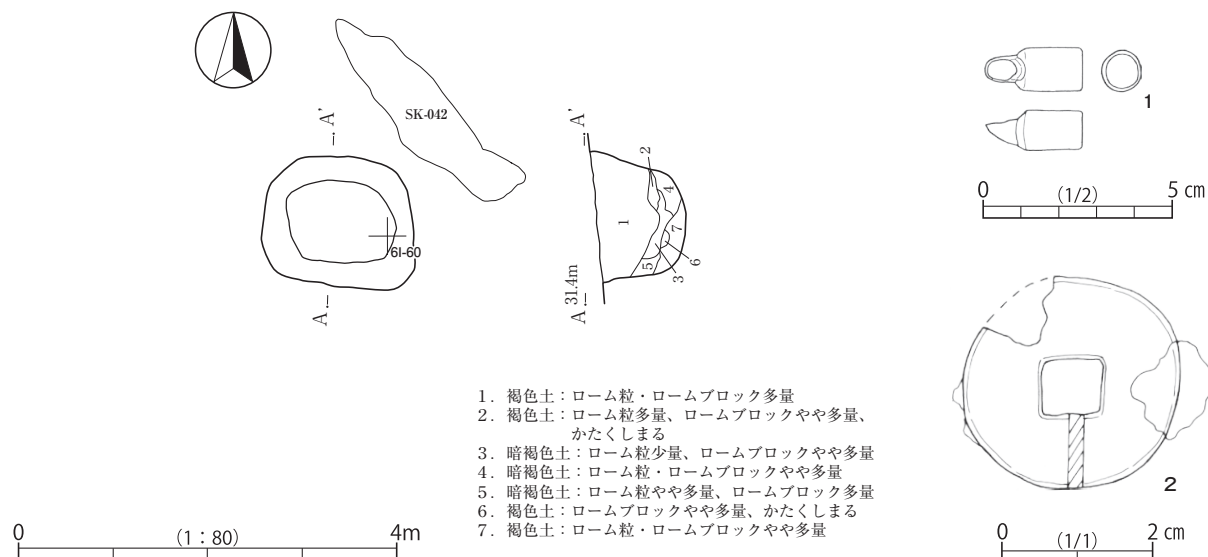
3 土坑墓

SK-027(第60図、第3表、図版23・39)

6H-59・69、6I-50・60グリッドに所在する。平面形は隅丸方形に近く、長軸方向はN-87°-Wである。規模は長軸長1.6m・短軸長1.36mで、確認面からの深さは0.96mである。底面は鍋底形である。遺構内一括で取り上げた遺物ではあるが、キセル雁首と鉄銭が出土していることから中・近世の土坑墓と判断した。

遺物は、図示したもののほかに土師器小破片が少量出土している。1はキセルの雁首である。火皿の部

分が欠損する。現存長15.5mm・最大幅11.5mm・孔径9mmである。2は鉄銭である。遺存状態は悪く、銭種は不明である。縁外径28.0mm・縁内径27.0mm・郭外径8.5mm・郭内径7.0mm・縁厚2.05mm・重さ4.0gである。



第60図 SK-027

4 土坑

SK-017a~d(第61図、第3表、図版23)

6H-51・61グリッドに所在する。4基の方形の土坑が隣接して掘られており、各土坑の新旧関係は不明である。SK-017aはSX-002ピット群を伴う窪地整形の埋土に覆われており、そのほかの土坑とともにSX-002の窪地整形時かそれ以前に掘られたと推測される。SK-017aは平面形が方形で、長軸方向はN-6°-Eである。規模は長軸長1.16m・短軸長0.96mで、確認面からの深さは0.37mである。SK-017bは平面形が不整形で、長軸方向はN-45°-Eである。規模は長軸長1.28m・短軸長0.82mで、確認面からの深さは0.17mである。SK-017cは平面形が方形で、長軸方向はN-35°-Eである。規模は長軸長1.10m・短軸長0.80mで、確認面からの深さは0.59mである。SK-017dは平面形が方形で、長軸方向はN-12°-Wである。規模は長軸長1.14m・短軸長1.0mで、確認面からの深さは0.30mである。

遺物は出土していない。

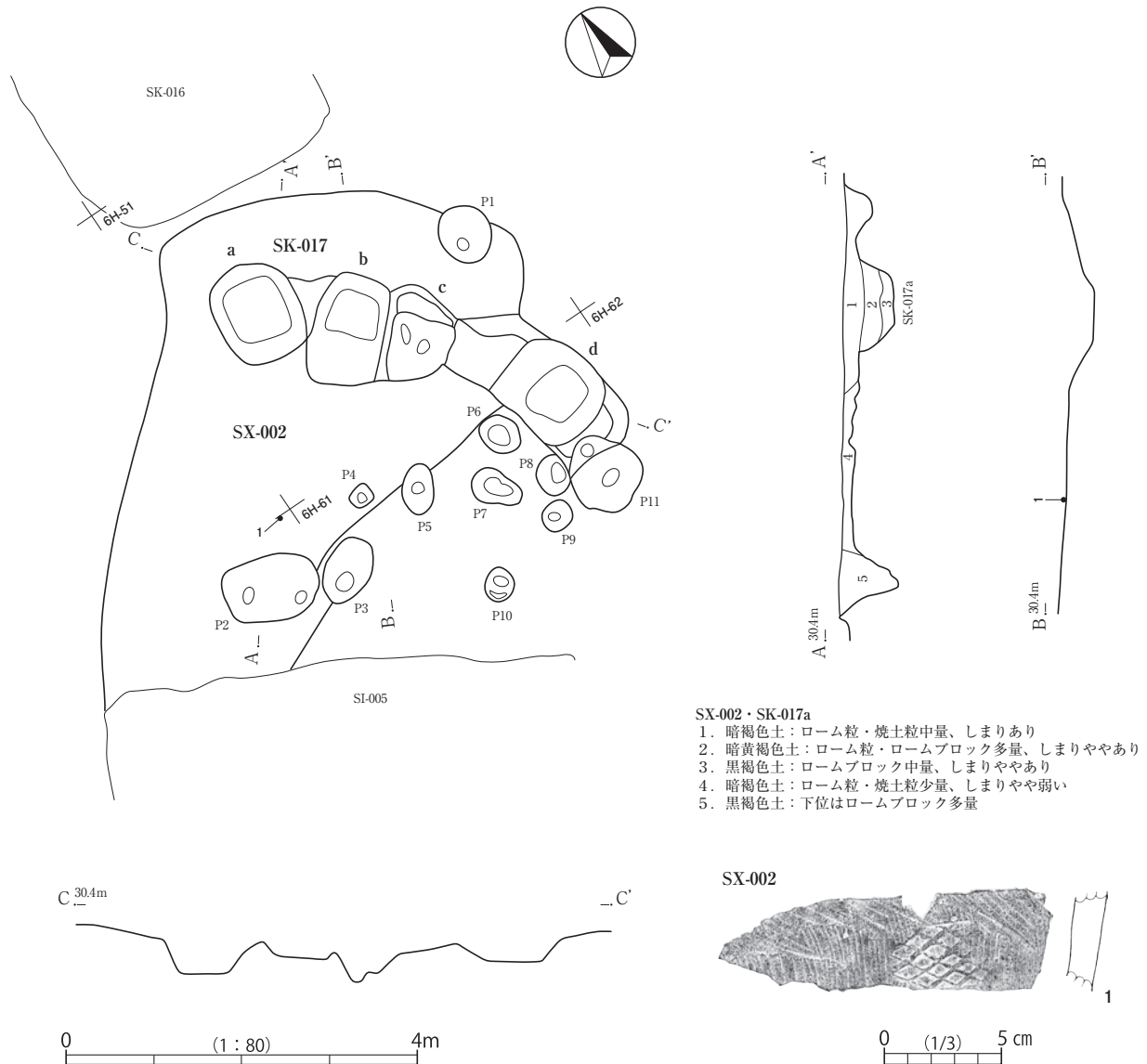
SK-051(第62図、第3表、図版9)

7G-09グリッドに所在する。北側は溝状の攪乱を受ける。平面形は隅丸台形で、長軸方向はN-58°-Eである。規模は長軸長1.39m・短軸長0.74mで、確認面からの深さは0.86mである。埋土の状況から中・近世の土坑と判断した。

本遺構に伴う遺物は出土していない。

SK-053~056(第62図、第3表、図版23)

6H-97グリッドに所在する。4基の土坑が重複しているが、SK-053・055・056は上端のみ図示した。北側でS1-014、南側でSI-012と重複する。それぞれの新旧関係は、土層断面図からSK-053はSK-055・056より新しく、SK-054はSK-055より新しい。SK-053は平面形が長方形で、長軸方向はN-84°-Eである。規模は長



第61図 SK-017a～d・SX-002

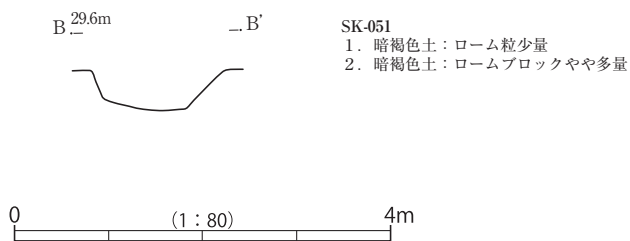
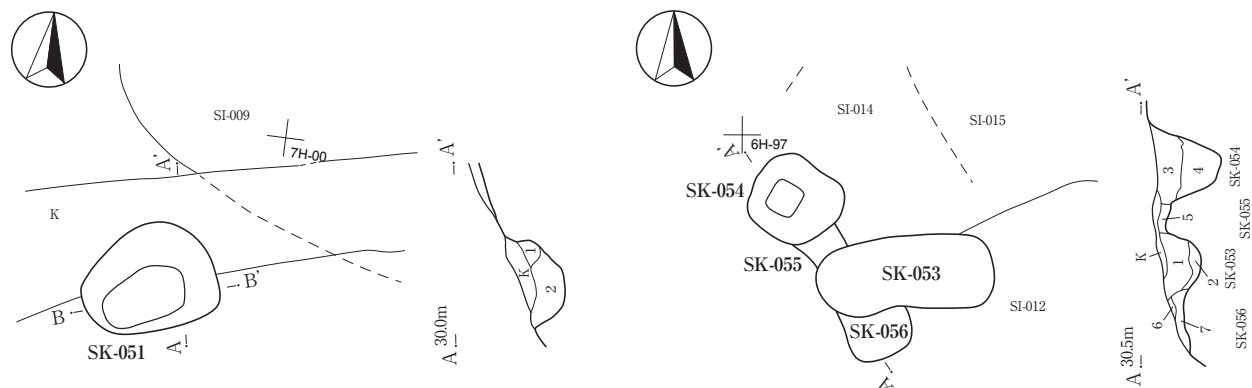
軸長1.9m・短軸長0.79mで、確認面からの深さは0.86mである。SK-054は平面形が方形である。規模は一辺1.0mで、確認面からの深さは0.45mである。埋土の状況から中・近世の土坑と判断した。

遺物は土器小破片が出土しているが、図示できるものはない。

SK-080～084 (第63図、第3表)

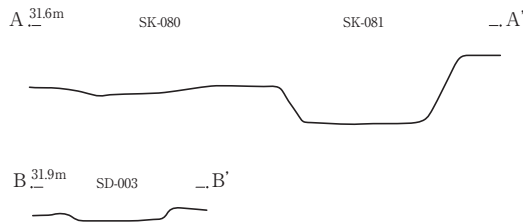
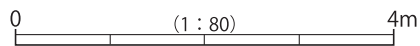
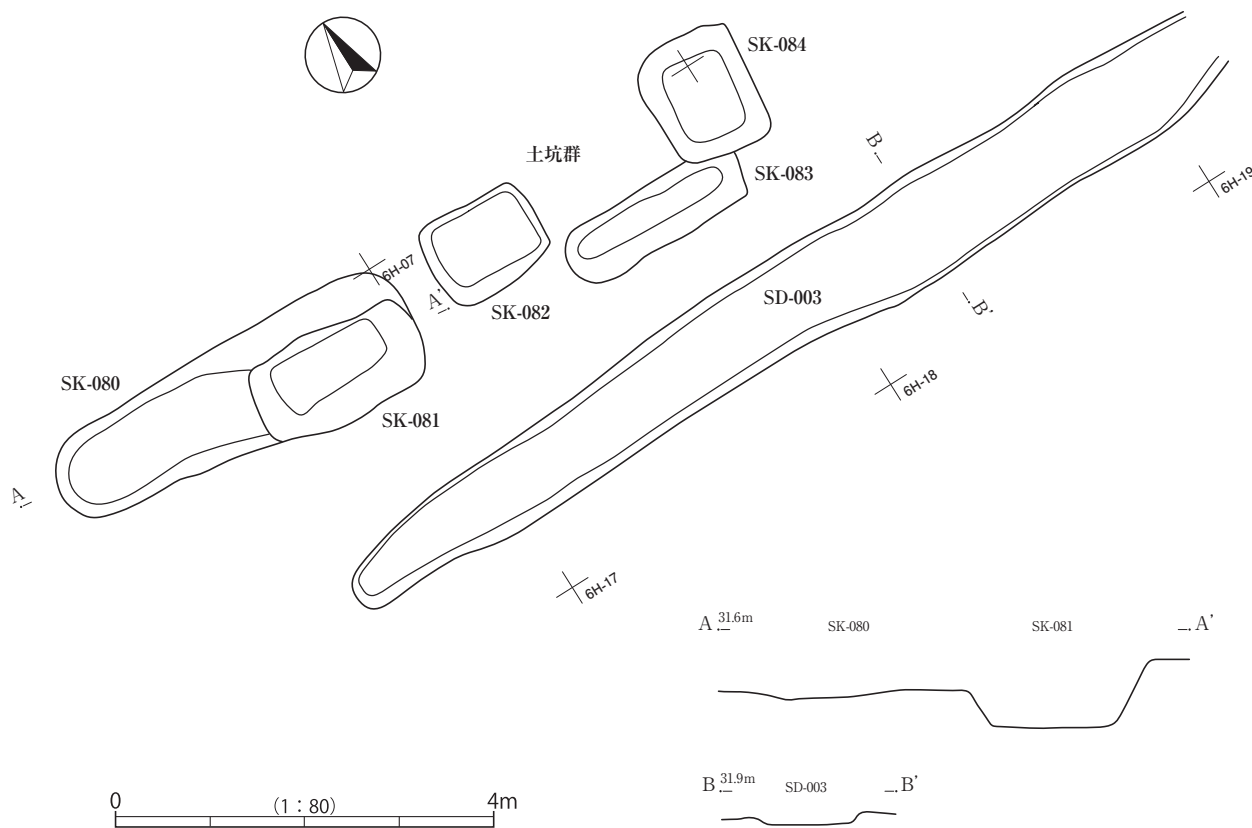
6H-06～08グリッドに所在する。北側台地整形区画東端に隣接する一段高い場所にあり、南側のSD-003に沿って東西に並んでいる。SK-080とSK-081、SK-083とSK-084はそれぞれ重複しているが、新旧関係は不明である。いずれも平面形は長方形である。SK-080は現存長軸長2.26m・短軸長1.04m・深さ0.25m、SK-081は長軸長1.92m・短軸長1.41m・深さ0.71m、SK-083は長軸長2.10m・短軸長0.63m・深さ0.45mである。SK-082・084は長軸長約1.4m・短軸長約1.0m・深さ0.32mで、ほぼ同規模である。長軸方向はSK-084がN-8°-Eで、そのほかがN-80°～90°-Wである。

いずれの遺構からも遺物は出土していない。



- SK-053~056**
1. 褐色土：ロームブロック(径20~30mm)やや多量
 2. 褐色土：ロームブロック(径2~3mm)(径5~10mm)多量
 3. 暗褐色土：ロームブロック(径2~3mm)多量、
ロームブロック(径10mm)・焼土ブロック少量
 4. 暗褐色土：ロームブロック(径2~3mm)やや多量
 5. 褐色土：ロームブロック(径2~3mm)やや多量、
焼土ブロック含む
 6. 褐色土：焼土ブロック(径3~5mm)多量、砂粒含む
 7. 褐色土：ロームブロック(径5~10mm)やや多量、
粘土ブロック少量、炭化物・焼土ブロック含む

第62図 SK-051・053~056



第63図 SK-080~084・SD-003

5 土坑群(ピット群)

SX-002(第61図、第3・20表、図版23・39)

6H-50・51・60・61グリッドに所在する。ピットは17基で、実線で示した範囲は窪地整形の上端である。SK-017a～dと重複する。埋土の状況から、まずSK-017a～dの土坑及び浅い掘り込みによる窪地が整形され、1層・4層により窪地が埋め戻された後、最後に本遺構のピット群が掘られたと推測される。窪地整形は小規模かつ部分的で、掘り込みも不明瞭である。範囲は東西長6.8m・南北長5.9mである。ピットの平面形は円形ないし楕円形で、各ピットの規模等は第20表のとおりである。大きいものは長径112cm、小さいものは短径22cmである。確認面からの深さは深いもので73cm、浅いもので17cmである。

図示できた遺物は陶器1点で、そのほかに土師質・瓦質土器破片などが出土している。1は常滑窯製品の大甕の胴部破片である。外面は平行タタキ、内面はナデである。外面に斜格子刻印が見られる。

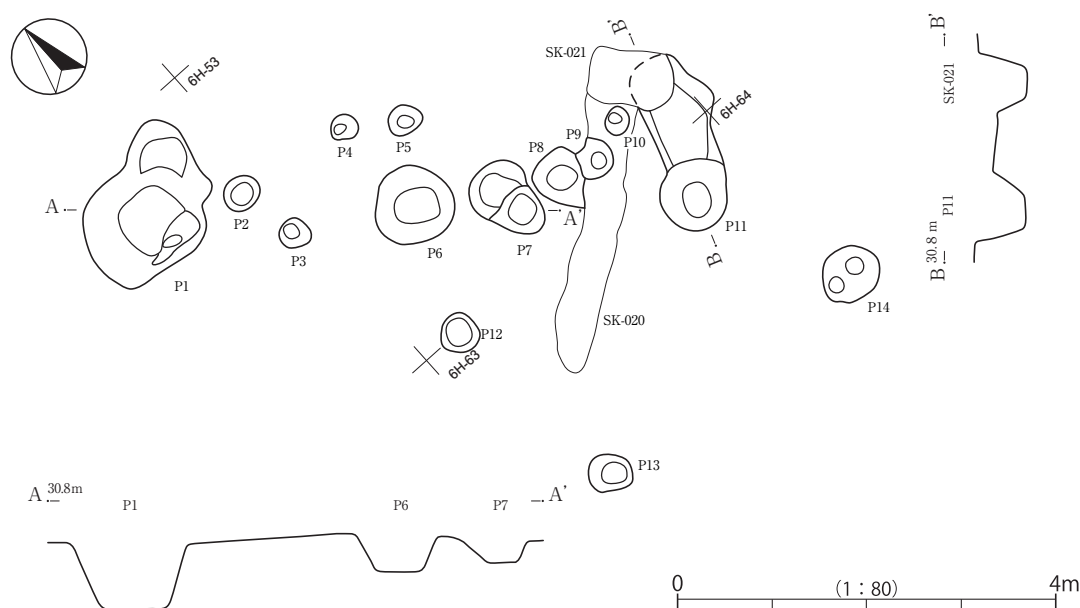
第20表 SX-002ピット計測表

単位：m ()推定値 < >現存値														
番号	形状	長軸	短軸	深さ	番号	形状	長軸	短軸	深さ	番号	形状	長軸	短軸	深さ
P1	円形	0.68	0.59	0.46	P2	楕円形	1.12	0.73	0.73	P3	楕円形	0.78	0.53	0.30
P4	円形	0.37	0.22	0.24	P5	楕円形	0.56	0.36	0.24	P6	円形	0.50	0.40	0.19
P7	楕円形	0.62	0.38	0.34	P8	円形	0.45	0.36	0.17	P9	円形	0.36	0.32	0.48
P10	円形	0.42	0.35	0.41	P11	円形	0.92	0.82	0.72					

SX-006(第64図、第3・21表、図版23)

6H-52・53・63グリッドに所在する。南東側でSK-020・021と重複し、いずれも本遺構の方が新しい。ピットは14基で、東西4.5m・南北5.3mの範囲にある。ピットの規模等は第21表のとおりであるが、径30cm～50cmのものと60cm～80cmのものに大きく二分される。確認面からの深さは21cm～76cmで、径の大小に比例しない。P1は規模が最も大きく長軸長1.30m・短軸長1.12m・確認面からの深さ0.76mである。

遺物は出土していない。



第64図 SX-006

第21表 SX-006ピット計測表

単位：m ()推定値 < >現存値

番号	形状	長軸	短軸	深さ	番号	形状	長軸	短軸	深さ	番号	形状	長軸	短軸	深さ
P1	円形	1.30	1.12	0.76	P2	円形	0.41	0.36	0.41	P3	円形	0.32	0.28	0.26
P4	円形	0.30	0.25	0.47	P5	円形	0.36	0.30	0.51	P6	円形	0.84	0.83	0.42
P7	楕円形	0.90	0.50	0.31	P8	楕円形	(0.80)	0.56	0.21	P9	円形	<0.43>	<0.43>	0.62
P10	円形	0.30	0.25	0.63	P11	円形	0.74	0.70	0.56	P12	円形	0.46	0.40	0.26
P13	円形	0.45	0.41	0.51	P14	円形	0.64	0.58	0.66					

6 溝

SD-003(第63図、第4表)

6H-06~09グリッドに所在する。北側台地整形区画東端に隣接する一段高い場所にあり、北側には本遺構に沿った形でSK-080~084が並んでいる。走行方向はN-90°-Eで、調査範囲内では直線的に伸びている。西側は溝端部で、東側は調査範囲外に続いている。現状での総延長10.60m・幅0.86m~1.16m、確認面からの深さは0.05m~0.24mで、西側半分が深くなっている。

遺物は出土していない。

第22表 中・近世土器観察表

()推定値 < >現存値

遺構	挿入番号	種類	器種	法量(cm)	遺存度	胎土	色調・焼成	技法	備考
SK-014	第49図-1	陶器	三筋壺	口径 - 底径 - 器高 -	肩部	石英粒・砂粒	内面 褐色(7.5YR4/1) 外面 褐色(7.5YR4/3) 焼成 良好	内面 - 外面 - 底外面 -	自然釉 2条の沈線 13~14C常滑窯?
	第49図-2	瓦質土器	捏鉢	口径 (32.0) 底径 - 器高 <9.0>	口縁部~ 体部上半	石英粒・白色砂粒	内面 橙色(7.5YR7/6) 外面 におい橙色(7.5YR7/4) 焼成 良好	内面 ナデ 備描き 外面 ナデ 底外面 -	地元産15~16C?
	第49図-3	カワラケ	小皿	口径 (8.0) 底径 (7.3) 器高 1.1	40%	石英粒・白色砂粒	内面 灰色(7.5YR6/1) 外面 灰色(5YR6/1) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ 底外面 回転糸切り 手持ちヘラ	器面摩滅
	第49図-4	カワラケ	小皿	口径 (7.3) 底径 (6.8) 器高 1.2	55%	石英粒・白色砂粒	内面 橙色(7.5YR7/4) 外面 橙色(7.5YR7/6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ 底外面 回転糸切り 手持ちヘラ	器面摩滅
SK-018	第53図-1	瓦質土器	甕	口径 - 底径 - 器高 -	胴部	石英粒・白色砂粒・ 砂粒	内面 褐色(5YR6/6) 外面 褐色(2.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ヘラナデ 底外面 -	常滑大甕模倣15~16C?
SX-001	第49図-1	土師質土器	杯	口径 - 底径 (6.8) 器高 <1.9>	底部	石英・白色砂粒	内面 におい橙色(5YR7/4) 外面 におい橙色(7.5YR7/3) 焼成 良好	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ 底外面 回転糸切り 無調整	
SX-002	第61図-1	陶器	甕	口径 - 底径 - 器高 -	胴部	白色砂粒	内面 黄褐色(10YR5/6) 外面 黄褐色(2.5YR5/3) 焼成 良好	内面 ヘラナデ ナデ 外面 平行タタキ 底外面 -	斜格子刻印 常滑窯
SX-004	第59図-1	土師質土器	杯	口径 - 底径 5.6 器高 <1.3>	胴部下位 ~底部	白色砂粒・雲母	内面 褐色(7.5YR6/6) 外面 におい褐色(7.5YR6/4) 焼成 良好	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ 手持ちヘラ削り 底外面 回転糸切り 無調整	
	第59図-2	土師質土器	杯	口径 - 底径 7.4 器高 <1.7>	底部	白色砂粒・雲母	内面 明褐色(7.5YR5/6) 外面 褐色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ 手持ちヘラ削り 底外面 回転糸切り 手持ちヘラ削り	
	第59図-3	土師質土器	杯	口径 - 底径 (7.0) 器高 <2.0>	胴部下位 ~底部	白色砂粒・雲母	内面 黒色(5YR1.7/1) 外面 におい赤褐色(5YR4/4) 焼成 良好	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ 手持ちヘラ削り 底外面 -	

第23表 中・近世土製品観察表

< >現存値

遺構番号	挿入番号	遺物番号	種類	法量：mm g					色調	備考
				最大長	最大幅	最大厚	孔径	重量		
SK-078	第59図-1	2	管状土錘	44.0	20.5	-	4.5	19.28	灰黄褐色(10YR4/2)	
SX-004	第59図-4	SX-004-6	管状土錘	49.0	18.5	-	3.5	17.42	黒褐色(2.5Y3/2)	
	第59図-5	SX-004-8	管状土錘	44.0	21.0	-	4.5	17.57	黄灰色(2.5Y4/1)	
	第59図-6	SX-004-10	管状土錘	47.0	21.5	-	4.5	23.92	明灰黄色(2.5Y4/2)	

第3章 まとめ

旧石器時代

ローム層中から出土した石器は、総数10点である。そのうちⅥ層～Ⅶ層境界面から出土した石器7点について、点数僅少ではあるが、一括性が高いと判断し1か所のブロックを設定した。これを第1ブロックと呼称した。ここでは、この第1ブロックについて、石器群の様相をまとめ、編年の位置づけを行う。

第1ブロックは剥片6点・石核1点が出土し、接合資料が2例確認された。第2章第2節で述べたとおり、本ブロックは後世の削平の影響を受けており、石器群は本来の全容を保っていない可能性が高い。しかしながら、以下の①～③の特徴からⅥ層～Ⅶ層境界面に生活面を持つブロックであると判断した。①残存する全ての石器がⅥ層～Ⅶ層境界面から出土している。②石材は全て良質な硬質頁岩(いわゆる東北産頁岩)あるいは珪質頁岩である。③良質石材を徹底的に消費する石刃リダクションを技術基盤とする。

これらの特徴は、下総台地のAT降灰前後の時期に頻出する“大型石刃をブランクとし特徴的なリダクションを行う石器群”いわゆる「下総型石刃再生技法」^(註1)ないし「千田台技法」^(註2)を技術基盤とする石器群の特徴を網羅する。刃部再生と小剥片類生産のいずれが主体的であるかは、コンテキストが断片的であり判断できない。検出できた内容においては、小剥片類生産が主体的で、ブランクの技術形態や両極剥離の例からは、石材消費戦略における末端的様相が看取できよう。類似する石器群としては、成田市香山新田中横堀遺跡・同天神峰奥之台遺跡・多古町千田台遺跡・東金市滝東台遺跡などがあげられる^(註3)。

縄文時代

縄文時代の遺構は陥穴が11基(SK-010・011・020・024・030・042・043・046・050・052・058)検出された。今回の調査で出土した縄文時代遺物は極めて少なく、本遺跡は居住の場としては利用されなかったものと推測される。取香川中流域の縄文時代集落跡は、中期の野毛平木戸下向山遺跡や長田雉子ヶ原遺跡を除いて現在まで確認されていない。本遺跡と同様に陥穴のみ検出された馬場扇ノ作遺跡が取香川対岸にあるが、縄文時代を通して遺跡や遺構が希薄な地域と言える。今回出土した土器は中期～後期であるが、これは本遺跡の北西に位置する関戸谷津之台遺跡^(註4)や隣接する関戸砦跡^(註5)の調査成果と同様である。

弥生時代

弥生時代の遺構は、竪穴住居跡が3軒(SI-002・007・009)検出された。これらは6G-66を北西端、7G-06を南西端、6H-64を北東端、7H-04を南東端としたおよそ20m×36mの範囲に収まる。一方で遺構外出土遺物が多く、分布としては竪穴住居跡に近接する範囲に集中するものの、調査範囲に広く分布していることが確認された。遺構の内外を問わず、遺物のほとんどは破片資料であり、接合できた個体も極めて少ない。おそらくは、本遺跡には検出された数以上の竪穴住居跡が存在していたものの、後世の攪乱等により、遺構が消失したものと推測される。

遺構の時期は第2章第4節で触れたように、出土土器の様相からSI-002が後期中葉、SI-007が後期初頭、SI-009が後期と判断した。中期後葉に帰属すると判断できる遺構は検出されていないものの、宮ノ台式や足洗式など中期後葉の土器が遺構外で出土しており、本遺跡における集落の形成は少なくとも中期後葉には始まり、後期中葉頃まで継続するものと推測される。土器の様相としては、中期後葉～後期中葉まで北関東系土器を主体としつつ南関東系土器が共伴するが、中期末～後期初頭に属する南関東系土器は確認で

きず、従来指摘されてきた印旛沼周辺地域の様相^(註6・7)と親和的である。このような集落の存続期間・土器の様相は、本遺跡の北西に位置する関戸谷津之台遺跡^(註4)や関戸遺跡^(註8)の調査結果と同様であり、この台地上における弥生時代集落の傾向として捉えることができる。なお、SI-007から中期前葉から中葉の可能性のある北関東系土器(第15図-12)が出土した点は注目される。

古墳時代

古墳時代の遺構は、中期～後期の竪穴住居跡が一部重複しながら14軒(SI-001・003a・b・004～006・012～015・017～020)検出された。そのほかに土坑3基(SI-021、SK-021・044)・溝1条(SD-006)が検出された。遺跡からは古墳時代初頭～後期にかけての遺物が確認されたが、集落は古墳時代中期～後期を中心に営まれたと推測され、いくつかの竪穴住居跡から土器類がまとまって出土した。

古墳時代中期～後期初頭の遺構はSI-003a・b・004・005・015・019・021・SK-044が該当する。この時期の遺構は調査区西部と東部に所在する。遺物の遺存状態は良好ではないが、杯・高杯・甕・甌などが出土し、赤彩された杯・高杯も含まれる。そのほかにもハケ調整が施されるものや底径の小さな甕などが特徴的である。また、財団法人印旛郡市文化財センターによって調査された関戸砦跡^(註5)の「調査区南東側斜面地」では、5世紀後半～末の須恵器や古墳時代中期の土師器・有孔円板などの石製品及び未成品が集中して出土している。古墳時代後期中葉以降の遺構はSI-001・006・012～014・017・018・020・SK-021が該当する。この時期の遺構は調査区中央部を中心に分布する。遺物の出土量は豊富で、杯・甕・甌などが出土し、黒色処理が施された杯が含まれる。また、土製品・石製品の種類も豊富で、祭祀に関連したと考えられる遺物が多く出土している。

本遺跡における集落の展開は、古墳時代中期に始まり、関戸砦跡などでも見られたように台地縁辺部に居住していたと考えられる。その後、古墳時代後期中葉以降には台地奥を中心に集落を形成するが、小規模な集落として存続していたものと思われる。

本遺跡の古墳時代の出土遺物として特筆すべきものとして、SI-020から完形で出土した2点の土鈴があげられる。完形で出土する土鈴は珍しく、貴重な資料である。そこで今回、その内部構造を非破壊により明らかにするべく、千葉県産業支援科学技術研究所において、X線CT試験を行なった。その結果、同一の竪穴住居跡より出土した2点の土鈴に、内部空間の広さ、内容物の材質、製作方法やなどに違いがあることが確認できた。

16は内部の空洞が狭小な点の特徴である。狭小な空間には、最大長約9mmの石が1点と、土鈴自体の胎土と似た、直径5mm前後の土製の丸が3点の合計4点を確認できた。製作方法については、粘土の接合痕及びX線CT画像の観察から、上部は複数の細かな粘土を組み合わせて作成されており、下部は碗型に成形して作られていると考えられる。上下をそれぞれ作成した後、上部に下部を張り付けている。さらに、全体の形状を指ナデで整えた後、最後に下部の切込み及び上部の吊手部分に穿孔を施していると思われる(図版40・1～7)。

17は縦長で内部の空洞が広い。内部には土鈴自体の胎土と似た最大長7mm前後の土製の丸が2点確認できた。製作方法は、接合痕及びX線CT画像の観察から、碗型に整えた底部に裏面と表面から側面のパーツをそれぞれ接合し、上部をかぶせた後、全体を指ナデやヘラナデにより成形したと考えられる。上部の吊手の部分は、粘土の接合痕は確認できず、上部の粘土をつまみ上げて成形したと推定される。また上部の穿孔は、両側から下部に向かって斜めに穿孔し、更に両側から水平に穿孔していると推定される(図版40・

8～14)。

土鈴の製作方法については国生尚の「土鈴集成」の中で言及され、上下を別々に作り下部に上部をかぶせるように接続する二分形成形と、底部の方から作り紐の方に絞りながら成形する一体成形の2つがあるとされている^(註9)。16は二分形成形によって製作され、17は論文では指摘されなかった製作方法で作られていることが明らかになった。

県内の類例では、佐倉市間野台・古屋敷遺跡C地区(1点)^(註10)、成田市大竹林畑遺跡(1点)^(註11)・同中岫第1遺跡F地点(6点)^(註12)、流山市三輪野山第Ⅱ遺跡(1点)^(註13)、栄町大畑Ⅰ遺跡(1点)^(註14)・同埴生郡衙跡(1点)^(註15)、香取市大倉桜馬場遺跡(1点)^(註16)の7遺跡があり、県内北部を中心として出土例が確認できる。

複数の土鈴が出土した中岫第1遺跡F地点での分類によると、形態からA：金属製の鈴の形態を模したものの、B：球形に近く、貼り付け把手がつき、鈴口のないもの、C：円筒型のもので、鈴口のないもの、の3種がみられる。県内で出土した事例を分類すると、Bは中岫第1遺跡出土の1点、Cは中岫第1遺跡出土の4点、Aは本遺跡を含めた9点があてはまる。中岫第1遺跡では様々な形態の土鈴が出土しているが、多くの土鈴は金属製の土鈴を再現したものであると考えられる。また、土鈴の出土した遺構も竪穴住居跡で共通しており、本遺跡の土鈴も住居内での祭祀行為に伴い、製作・使用されたものと推測される。

奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺構は、竪穴住居跡2軒(SB-001・002)・土坑11基(SK-004・005・007a・b・008・009・012・026・057・070・085)が検出された。竪穴住居跡は柱穴だけで、掘り込みは確認できなかったが、土坑からは遺物が比較的まとまって出土している。出土遺物から時期が明らかな土坑のうち、SK-085は9世紀中葉、SK-005・009・012・070は9世紀後葉、SK-004・008・026は10世紀前葉である。隣接する関戸砦跡では9世紀第2四半世紀と考えられる土坑が南西側台地縁辺部で検出されているだけで、竪穴住居跡は検出されていない。このことから、本遺跡は9世紀中葉～10世紀前葉の間に竪穴住居や土坑が作られたが、遺構数はわずかであり、この時代には本台地が居住の場としてはあまり利用されなかったと思われる。

中・近世

中・近世の遺構は、北側と南側の2か所の台地整形区画があり、この区画内を中心に土地整形遺構3基(SX-001・004・005)・掘立柱建物跡1棟(SB-003)・竪穴状遺構11基(SK-015・016・019・022・023・025a・028・029・032～034)・地下式坑2基(SK-014・018)・土坑墓1基(SK-027)・土坑31基(SK-001～003・017a～d・025b・c・031・035a・b・051・053～056・071～084)・土坑群(ピット群)7か所(SX-002・003・006～010)・溝1条(SD-003)が検出された。

北側台地整形区画は、北向きの斜面部の傾斜を変換するように掘り下げ、区画内に土坑群や地下式坑が存在する。各遺構とも遺存状態が悪いため、細かい時期や性格、前後関係は判然としない。その中で唯一、地下式坑SK-014の天井崩落土が小規模な台地整形区画SX-001に切られており、前後関係が判断できる。このことから、台地整形区画の中で地下式坑が機能していた第1段階と、その廃絶後にSX-001がなんらかの土地利用を行っている第2段階が想定できる。年代が分かる遺物は、SX-001から13世紀初頭の嘉泰通宝(南宋銭)が、SK-023から11世紀後半の熙寧元宝(北宋銭)が出土している。また、SK-014からは比較的遺存状態の良い瓦質の片口鉢が出土している。在地産の土器と思われるが、口唇部の拡張がみられ、常滑10型式(15世紀後半)に類似する。ただし、遺物の年代が上述の遺構の前後関係と整合しないため、伝来品である銭貨については正確な遺構の時期を反映していない可能性が高い。出土遺物全体の傾向をみると、粗悪な在地

系瓦質土器が目立つ。

南側台地整形区画は、南向き斜面に平場状遺構SX-004を形成し、更に階段状遺構SX-005を整形するものであり、平場状遺構内に土坑群が存在する。ここでは、平場状遺構とそれを切る階段状遺構の2段階の土地利用が想定できる。各遺構とも遺存状態が悪いため、細かい時期は判然としない。平場状遺構からは、漁労具として使用されたと推測される土錘がまとまって出土しており、この時代の漁労に関連する遺構であった可能性がある。

本遺跡の北西には関戸砦跡があり、中世後期の金山郷に關係する戦国城郭とされている^(註17)。本遺跡北西の関戸砦跡まで延びる瘦せ尾根上には点々と城郭状の構造物が確認されており^(註5)、本遺跡の北側台地整形区画もこれらに關係する遺構である可能性もある。北側と南側の台地整形区画については、いずれも細かい時期や性格に関する情報が不足しているため、両区画が同時に存在したかどうかは明らかにすることはできない。

注1 1984『新東京国際空港埋蔵文化財調査報告書Ⅳ-No.7遺跡-』財団法人千葉県文化財センター

1995 新田浩三「下総型石刃再生技法の提唱」『研究紀要16』財団法人千葉県文化財センター

注2 1996『多古町千田台遺跡』千葉県文化財センター調査報告第283集

注3 1995『油井古塚原遺跡群』財団法人山武郡市文化財センター発掘調査報告書第25集

1997『新東京国際空港埋蔵文化財調査報告書Ⅹ-天神奥之台遺跡(No.65遺跡)-』千葉県文化財センター調査報告第304集

注4 2019『成田市関戸谷津之台遺跡』千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第31集

注5 2001『千葉県成田市大生城跡・関戸砦跡』財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第182集

注6 2007 高花宏行「『臼井南式』と周辺土器の様相の検討」『研究紀要5』財団法人印旛郡市文化財センター

注7 2013 小林嵩「下総における弥生時代後期の南関東系土器群について」『駿台史学』第149号 駿台史学会

注8 1983『成田新線建設事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ(関戸遺跡)』財団法人千葉県文化財センター

注9 1992 国生尚「土鈴集成」『岩手考古学』第4号 岩手考古学会

注10 2013「佐倉市間野台・古屋敷C地区(第9次)」『第17回遺跡発表会 発表要旨』公益財団法人印旛郡市文化財センター

注11 2008『大竹林畑遺跡Ⅵ・Ⅶ』財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第261集

注12 1998『南羽鳥遺跡群Ⅲ』財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第145集

注13 1996『主要地方道松戸野田線埋蔵文化財調査報告書』千葉県文化財センター調査報告第276集

注14 2006『栄町埋蔵文化財調査報告書4 大畑Ⅰ-4遺跡』財団法人印旛郡市文化財センター

注15 1987『栄町埴生郡衙跡確認調査報告書Ⅱ』千葉県文化財保護協会

注16 2014『千葉県香取市 大倉桜馬場遺跡 発掘調査報告書』有限会社原史文化研究所

注17 1986 須田茂「城の用途と軍事構成」『成田市史 中世・近世編』成田市



第65図 関戸関ノ台遺跡・関戸砦跡遺構配置

写 真 图 版



航空写真(S = 約 1/10,000)



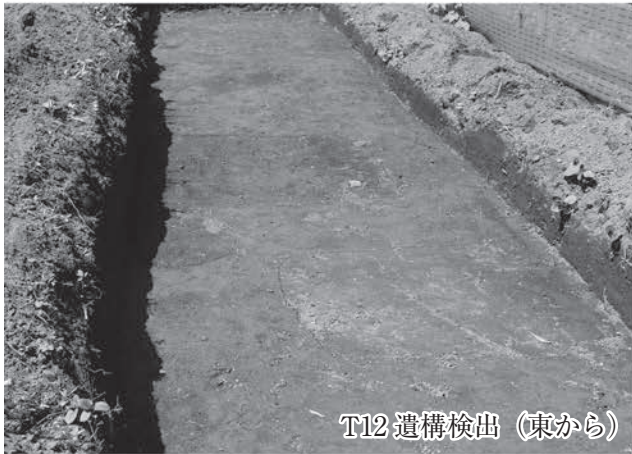
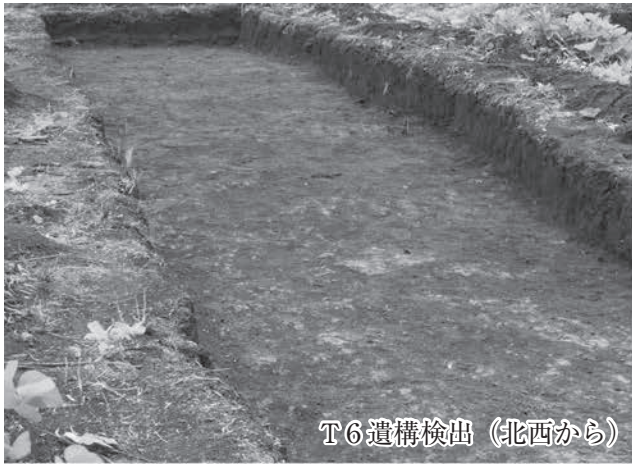


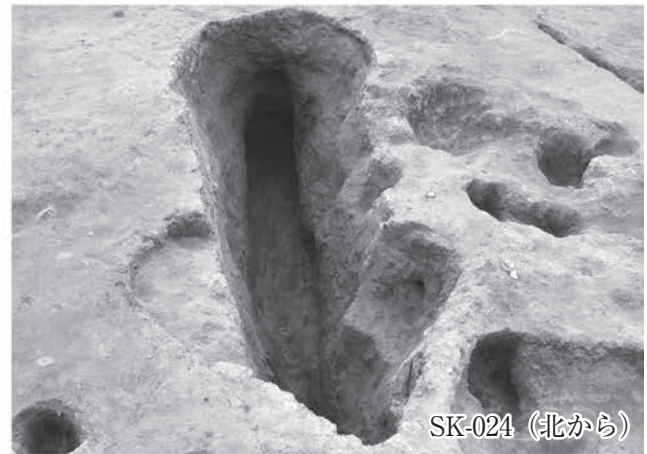
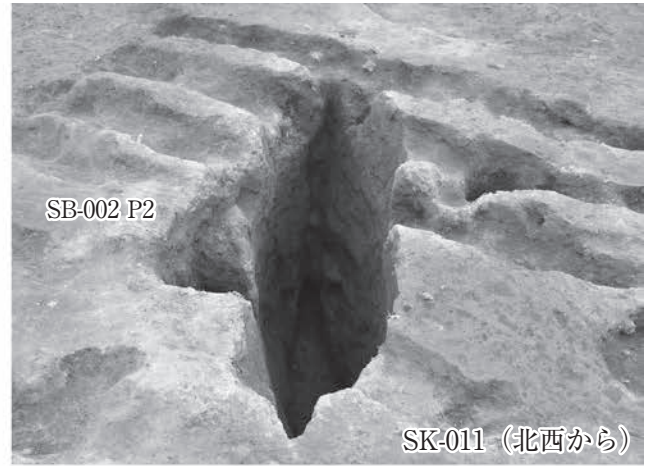
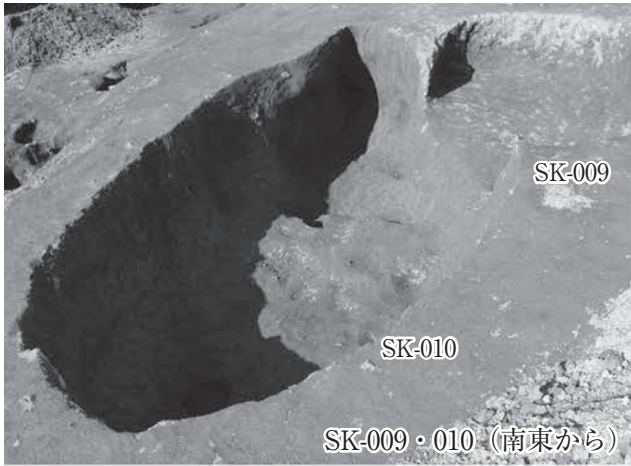
調査前③(西から)

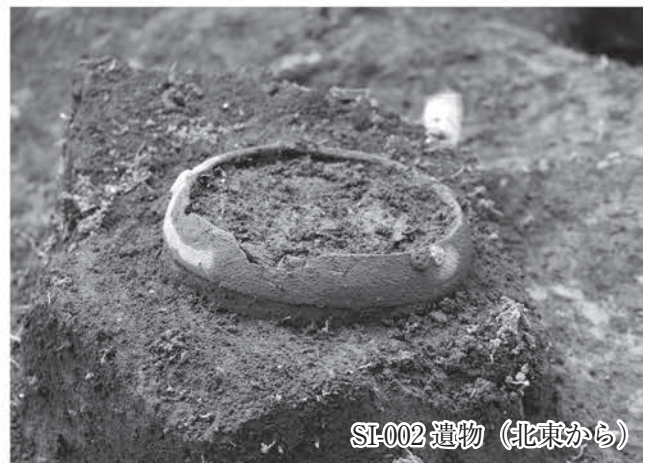
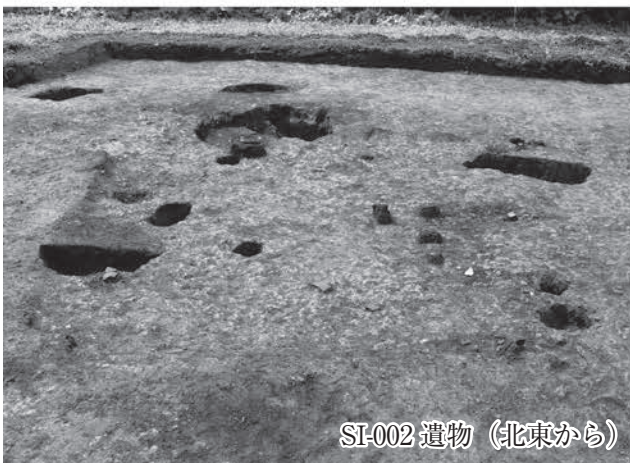
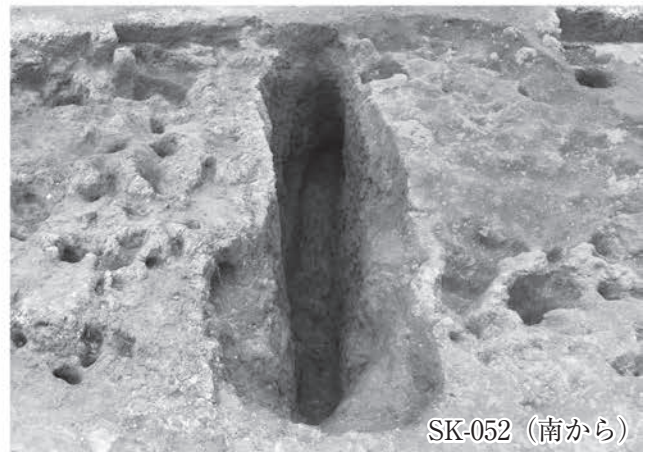
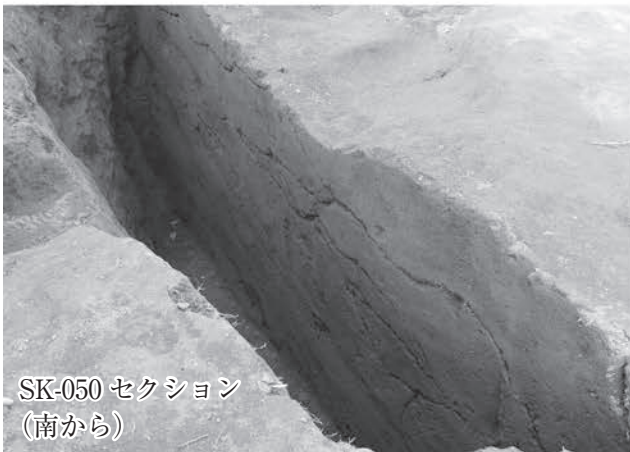


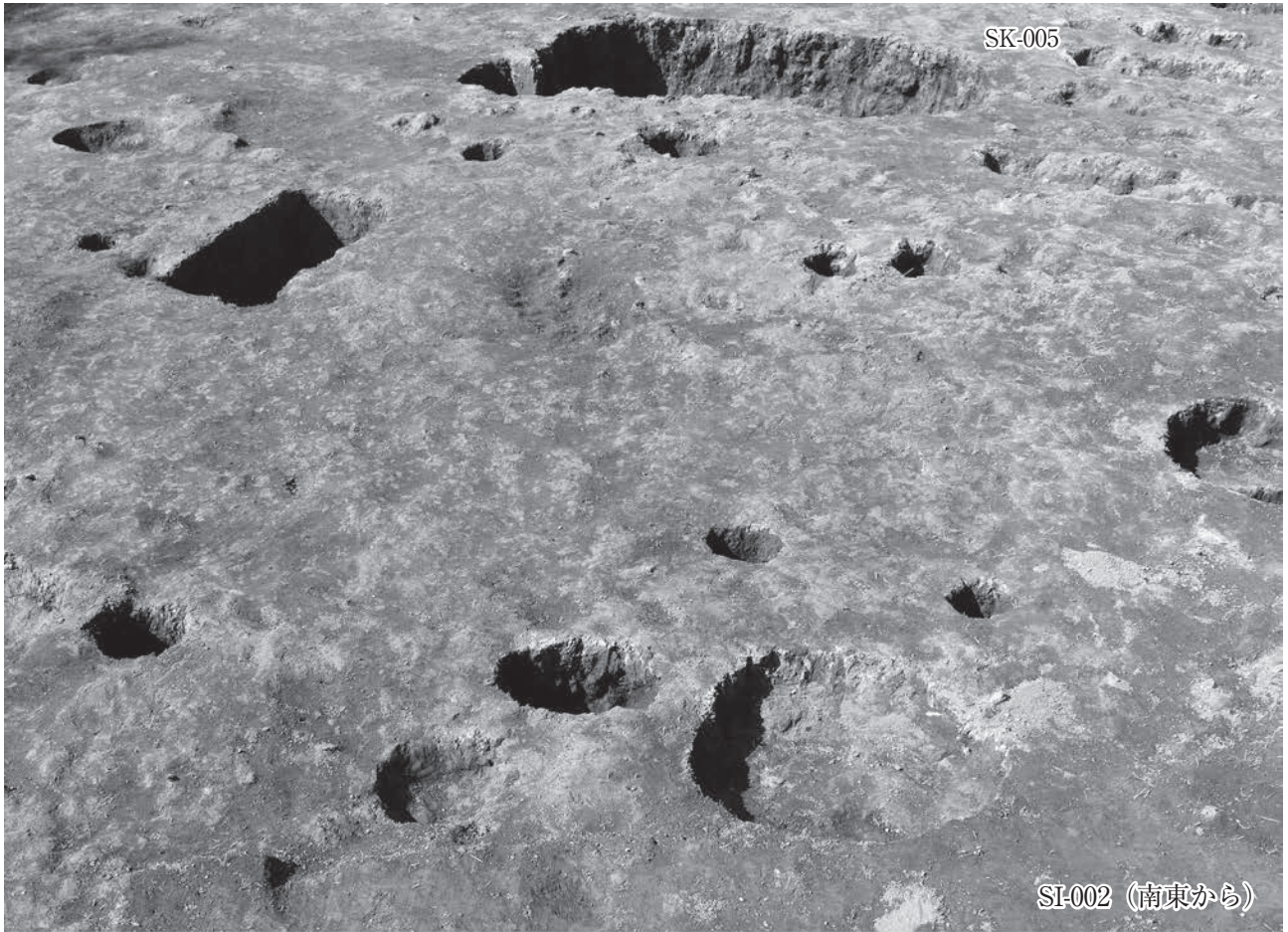
調査前④(北西から)

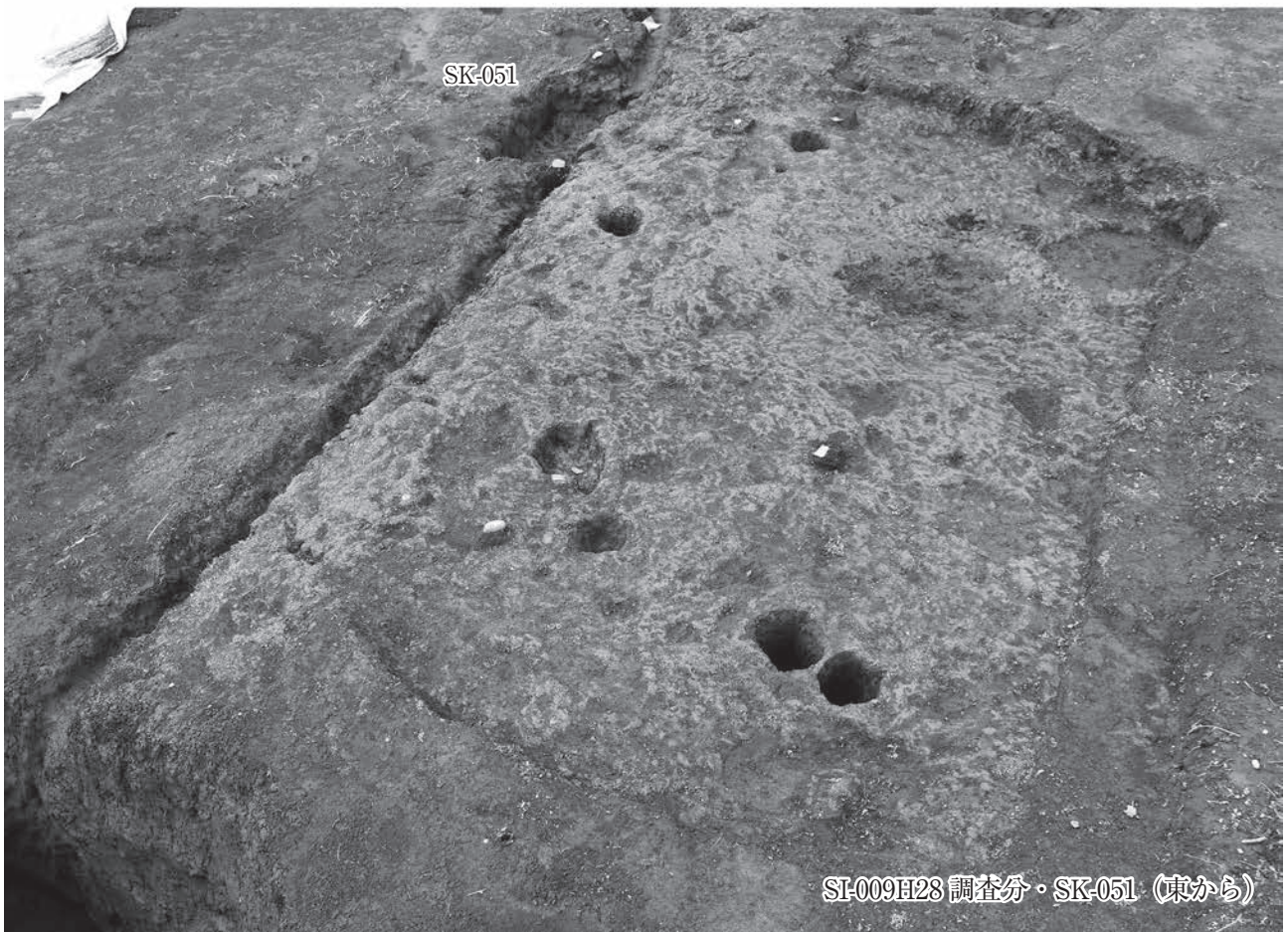


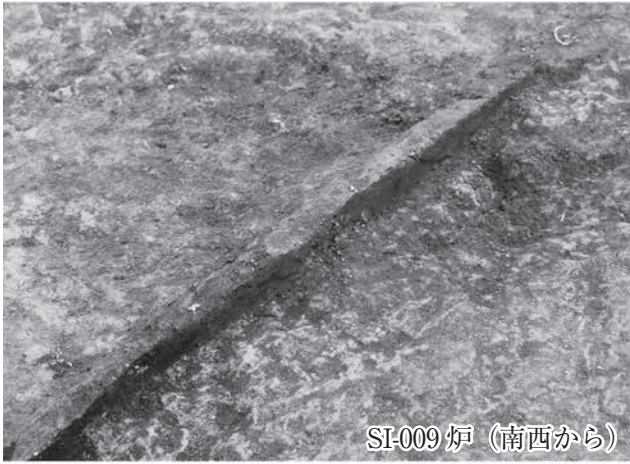








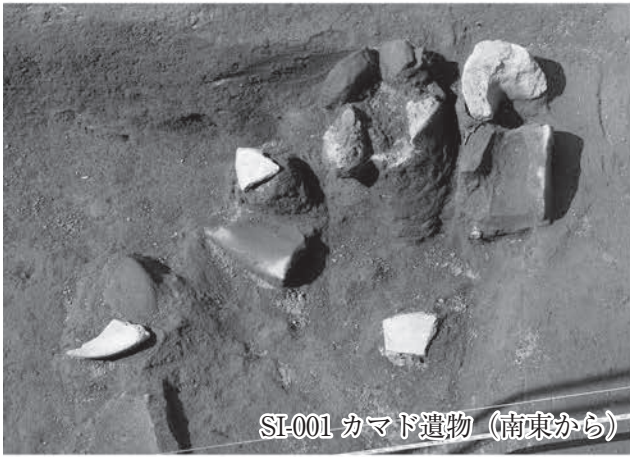




SI-009 炉 (南西から)



SI-001 カマド (南東から)



SI-001 カマド遺物 (南東から)

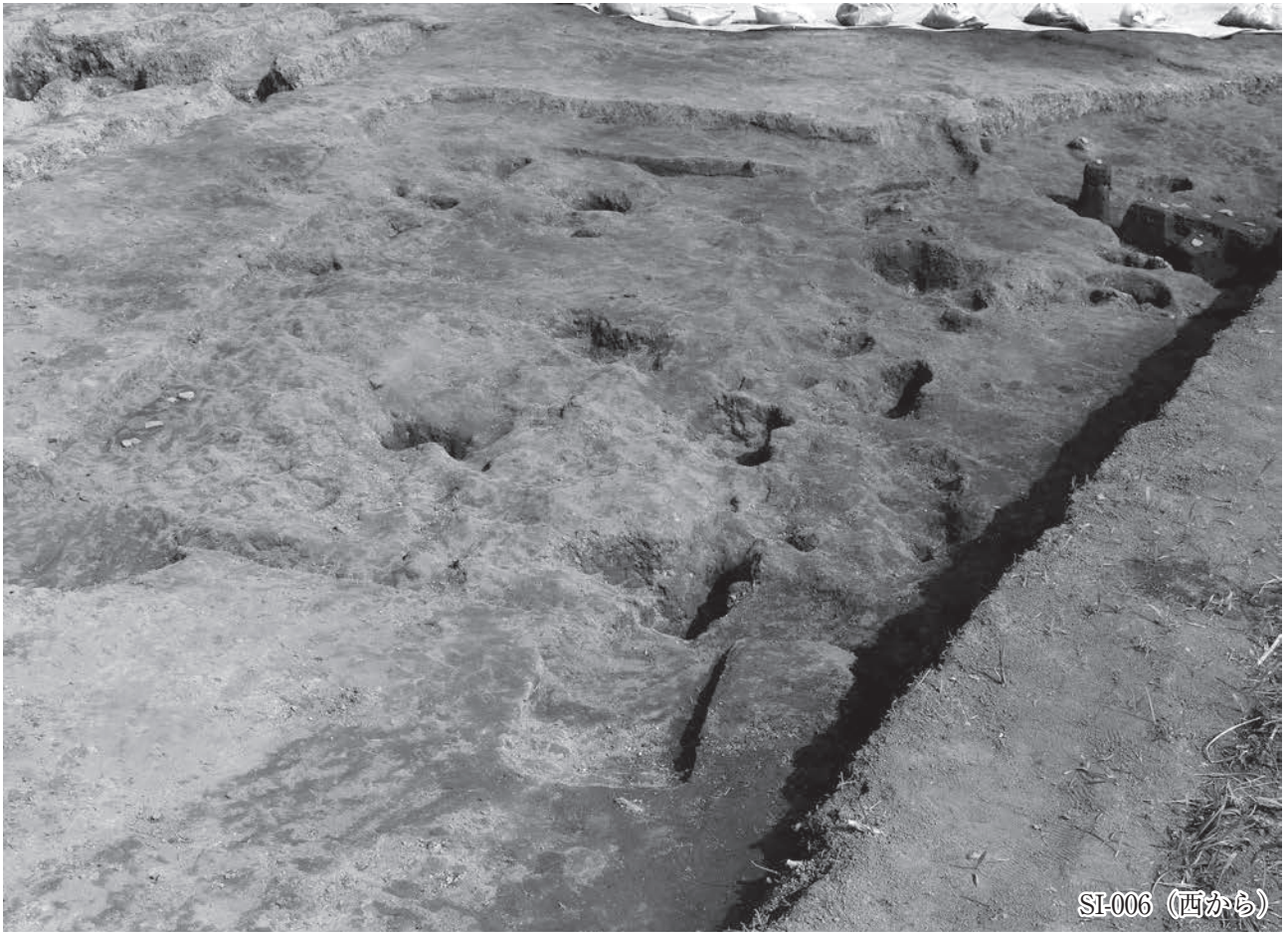


SI-001 貯蔵穴遺物 (北から)



SI-001 (東から)





SI-006 (西から)



SI-006 カマド (南西から)

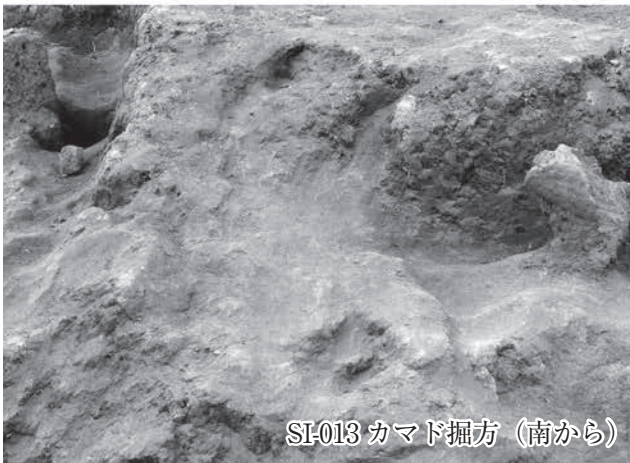


SI-009

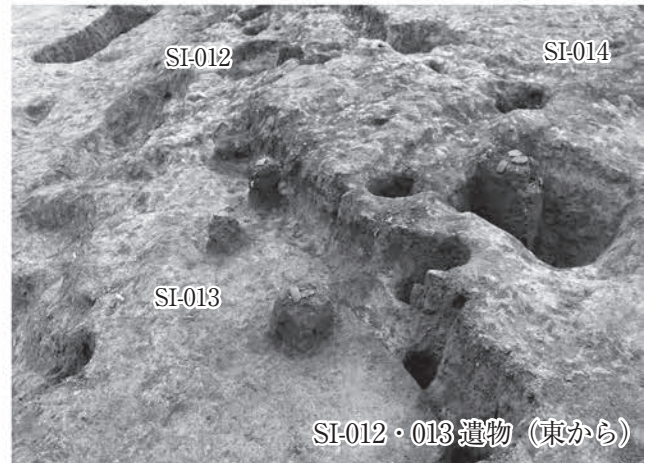
SI-006

SI-006 貯蔵穴

SI-006 貯蔵穴 (西から)



SI-013 カマド掘方 (南から)

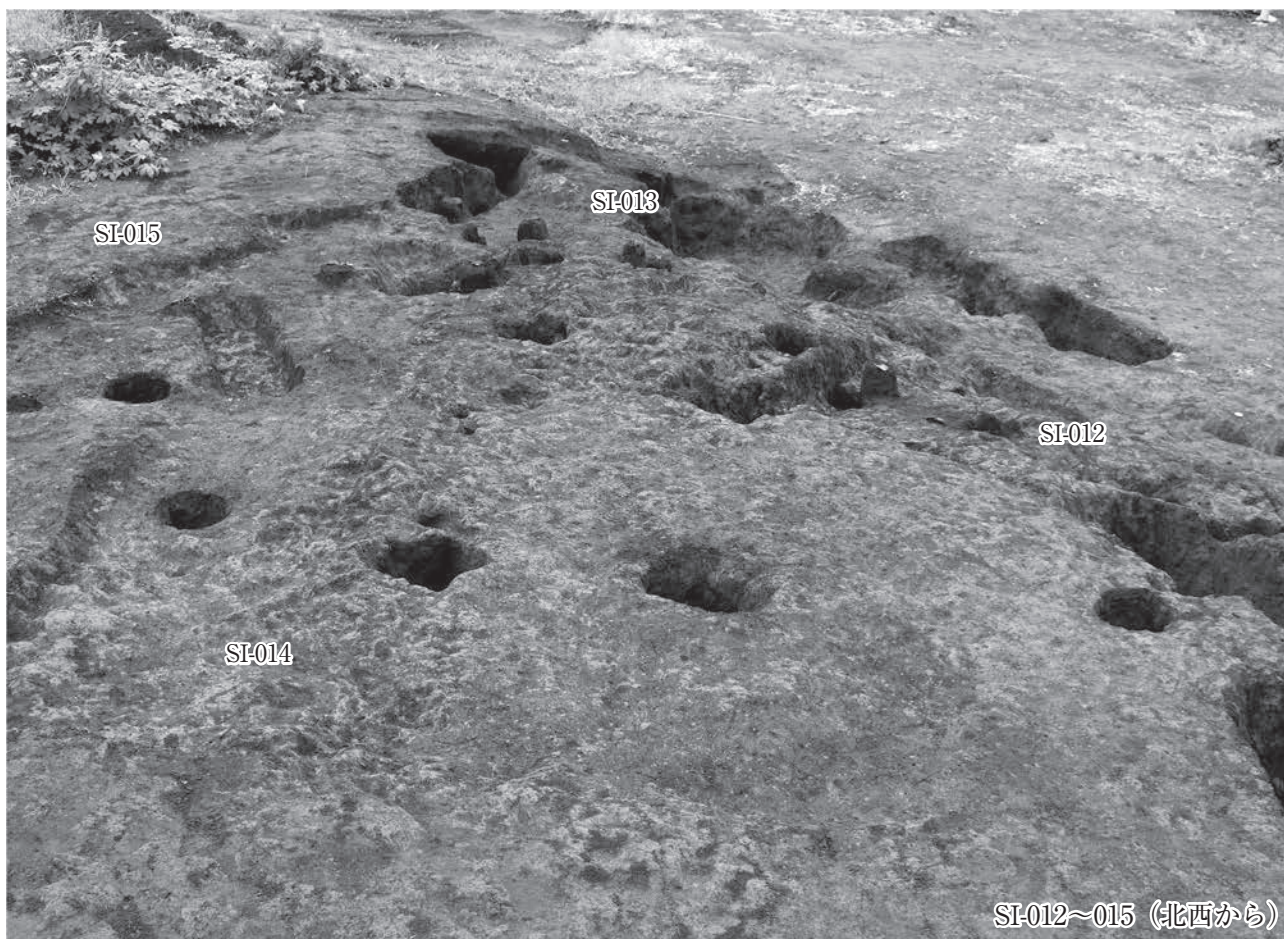


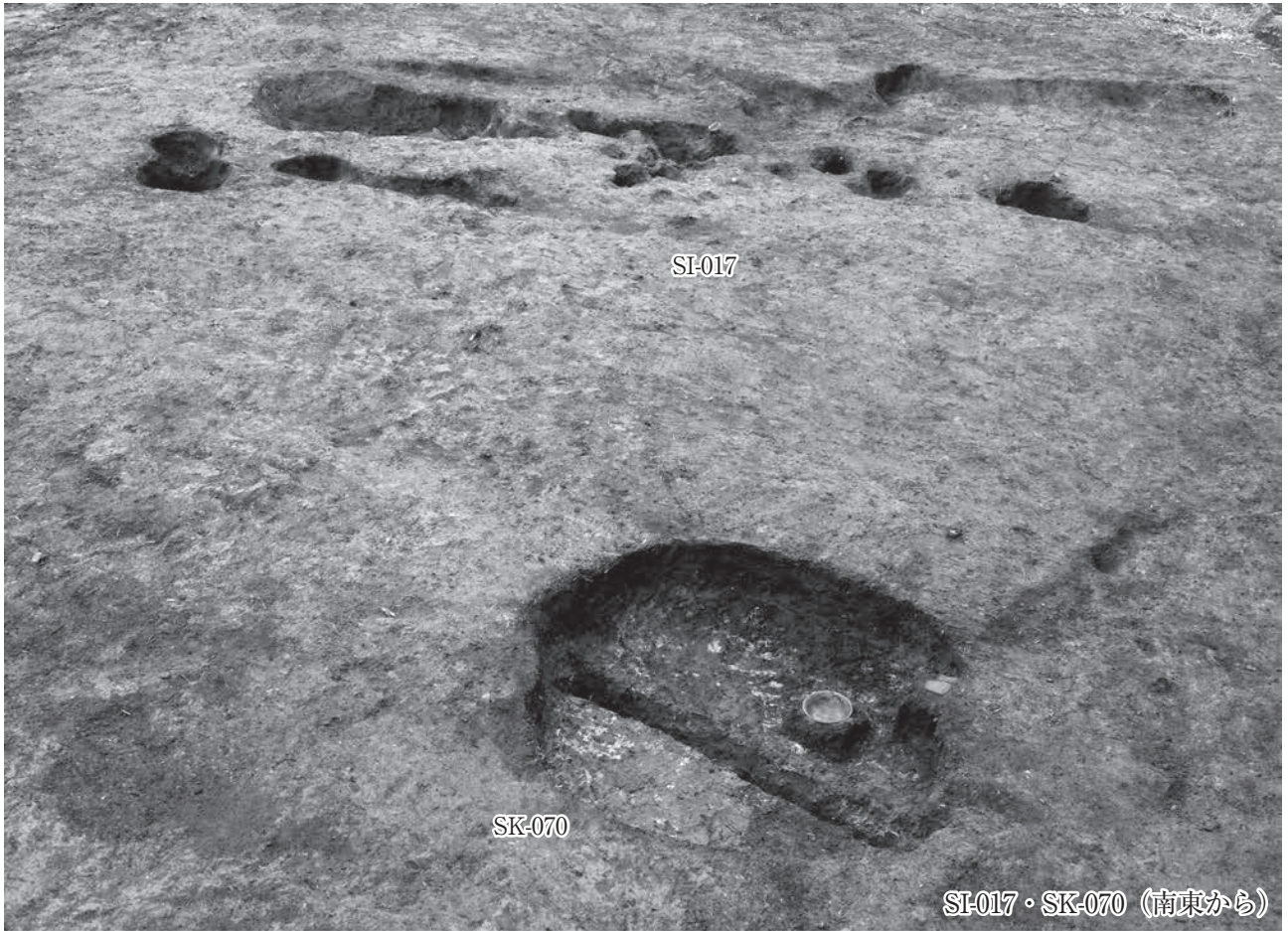
SI-012

SI-014

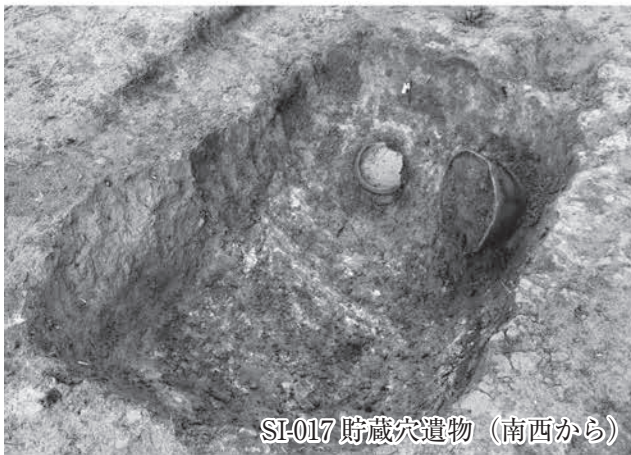
SI-013

SI-012・013 遺物 (東から)





SI-017・SK-070 (南東から)



SI-017 貯蔵穴遺物 (南西から)



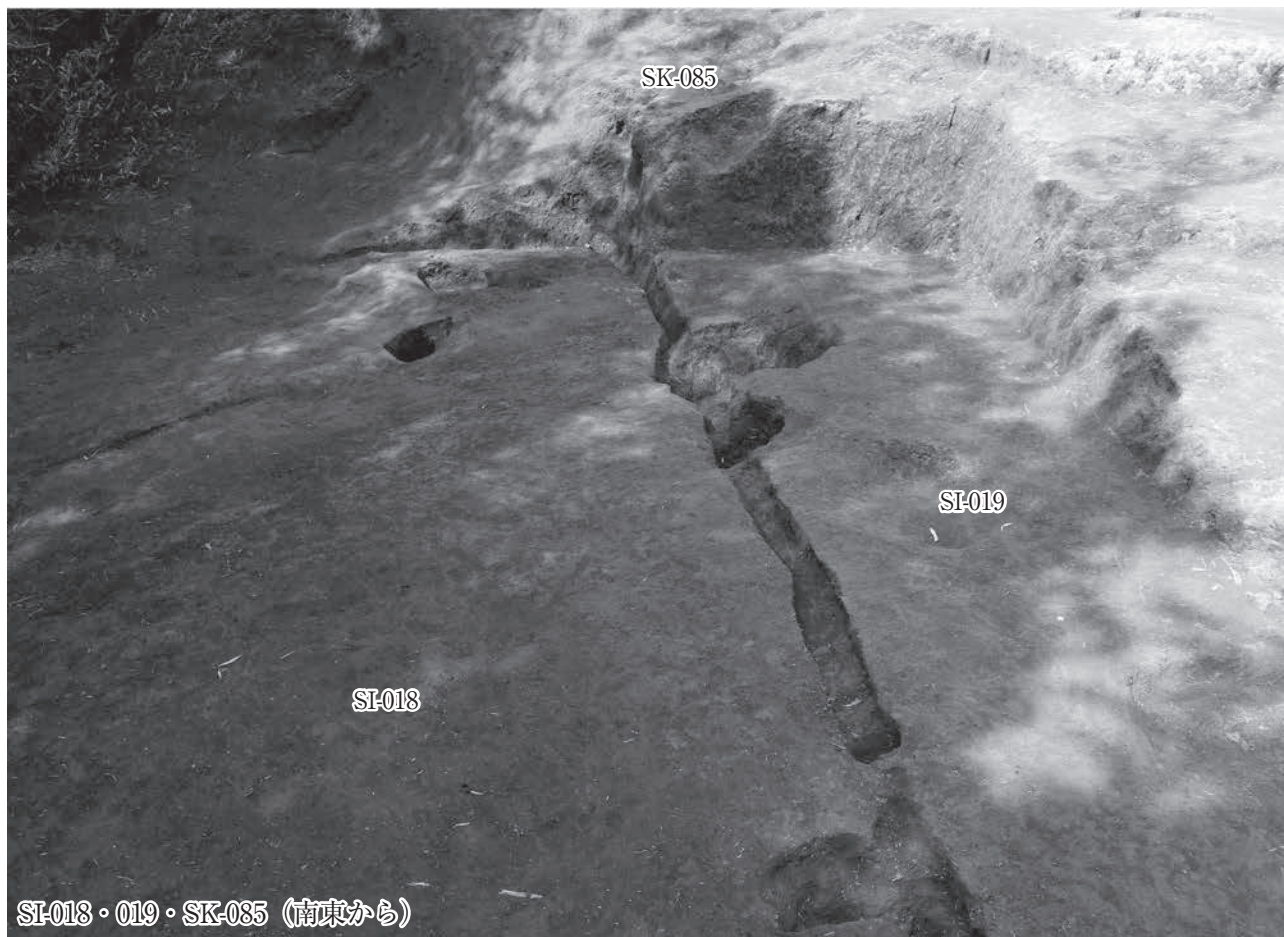
SI-018・019 セクション (南東から)

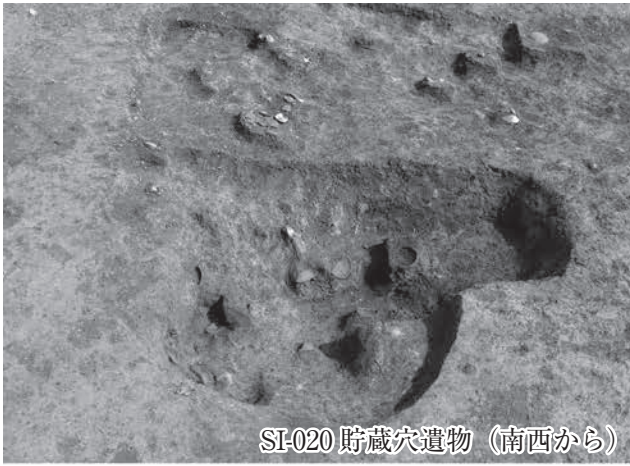


SI-018・019 遺物 (南西から)



SI-018 貯蔵穴遺物 (南東から)





SI-020 貯蔵穴遺物 (南西から)



SI-020 貯蔵穴セクション (南から)



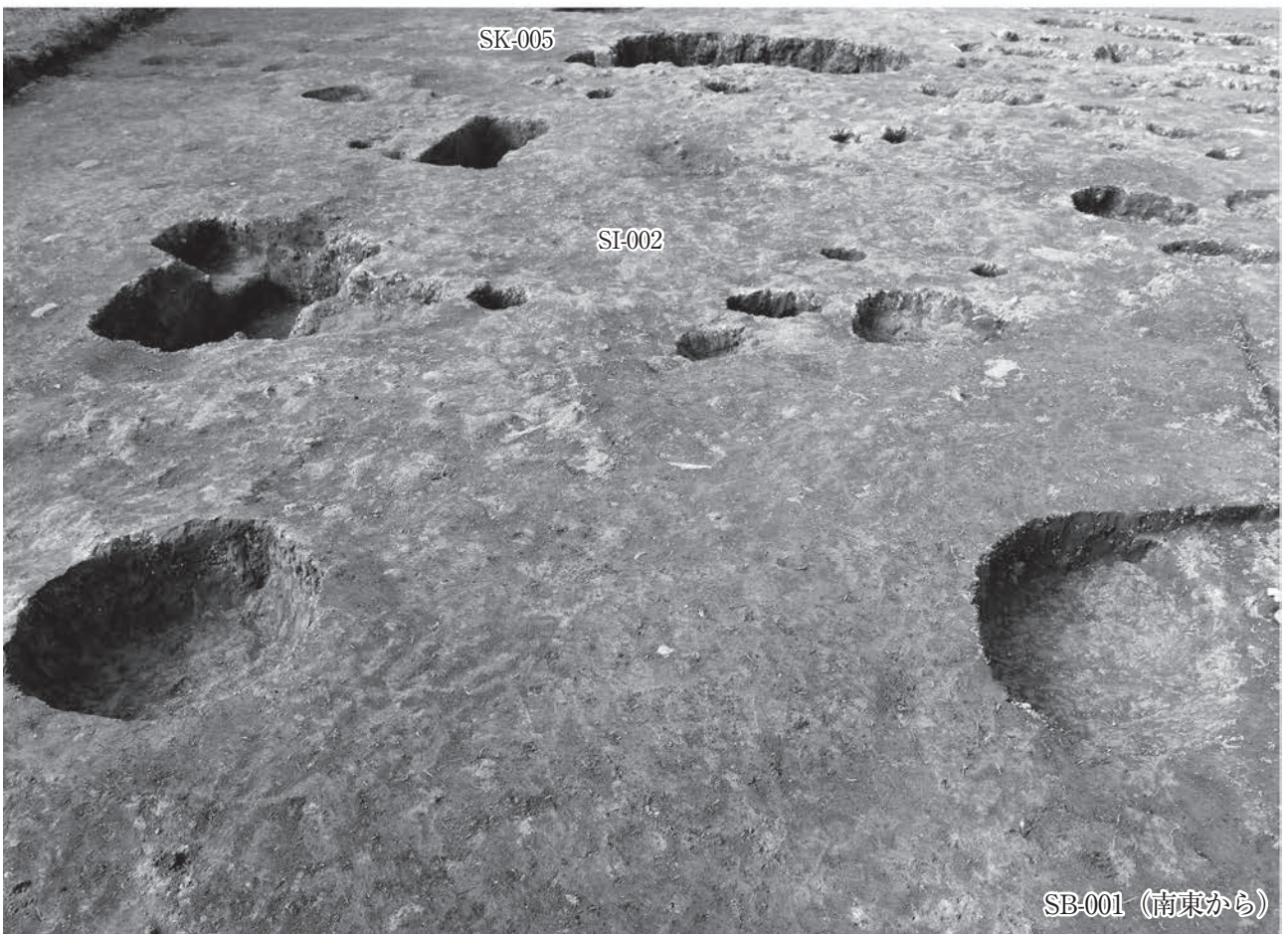
SK-021

SK-020

SK-021 (南西から)



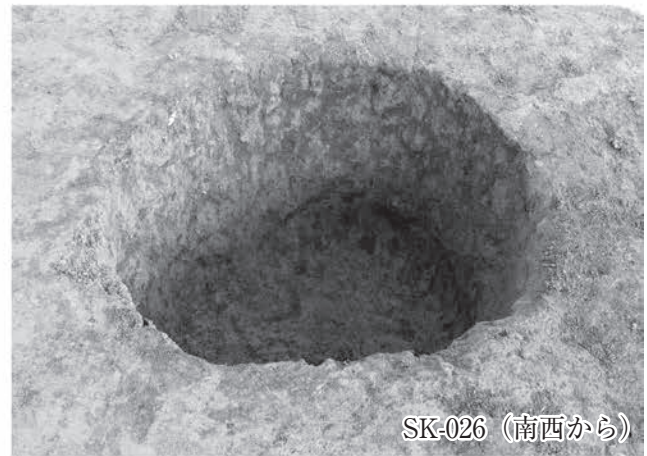
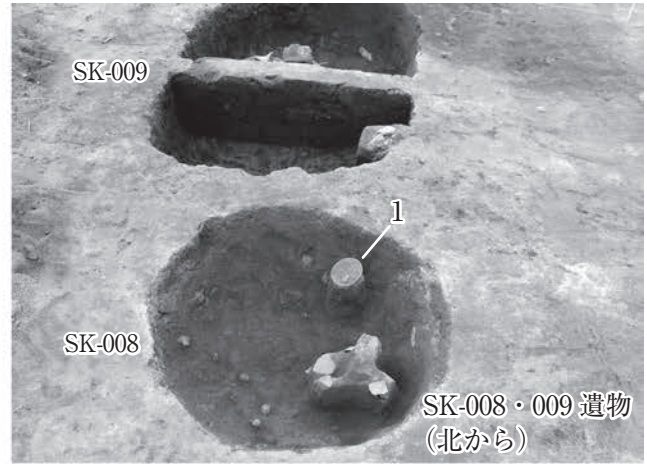
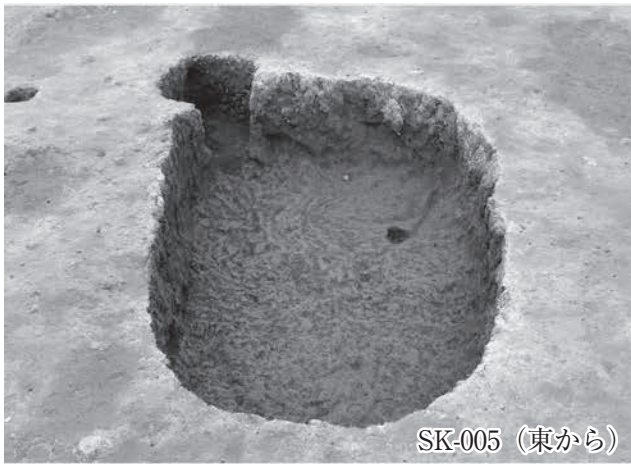
SK-004 (西から)

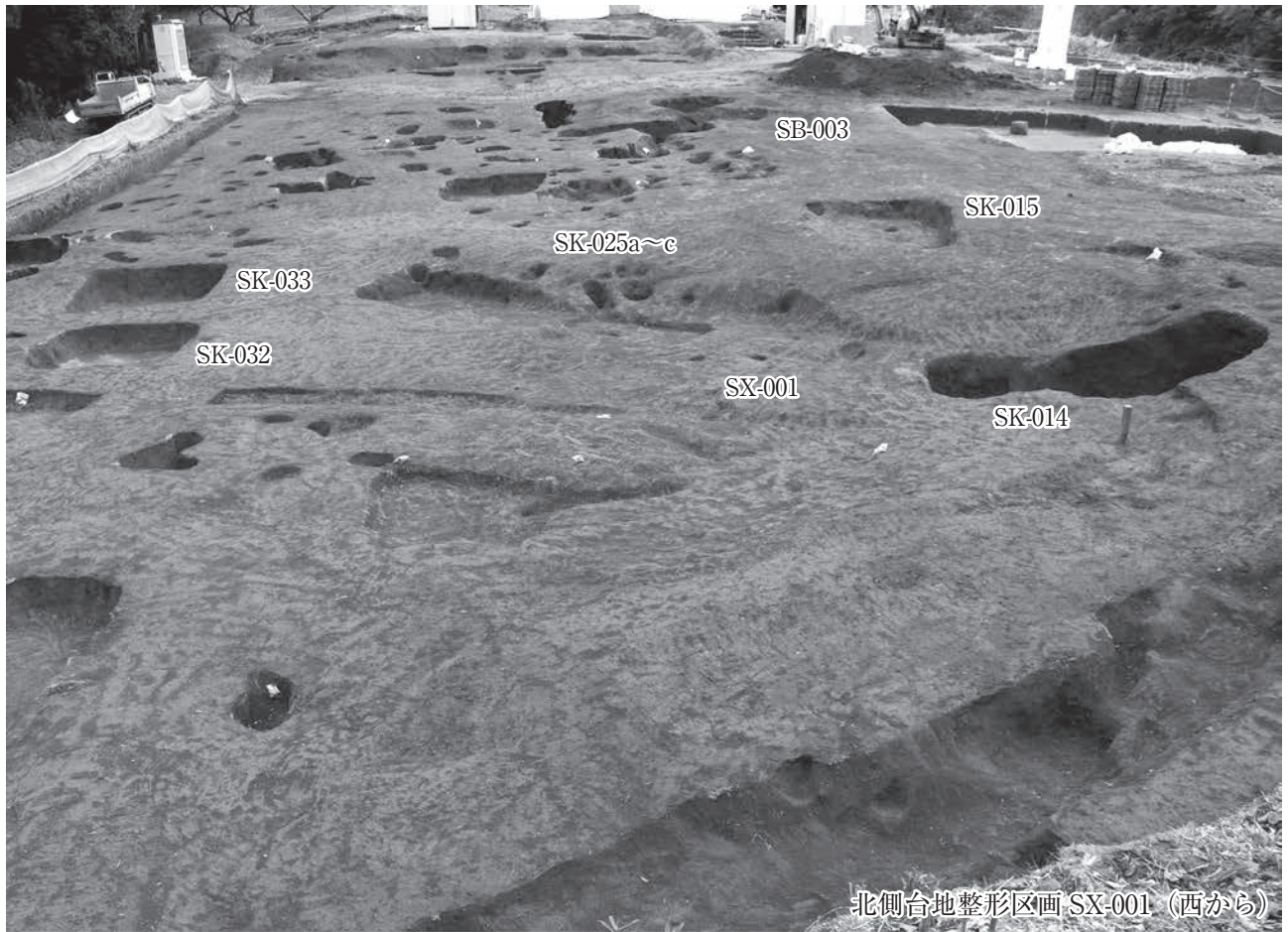


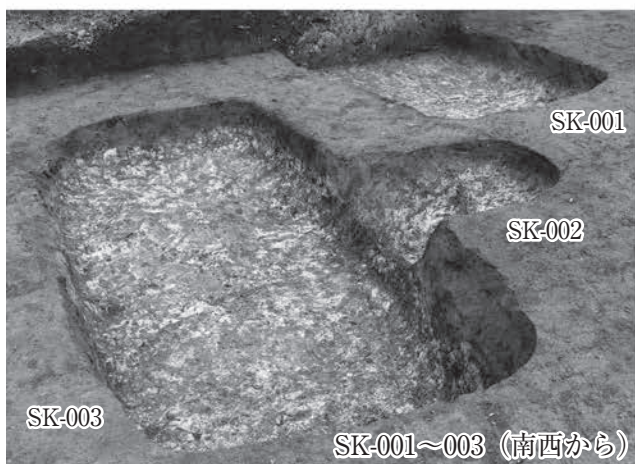
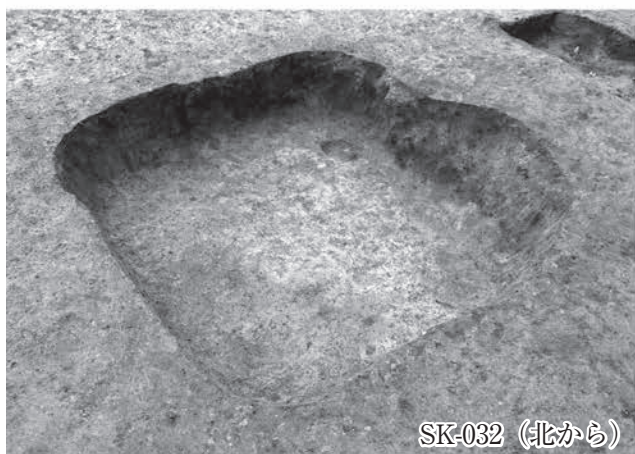
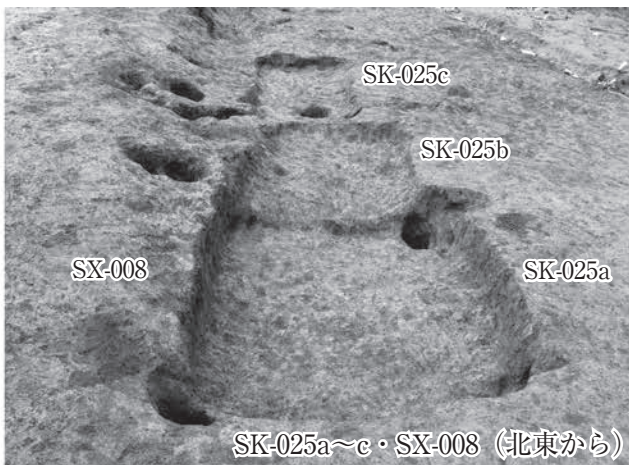
SK-005

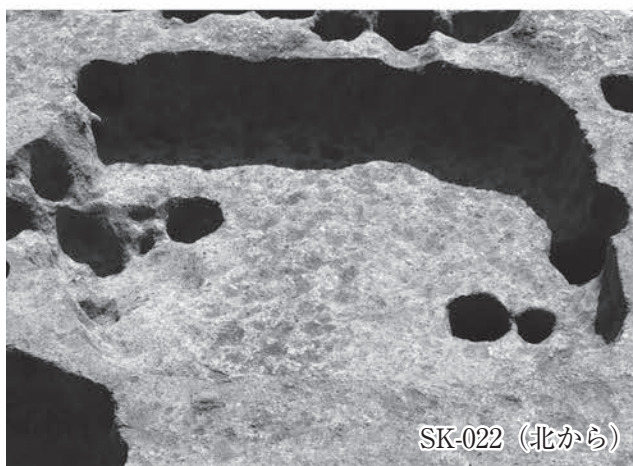
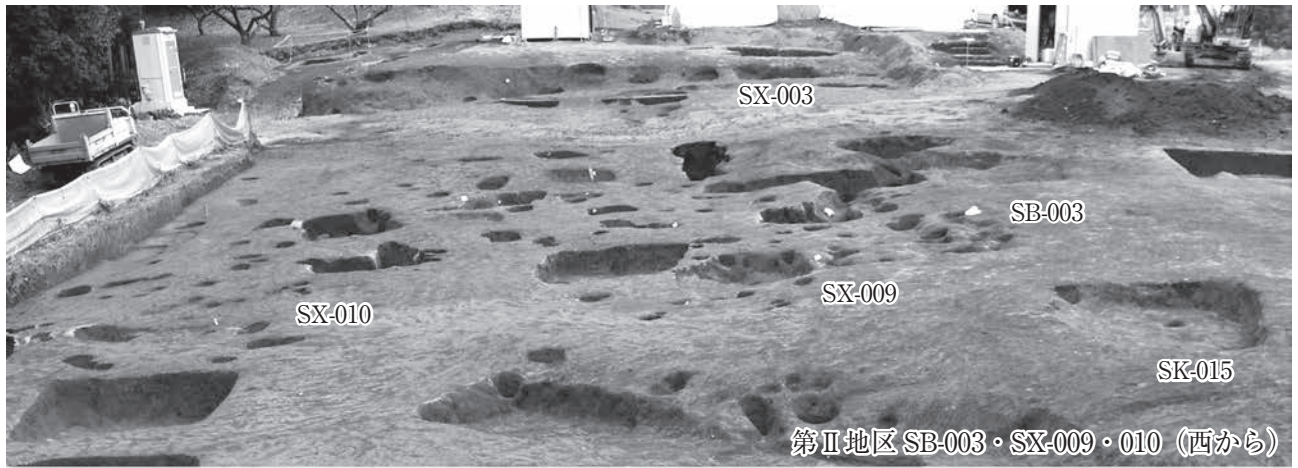
SI-002

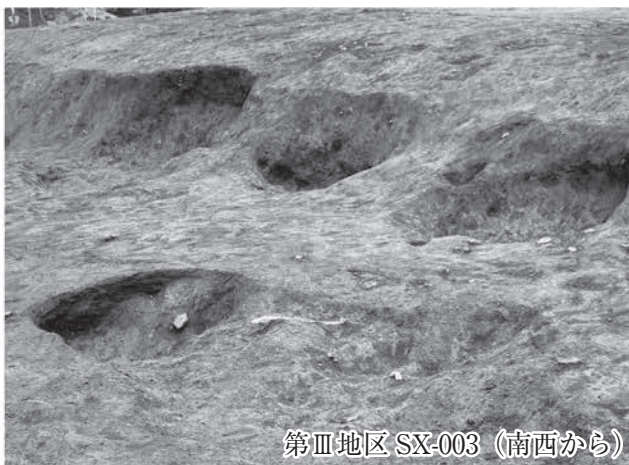
SB-001 (南東から)

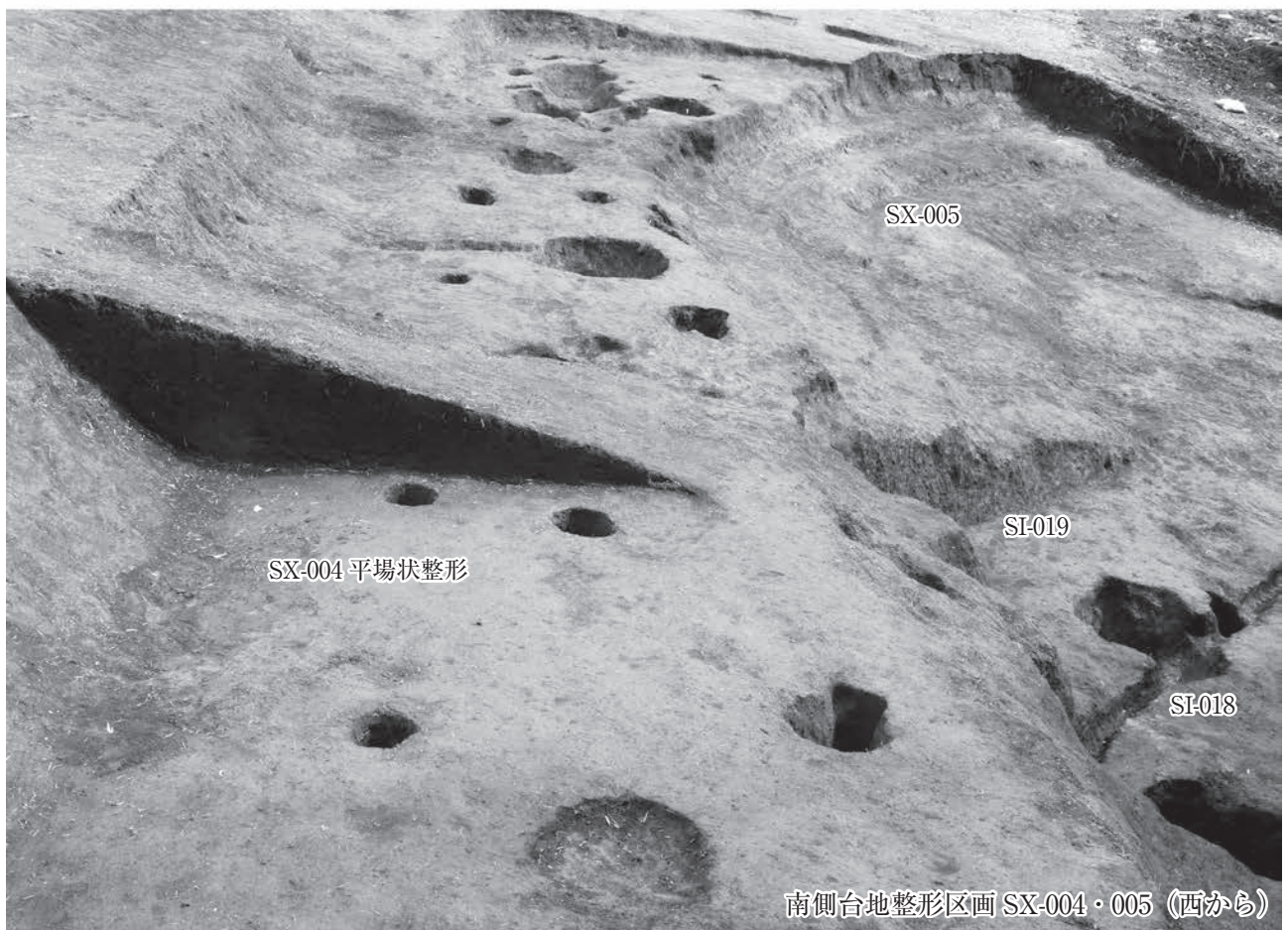
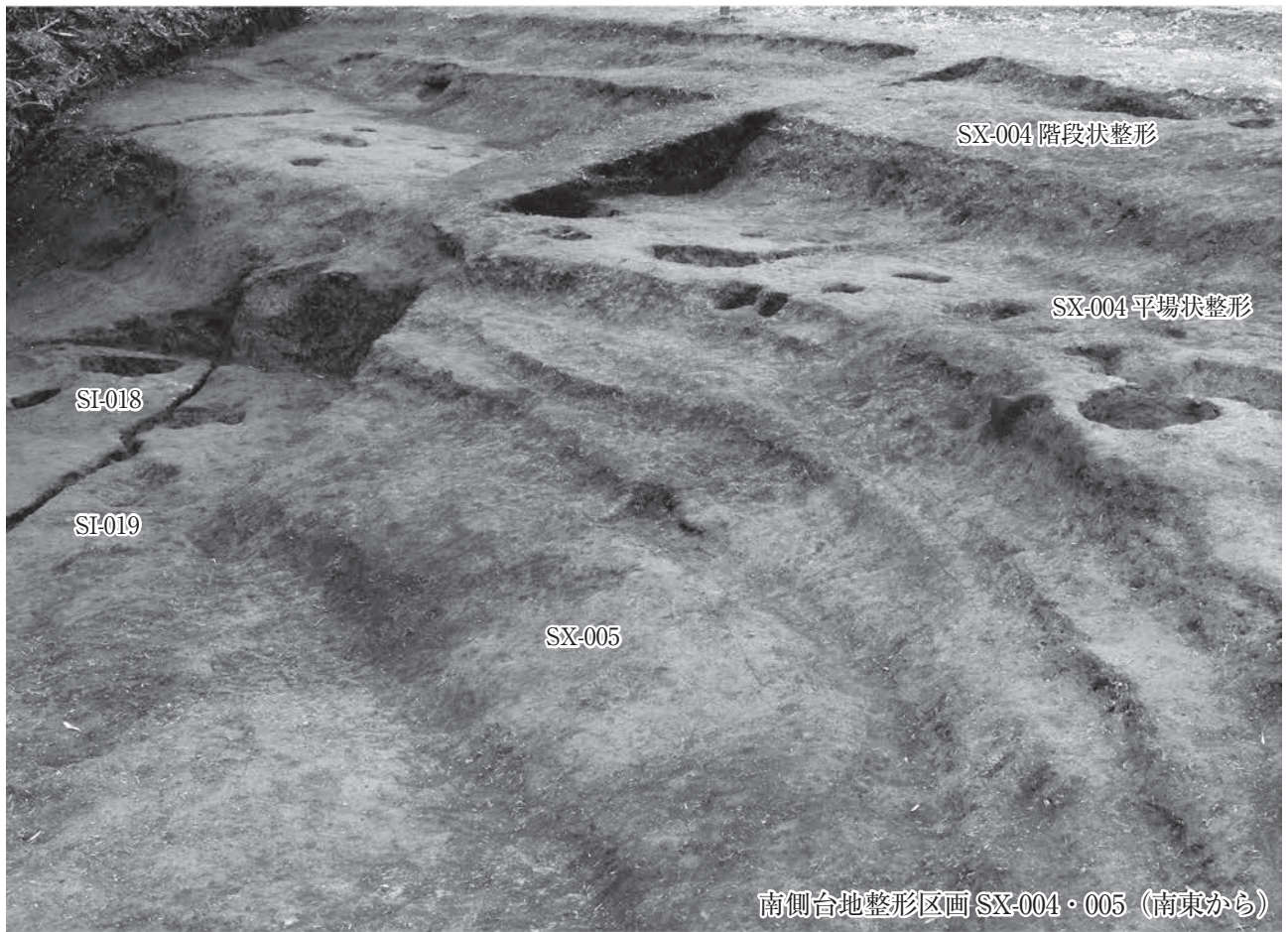


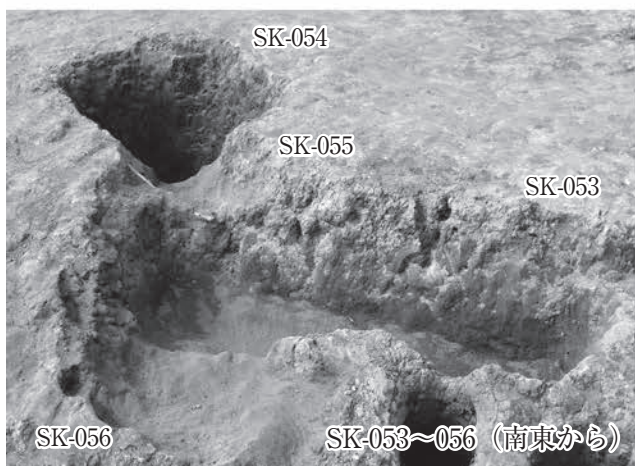
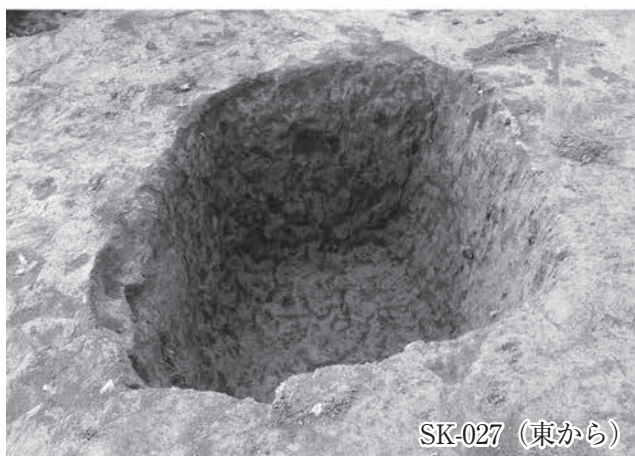
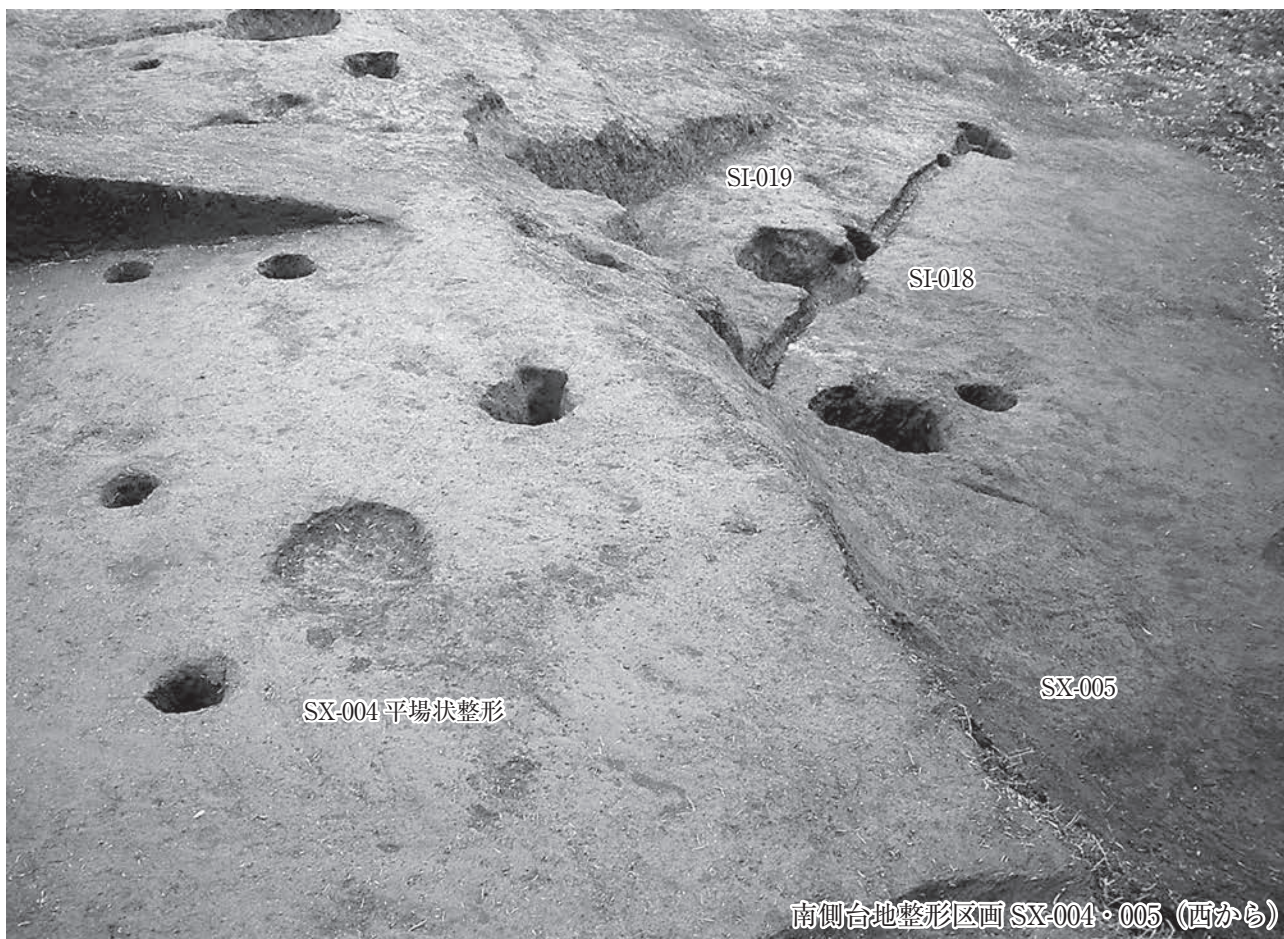




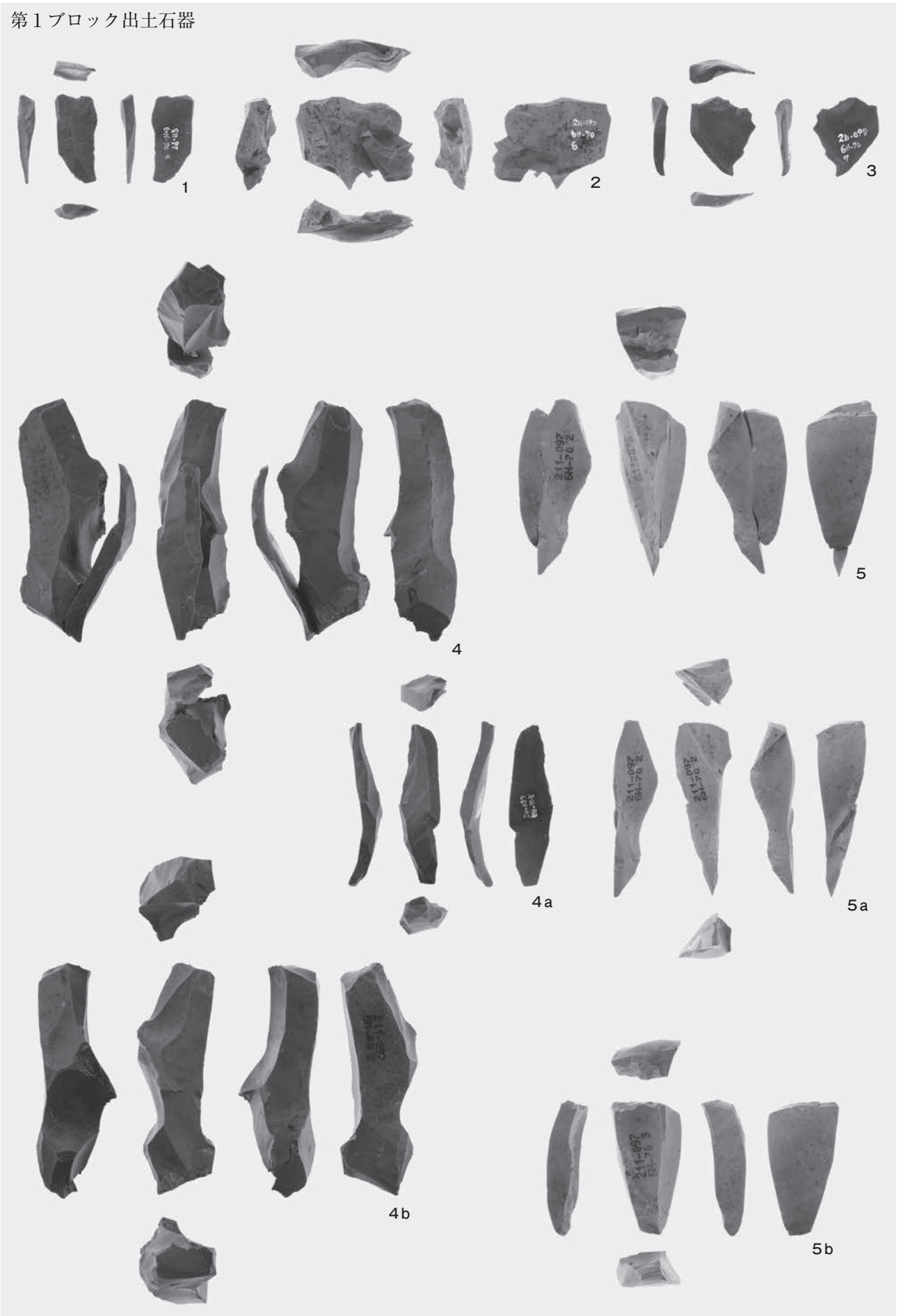




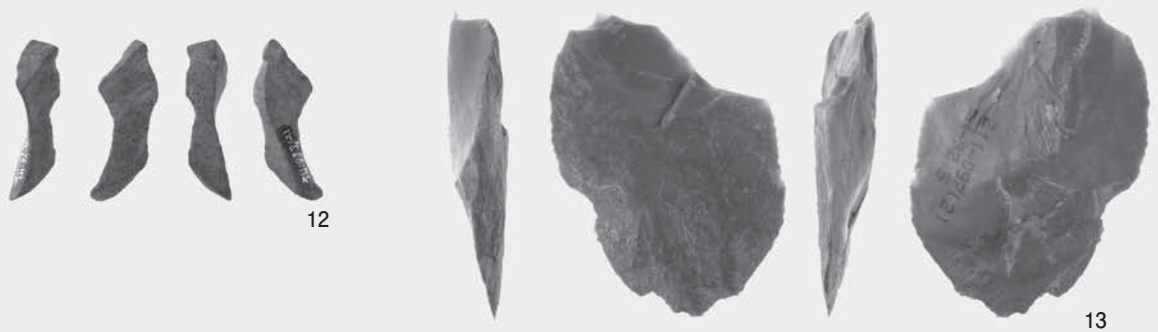
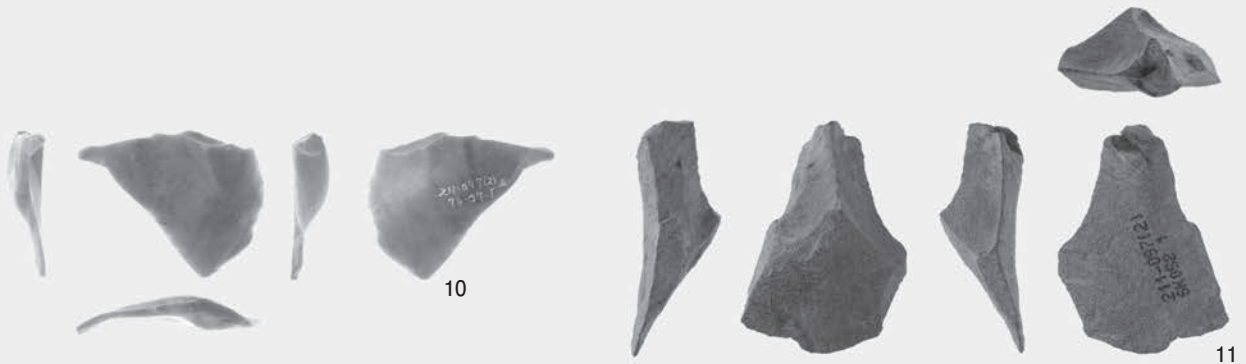
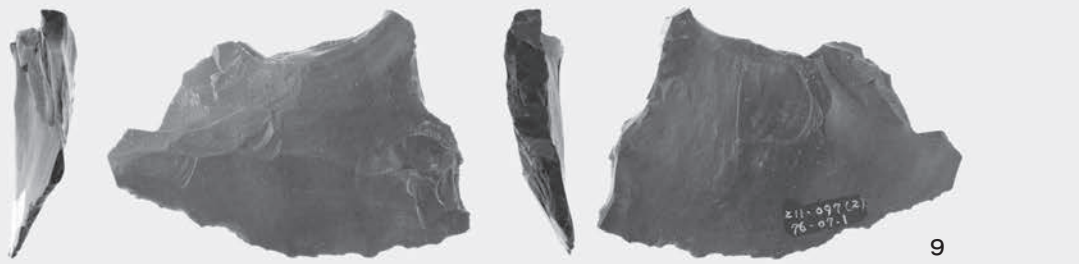
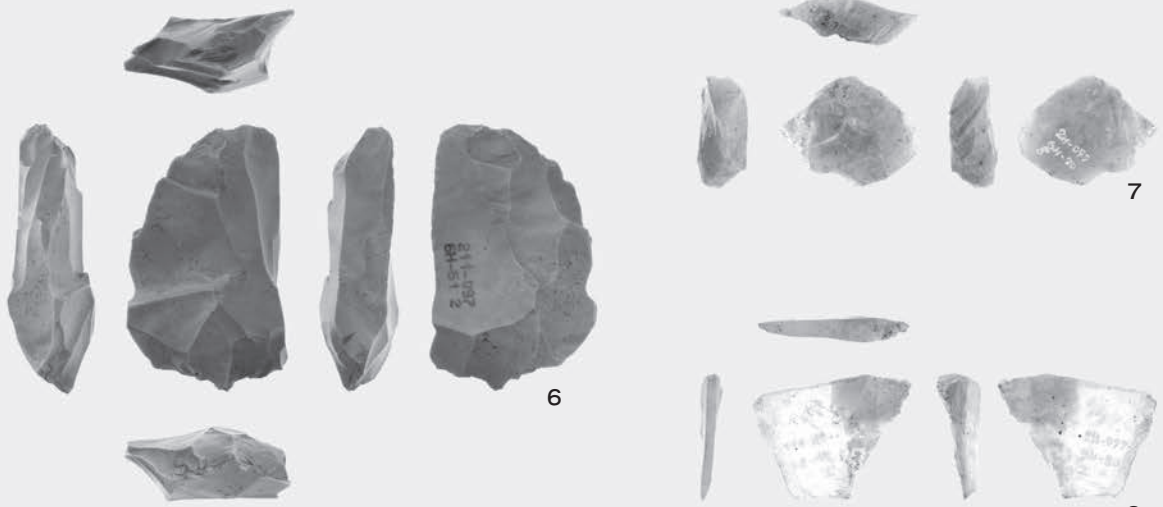


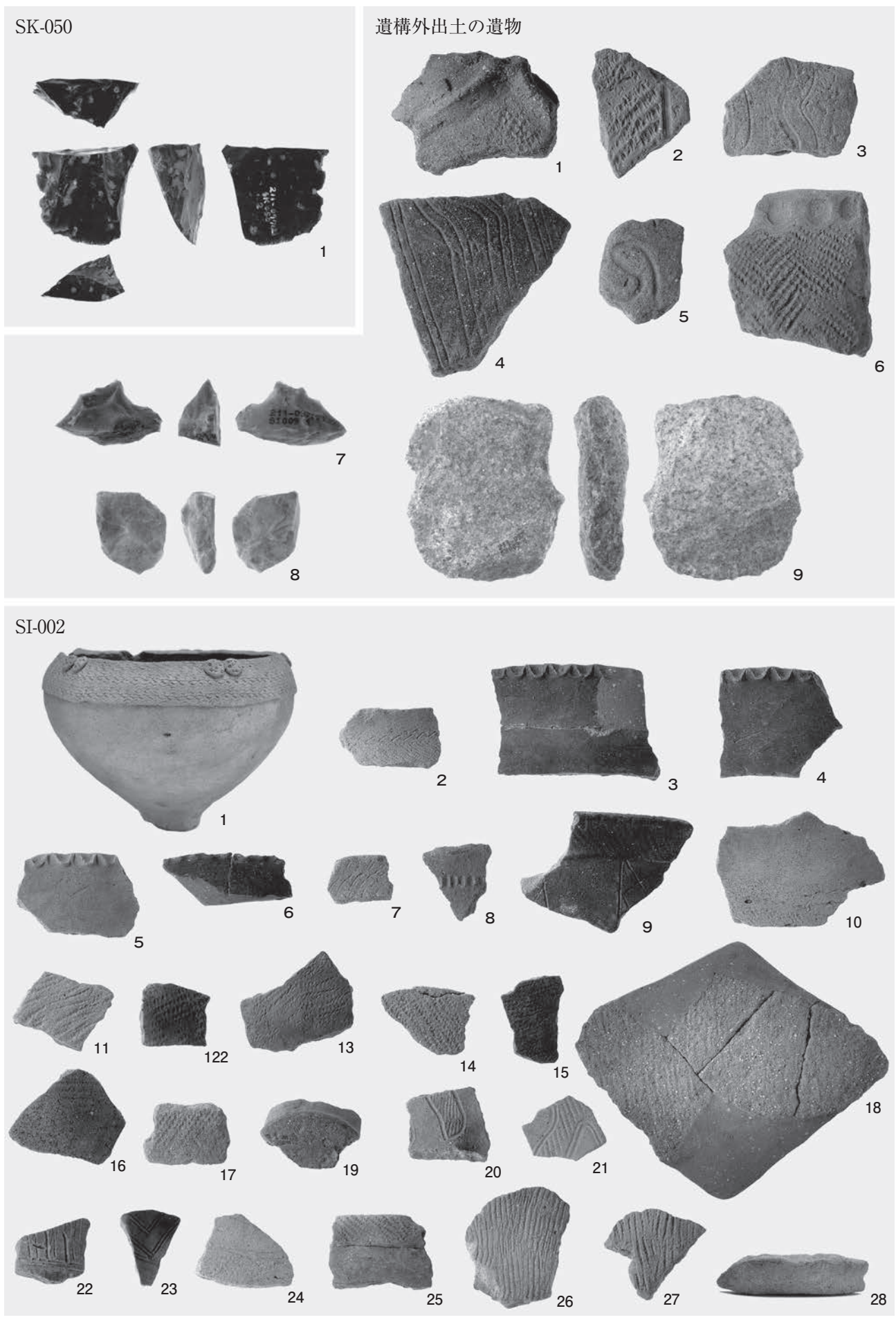


第1ブロック出土石器

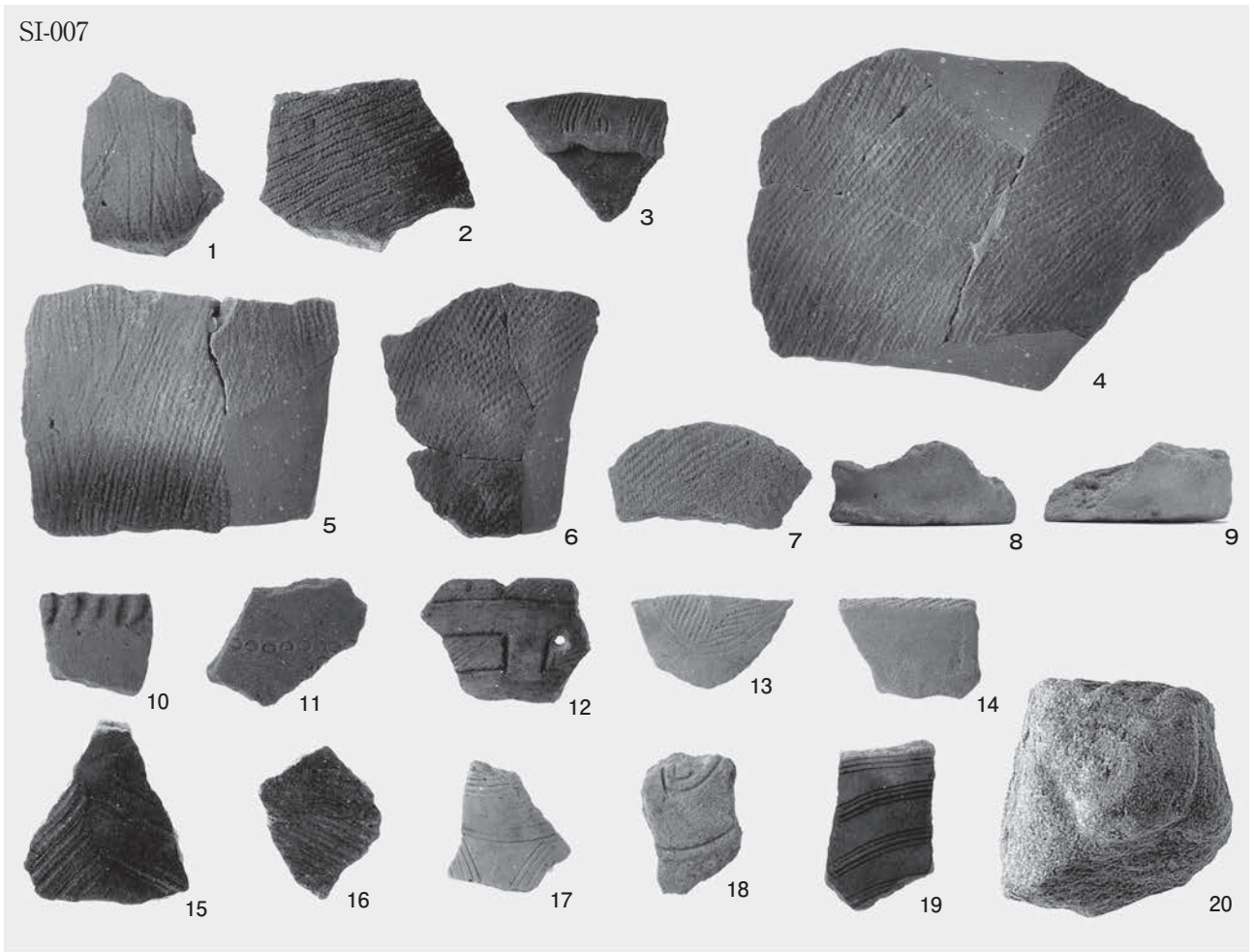


单独出土石器

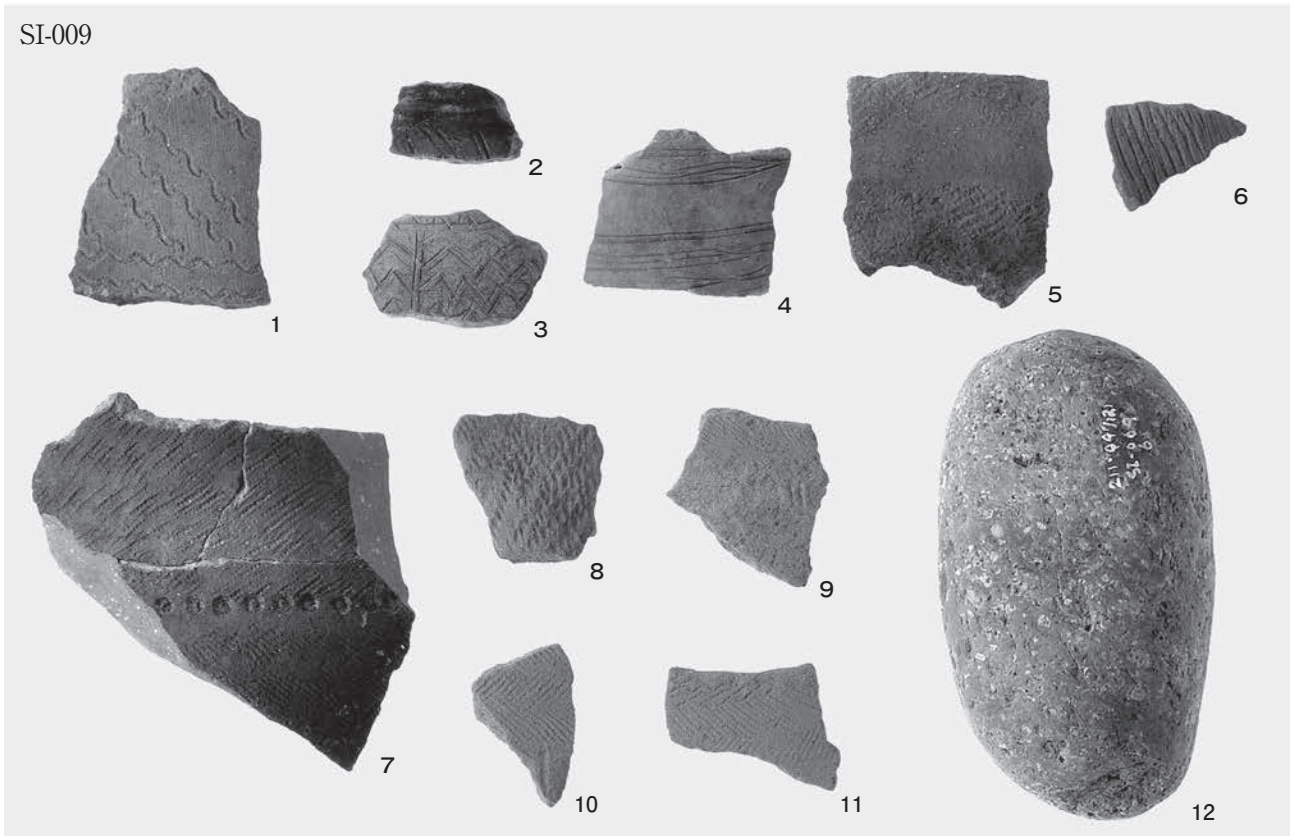




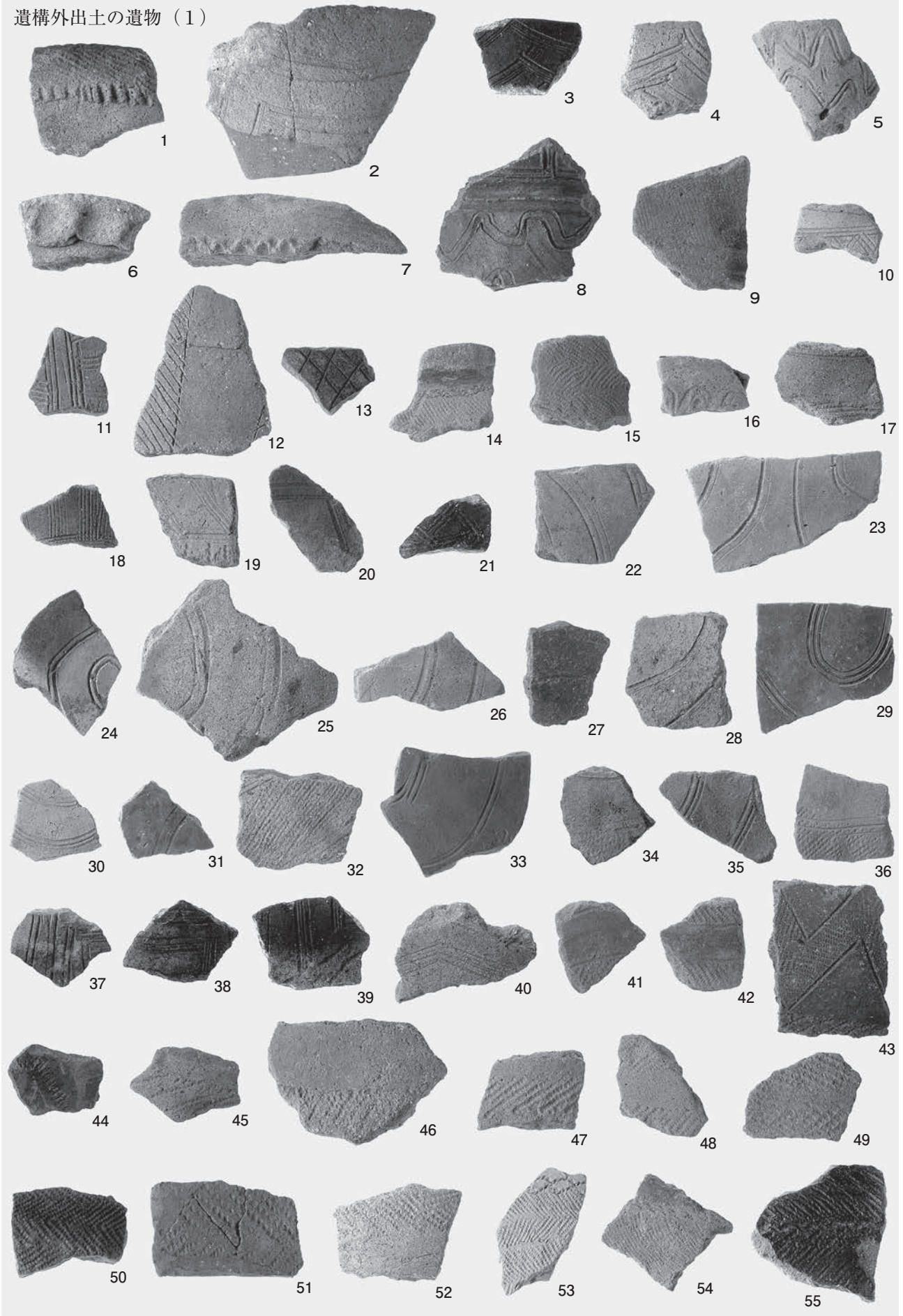
SI-007



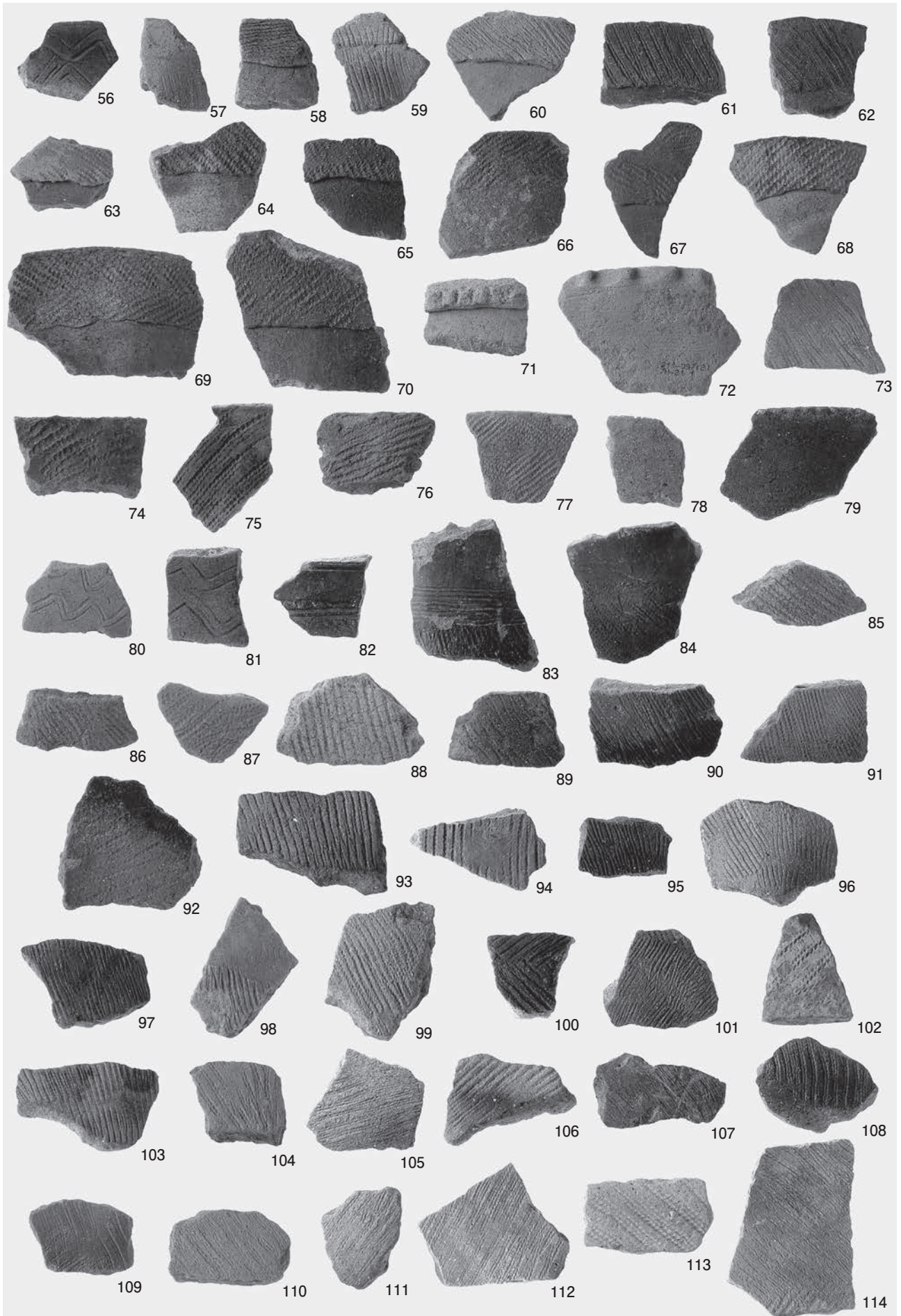
SI-009



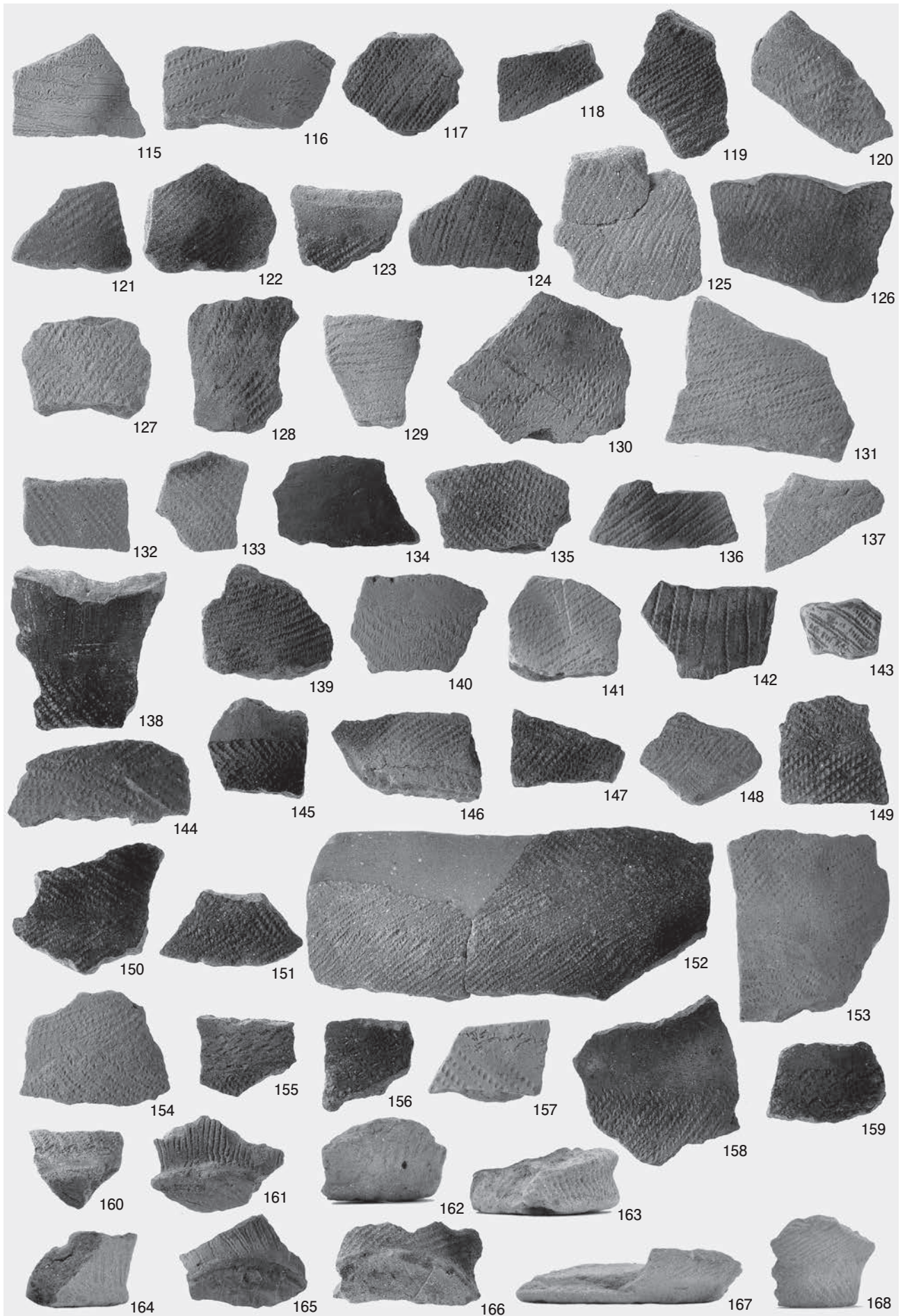
遺構外出土の遺物 (1)

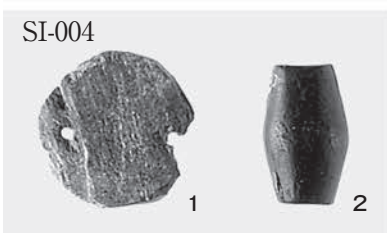
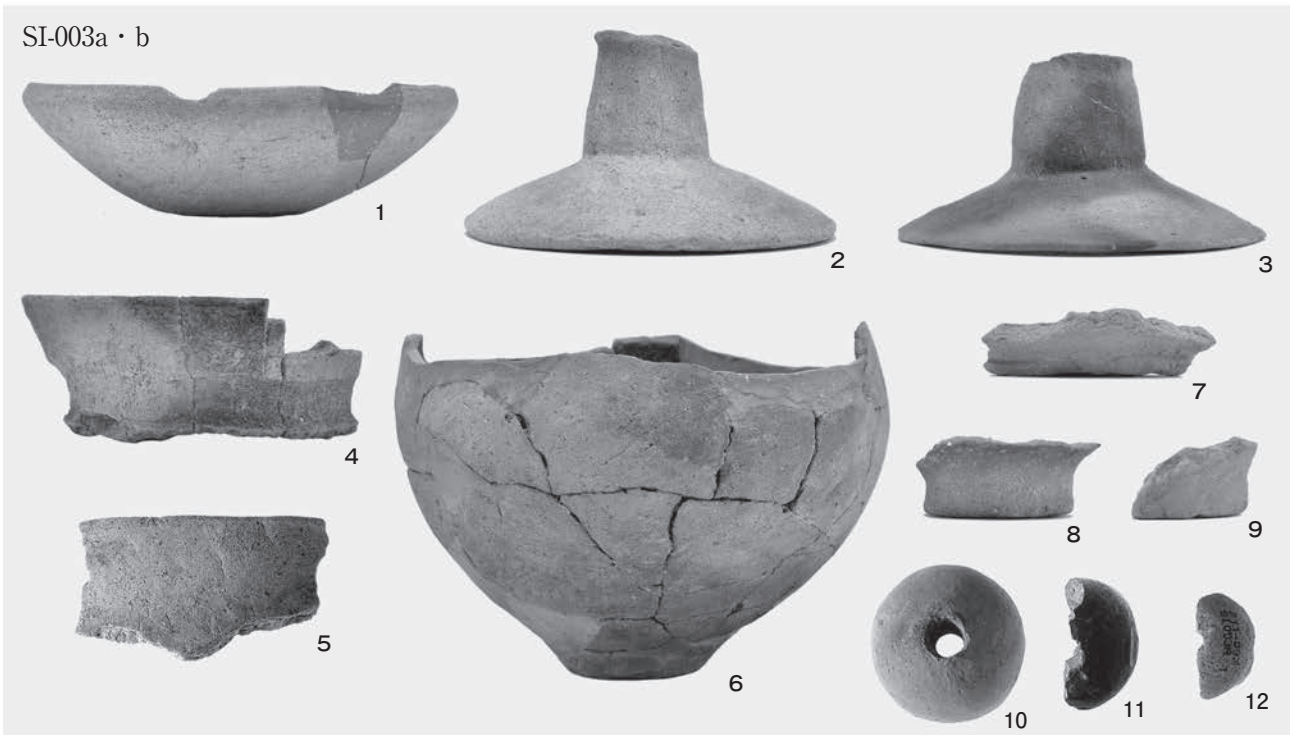
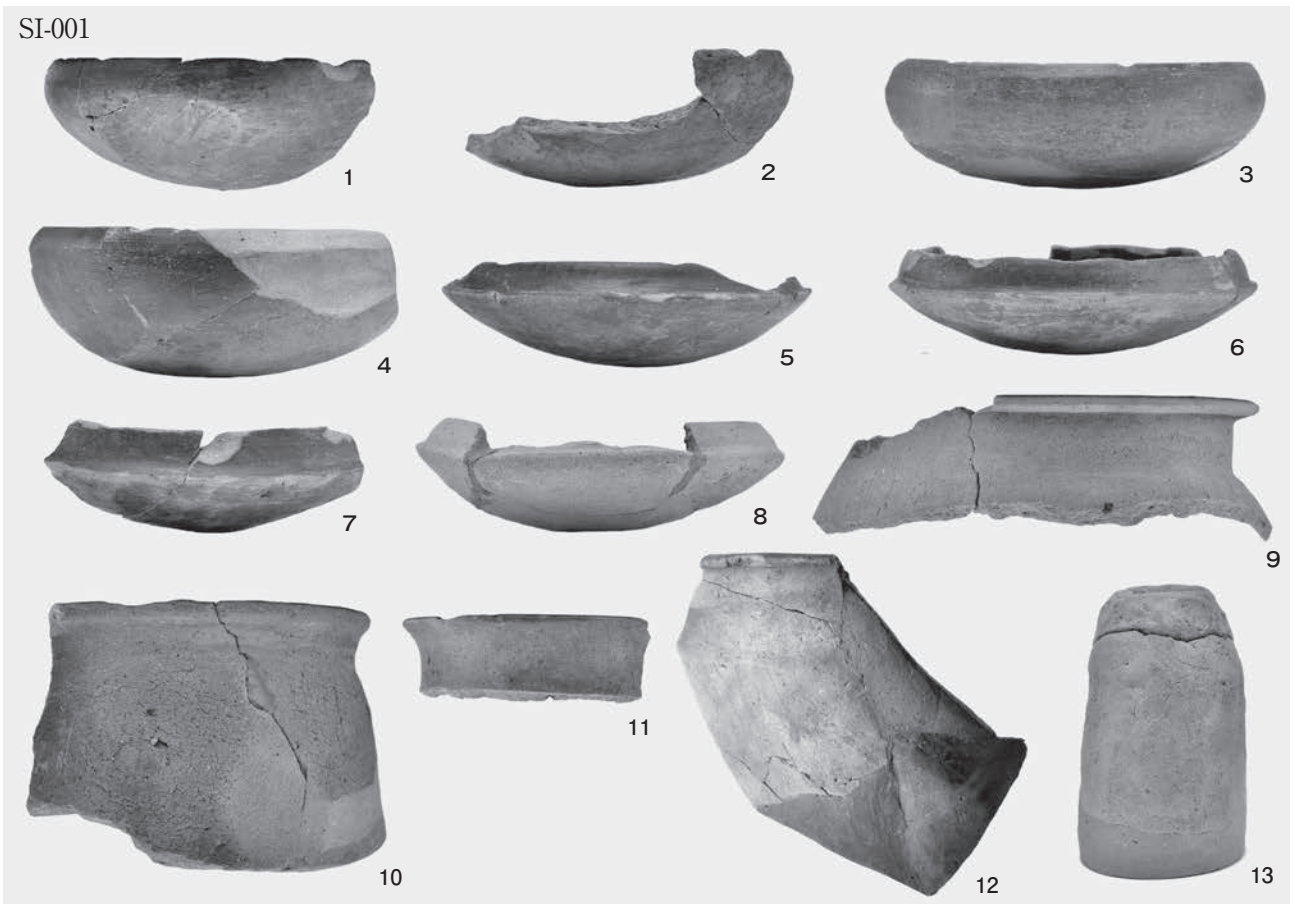


遺構外出土の遺物（2）

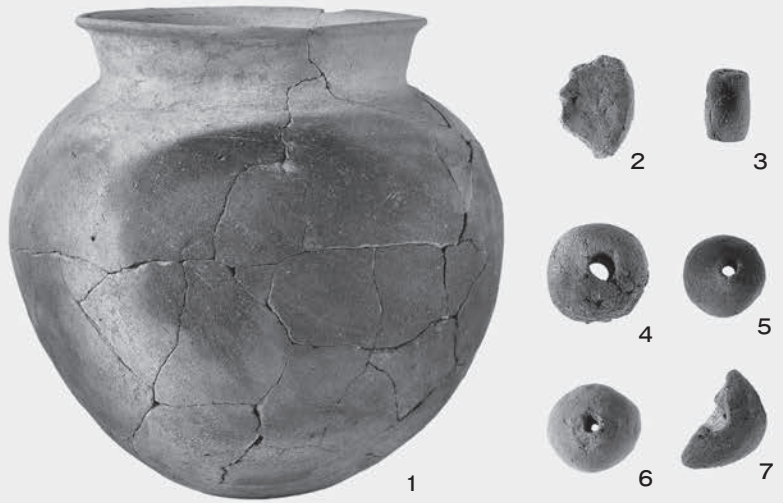


遺構外の出土遺物 (3)

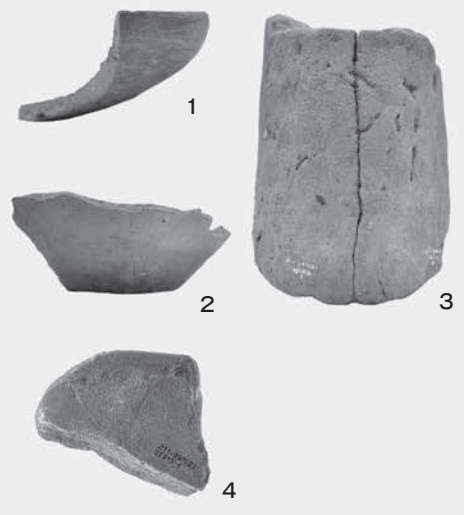




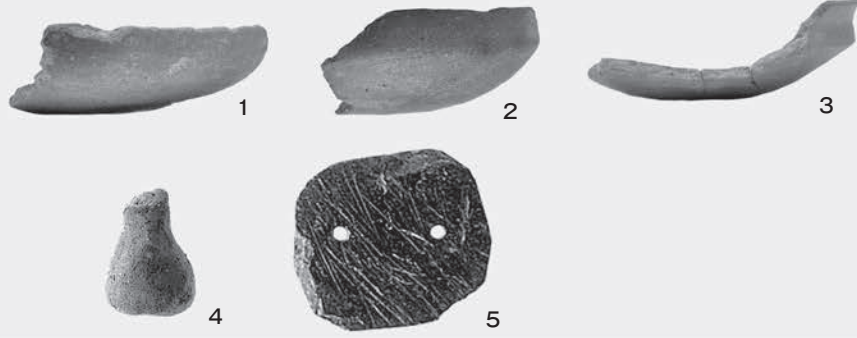
SI-006



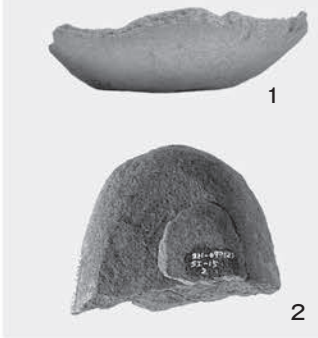
SI-013



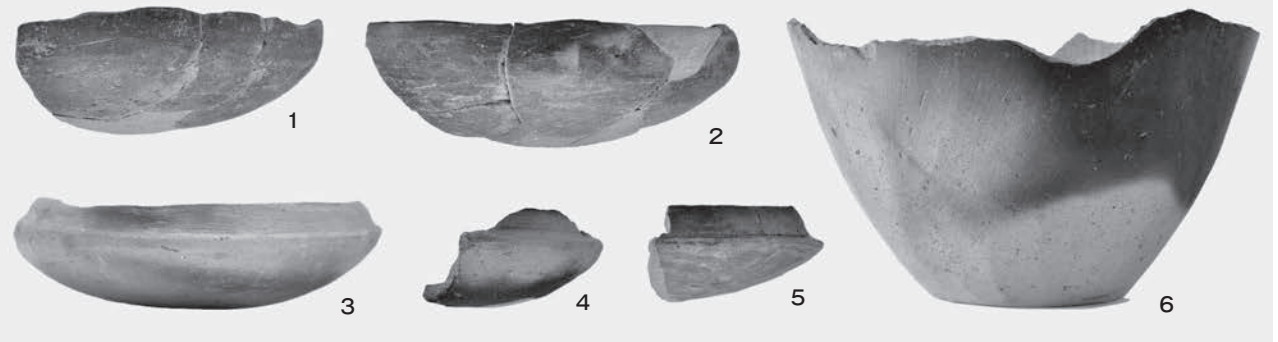
SI-014



SI-015



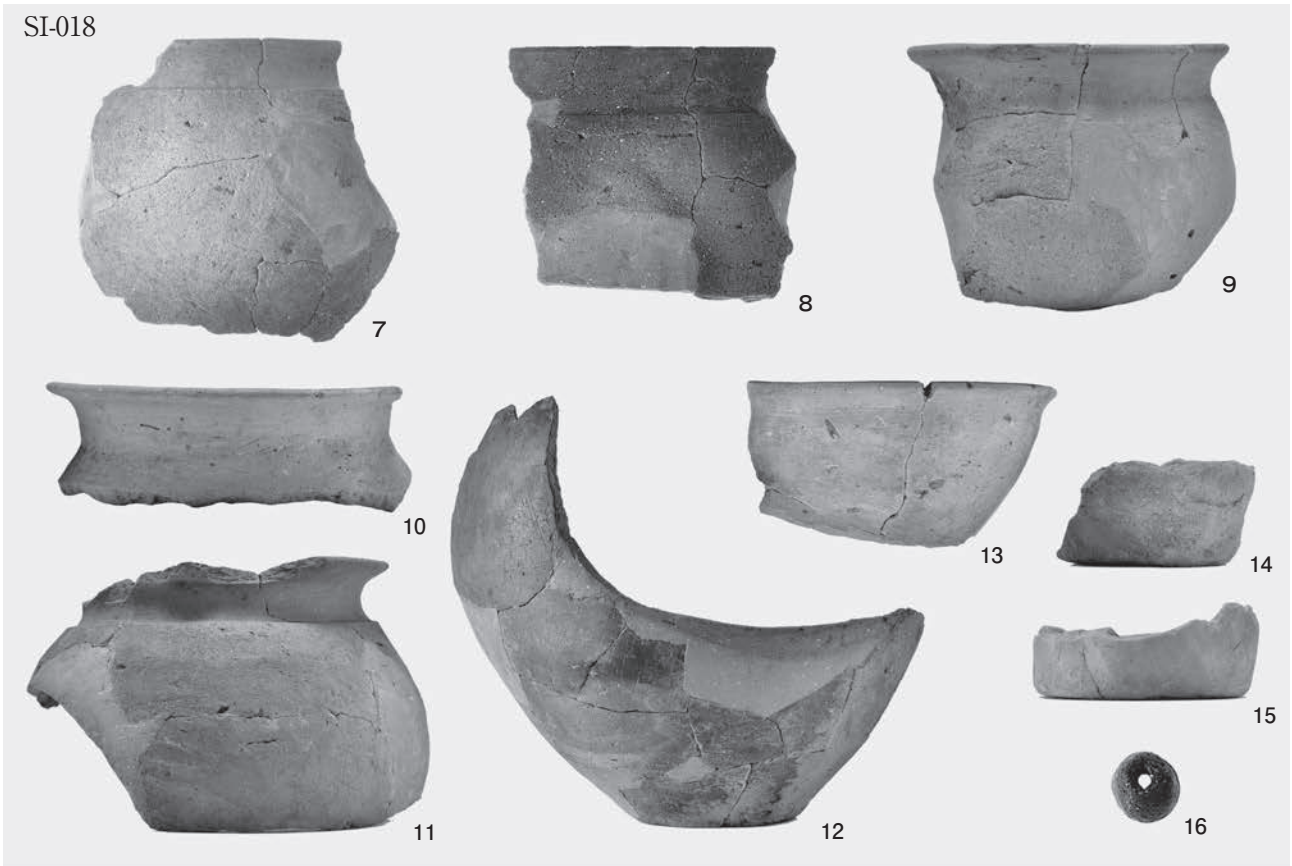
SI-017



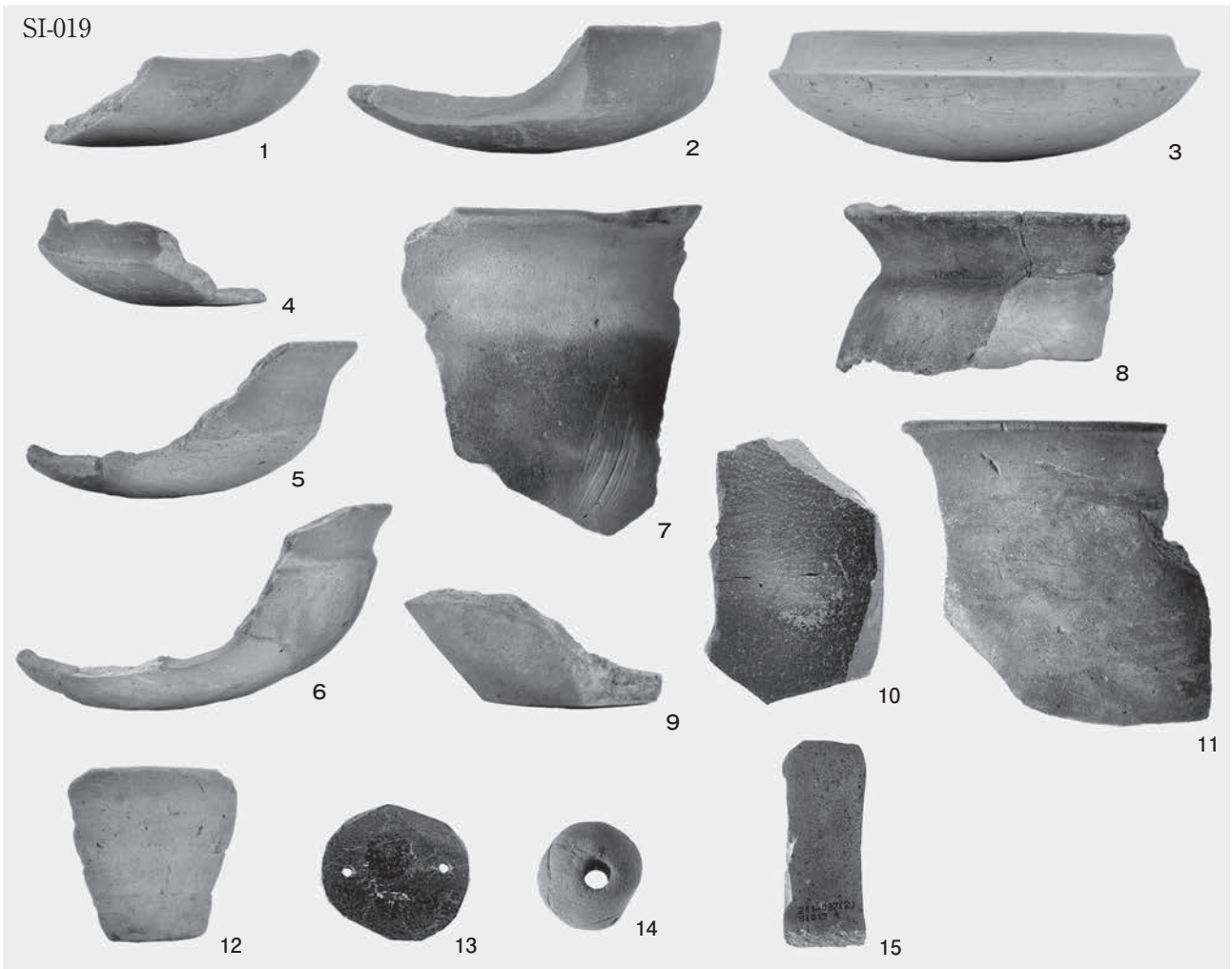
SI-018

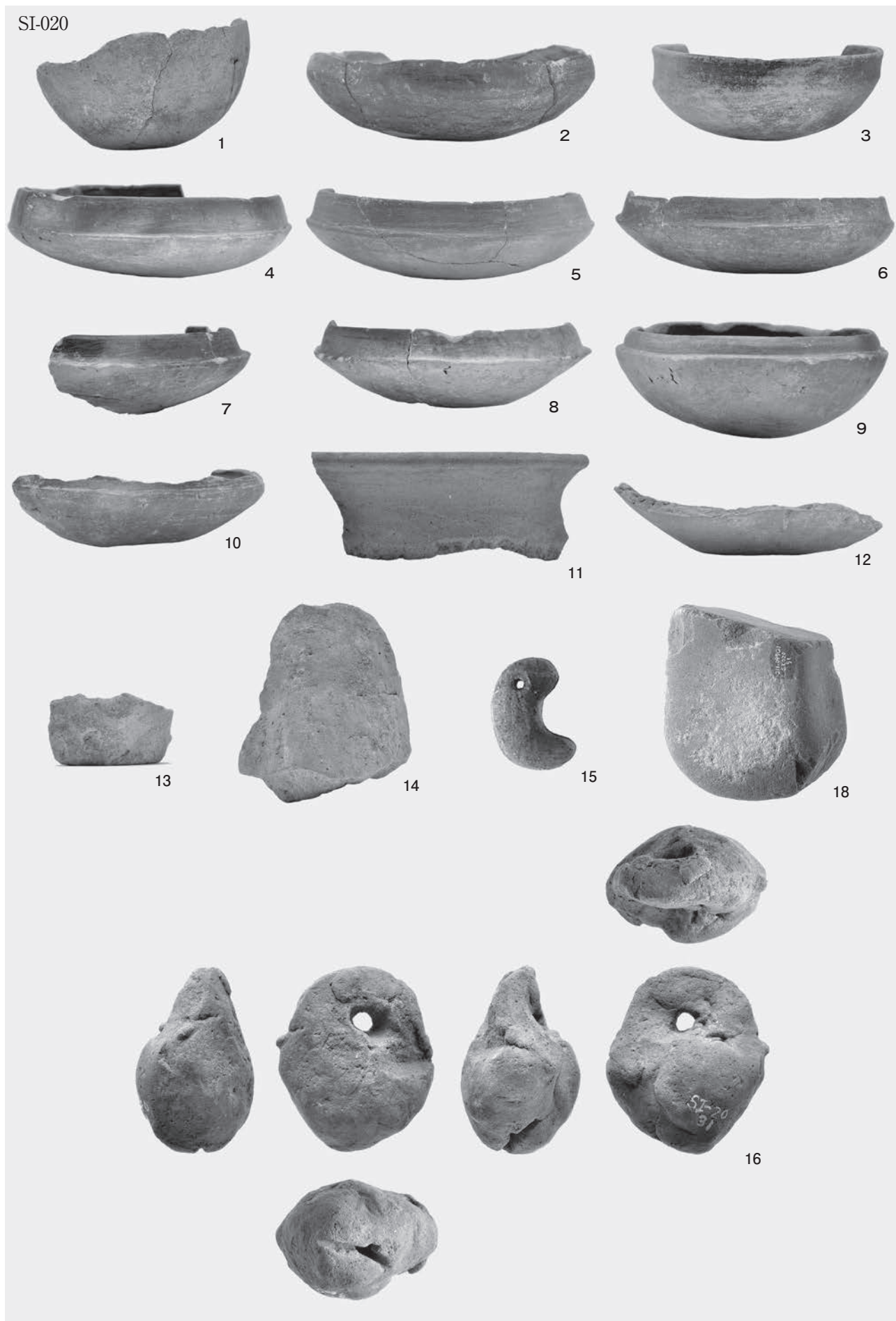


SI-018



SI-019





SI-020



SI-021



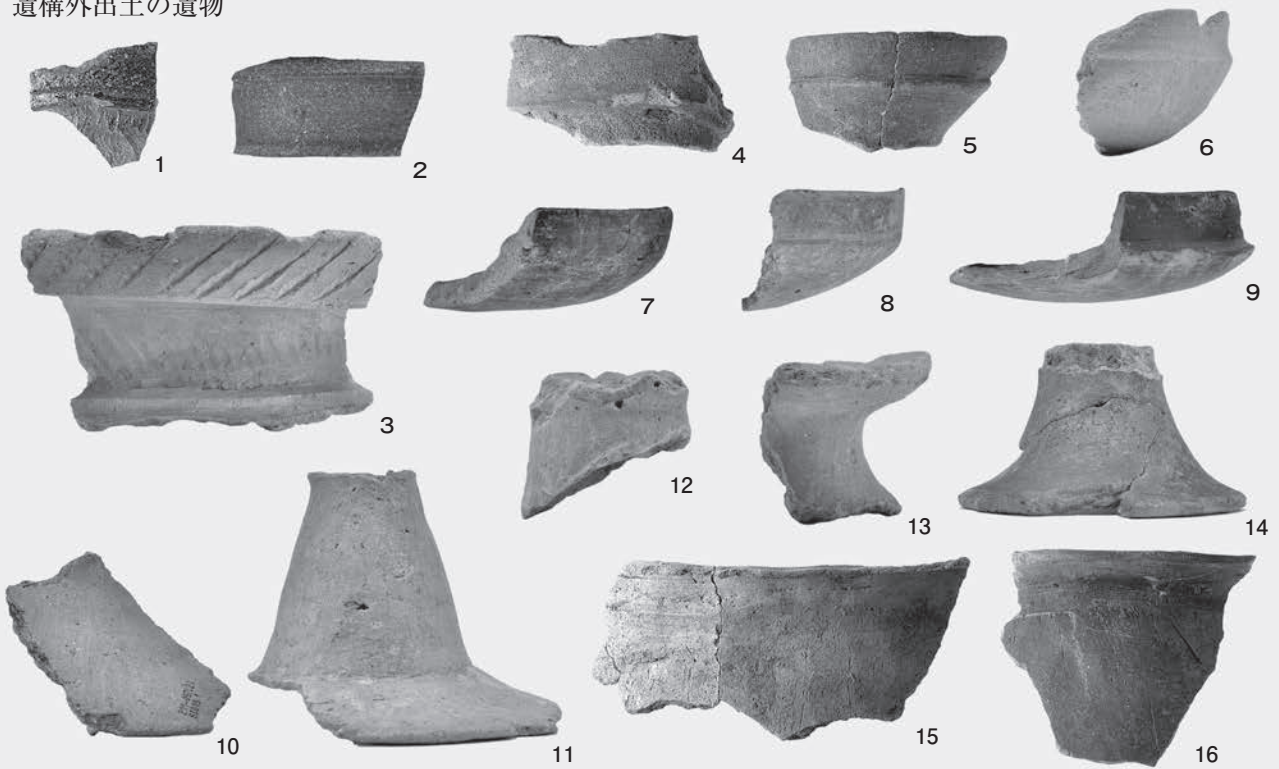
SK-021



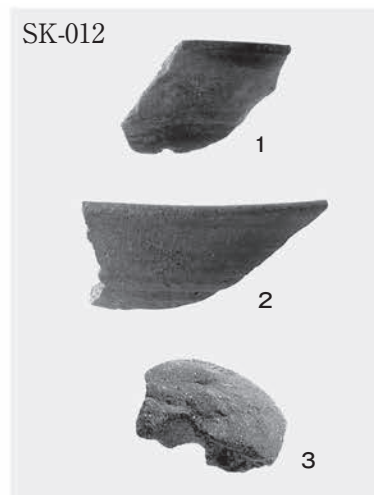
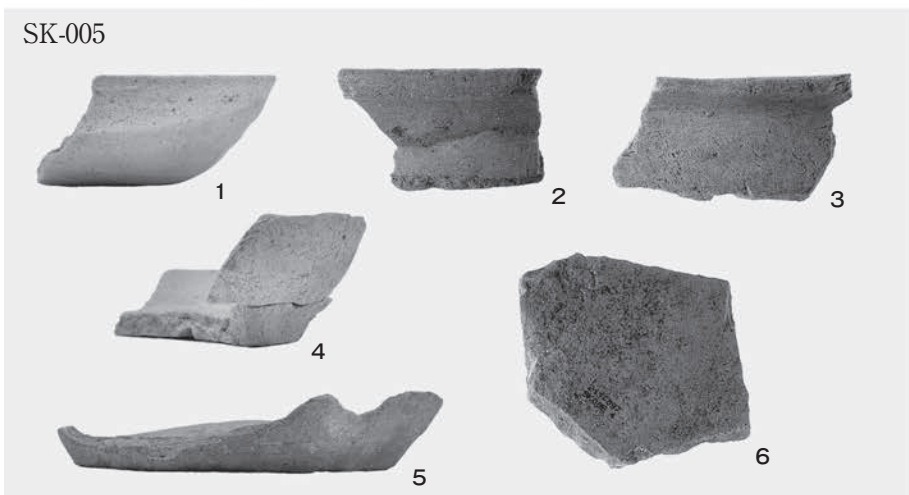
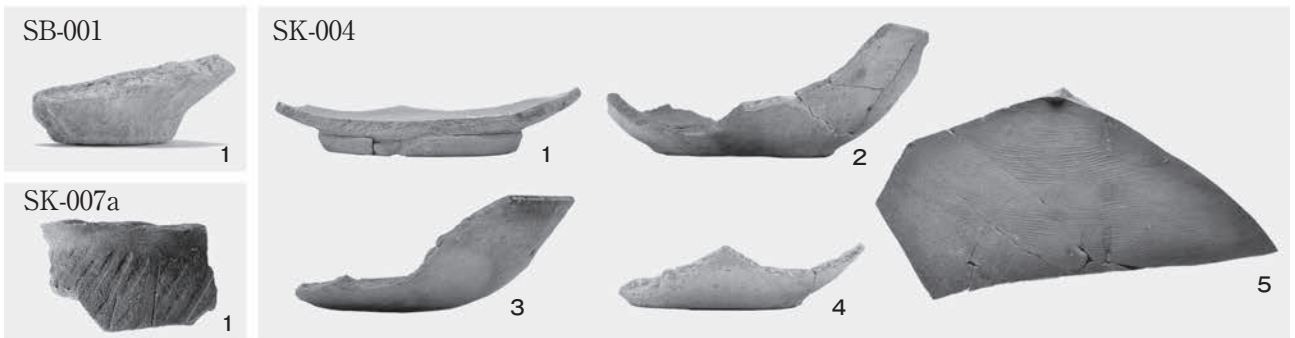
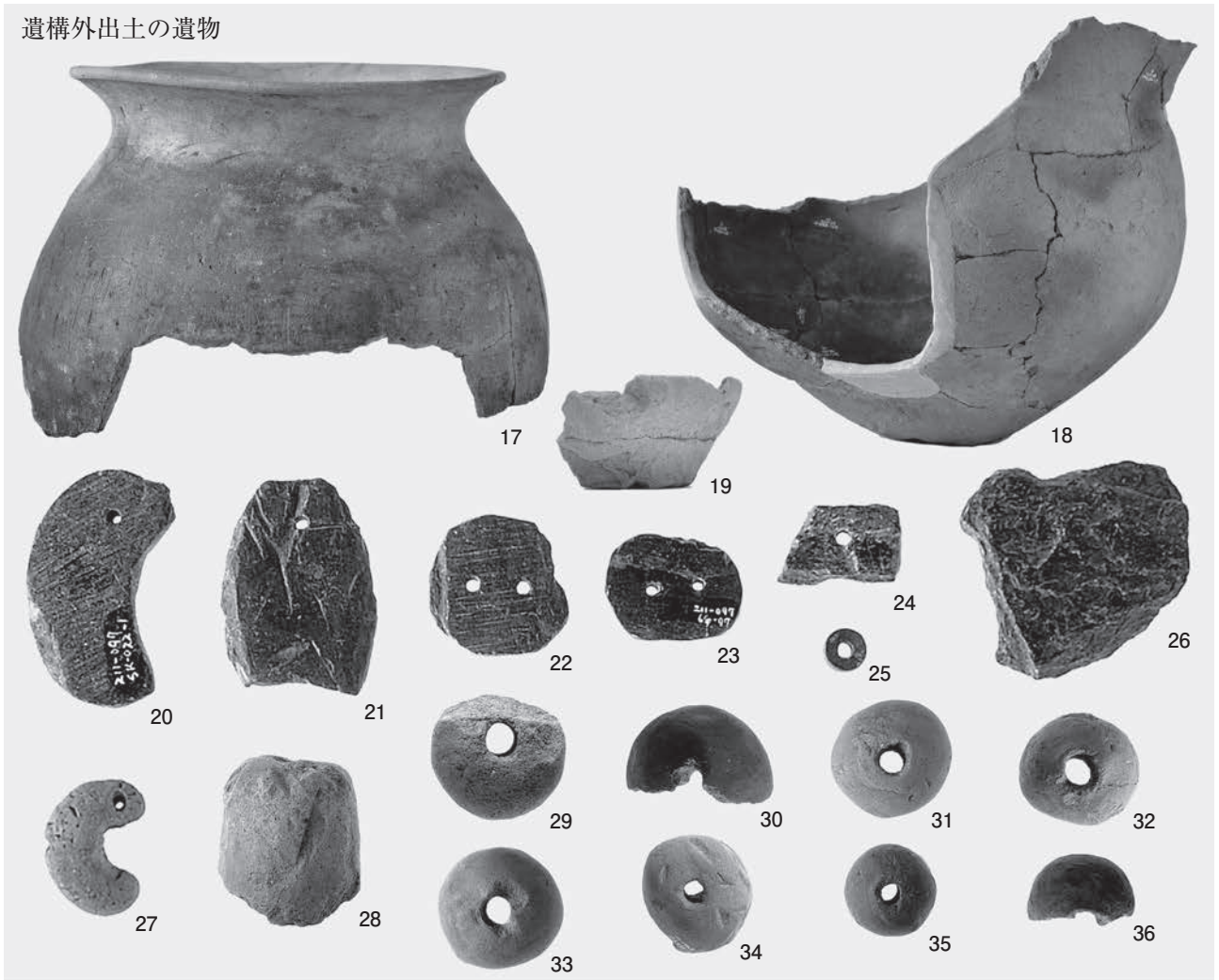
SD-006



遺構外出土の遺物



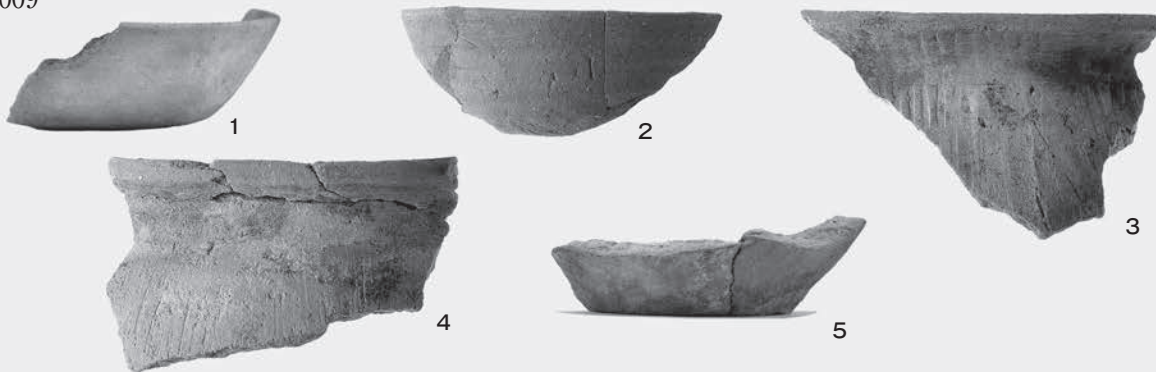
遺構外出土の遺物



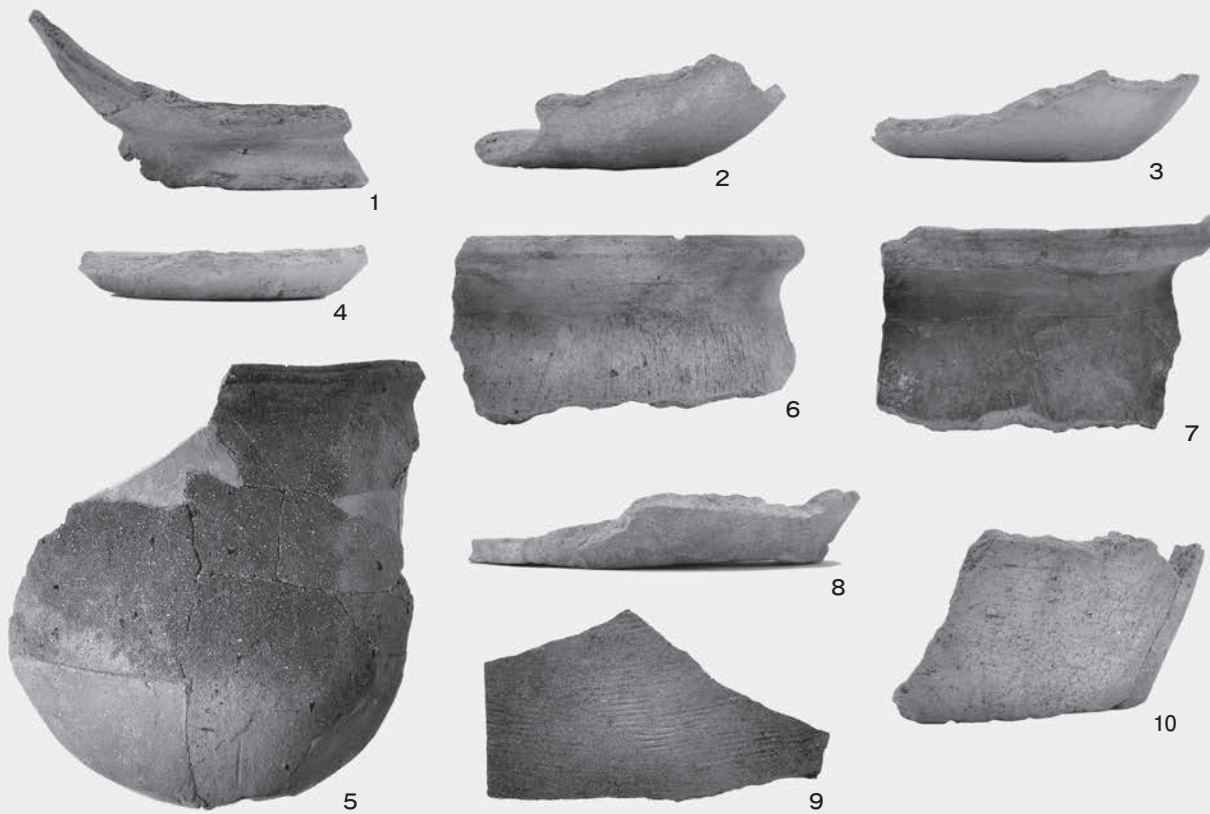
SK-008



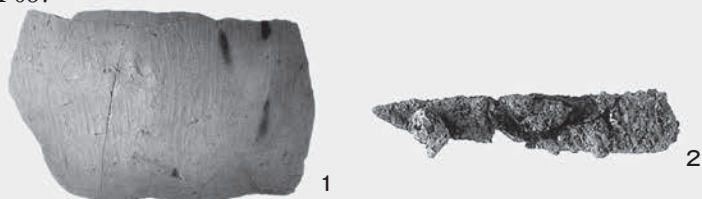
SK-009



SK-026



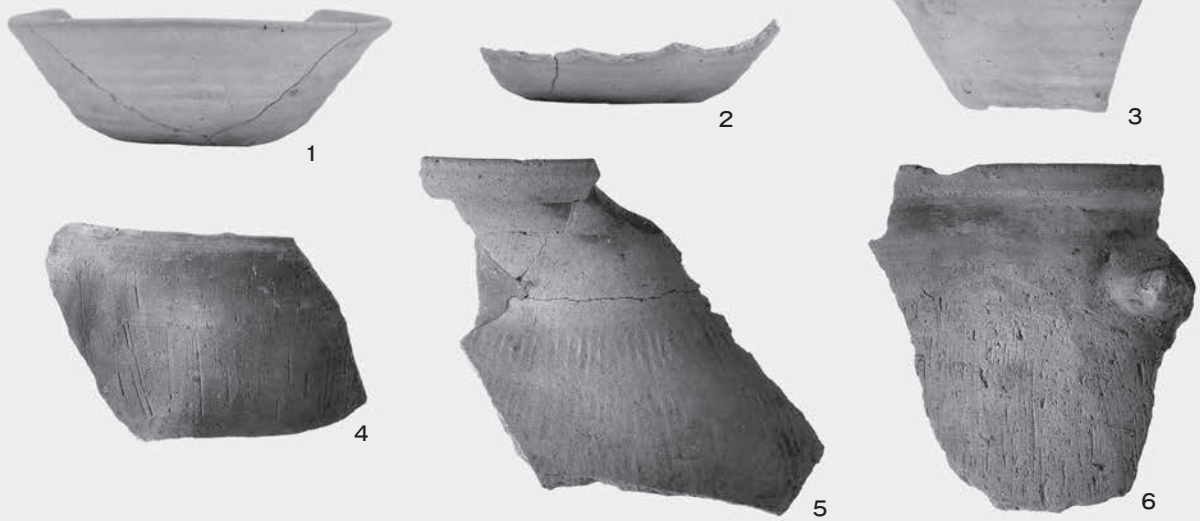
SK-057



SK-070



SK-085



遺構外出土の遺物



SX-001



SK-014



SK-018

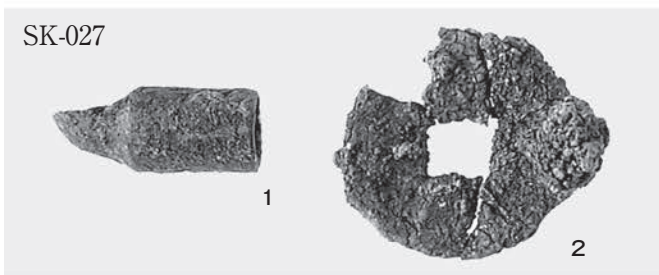
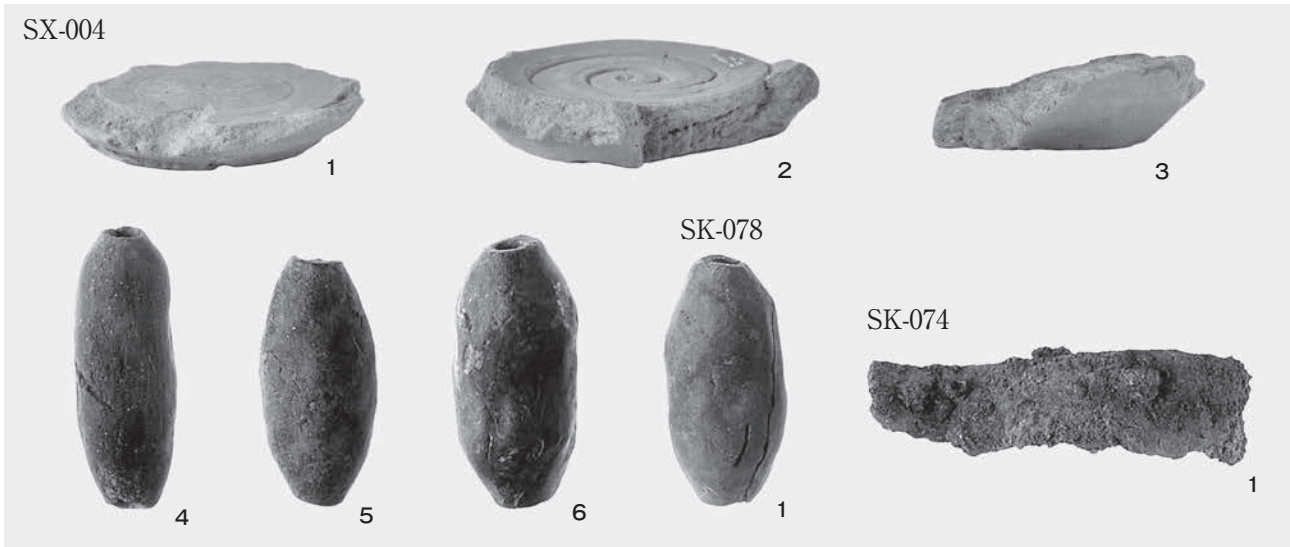


SK-015

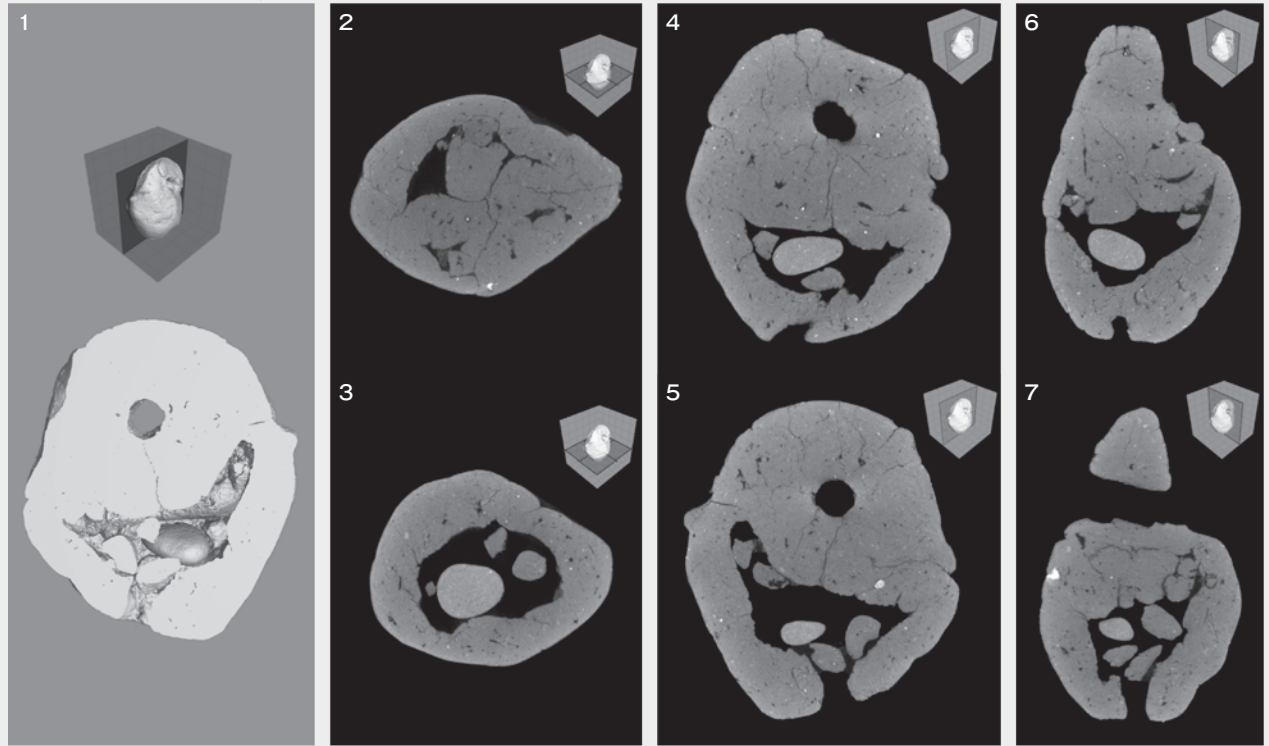


SK-023

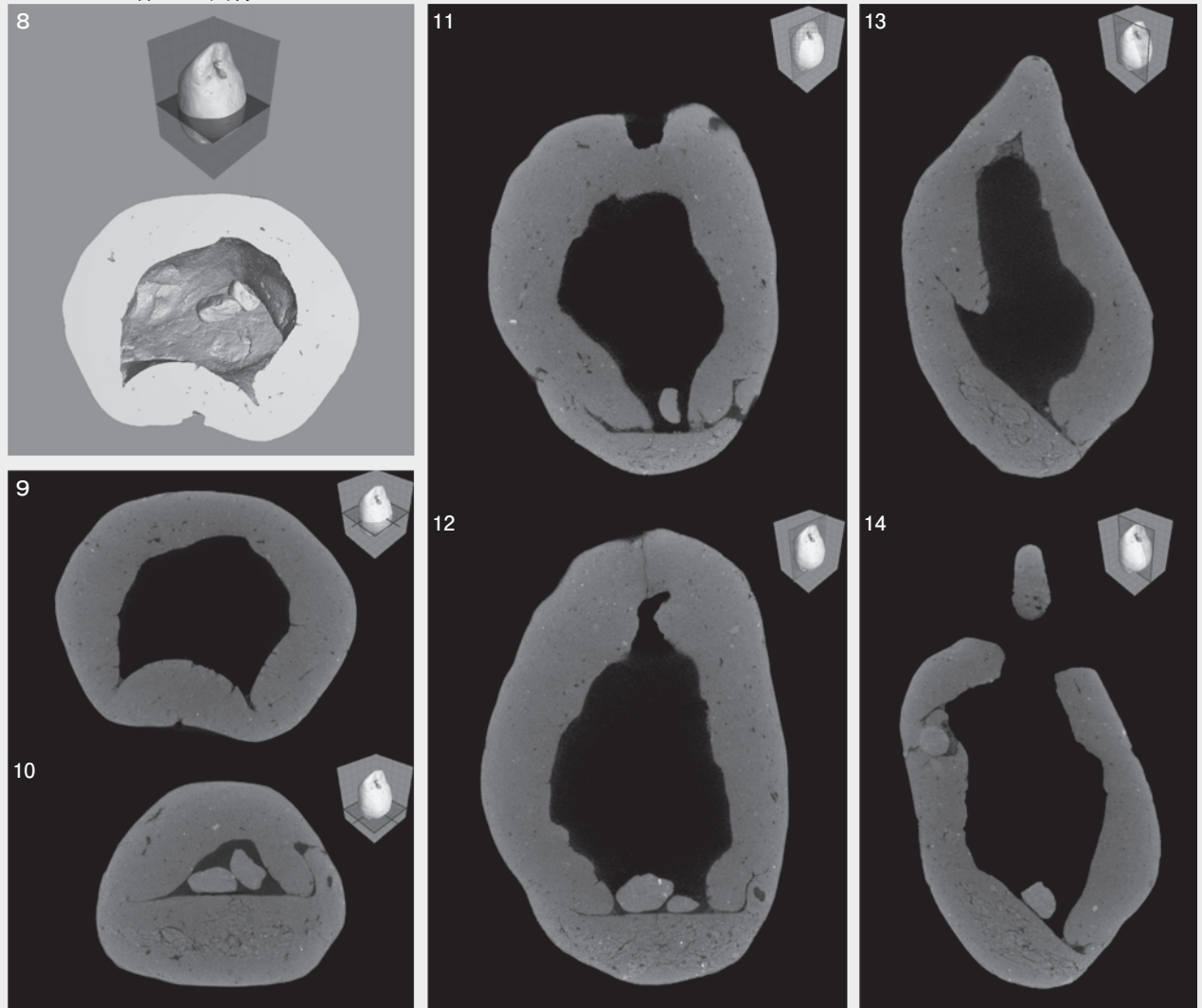




SI-020-16 X線 CT 画像



SI-020-17 X線 CT 画像



1・8 断面見透し図、2・3・9・10横断面図、4・5・11・12正面方向からの断面図、6・7・13・14側面方向からの断面図

報告書抄録

ふりがな	なりたしせきどせきのだいいせき							
書名	成田市関戸関ノ台遺跡							
巻次								
副書名	一般国道464号北千葉道路事業埋蔵文化財発掘調査報告書3							
シリーズ名	千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第35集							
編著者名	金丸 誠 渡邊 玲 横田 真名望 鈴木 彩奈							
編集機関	千葉県教育委員会							
所在地	〒260-8662 千葉県千葉市中央区市場町1-1 TEL043-223-4129							
発行年月日	西暦2021年1月29日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
せきどせきのだいいせき 関戸関ノ台遺跡	なりたしせきどあざ 成田市関戸字 せきのだいいせき 関ノ臺425ほか	12211	097	35度 47分 37秒	140度 19分 54秒	20150810～ 20160128 20160701～ 20161007	7,628㎡	道路建設
				世界測地系 WGS84				
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
関戸関ノ台遺跡	包蔵地 集落跡	旧石器時代 縄文時代 弥生時代 古墳時代 奈良・平安時代 中・近世	石器集中地点 陥穴 竪穴住居跡 竪穴住居跡・土坑・溝 竪穴住居跡・土坑 台地整形区画・土地整形遺構・掘立柱建物跡・竪穴状遺構・地下式坑・土坑墓・土坑・土坑群(ピット群)・溝		石器 縄文土器・石器 弥生土器・石器 土師器・須恵器・石製品・土製品 土師器・須恵器・灰釉陶器・鉄製品 陶器・瓦質土器・カワラケ・鉄製品・銭貨・土製品		今回の調査成果は、取香川流域における旧石器時代～中・近世の各時代の様相や変遷を知る上での貴重な資料である。	
要約	<p>本遺跡は根木名川とその支流である取香川の合流地点の北側で、樹枝状に延びる瘦せ尾根付け根部分の標高28m～30mの台地上にある。旧石器時代は本台地ではじめてⅥ層～Ⅶ層からブロック1か所が検出された。縄文時代は陥穴11基が検出された。弥生時代は後期の竪穴住居跡3軒が検出され、北関東系の土器が主体となっている。古墳時代は中期～後期にかけての竪穴住居跡14軒、土坑3基・溝1条が検出され、後期の竪穴住居跡から県内でも珍しい土鈴が2点出土した。奈良・平安時代は竪穴住居跡2軒・土坑11基が検出され、出土遺物から9世紀中葉～10世紀前葉が中心となる。中・近世は北側と南側の2か所の台地整形区画と土地整形遺構3基・掘立柱建物跡1棟・竪穴状遺構11基・地下式坑2基・土坑墓1基・土坑31基・土坑群(ピット群)7か所・溝1条を検出した。</p>							

千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第35集

成田市関戸関ノ台遺跡

—一般国道464号北千葉道路事業埋蔵文化財発掘調査報告書 3—

令和3年1月29日発行

編集・発行

千葉県教育委員会

千葉市中央区市場町1-1

印刷

株式会社白樺写真工芸

千葉市稲毛区山王町102-5